

エストニア語文法

松村一登

改訂増補版
1999年5月

ESTONIAN GRAMMAR

An Introduction

Kazuto MATSUMURA

Revised edition
May 1999

Copyright © 1999 by Kazuto Matsumura

First edition appeared in July 1991

The author: Graduate School of Humanities and Sociology
University of Tokyo
Hongo 7-3-1, Bunkyo-ku
TOKYO 113-0033 Japan
E-mail: kmatsum@tooyoo.L.u-tokyo.ac.jp

はしがき

本書は、1991年夏に東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所においておこなわれた平成3年度言語研修「エストニア語」の文法教材として編集された「エストニア語文法入門」を全面的に改訂し、新たに序説として、エストニア語の話者に関する統計や、エストニア語の音声と表記に関する簡単な解説を加えたものである。

旧版執筆に際しては、次の文献を全面的に参考にした。

A. Valmet, E. Uuspõld, and E. Turu: *Учебник эстонского языка*. Tallinn, 1981

また、1991年の言語研修で講師のパートナーをつとめていただいたトーマス・ヘルプ (Toomas Help) 氏には、旧版の原稿の段階で、用例のチェックをお願いしたほか、一部の用例の提供も受けたことを、感謝の意をこめてもう一度ここに記しておく。

東京にて 1999年5月15日

松村一登

PREFACE AND ACKNOWLEDGMENT

This is a revised version of the textbook of Estonian grammar published in July 1991 for the 150-hour intensive course of the Estonian language held on July 22 – August 31, 1991 at the Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies. In this new edition, I have added an introductory chapter dealing with statistical data on the speakers of the language and describing the orthography and phonetics.

In compiling this textbook, extensive use was made of the following work:

A. Valmet, E. Uuspõld, and E. Turu: *Учебник эстонского языка*. Tallinn, 1981

I am grateful to Dr. Toomas Help, who checked the Estonian-language examples as well as made many useful suggestions for the 1991 version of this grammar. Many Estonian example sentences he produced during the intensive course are also included in this new version.

Tokyo
May 15, 1999

Kazuto Matsumura

目次

はしがき

序章

- 0.1. エストニア語について
- 0.2. エストニア語の文字と音韻
 - 0.2.1. 文字と正書法
 - 0.2.2. 母音と子音
 - 0.2.2.1. 母音
 - 0.2.2.2. 子音
 - 0.2.2.3. 母音・子音の長さ
 - 0.2.2.4. 二重母音および子音連続(consonant cluster)の長さ
 - 0.2.2.5. 音節の長さ
 - 0.2.2.6. 強勢

第1章(esimene peatükk)

- 1.1. 「これは本です」
- 1.2. 「ここに辞書があります」
- 1.3. 「わたしはエストニア人です」
 - 1.3.1. 人称代名詞
 - 1.3.2. 動詞 olema 「ある, いる」の現在形
 - 1.3.3. 用例
 - 1.3.4. 2人称単数の親称と敬称
- 1.4. 「これは白い家です」
 - 1.4.1. 形容詞述語
 - 1.4.2. 形容詞修飾語
 - 1.4.3. 形容詞修飾語と形容詞述語
- 1.5. 「あなたは日本人ですか」
- 1.6. 「これは何ですか」
- 1.7. 「この人は誰ですか」
- 1.8. 「これはどんな家ですか」
- 1.9. 「あなたのお名前は」
 - 1.9.1. 人称代名詞の属格形: 「~の」
 - 1.9.2. 「これは誰の席ですか」
- 1.10. 人称代名詞の接格と所有文
- 1.11. 数詞(1から20まで)

第2章(teine peatükk)

- 2.1. 動詞の不定詞形
- 2.2. 動詞の現在形
 - 2.2.1. 語幹と語尾
 - 2.2.2. 変則的な現在形をもつ動詞
 - 2.2.3. 現在形の用法

- 2.2.4. 動詞の現在の否定形
- 2.3. 複合動詞(liitverb)
 - 2.3.1. 複合動詞の用例
 - 2.3.2. 複合動詞の否定形
- 2.4. 場所の表現：「～で」「～へ」「～から」
 - 2.4.1. 場所の副詞：「ここで」「(あ)そこで」「ここへ」「(あ)そこへ」
 - 2.4.2. 「家の中で」(名詞の内格)
 - 2.4.3. 「どこで?」「どこに?」
- 2.5. 時の表現
 - 2.5.1. 1日, 季節
 - 2.5.2. 時の疑問詞：「いつ?」
 - 2.5.3. 時の表現の用例

第3章(kolmas peatükk)

- 3.1. 名詞の格変化：主格と属格
 - 3.1.1. 名詞の格変化について
 - 3.1.2. 単数主格と単数属格
 - 3.1.3. 名詞と形容詞修飾語の呼応(格の一致)
- 3.2. 単数属格の用法(その1)：連体修飾語
- 3.3. 単数属格形(=単数語幹)による名詞の種類
 - 3.3.1. 単数属格形が母音 a で終わる名詞
 - 3.3.2. 単数属格形が母音 e で終わる名詞
 - 3.3.3. 単数属格形が母音 i で終わる名詞
 - 3.3.4. 単数属格形が母音 u, o で終わる名詞
 - 3.3.5. 単数語幹が長母音または二重母音で終わる名詞
 - 3.3.6. 単数属格形に関する注意
 - 3.3.6.1. 単数主格と単数属格(=単数語幹)の間に子音の違い
 - 3.3.6.2. 単数属格形が単数主格形とかなり違う名詞
 - 3.3.6.3. 複合名詞の単数属格形
- 3.4. 単数属格の用法(その2)：直接目的語
- 3.5. 複合名詞の最初の構成成分
- 3.6. 代名詞の属格形
- 3.7. 所有再帰代名詞 oma 「自分の」
- 3.8. 「人称代名詞の属格 + 所有再帰代名詞」 = 「～のもの」
- 3.9. 単数属格の用法(その3)：後置詞とともに

第4章(neljas peatükk)

- 4.1. 名詞の格変化：複数主格
- 4.2. 複数主格の用法(その1)：主語
 - 4.2.1. 名詞・形容詞
 - 4.2.2. 指示代名詞
 - 4.2.3. 不定代名詞 mõni ~ mõned 「いくつかの」
- 4.3. 複数主格の用法(その2)：直接目的語
- 4.4. 動詞の過去形
 - 4.4.1. 過去語幹と人称語尾

- 4.4.2. 動詞の過去形の作り方：例外(その1)
- 4.4.3. 動詞の過去形の作り方：例外(その2)
- 4.4.4. 不規則動詞
- 4.5. 「どこへ」
- 4.6. 「いかがお過ごしですか」(様態の副詞)
- 4.6.1. 「よく, うまく」
- 4.6.2. 接尾辞 -sti, -lt
- 4.7. 時刻の言い方
- 4.7.1. 「～時です」
- 4.7.2. 「～時に」
- 4.8. 接続詞：või 「それとも, または」

第5章(viies peatükk)

- 5.1. 個体名詞と非個体名詞
- 5.2. 名詞の格変化：単数分格
 - 5.2.1. 単数分格語尾が-tとなる名詞
 - 5.2.1.1. 単数語幹(=単数属格形)から単数分格形をつくる名詞
 - 5.2.1.2. 子音語幹から単数分格形をつくる名詞
 - 5.2.1.3. 注意すべき単数分格形
 - 5.2.2. 単数分格の語尾が-Ø(ゼロ)となる名詞
 - 5.2.2.1. 単数分格形が単数属格形と区別できない名詞
 - 5.2.2.2. 単数分格形と単数属格形が異なる名詞
 - 5.2.2.3. 注意すべき単数分格形
 - 5.2.3. 単数分格の語尾が-dとなる名詞
- 5.3. 単数分格の用法(その1)：直接目的語
 - 5.3.1. 分格目的語だけをとる他動詞
 - 5.3.2. 属格目的語・分格目的語のどちらもとれる動詞
 - 5.3.2.1. 否定文
 - 5.3.2.2. 肯定文
 - 5.3.2.2.1. 目的語が非個体名詞の場合
 - 5.3.2.2.2. 目的語が個体名詞の場合
 - 5.3.2.2.3. 属格目的語と分格目的語(補足)
- 5.4. 単数分格の用法(その2)：数詞・数量詞とともに
 - 5.4.1. 数詞とともに
 - 5.4.2. 数量詞とともに
- 5.5. 分格の用法(その3)：存在文・所有文の主語
 - 5.5.1. 否定文
 - 5.5.2. 肯定文
 - 5.5.2.1. 主語が非個体名詞の場合
 - 5.5.2.2. 主語が個体名詞の場合

第6章(kuues peatükk)

- 6.1. 「窓を開けてください」
 - 6.1.1. 動詞の活用：命令形
 - 6.1.2. 2人称単数の命令形

- 6.1.3. 例外
- 6.2. 「窓を開けないでください」
- 6.3. 命令文における直接目的語
- 6.4. 「さあ～しましょう」
- 6.5. 不定詞の用法
 - 6.5.1. da-不定詞をとる動詞
 - 6.5.2. ma-不定詞をとる動詞
 - 6.5.3. 「et + da-不定詞」(～するために)
- 6.6. 代名詞の分格形
 - 6.6.1. 人称代名詞
 - 6.6.2. 疑問代名詞
 - 6.6.3. 指示代名詞
- 6.7. 複数分格
- 6.8. 分格支配の前置詞
- 6.9. 接続詞：「AではなくてB」(ei A vaid B)

第7章(seitsmes peatükk)

- 7.1. 階程交替(astmevaheldus, grade alternation)
- 7.2. 階程交替(その1)：pp～p, tt～t, kk～k
- 7.3. 階程交替(その2)：つづりに現れない超長音と長音の交替
 - 7.3.1. 超長母音と長母音(または, 超長二重母音と二重母音)の交替
 - 7.3.2. 超長子音と長子音(超長子音連続と子音連続)の交替
- 7.4. 階程交替(その3)：長音 p, t, k と短音 b, d, g の交替
- 7.5. 階程交替(その4)：子音の同化が起こるもの
- 7.6. 用例
 - 7.6.1. 超長音と長音の交替
 - 7.6.1.1. 階程交替が正書法から明らかになる場合
 - 7.6.1.2. 階程交替が正書法からはわからない場合
 - 7.6.2. 長子音と短子音の交替
 - 7.6.3. 子音の同化がおこる場合
- 7.7. 階程交替に関する補足
 - 7.7.1. 子音が消失するタイプ
 - 7.7.1.1. 子音 b, d, g の消失
 - 7.7.1.2. 子音 s の消失
 - 7.7.1.3. 子音 t, k の消失
 - 7.7.2. 子音の消失に母音の変化がともなうタイプ
 - 7.7.3. 子音の交替がおこるタイプ
- 7.8. 階程交替に関してとくに注意を要する語

第8章(kaheksas peatükk)

- 8.1. 名詞の格変化：場所格
 - 8.1.1. 場所格の体系
 - 8.1.2. 内部格と外部格の使い分けについて
 - 8.1.3. 場所格に対応する疑問詞
 - 8.1.4. 単数の場所格の作り方

- 8.1.5. 短い単数入格形
- 8.2. 入格の用法
- 8.3. 向格の用法
 - 8.3.1. 運動の目標・到達点
 - 8.3.2. 受け手(与格)
 - 8.3.3. 人称代名詞の向格形とその用法
- 8.4. 内格の用法 V
- 8.5. 接格の用法
 - 8.5.1. 静止位置, 状態
 - 8.5.2. 所有文における所有者
 - 8.5.3. 不定詞の意味上の主語
 - 8.5.3.1. 非人称文
 - 8.5.3.2. 使役, 命令, 許可, 禁止などを表す文
 - 8.5.4. 時間表現
- 8.6. 出格の用法
 - 8.6.1. 運動の起点・出発点
 - 8.6.2. 材料, 原料: 「～から(できている)」
 - 8.6.3. 話題: 「～について」
 - 8.6.4. 時間的な起点: 「～から」「～以来」
- 8.7. 奪格の用法
 - 8.7.1. 運動の起点・出発点
 - 8.7.2. 与え手
 - 8.7.3. 「～の点では」「～に関して言えば」

第9章(üheksas peatükk)

- 9.1. 動詞の格支配
 - 9.1.1. 入格支配の動詞
 - 9.1.2. 向格支配の動詞
 - 9.1.3. 内格支配の動詞
 - 9.1.4. 出格支配の動詞
 - 9.1.5. 奪格支配の動詞
 - 9.1.6. 動詞の格支配についての補足
- 9.2. 場所格相当の後置詞
 - 9.2.1. 場所格を後置詞句で言い替える
 - 9.2.2. 場所を表す後置詞の体系
- 9.3. 場所関係を表す副詞
- 9.4. 場所格の用法: 衣服の着脱
 - 9.4.1. 「～を着る」
 - 9.4.2. 「～を着ている」
 - 9.4.3. 「～を脱ぐ」
- 9.5. 「ビン2本の牛乳」
 - 9.5.1. 数詞 üks 「1」
 - 9.5.2. 2以上の数詞
 - 9.5.3. 「数詞+数量詞+非個体名詞」
- 9.6. 「1週間は何日ですか」
- 9.7. 「たくさん」「すこし」

第 10 章 (kümnes peatükk)

- 10.1. 名詞の格変化：場所格以外の格
- 10.2. 変格の用法
 - 10.2.1. 変化の結果：「～に(なる)」「～に(変わる)」
 - 10.2.2. 変化の結果：「～に(する)」「～に(変える)」
 - 10.2.3. 一時的な職務・機能：「～として」
 - 10.2.4. 目的補語：「(～を)～と(みなす)」
 - 10.2.5. 用途，目的：「～のために」「～用に」「～として」
 - 10.2.6. あることのために予定される時間・期間
 - 10.2.7. 期限：「～までに」「～になる前に」
- 10.3. 共格の用法
 - 10.3.1. 道具，手段：「～で」「～を用いて」「～によって」
 - 10.3.2. 同伴，随行：「～と」「～と一緒に」「～とともに」
 - 10.3.3. 時間的範囲：「～で」「～のうちに」
 - 10.3.4. 付属，携帯：「～のついた」「～をもった」
 - 10.3.5. 共格支配の動詞
- 10.4. 欠格の用法
- 10.5. 様格の用法
 - 10.5.1. 一時的な職務・機能
 - 10.5.2. 様子・様態
 - 10.5.3. 判断・評価の基準：「～にしては」「～としては」
 - 10.5.4. 様格に相当する接続詞 kui
- 10.6. 到格の用法
- 10.7. 等位構造と格語尾
- 10.8. 数詞(21 以上)
- 10.9. 「～も」(小詞 ka)

第 11 章 (üheteistkümnes peatükk)

- 11.1. 動詞の過去形
 - 11.1.1. 過去形(その 1)
 - 11.1.2. 過去形(その 2)
 - 11.1.3. 過去形(その 3)
 - 11.1.4. 過去形の用例
 - 11.1.5. 複合動詞の過去形
- 11.2. 動詞の nud-分詞(能動過去分詞)
 - 11.2.1. nud-分詞の作り方(その 1)
 - 11.2.2. nud-分詞の作り方(その 2：例外)
- 11.3. 動詞の過去形(否定形)
- 11.4. 動詞の完了時制
 - 11.4.1. 現在完了
 - 11.4.2. 過去完了
 - 11.4.3. 「完了時制 + 完了時制」の等位構造
 - 11.4.4. 複合動詞の完了時制形
- 11.5. 序数詞：「～番目」

11.6. 日付の言い方

第 12 章(kaheteistkümnes peatükk)

- 12.1. 形容詞の比較級
 - 12.1.1. 比較級の作り方
 - 12.1.2. 例外
 - 12.1.3. 比較級の格変化(単数)
- 12.2. 比較級の用法
 - 12.2.1. 比較構文と比較の基準
 - 12.2.2. 「～より少し」「～よりずっと」
 - 12.2.3. 「～と同じくらい」
- 12.3. 形容詞の最上級
- 12.4. 時間の表現
 - 12.4.1. 「～時です」
 - 12.4.2. 「～時から～時まで」
- 12.5. 語形成
 - 12.5.1. 動作主名詞(～する人)
 - 12.5.2. 動作名詞(～すること)
- 12.6. 指小接尾辞：-ke ~ -kene
- 12.7. 身体部位・内臓器官
- 12.8. 方角(ilmakaared)

第 13 章(kolmeteistkümnes peatükk)

- 13.1. 数詞の格変化
 - 13.1.1. 基本的な数詞の主な活用形
 - 13.1.2. 複合的な数詞の活用
- 13.2. 「何歳ですか？」
- 13.3. 序数詞
- 13.4. 何回目ですか？
- 13.5. 日付の表し方：「～月～日に」
- 13.6. 年号の表し方：「(西暦)～年に」
- 13.7. 名詞をつくる接尾辞：-us
 - 13.7.1. 動詞 + -us
 - 13.7.2. 形容詞 + -us

第 14 章(neljateistkümnes peatükk)

- 14.1. 名詞の格変化：複数属格
- 14.2. 複数属格形の作り方
- 14.3. 複数属格形の作り方に関する補足
 - 14.3.1. -ne で終わる名詞
 - 14.3.2. 例外など
 - 14.3.3. kõik の複数属格形
 - 14.3.4. 指示代名詞の複数属格形
- 14.4. 属格支配の前置詞・後置詞

- 14.5. 名詞の複数形の格変化
- 14.6. 形容詞修飾語と名詞の数・格における一致
- 14.7. 副詞の比較級
 - 14.7.1. 語尾 -em
 - 14.7.2. 語尾 -mini
 - 14.7.3. 語尾 -malt
 - 14.7.4. 場所関係を表す副詞の比較級
 - 14.7.5. 副詞の比較級に関する補足
 - 14.7.6. 副詞の比較級の用例
- 14.8. 副詞の最上級

第 15 章 (viieteistkümnes peatükk)

- 15.1. 名詞の格変化：複数分格
- 15.2. 複数分格形の作り方
 - 15.2.1. 複数分格形(その 1) - 語尾 -id
 - 15.2.2. 複数分格形(その 2) - 母音 -u, -i, -e でおわる場合
 - 15.2.3. 複数分格形(その 3) - 語尾 -sid
 - 15.2.4. 複数分格の作り方(補足)
 - 15.2.5. 注意すべき複数分格形
- 15.3. 複数分格の用法(その 1)：他動詞文の直接目的語
 - 15.3.1. 否定文
 - 15.3.2. 分格支配の動詞
 - 15.3.3. 肯定文
 - 15.3.3.1. 複数名詞と非個体名詞
 - 15.3.3.2. 進行中の動作・行為
 - 15.3.3.3. 不特定のものの集まり
- 15.4. 目的語の格表示：主格，属格，分格
 - 15.4.1. 単数主格～複数主格(命令文)
 - 15.4.2. 単数属格～複数主格(平叙文)
 - 15.4.3. 単数分格～複数分格(命令文，平叙文とも)
- 15.5. 複数分格の用法(その 2)：存在文・所有文の主語
 - 15.5.1. 否定文
 - 15.5.2. 肯定文
- 15.6. 複数分格の用法(その 3)：数量詞とともに
- 15.7. 分格とともに用いられる前置詞

第 16 章 (kuueteistkümnes peatükk)

- 16.1. 人称代名詞の格変化
 - 16.1.1. 完全形と短縮形
 - 16.1.2. 人称代名詞の格変化
 - 16.1.3. 人称代名詞の格の用法に関する注意
- 16.2. 再帰代名詞
 - 16.2.1. 再帰代名詞の用法
 - 16.2.2. 再帰代名詞の格変化
- 16.3. 所有再帰代名詞(oma)

- 16.3.1. 所有再帰代名詞と人称代名詞の属格形の用法の比較
- 16.3.2. 所有再帰代名詞の名詞的用法
- 16.3.3. 所有再帰代名詞の格変化
- 16.4. 疑問詞の格変化

第 17 章(seitsmeteistkümnes peatükk)

- 17.1. 指示詞
 - 17.1.1. 「これ, あれ, それ」
 - 17.1.2. 「同じ」
 - 17.1.3. 「こんな, そんな」
- 17.2. 疑問詞(関係詞)
- 17.3. 不定代名詞
 - 17.3.1. 「誰か(ある人)」「何か(あるもの)」
 - 17.3.2. 「すべて, どれも」
 - 17.3.3. 「いくつか」「多数(の)」
 - 17.3.4. 「両方」「どちらも」
- 17.4. 相互代名詞

第 18 章(kaheksateistkümnes peatükk)

- 18.1. 動詞の活用：不定詞
- 18.2. da-不定詞の語尾
 - 18.2.1. 語尾 -da
 - 18.2.2. 語尾 -ta
 - 18.2.3. 語尾 -a
 - 18.2.4. 変則的な da-不定詞形をもつ動詞
- 18.3. da-不定詞をとる動詞
 - 18.3.1. 可能性や意志を表す動詞
 - 18.3.2. 使役や許可を表す動詞
 - 18.3.3. ある動作・行為に対する心理的状态を表す動詞
 - 18.3.4. 非人称構文
 - 18.3.5. 名詞の修飾句
 - 18.3.6. 「on + da-不定詞」
 - 18.3.7. 「on + 形容詞 + da-不定詞」
 - 18.3.8. 接続詞 et とともに(目的を表す副詞句)
 - 18.3.9. 非人称の疑問文
 - 18.3.10. da-不定詞の否定形
 - 18.3.11. da-不定詞節内の語順
- 18.4. 動詞の活用：副動詞形(des-形)

第 19 章(üheksateistkümnes peatükk)

- 19.1. ma-不定詞の用法
 - 19.1.1. ma-不定詞の場所格的意味
 - 19.1.2. ma-不定詞の基本形の用法
 - 19.1.2.1. 運動の動詞

- 19.1.2.2. 動作・行為の開始を表す動詞
- 19.1.2.3. 動詞 hakkama と algama
- 19.1.2.4. 動詞 pidama 「～しなければならない」
- 19.1.2.5. valmis olema 「～する用意がある」、nõus olema 「～することに同意している」
- 19.1.2.6. その他の動詞で ma-不定詞をとるもの
- 19.2. 動詞の mas-形の用法
- 19.3. 動詞の mast-形の用法
- 19.4. 動詞の mata-形の用法
 - 19.4.1. 副詞的用法
 - 19.4.2. 修飾語としての用法
- 19.5. 動詞の maks-形の用法
- 19.6. 動詞の活用：命令法 2 人称
 - 19.6.1. 「～してください」「～しなさい」
 - 19.6.2. 2 人称複数の命令形の作り方
 - 19.6.2.1. da-不定詞の語幹
 - 19.6.2.2. 語尾 -ge ~ -ke の使い分け
 - 19.6.2.3. 命令形が ma-不定詞の語幹から作られる動詞
- 19.7. 動詞の活用：命令法 3 人称
- 19.8. 動詞の活用：命令法(否定形)

第 20 章 (kahekümnes peatükk)

- 20.1. 動詞の活用：条件法
 - 20.1.1. 条件法現在
 - 20.1.2. 条件法完了
 - 20.1.3. 条件法の否定形
 - 20.1.4. 条件法の用法(その 1)
 - 20.1.5. 条件法の用法(その 2)：婉曲な依頼
 - 20.1.6. 条件法の語幹と階程交替
- 20.2. 「～しましょう」
 - 20.2.1. 動詞の勧誘形
- 20.3. 動詞の活用：伝聞法 (kaudne kõneviis)
- 20.4. 形容詞をつくる接尾辞 -ne
 - 20.4.1. 副詞についたもの
 - 20.4.2. 名詞の属格についたもの
 - 20.4.3. 名詞の主格についたもの
 - 20.4.4. 名詞句についたもの

第 21 章 (kahekümne esimene peatükk)

- 21.1. 不定人称文 (umbisik, indefinite person)
 - 21.1.1. 動詞文の 3 つのタイプ：不定人称文・定人称文・非人称文
 - 21.1.2. 動詞の不定人称形
 - 21.1.3. 不定人称文の作り方
 - 21.1.4. 補足：不定人称文といわゆる「受動文」
- 21.2. 不定人称の過去分詞 (tud-分詞)
 - 21.2.1. tud-分詞の作り方

21.2.2. 例外

第 22 章 (kahekümne teine peatükk)

- 22.1. 不定人称の現在形
- 22.2. 不定人称現在形の用例
- 22.3. 不定人称過去
- 22.4. 不定人称現在完了
- 22.5. 不定人称過去完了
- 22.6. 不定人称の用例(追加)
- 22.7. 従属接続詞 et と間接疑問文
 - 22.7.1. 「言う」「思う」などの意味の動詞とともに
 - 22.7.2. 指示詞 see が先行するもの
 - 22.7.3. 程度
- 22.8. 接尾辞 -line
 - 22.8.1. 名詞の属格についてしたもの
 - 22.8.2. 名詞句の属格についてしたもの
- 22.9. 接尾辞 -lik
 - 22.9.1. 名詞の主格についてしたもの
 - 22.9.2. 名詞の属格についてしたもの(比較的まれ)

第 23 章 (kahekümne kolmas peatükk)

- 23.1. 名詞の複数形：「i-複数」
- 23.2. 句と句を結びつける接続詞
 - 23.2.1. A と B
 - 23.2.2. A か B
 - 23.2.3. 対比
- 23.3. 文と文の等位接続
 - 23.3.1. 並列的
 - 23.3.2. 対比的
- 23.4. 原因または結果を表す接続詞
- 23.5. 譲歩を表す接続詞
- 23.6. 時・条件の接続詞
 - 23.6.1. 接続詞 kui
 - 23.6.2. 接続詞 kuni
 - 23.6.3. 接続詞 kui を含む複合接続詞
 - 23.6.3.1. 時間的關係：「～する前に」「～する間」「～したあとで」
 - 23.6.3.2. 比喩
- 23.7. 接尾辞 -lane, -lanna
- 23.8. 主な形容詞とその反意語

第 24 章 (kahekümne neljas peatükk)

- 24.1. エストニア語の動詞の 4 つの分詞
- 24.2. v-分詞(能動現在分詞, 能動未完了分詞)
 - 24.2.1. v-分詞の作り方と格変化

- 24.2.2. 分詞の用例
- 24.3. nud-分詞(能動過去分詞, 能動完了分詞)
 - 24.3.1. 動詞の活用形としての用法
 - 24.3.2. 名詞の修飾句
 - 24.3.3. 時を表す副詞節(分詞構文)
- 24.4. tav-分詞(受動現在分詞, 受動未完了分詞, 不定人称の現在分詞)
 - 24.4.1. tav-分詞の作り方と格変化
 - 24.4.2. tav-分詞の用法
 - 24.4.2.1. 名詞の修飾語
 - 24.4.2.2. 動詞 olema の補語として
- 24.5. tud-分詞(受動過去分詞, 受動完了分詞, 不定人称の過去分詞)
 - 24.5.1. 動詞の活用形として
 - 24.5.2. 名詞の修飾句
 - 24.5.3. 時間を表す副詞節(分詞構文)
- 24.6. 形容詞の最上級: 「i-最上級」

第25章(kahekümne viies peatükk)

- 25.1. 場所格相当の後置詞
- 25.2. 場所関係を表す前置詞
 - 25.2.1. 属格支配の前置詞
 - 25.2.2. 分格支配の前置詞
 - 25.2.3. 到格支配の前置詞
- 25.3. 時間関係を表す後置詞・前置詞
 - 25.3.1. 属格支配の後置詞
 - 25.3.2. 出格支配の後置詞
 - 25.3.3. 分格支配の後置詞
- 25.4. 原因・理由または目的を表す後置詞(属格支配)
- 25.5. 量的関係を表す後置詞・前置詞
 - 25.5.1. 属格支配の後置詞
 - 25.5.2. 属格支配の前置詞
- 25.6. その他の関係を表す後置詞・前置詞
 - 25.6.1. 属格支配の後置詞
 - 25.6.2. 属格支配の前置詞
 - 25.6.3. 共格支配の前置詞
 - 25.6.4. 欠格支配の前置詞
- 25.7. 名詞の格を後置詞・前置詞で言い替える
 - 25.7.1. 向格 属格 + peale
 - 25.7.2. 接格 属格 + peal
 - 25.7.3. 奪格 属格 + pealt
 - 25.7.4. 奪格 属格 + poolest
 - 25.7.5. 奪格 属格 + k:est
 - 25.7.6. 属格 + ümber ←→ umbes + 主格
 - 25.7.7. 出格 + saadik/peale ←→ 出格 + alates (~ alates + 出格)
 - 25.7.8. 属格 + eest ←→ 主格 + tagasi

序 章

0.1. エストニア語について

エストニア語(eesti keel; 英語名Estonian; ドイツ語名Estnisch)は、ウラル語族、フィン・ウゴル語派、バルト・フィン諸語に属する言語で、その標準語(ühiskeel「共通語」)は、憲法および言語法によってエストニア共和国の国語(riigikeel)と規定されている。

エストニア語の話者の数は、100万人を超える。エストニア本国におけるエストニア人語の話者数に関するもっとも新しい統計は、1989年の旧ソ連邦国勢調査によるもので、エストニア・ソビエト社会主義共和国(当時)の総人口1,565,622人のうち、エストニア語を母語と申告した住民は61.5%、963,269人である。

独立回復(1991年)後はまだ国勢調査が行われておらず、エストニア語の話者数に関する正式な統計はない。エストニアの人口の民族構成については、1998年1月の推定として、次のような数値が公表されている。

総人口：	1,453,844人
エストニア人：	65.1%
ロシア人：	28.1%
ウクライナ人：	2.54%
ベラルーシ人：	1.48%
フィン人：	0.92%

エストニア人は、エストニア国外では、旧ソ連邦(ロシアなど)に64,000人(1989)、スウェーデンに15,000人程度、カナダに14,000人程度、アメリカ合衆国に20,000人程度、オーストラリアに5,000人程度住んでいるといわれるが、彼らの母語保持率は一般にそれほど高くない。これらは、いずれもソビエト時代末期の数字であり、1991年以後、ロシアなど旧ソ連からエストニア本国に移り住んだエストニア人や、留学・結婚等の理由でエストニア本国から外国へ移り住んだエストニア人も少なからずいると考えられる。

0.2. エストニア語の文字と音韻

0.2.1. 文字と正書法

エストニア語は、ラテン文字によって表記される。エストニア語のアルファベットに、通常、次ページの表に示す32文字([]内は一般的な呼称)からなるとされる。

32文字のうち、エストニア語固有の語の表記に用いられるのは、括弧でくくった文字(c, q, w, x, y)とf, z, š, žを除く23文字である。

a) 括弧でくくった5文字(c, q, w, x, y)は、原語の綴りで表記される外国の人名、地名に限って用いられる(例：Calais, Don Quixote, Weimar, Mexico, New York)。

b) f, z, š, žの4文字が用いられるのは、比較的新しい外来語である。

film	フィルム	zooloog	動物学者
šokolaad	チョコレート	žanr	ジャンル

c) 以上の文字のほかに、č が加えられることがある。文字の順番としては、č はcとdの間に置かれる。

エストニア語のアルファベット
Eesti tähestik

A a	[aa]	(Q q)	[kuu]
B b	[bee]	R r	[err]
(C c)	[tsee]	S s	[ess]
D d	[dee]	Š š	[šaa]
E e	[ee]	Z z	[zee]
F f	[eff]	Ž ž	[žee]
G g	[gee]	T t	[tee]
H h	[haa]	U u	[uu]
I i	[ii]	V v	[vee]
J j	[jott]	(W w)	[(topelt-)vee]
K k	[kaa]	Õ õ	[õõ]
L l	[ell]	Ä ä	[ää]
M m	[emm]	Ö ö	[öö]
N n	[enn]	Ü ü	[üü]
O o	[oo]	(X x)	[iks]
P p	[pee]	(Y y)	[igrek]

0.2.2. 母音と子音

0.2.2.1. 母音

エストニア語の単母音は、次の9つである。

	前 舌		奥 舌	
	円 唇	非円唇	非円唇	円 唇
高母音	ü	i		u
中母音	ö	e	õ	o
低母音		ä	a	
【参考】	süüd	siid	–	suud
	lööm	leem	lõõm	loom
	–	säär	saar	–

母音õの音韻論的位置づけについては、「非円唇中舌高母音」とする考え方もある(Hint 1987:53)。音声学的にみると、この母音は、「非円唇奥舌中母音」と比べ、やや中舌寄り、やや高めであることが多い。

エストニア語固有の語の場合、第1音節には9母音すべてが現れるが、第2音節以降には、外来語をのぞき、a, u, i, e以外の母音は現れない。

単母音(a, e, i, o, u, ä, ö, ü, õ)には、「短」(lühike; short; I) - 「長」(pikk; long; II) - 「超長」(ülipikk; overlong; III)の3段階の長さの区別がある。母音の音色は、長さの違いに関係なく一定に保たれる。

二重母音は、単母音2つの連続と解釈され、また聴覚的にもそのようにはっきりと聞こえる。二重母音は、本来「長い」母音で、「長」と「超長」の2段階の長さの区別がある。

母音の長さの対立については、0.2.3.を参照。

0.2.2.2. 子音

	両唇音	唇歯音	歯茎音	口蓋化音	硬口蓋音	軟口蓋音	声門音
破裂音	p		t	t'		k	
鼻音	m		n	n'		(ŋ)	
摩擦音(無声)		f	s, š	s'			h
(有声)		v			j		
側面音			l	l'			
ふるえ音			r				

母音と同様に、多くの単子音に「短 - 長 - 超長」の3段階の長さの区別がある(0.2.2.3. 参照)。

破裂音(p, t, k; 閉鎖音)には、有声・無声の対立がない。文字b, d, gは、短い破裂音の表記に用いられ、長い破裂音の表記には、文字p, t, kを用いる。

単数主格	単数属格	単数分格	
märk	märgi	märki	印, 記号
pilt	pildi	pilti	絵, 写真
sõber	sõbra	sõpra	友人

外来語では、文字b, d, gが語頭に現れることがあるが、発音上、p, t, kと区別されない。

paar	:	baar	対	: バー
toos	:	doos	箱	: 服用量
kaas	:	gaas	ふた	: ガス

共通語の規範では、語頭のhを発音するのが好ましいとされているが、語頭のhをもたない話し手がかなりいる。

比較:	hall	:	all	霜	: ~の下に(後置詞)
	hea	:	ea	良い	: 年齢(igaの単数属格)

文字šとžはともに [ʃ] (無声硬口蓋歯茎摩擦音)を表す。šとžの使い分けは、p, t, kとb, d, gの使い分けに準じる。すなわち、母音間では、šは長音、žは短音として読まれるが、語頭では発音上区別されない。

šokk	ショック
dušš : duššid	シャワー(単数主格: 複数主格)
žest (発音: šest)	身ぶり, ジェスチャー
süžee (発音: süšee)	トピック, 話題
maneež (発音: maneeš)	調教場

軟口蓋鼻音 [ŋ] は、子音/k/の直前にのみ現れる。子音/k/の前には [n] は現れない([ŋ] と [n] の最小対立の例がない)ので、[ŋ] と [n] は同じ音素 /n/ の異音の関係にあると考えてよい。正書法では ng, nk と書かれるため、[ŋ] と [n] は表記上もまったく区別されない。

pank /paŋ`k/ : panga /paŋka/	銀行(単数主格: 単数属格)
------------------------------	----------------

比較 kang /ka`ŋk/ : kand /ka`nt/ パール(道具) : かかと
 hing /hi`ŋk/ : hind /hi`nt/ 息 : 値段

これに対して, [n] と[m] は語頭や母音間で対立する。

比較 nina : mina 鼻 : 私(1人称単数の代名詞)
 kana : kama にわとり : 穀物類を煎って作った食物

文字jは, ドイツ語, スウェーデン語, フィンランド語などと同様に, [j] (有声硬口蓋摩擦音) を表す。

文字zは, /s/または/ts/として読まれる。

zooloogia /soo-/ ~ /tsoo-/ 動物学
 zlott /slo`tt/ ポーランドの通貨単位
 Zirk /tsir`k/ 南エストニアに多い姓

正書法は, 口蓋化した子音 (/t'/, /s'/, /l'/, /n'/) と通常の子音は区別せず, とともに t, s, l, n で書き表す。

単数主格	単数属格	
kott /kott/	kota /kota/	木靴
kott /kot`t/	koti /kot`i/	袋
hall /hall/	halla /halla/	霜
hall /hal`l/	halli /hal`li/	灰色の
tunned /tunned/	: tunnid /tun`nid/	あなたは知っている : 時間 (複数主格)
kassad /kassad/	: kassid /kas`sid/	レジ (複数主格) : ネコ (複数主格)

参考 半母音 : [w], [j]
 majja [ma`ija], ojja [o`ija]
 laua [lauwa], kaua [kauwa]
 Saiad tuuakse siia õue. [saijad t`uuwakse s`iija `õuwe]

0.2.3. 母音・子音の長さ

0.2.3.1. 三段階の長さの区別

エストニア語の母音と子音には, 短(長さ), 長(長さ), 超長(長さ)の3段階のがある。ただし, 正書法は, この3段階の区別を首尾一貫して書き表すことができない。3段階の区別をはっきりと書き分けることができるのは, 母音間の破裂音に限られる。

短	長	超長	
lõbu	lõpu	lõppu	喜び : 終わり(単数属格) : 終わり(単数分格)
koda	kota	kotta	家 : 木靴(単数属格) : 木靴(単数分格)
tigu	tiku	tikku	カタツムリ : ピン(単数属格) : ピン(単数分格)

これ以外の場合，エストニア語の正書法は，長音(長さ)と超長音(長さ)の間の区別を書き分けない。すなわち，正書法上は，短音(長さ)であるかないかの区別だけが表記される。この際，短音は母音字または子音字 1 つで，長音と超長音は同一の母音字または子音字 2 つで書き表される。

lina	vala	sada	koli	(短音)
linna	valla	saada	kooli	(長音，超長音)

辞書や文法書などで，超長音として発音される母音または子音を明示する必要がある場合には，その母音または子音を表す文字の直前にアクセント記号(´)を書く約束になっている。

lina	linna	li`nna	シーツ(単数主格)：町(単数属格)：町(単数入格)
vala	valla	va`lla	注ぐ(2人称単数命令)：村(単数属格)：放たれて(副詞)
sada	saada	s`aada	100(単数主格)：送る(2人称単数命令)：受ける(不定詞)
koli	kooli	k`ooli	がらくた(単数主格)：学校(単数属格)：学校(単数入格)

0.2.3.2. 二重母音および子音連続(consonant cluster)の長さ

二重母音は短母音 2 つ分，子音連続は短子音 2 つ分(ないしそれ以上)に相当する。したがって，二重母音や子音連続には，原理上，短音(長さ)はありえず，対立は長音(長さ)と超長音(長さ)の二項対立のみとなる。

koera	k`oera	犬(単数属格：単数分格)
laulu	l`aulu	歌(単数属格：単数分格)
metsa	me`tsa	森(単数属格：単数分格)
kasvu	ka`svu	成長(単数属格：単数分格)

二重母音の場合，長さ と長さ との対立は，第 2 成分の母音の持続時間の対立として実現する。すなわち，長さ の二重母音の第 2 成分は，長さ の二重母音の第 2 成分よりかなり長く発音される。

子音連続の場合，長さ ではすべての子音が長さ に発音されるが，長さ では，ある特定の子音がひとつ超長音として発音される。

0.2.3.3. 音節の長さ

3 段階の長さの区別は音節についても行われる。短母音でおわる開音節を短音節(長さ)と呼ぶ。短音節でない音節は，もしそれが超長音を含むなら超長音節(長さ)と呼ばれ，超長音をふくまなければ，長音節(長さ)と呼ばれる。エストニア語の正書法は，大部分の場合，長音節と超長音節を書き分けない。

超長音節においてどの成分が超長音として発音されるかは，ふつうその音節の構造によって決まるので，辞書などにおいて，超長音節を区別する必要のある場合は，その音節の頭にアクセント記号(´)を添える習慣になっている。

`lõppu, `kotta, `tikku, `linna, `saada, `koera, `kinga, `kinki

比較のために、実際に超長音となる母音ないし子音のわかる表記法で示すと次のようになる。

lō`ppu, ko`tta, ti`kku, li`nna, s`aada, k`oera, ki`nga, kin`ki

最少対立を表わす例をあげておく。

短	長	超長
kalu /kalu/ 魚(複数分格)	kaalu /kaalu/ 重さ(単数属格)	`kaalu /k`aalu/ 重さ(単数分格)
lina /lina/ シーツ(単数主格)	linna /linna/ 町(単数属格)	`linna /li`nna/ 町(単数入格)
kabi /kabi/ ひづめ(単数主格)	kapi /kappi/ 戸棚(単数属格)	`kappi /ka`ppi/ 戸棚(単数入格)

0.2.4. 強勢

固有語では、主強勢は第1音節におかれる(a)。比較的新しい借用語では、第1音節以外の音節に主強勢がおかれることがある(b)。

a) 'elu	生活, 生涯
'aken	窓
'pere,kond	家族
b) kvar'tett	四重奏
met'roo	地下鉄
konk'reetne	具体的な

主強勢のある第1音節が超長音節でない場合、すなわち、超長音を含まない場合、副強勢は奇数番目の音節におかれる(c)。主強勢のある第1音節が超長音節の場合、副強勢は偶数番目の音節におかれる(d)。副強勢は、接尾辞におかれることがある(e)。

c) 'hari,likku,dele	通常の(複数向格)
d) 'vank,rile	ワゴン(単数向格)
e) 'kaas,lane	仲間, 同伴者

複合語においては、それぞれの成分に上記の強勢規則が適用される。ただし、最終的に主強勢として実現するのは第1成分の主強勢のみで、その他の成分の主強勢は、副強勢に格下げされて実現する(f)。

f) 'pea,hoone	本館
'raamatu,kogu	図書館
'hamba,ravi,kabinet	歯科治療室

第 1 章(esimene peatükk)

1.1. 「これは本です」

エストニア語は、日本語と異なり、ふつう「これ」「それ」「あれ」のような細かい区別をしません。エストニア語の指示詞 see を日本語に訳す場合には、文脈に応じて「これ」「それ」「あれ」のどれかを当てます。

エストニア語には、英語の the や a のような冠詞はありません。

See on raamat.	これは本です。
See on vihik.	これはノートです。
See on pliiats.	これは鉛筆です。
See on sullepea.	これはペンです。
See on kott.	これはカバン [バッグ] です。
See on käekott.	これはハンドバッグです。
See on Toomas.	この人はトーマス(さん)です。
See on Ulla Kook.	この人はウッラ・コーク(さん)です。
See on proua Kotli.	この人はコトリさんです。
See on härra Kivi.	この人はキヴィさんです。
See on preili Rebane.	この人はレパネさんです。
See on üliõpilane Reet Lepp.	この人は大学生のレート・レップさんです。
See on professor Paul Ariste.	この人はパウル・アリステ教授です。

【解説】

(1) タルトを中心とする南エストニアでは、see のかわりに too が用いられることがあります。

(2) härra, proua, preili は、英語の Mr., Mrs., Miss に相当し、hr., pr., prl. と略されます。

1.2. 「ここに辞書があります」

siin「ここに、ここで」は、話し手の近くの場所を、seal「(あ)そこに、(あ)そこで」は話し手から離れた場所を表します。

「主語 + on + siin (seal)」の語順は、日本語の「～はここ(あそこ)にある/いる」に相当し、「siin (seal) + on + 主語」の語順は、「ここ(あそこ)に～がある/いる」に相当します。

Siin on sõnaraamat.	ここに辞書があります。
Seal on pastapliiats.	あそこにボールペンがあります。
Sõnaraamat on siin.	辞書はここにあります。
Pastapliiats on seal.	ボールペンはあそこにあります。
Reet on siin.	レートはここにいます。
Professor Künnap on seal.	クンナップ教授はあそこにいます。
Siin on raamat, seal on portfell.	ここに本があり、あそこに書類カバンがあります。
Siin on ülikool, ja seal on kirik.	ここには大学があり、あそこには教会があります。
Kilekott on seal, aga rahakott on siin.	
ビニール袋はあそこにあります、財布はここにいます。	

エストニア語の指示詞は see ひとつだけですが、「これ、この」と「あれ、あの」の区別が必要な場合は、siin または seal を添えて、see siin「ここにあるそれ」、see seal「あそこにあるそ

れ」と言うことによって、「これ」と「あれ」の区別ができます。

See siin on sõnaraamat. これは辞書です。
See seal on pastapliiats. あれはボールペンです。

1.3. 「わたしはエストニア人です」

1.3.1. 人称代名詞

エストニア語には人称代名詞が6つあります。6つの代名詞は、人称(1人称 = 話者, 2人称 = 相手, 3人称 = 第3者)と数(単数・複数)によって区別されます。

エストニア語の3人称の人称代名詞には、英語, フランス語, ドイツ語, ロシア語, スペイン語などと異なり、性の区別(男性, 女性, 中性)がありません。エストニア語の3人称の人称代名詞 tema ~ ta (単数), nemad ~ nad (複数)は、文脈によって、それぞれ「彼」または「彼女」, 「彼ら」または「彼女たち」のどちらかになります。

それぞれの人称代名詞には、完全形と短縮形の2つの形があります。

	単 数			複 数		
	完全形	短縮形		完全形	短縮形	
1人称	mina	~ ma	わたし	meie	~ me	わたしたち
2人称	sina	~ sa	あなた	teie	~ te	あなたたち
3人称	tema	~ ta	彼, 彼女	nemad	~ nad	彼ら, 彼女ら

完全形と短縮形の使い分けを、簡単な規則の形で表すことはできません。さまざまな要因が関係しているからです。初級の段階では、人称代名詞が何らかの意図で強調されて、強勢(アクセント)が置かれる場合に完全形を用い、それ以外の場合は、強勢を置かずに短縮形を用いるとだけ覚えておいてください。

1.3.2. 動詞 olema 「ある, いる」の現在形

エストニア語の動詞 olema は、英語の be 動詞に相当する動詞で、次のように活用します。動詞 olema は、エストニア語には数少ない不規則活用の動詞の1つで、3人称の単数形と複数形が同じ形です。

	単数		複数	
1人称	ma	ole/n	me	ole/me
2人称	sa	ole/d	te	ole/te
3人称	ta	on	nad	on

動詞 olema の否定形(「~でない, ~にいない」)は、すべての人称で同じ形になります。動詞 olema の現在の否定形としては、ei ole と pole の2つの形が用いられます。

	単数		複数	
1人称	ma	ei ole ~ pole	me	ei ole ~ pole
2人称	sa	ei ole ~ pole	te	ei ole ~ pole
3人称	ta	ei ole ~ pole	nad	ei ole ~ pole

1.3.3. 用例

Mina olen Reet Lepp. わたしはレート・レップです。

Mina olen eestlane.	わたしはエストニア人です。
Mina olen siin.	わたしはここにいます。
Sina oled Jüri Rand.	あなたはユリ・ラントです。
Sina oled ka eestlane.	あなたもエストニア人です。
Sina oled seal.	あなたはそこにいます。
Meie oleme siin.	わたしたちはここにいます。
Teie olete ka siin.	あなた(たち)もここにいます。
Proua Nurk on õpetaja.	ヌルクさんは教師です。
Ta on tartlane.	彼女はタルト出身です。
Jaan Sepp on tallinlane.	ヤーン・セップはタリン出身です。
Härna Laja on arst.	ラヤ先生は医者です。
Rein Laan on dotsent.	レイン・ラーンは助教授です。
Professor Mets on dekaan.	メッツ教授は学部長です。
Nemad on seal.	彼らはあそこにいます。
Mati ja Jüri on ka seal.	マッティとユリもあそこにいます。

Mina ei ole eestlane.	わたしはエストニア人ではありません。
Sa ei ole venelane.	あなたはロシア人ではありません。
Mall Kivi ei ole jaapanlane, ta on eestlane.	
マル・キヴィは日本人でなく、エストニア人です。	
Teie ei ole seal kaua.	あなたたちはそこに長居しません。
Meie ei ole seal.	わたしたちはそこにいません。
Nad pole praegu siin.	彼らは今ここにいません。

1.3.4. 2人称単数の親称と敬称

2人称単数の *sina* ~ *sa* は、家族、親しい友人、神(!)などに対して用いる形で、「親称の2人称単数」と呼ばれます。

話者と相手の関係が疎遠な場合には、相手が1人でも、2人称複数の代名詞 *teie* ~ *te* が用いられます。*sina* ~ *sa* の代わりに用いられる *teie* ~ *te* を「敬称の2人称単数」と呼びます。「敬称の2人称単数」の場合、動詞は、人称代名詞の *teie* ~ *te* に合わせて、2人称複数形になります。

Teie olete ka eestlane.	あなた(敬称)もエストニア人です。
-------------------------	-------------------

【解説】

エストニア語の2人称単数の親称と敬称の使い分けは、フランス語の *tu* と敬称の *vous* , あるいは、ロシア語の *ты* と敬称の *вы* の使い分けの問題と基本的に同じと考えてください。

最近、主としてフィンランド語の影響で、初対面の外国人と最初から親称の *sina* ~ *sa* で話すエストニア人が、若者を中心に増えていますが、賛否両論ある現象なので、敬語文化をもつわれわれ日本人としては、この傾向に従うのを控えておいた方が無難だと私は考えています。

とくに年輩のエストニア人に若輩のわれわれが親称で話しかけるのは、失礼になることが多いということは、心に留めておくべきで、その場合は、相手が *sina* の関係を望む場合のみ、*sina* に移行するようにするのがいいと思います。

1.4. 「これは白い家です」

形容詞は、動詞 *olema* 「～である」の補語として用いられたり、修飾語として名詞の前にお

かれたりします。前者を「形容詞述語」，後者を「形容詞修飾語」と呼びます。

1.4.1. 形容詞述語

Taevas on sinine.	空は青いです。
Maa on must.	大地は黒いです。
Lumi on valge.	雪は白いです。
Sein on roheline.	壁は緑色です。
Laud on kollane.	机は黄色いです。
Auto on punane.	車は赤いです。
Tuba on väike ja pime.	部屋は小さくて暗いです。
Maja on vana ja suur.	家は古くて大きいです。

Mina olen vana.	わたしは年をとっています。
Mina ei ole noor.	私は若くありません。
Sina oled pikk.	あなたは背が高いです。
Sina ei ole väike.	あなたは小さくありません。
Tema on ilus.	彼女は美人です。
Tema ei ole rumal.	彼女は愚かではありません。
See on kõva.	それはかたいです。
See ei ole halb.	それは悪くありません。

1.4.2. 形容詞修飾語

See on valge maja.	これは白い家です。
Siin on suur maja.	ここに大きな家があります。
Seal on väike laev.	あそこに小さい船があります。
Vana auto on siin.	古い車はここにありません。
See on vana auto.	これは古い車です。
Uus vihik on seal.	新しいノートはそこにありません。
See on huvitav raamat.	これは、おもしろい本です。
Maie on tark tüdruk.	マイエは、聡明な娘さん(少女)です。
Jüri Rand on pikk poiss.	ユリ・ラントは、背の高い若者(少年)です。

Valge maja ei ole kõrge. Ta on madal.	白い家は高くありません。低いです。
Eesti keel ei ole raske. Ta on kerge.	エストニア語は難しくなく、やさしいです。
Lagi on valge, aga põrand on must.	天井は白いですが、床は黒いです。
Tüdruk on ilus ja tark, aga poiss on vaene ja rumal.	娘は美しく聡明でしたが、青年は貧しく愚か者でした。

1.4.3. 形容詞修飾語と形容詞述語

形容詞修飾語と形容詞述語の構文は、相互に言い替えができます。また、指示詞 see「これ，それ」は、名詞の前において形容詞修飾語と同じように用いることができます。

See on väike laps.	これは小さな子どもです。
See laps on väike.	この子どもは小さいです。

See on tark poiss. これは頭のいい少年です。
See poiss on tark. この少年は頭がいいです。

See on vana inimene. この人は老人 [年をとった人] です。
See inimene on vana. この人は年をとっています。

1.5. 「あなたは日本人ですか」

普通の文(「平叙文」と呼びます)の文頭に疑問を表す小詞 kas を添えると、英語の「Yes/No 疑問文」「はい」「いいえ」で答える疑問文)に相当する疑問文になります。語順は、原則としてもとの文の語順と同じで、英語のように主語と動詞の語順を入れ換える操作をする必要はありません。

エストニア語の「はい」は、jah ~ jaa です。「いいえ」に当たる特別な語はありません。動詞に添えて否定を表す小詞 ei が「いいえ」として使われます。

Teie olete jaapanlane.	あなた(敬称)は日本人です。
Kas te olete jaapanlane?	あなたは日本人ですか？
- Jah, ma olen jaapanlane.	- はい、わたしは日本人です。
- Ei, ma ei ole jaapanlane.	- いいえ、わたしは日本人ではありません。
Sina oled eestlane.	あなたはエストニア人です。
Kas sa oled eestlane?	あなたはエストニア人ですか？
- Jah, olen küll.	- はい、そうです。
- Ei, ma olen jaapanlane.	- いいえ、わたしは日本人です。
Kas nad on siin? - Jah, on küll.	彼らはここにいますか。 - はい、います。
Kas ta on seal? - Jah, ta on seal.	彼女はそこにいますか。 - はい、そこにいます。
Kas see film on huvitav? - Ei, see film ei ole huvitav.	この映画はおもしろいですか？ - いいえ、この映画はおもしろくありません。
Kas see tuba on ilus? - Ei, see tuba ei ole ilus.	この部屋は美しいですか？ - いいえ、その部屋は美しくありません。
Kas see on hea raamat? - Jah, on küll.	これはいい本ですか？ - ええ、そうです。
Kas see on halb sõnaraamat? - Ei, pole viga.	これはよくない辞書ですか？ - いいえ、問題ありません。

1.6. 「これは何ですか」

日本語の「何」に相当する疑問詞は mis です。mis は、必ず文頭におかれます。

Mis see on? - See on mägi.	これは何ですか？ - それは山です。
Aga mis see on? - See on jõgi.	では、これは何ですか？ - それは川です。
Mis seal on? - Seal on meri.	あそこに何がありますか？ - あそこに海があります。
Aga mis siin on? - Siin on järv.	では、ここには何がありますか？ - ここには湖があります。

1.7. 「この人は誰ですか」

日本語の「誰」に相当する疑問代名詞 kes です。kes は、必ず文頭におかれます。

Kes see on? - See on õpetaja Kaasik.
この人は誰ですか？ - カーシック先生です。

Aga kes see mees on? - See mees on härra Päri.
では、この男性は誰ですか？ - パリさんです。
Kes on härra Päri? - Härra Päri on autojuht.
パリさんの職業は何ですか？ - パリさんは運転手です。
Aga kes on see naine? - See naine on Helga Kuusik.
では、この女性は誰ですか？ - ヘルカ・クーシクさんです。
Kes on Helga Kuusik? - Helga Kuusik on arst.
ヘルカ・クーシクさんの職業は何ですか？ - ヘルカ・クーシクさんは医者です。
Kes seal veel on? - Sina oled ka seal.
そこにはほかに誰がいますか？ - あなたもそこにいます。

1.8. 「これはどんな家ですか」

形容詞に対応する疑問詞(疑問形容詞)は、missugune「どんな」です。missugune は、必ず文頭におかれます。

Missugune see maja on? - See maja on suur.
この家はどんなですか？ - この家は大きいです。
Missugune maja see on? - See on uus maja.
これはどんな家ですか？ - これは新しい家です。

Missugune on tuba? - Tuba on kitsas ja pime.
部屋はどんなですか？ - 部屋は、狭くて、暗いです。
Missugune on aga see tuba? - See tuba on lai ja valge.
ではこの部屋どんなですか？ - この部屋は、広く、明るいです。

Missugune on see inimene? - See inimene on vana ja tark.
この人はどんな方ですか？ - この人は、老年で、賢いです。
Missugune neiu Reet on? - Reet on väga meeldiv neiu.
レートはどんな娘さんですか？ - レートはとてもすてきな娘さんです。

Missugune oled sina? - Mina olen väike ja vaene.
あなたはどんな方ですか？ - わたしは小さくて貧しいです。
Missugune on tee? - Tee on lühike.
道はどんなですか？ - 道は近い [短い] です。
Missugune on tee? - Tee on hästi kuum ja kange.
お茶はどんなですか？ - お茶はとても熱くて、濃いです。

1.9. 「あなたのお名前は」

1.9.1. 人称代名詞の属格形：「～の」

1.3.節で扱った人称代名詞の形は、「主格形」と呼ばれます。主格形は人称代名詞が主語として用いられるときの形です。

人称代名詞には、「わたしの机」「彼の本」などと言う場合に用いられる形があり、「属格形」と呼ばれます。3人称複数を除いて、人称代名詞の属格形にも完全形と短縮形の2つの形があります。

3人称単数の代名詞 tema ~ ta, 1人称複数の代名詞 meie ~ me, 2人称複数の代名詞 teie ~ te の属格形は、主格形と全く同じ形です。

主格形		属格形			
mina	~ ma	minu	~ mu	[laud]	わたしの [机]
sina	~ sa	sinu	~ su	[laud]	あなたの [机]
tema	~ ta	tema	~ ta	[laud]	彼(彼女)の [机]
meie	~ me	meie	~ me	[laud]	わたしたちの [机]
teie	~ te	teie	~ te	[laud]	あなたたちの [机]
nemad	~ nad	nende		[laud]	彼ら(彼女たち)の [机]

Kuidas (~ mis) su nimi on?	あなたの名前は何といいます？
Minu nimi on Peeter Kotli.	わたしの名前はペーテル・コトリです。
See on minu õpetaja.	これはわたしの先生です。
Mu tuba on suur.	わたしの部屋は大きいです。
See on sinu tuba.	これはあなたの部屋です。
Siin on tema toanaaber.	ここに彼女のルームメイトがいます。
See on meie ühiselamu.	これはわたしたちの共同住宅(学生寮)です。
Seal on teie laud.	あそこにあなたたちの机があります。
Seal on nende auditoorium.	あそこに彼らの教室があります。
Ta toanaaber on ka üliõpilane.	彼女のルームメイトも学生です。
Siin on me kodu.	ここにあるのが、わたしたちの家です。
Te vihik on seal.	あなたたちのノートはあそこにあります。
Nende raamat on seal.	かれらの本はあそこにあります。

1.9.2. 「これは誰の席ですか」

疑問詞 kes 「誰」の属格形は, kelle 「誰の」です。

Kelle koht see on? - See on minu koht.	これは誰の席ですか? - わたしの席です。
Kelle tuba siin on? - See on sinu tuba.	ここは誰の部屋ですか? - あなたの部屋です。
Kelle õpetaja see on? - See on meie õpetaja.	
この人は誰の先生ですか? - わたしたちの先生です。	
Kelle portfell seal on? - Seal on tema portfell.	
あそこに誰の書類カバンがありますか? - 彼の書類カバンがあります。	

1.10. 人称代名詞の接格と所有文

エストニア語には, 英語の have 動詞にあたるものがありません。エストニア語では所有を表す場合に, 日本語と同じように「[人]に[物]がある」という構文を用います。この構文を「所有文」と呼びます。

この課では, 所有者が代名詞で表される所有文のみを扱います。所有文で所有者を表す代名詞は, 語尾 -l がついた接格形と呼ばれる形になります。

人称代名詞と疑問詞 kes 「誰」の接格形(語尾 -l がついた形)を覚えましょう。接格形に完全形と短縮形がある代名詞があります。

主格	属格		接格		
mina	minu	~ mu	minul	~ mul	わたしに
sina	sinu	~ su	sinul	~ sul	あなたに
tema	tema	~ ta	temal	~ tal	彼(彼女)に
meie	meie	~ me	meil		わたしたちに

teie	teie	~ te	teil		あなたたちに
nemad	nende		nendel	~ neil	彼ら(彼女たち)に
kes	kelle		kellel	~ kel	誰に？

所有文は、「接格 + on + 所有されるもの」という構造の構文です。

Mul on raamat.	わたしは本をもっています。
Sul on vend.	あなたは男の兄弟がいます。
Tal on poeg.	彼は息子がいます。
Meil on auto.	うちには車があります(わたしたちは車をもっています)。
Teil on koer.	お宅では犬を飼っています。
Neil on buss.	彼らはバスをもっています。

この構文は、動詞 olema の後ろに、所有されるものを表す名詞の代わりに形容詞を用いると、気分や肉体的状態を表す文になります。

Mul on hea.	わたしは気分がいいです。
Sul on halb.	あなたは気分がよくありません。
Tal on mugav.	彼は快適です。
Meil on raske.	わたしたちはしんどいです。
Teil on kerge.	あなたたちは楽です。
Neil on külm.	彼らは寒がっています。

1.11. 数詞(1 から 20 まで)

11 ~ 19 は、1 ~ 9 を表す数詞の後ろに -teist を添えて表します。

1	üks	11	üks/teist
2	kaks	12	kaks/teist
3	kolm	13	kolm/teist
4	neli	14	neli/teist
5	viis	15	viis/teist
6	kuus	16	kuus/teist
7	seitse	17	seitse/teist
8	kaheksa	18	kaheksa/teist
9	üheksa	19	üheksa/teist
10	kümme	20	kaks/kümmend

第2章(teine peatükk)

2.1. 動詞の不定詞形

エストニア語の動詞を辞書で検索する場合，見出し語には olema のように語尾 -ma で終わる動詞の形を用います。この形は「ma-不定詞」と呼ばれ，エストニア語の動詞の最も基本的な形です。エストニア語の動詞には，ma-不定詞のほかに，もうひとつ「da-不定詞」と呼ばれる形があります。

ma-不定詞	da-不定詞	
armasta/ma	armasta/da	愛する
astu/ma	astu/da	進む
ava/ma	ava/da	開ける
ela/ma	ela/da	生きる，住む
helista/ma	helista/da	電話する
hoolitse/ma	hoolitse/da	心配する，世話する
istu/ma	istu/da	座る
kasuta/ma	kasuta/da	使う
kirjuta/ma	kirjuta/da	書く
korista/ma	korista/da	掃除する
küsi/ma	küsi/da	質問する
maga/ma	maga/da	寝る，眠る
otsi/ma	otsi/da	捜す
palu/ma	palu/da	頼む
seleta/ma	seleta/da	説明する
tööta/ma	tööta/da	働く
unusta/ma	unusta/da	忘れる
õpeta/ma	õpeta/da	教える
aita/ma	aida/ta	手助けする
hakka/ma	haka/ta	始める，とりかかる
lenda/ma	lenna/ta	飛ぶ
lõika/ma	lõiga/ta	切る
näita/ma	näida/ta	見せる
oota/ma	ooda/ta	待つ
vaata/ma	vaada/ta	見る
vasta/ma	vasta/ta	答える
ärka/ma	ärka/ta	目を覚ます

ma-不定詞の語尾 -ma は，すべての動詞に共通です。da-不定詞の語尾は，多くの場合 -da または -ta ですが，これら以外の語尾で終わる da-不定詞をもつ動詞も見られます。また，da-不定詞の語幹が，ma-不定詞の語幹と同じでない動詞がかなりあります。

とくに，次の動詞の da-不定詞形は特別な形をしています。

joo/ma	juua	飲む
too/ma	tuua	持ってくる
löö/ma	lüüa	打つ

söö/ma	süüa	食べる
mine/ma	minna	行く
ole/ma	olla	ある, いる
pane/ma	panna	置く
sure/ma	surra	死ぬ
tule/ma	tulla	来る
pese/ma	pesta	洗う
näge/ma	näha	見る
tege/ma	teha	する, 作る

2.2. 動詞の現在形

2.2.1. 語幹と語尾

動詞 elama 「生きている, 住んでいる」の現在形は次のとおりです。

	単数		複数	
1 人称	ma	elan	me	elame
2 人称	sa	elad	te	elate
3 人称	ta	elab	nad	elavad

動詞の現在形の6つの形は, 6つある人称代名詞の1つ1つに対応しています。動詞 elama の現在形を注意して観察すると, 6つの形すべてに共通している部分(ela-)と相互に異なっている部分(-n, -d, -b, -me, -te, -vad)とがあることがわかります。

現在語幹	人称語尾	
ela-	-n	(1 人称単数の人称語尾)
	-d	(2 人称単数の人称語尾)
	-b	(3 人称単数の人称語尾)
	+	
	-me	(1 人称複数の人称語尾)
	-te	(2 人称複数の人称語尾)
	-vad	(3 人称複数の人称語尾)

6つの形すべてに共通している ela- を「語幹」(現在形の語幹, 現在語幹)といい, 相互に異なっている部分を「語尾」(人称語尾)といいます。以下, この教科書では, 語幹と語尾を明らかにする必要がある場合には, 次のように斜線を用いて表します。

ma	ela/n	me	ela/me
sa	ela/d	te	ela/te
ta	ela/b	nad	ela/vad

動詞 elama の現在語幹は, ma-不定詞から不定詞の語尾 -ma を取り除いた形です。別の言い方をすると, ma-不定詞の語幹がそのまま現在語幹になります。動詞 elama と同じ方法で現在語幹が得られる動詞は, エストニア語の動詞全体の7割以上を占めています。

2.2.2. 変則的な現在形をもつ動詞

変則的な現在形, あるいは現在語幹を持つ動詞を4つ覚えましょう。どれももっとも基本

的な動詞に属します。

動詞 *olema* は、現在形の 3 人称の形が変則的です。

<i>ole/ma</i>	<i>ma ole/n</i>	<i>me ole/me</i>
「ある，いる」	<i>sa ole/d</i>	<i>te ole/te</i>
	<i>ta on</i>	<i>nad on</i>

動詞 *minema* の現在語幹は、*ma*-不定詞の語幹とはまったく異なる形(*lähe-*)をしています。

<i>mine/ma</i>	<i>ma lähe/n</i>	<i>me lähe/me</i>
「行く」	<i>sa lähe/d</i>	<i>te lähe/te</i>
	<i>ta lähe/b</i>	<i>nad lähe/vad</i>

動詞 *nägema* と *tegema* の現在語幹では、*ma*-不定詞の語幹にある子音 *-g-*が落ちます。

<i>näge/ma</i>	<i>ma näe/n</i>	<i>me näe/me</i>
「見る」	<i>sa näe/d</i>	<i>te näe/te</i>
	<i>ta näe/b</i>	<i>nad näe/vad</i>

<i>tege/ma</i>	<i>ma tee/n</i>	<i>me tee/me</i>
「する，作る」	<i>sa tee/d</i>	<i>te tee/te</i>
	<i>ta tee/b</i>	<i>nad tee/vad</i>

2.2.3. 現在形の用法

エストニア語の現在時制は、英語の現在時制(I live)、現在進行形(I am living)、未来形(I will live)、未来進行形(I will be living)をすべて統合した意味をもっています。すなわち、現在形の動詞が用いられている文を日本語に訳す場合には、個々の動詞の表す動作・行為などの性格やその動詞が用いられている文脈などによって、「～する」「～している」「～しようとしている」などと訳し分ける必要があります。

<i>Mina töötan iga päev.</i>	わたしは毎日仕事をします。[習慣，繰り返し]
<i>Mina töötan homme.</i>	わたしは明日仕事をします。[未来]
<i>Ma töötan praegu.</i>	わたしは今仕事をしているところです。[現在]
<i>Sina ootad.</i>	あなたは待ちます(待っているところです)。
<i>Riina sööb.</i>	リーナは食べます(食べています)。
<i>Meie kirjutame.</i>	わたしたちは書きます(書いています)。
<i>Teie suitsetate.</i>	あなたたちはタバコを吸います(吸っています)。
<i>Nemad tulevad.</i>	彼らはやってきます(やってくるところです)。
<i>Nad kõik magavad.</i>	彼女たちはみな眠ります(眠っています)。

<i>Kas te töötate iga päev?</i>	あなたは毎日仕事をしますか？
– <i>Jah, ma töötan iga päev.</i>	– はい，わたしは毎日働きます。
<i>Kas sa töotad homme?</i>	あなたは明日仕事をしますか？
– <i>Jah, töötan küll.</i>	– はい，します。

疑問詞の *kes* 「誰」が主語の場合，動詞は 3 人称単数になります。

Kes magab praegu? 今眠っているのは誰ですか(今誰か眠っていますか)?
 Mati magab (~ Jaan ja Toomas magavad) praegu.
 マッティ(~ヤーンとトーマス)が眠っています。

2.2.4. 動詞の現在の否定形

動詞の現在の否定形は、ei (否定の小詞)を動詞の前においてつくります。その際、動詞は人称語尾のつかない形、すなわち現在語幹の形のままです。したがって、否定形はすべての人称に対して同じ形です。

動詞 elama 「住む, 生きている」の否定形

ma	わたしは住んでいない
sa	あなたは住んでいない
ta	彼(彼女)は住んでいない
ei ela	
me	わたしたちは住んでいない
te	あなたたちは住んでいない
nad	彼らは住んでいない

Sina ei ela Narvas. (Narva)	あなたはナルヴァに住んでいません。
Nad ei ela metsas. (mets)	彼らは森の中に住んでいません。
Ülikool ei asu Pärnus.	大学はパルヌにはありません。
Mina ei suitseta kodus.	わたしは家ではタバコを吸いません。
Sina ei käi sageli kaupluses. (kauplus)	あなたは店にあまり行きません。
Te ei tööta haiglas. (haigla)	あなたたちは病院で働いていません。
Ta ei õpeta ülikoolis.	彼女は大学で教えていません。
Me ei söö sööklas.	わたしたちは食堂で食べません。

Kas te elate Tallinnas?	あなたはタリンにお住まいですか?
- Ei, ma ei ela Tallinnas.	- いいえ, わたしはタリンに住んでいません。
Kas te käite sageli raamatukogus?	あなたは図書館によくいらっしゃいますか?
- Ei, ma ei käi seal sageli.	- いいえ, あまり行きません。
Kas te elate ühiselamus?	あなたたちは学生寮に住んでいるのですか?
- Ei, me ei ela ühiselamus.	- いいえ, わたしたちは寮には住んでいません。
Kas sa käid kinos?	あなたは映画に行きますか?
- Ei, ma ei käi kinos.	- いいえ, わたしは映画に行きません。

2.3. 複合動詞(liitverb)

名詞の格変化した形や副詞など、動詞に副詞的な意味を添える語と動詞が結びついてできた熟語動詞を、「複合動詞」と呼びます。複合動詞の構成要素のうち、動詞ではない要素を、この教科書では「複合動詞の副詞的成分」と呼ぶことにします。

複合動詞は熟語的表現ですから、それを構成する動詞と副詞的成分の意味を単純に合わせると複合動詞の意味になるとはかぎりません。複合動詞は、しばしば、それを構成する動詞と副詞的成分の意味からは予想できないような意味を持っています。したがって、多くの場合、複合動詞は、もとになっている動詞とは独立した動詞として覚える必要があります。

heitma 「投げる」 + ette 「前へ」 → ette heitma 「非難する」

kutsuma 「呼ぶ」 + üles 「上へ」 → üles kutsuma 「訴える」

複合動詞の副詞的成分は、動詞が不定詞形の場合は、動詞の前におかれ、動詞が人称変化した形の場合は、動詞の後ろにおかれるのがふつうです。

ma-不定詞	da-不定詞	
aru saa/ma	aru saa/da	理解する, わかる
välja mine/ma	välja minna	外に出る
ära tule/ma	ära tulla	やって来る

複合動詞 aru saama の現在形

単数

複数

1 人称	ma saa/n aru	me saa/me aru
2 人称	sa saa/d aru	te saa/te aru
3 人称	ta saa/b aru	nad saa/vad aru

2.3.1. 複合動詞の用例

Mina lähen ära.	わたしは行きます(出発します, 立ち去ります)。
Meie läheme ära.	わたしたちは行きます。
Sina tuled välja.	あなたは外に出てきます。
Teie tulete välja.	あなたたちは外に出てきます。
Tema paneb tähele.	彼は注目しています。
Nemad panevad tähele.	彼らは注目しています。
Kas ma lähen ära?	立ち去りましょうか?
- Jah, palun.	- ええ, お願いします。
Kas sa tuled välja?	あなたは外に出てきますか?
- Jah, tulen küll.	- ええ, 出て行きます。

【注意】

エストニア語の minema「行く」と tulema「来る」の関係は、英語の go「行く」と come「来る」の関係と基本的に同じです。この最後の例の場合、日本語では「行く」ですが、エストニア語では tulema「来る」を用います。日本語の「来る」は、相手や第3者が話者の方に近づく場合にだけ用いる動詞ですが、エストニア語の tulema は、相手や第3者が話者の方に近づく場合のほかに、話者が相手の方に近づく場合にも用いられます。

2.3.2. 複合動詞の否定形

複合動詞 aru saama 「理解する」の否定形

ma	わたしは分かりません
sa	あなたは分かりません
ta	彼(彼女)は分かりません
ei saa aru	
me	わたしたちは分かりません
te	あなたたちは分かりません
nad	彼らは分かりません

Ma ei saa aru.	わたしは理解できません。
Sina ei saa aru.	あなたは理解できません。
Tema ei tule tagasi.	彼女は帰ってきません。
Me ei tule tagasi.	わたしたちは戻ってきません。
Teie ei lähe ära.	あなたたちは立ち去りません。
Ma ei lähe nüüd ära.	わたしは今はいきません。

Kas te saate aru?	おわかりですか？
- Ei, ma ei saa aru.	- いいえ, 理解できません。
Kas sa tuled tagasi?	戻っていらっしゃいますか？
- Ei, ma ei tule tagasi?	- いいえ, 戻りません。
Kas nad lähevad ära?	彼らは行ってしまおうのですか？
- Ei, nad ei lähe ära.	- いいえ, 行きません。
Kas me läheme ära?	出かけ(立ち去り, 出発)しましょうか？
- Ei, me ei lähe veel ära.	- いいえ, まだ出かけません。

2.4. 場所の表現：「～で」「～へ」「～から」

2.4.1. 場所の副詞：「ここで」「(あ)そこで」「ここへ」「(あ)そこへ」

場所の副詞 *siin*「ここで」と *seal*「(あ)そこで」は、人がいる場所や物がある場所、あるいは何かが行われたり、起こったりする場所をさすときに用いられる副詞です。これに対し、人や物が別の場所に移動する場合、その移動先または到達点を表すのが、*siia*「ここへ」と *sinna*「(あ)そこへ」です。

Ma olen <i>siin</i> .	- Ma tulen <i>siia</i> .
わたしはここにいます。	- わたしはここへ来ます。
Ma olen <i>seal</i> .	- Ma lähen <i>sinna</i> .
わたしはそこにいます。	- わたしはそこへ行きます。

Sa tuled <i>siia</i> .	あなたはここへ来ます。
Sa lähed <i>sinna</i> .	あなたはそこへ行きます。
Me tuleme <i>siia</i> .	わたしたちはここに来ます。
Me läheme <i>sinna</i> .	わたしたちはそこへ行きます。
Nad tulevad <i>siia</i> .	彼らはここへ来ます。
Nad lähevad <i>sinna</i> .	彼らはそこへ行きます。

【注意】

日本語の「ここに」「(あ)そこに」は、一緒につかわれる動詞の意味に注意して、*siin*, *seal* に相当するか、*siia*, *sinna* に相当するかを判断した上で、エストニア語に訳す必要があります。

わたしは今ここに住んでいます。	<i>Mina elan praegu siin.</i>
わたしは明日ここに来ます。	<i>Mina tulen homme siia.</i>

2.4.2. 「家の中で」(名詞の内格)

地名その他の場所を表す名詞に語尾 *-s* をつけると、「～において」「～の中で」という意味の形(名詞の内格)になります。子音で終わっている名詞に語尾 *-s* がつく場合には、語尾 *-s* の

前に母音が現れます。

Tartu	タルト	- Tartu/s	タルトで
maja	家	- maja/s	家の中で
Tallinn	タリン	- Tallinn/a/s	タリンで
ülikool	大学	- ülikool/i/s	大学で

Mina elan Tartus.	わたしはタルトに住んでいます。
Tema elab Pärnus. (Pärnu)	彼女はパルヌに住んでいます。
Meie elame Eestis. (Eesti)	わたしたちはエストニアに住んでいます。
Teie elate Tallinnas.	あなたたちはタリンに住んでいます。
Nemad elavad linnas. (linn)	彼らは都市に住んでいます。
Sina oled praegu kodus. (kodu)	あなたは今うちにいます。
Reet töötab sageli raamatukogus. (raamatukogu)	レートはよく図書館で勉強します。
Professor Mets õpetab ülikoolis.	メッツ教授は大学で教えています。
Kes magab majas?	家の中で寝ているのは誰ですか。

2.4.3. 「どこで？」 「どこに？」

場所を問う疑問詞は kus 「どこで」です。kus は、かならず文頭におかれます。

Kus sina oled?	あなたはどこにいますか？
Mina olen siin.	わたしはここにいます。
Kus te elate?	あなたはどこにお住まいですか？
Mina elan Tartus.	わたしはタルトに住んでいます。
Kus te täna töötate?	あなたは今日どこで仕事をなさいますか？
Ma töotan täna kodus.	わたしは今日自宅で仕事をします。
Kus me ootame?	どこで待ちましょうか？
Ootame autos. (auto)	車の中で待ちましょう。
Kus te sööte?	あなたたちはどこで食事をしますか？
Me sööme sööklas. (söökla)	わたしたちは食堂で食べます。
Kus elab teie ema?	あなたのお母さんはどこにお住まいですか？
Ta elab Tallinnas.	タリンに住んでいます。

2.5. 時の表現

2.5.1. 1日, 季節

1日の時間区分, 季節, 曜日・月の名前と「~に」という表現をまとめて覚えましょう。

		~に
朝	hommik	hommikul
昼間, 日中	päev	päeval
夕方, 晩	õhtu	õhtul
夜, 夜中	öö	öösel
春	kevad	kevadel
夏	suvi	suvel
秋	sügis	sügisel
冬	talv	talvel

月曜日	esmaspäev	esmaspäeval
火曜日	teisipäev	teisipäeval
水曜日	kolmapäev	kolmapäeval
木曜日	neljapäev	neljapäeval
金曜日	reede	reedel
土曜日	laupäev	laupäeval
日曜日	pühapäev	pühapäeval

1月	jaanuar	jaanuaris
2月	veebruar	veebruaries
3月	märts	märtsis
4月	aprill	aprillis
5月	mai	mais
6月	juuni	juunis
7月	juuli	juulis
8月	august	augustis
9月	september	septembris
10月	oktoober	oktoobris
11月	november	novembris
12月	detsember	detsembris

2.5.2. 時の疑問詞：「いつ？」

時を問う疑問詞は millal 「いつ」です。millal は、文頭におかれます。

Millal me ärkame?	わたしたちはいつ目を覚ましますか？
Me ärkame hommikul.	朝目覚めます。
Millal me töötame?	わたしたちはいつ働きますか？
Me töötame päeval.	日中働きます。
Millal me sööme ja joome?	わたしたちはいつ食べたり飲んだりしますか？
Me sööme ja joome õhtul.	晩に食べたり飲んだりします。
Millal me magame?	わたしたちはいつ眠りますか？
Me magame öösel.	夜眠ります。

2.5.3. 時の表現の用例

Kool algab Jaapanis kevadel.	日本では春に学校が始まります。
Suvel me puhkame.	夏には休みます。
Kool algab Eestis sügisel.	エストニアでは秋に学校が始まります。
Talvel on külm ja pime.	冬は寒くて暗いです。
Me ei tööta pühapäeval.	日曜日には仕事をしません。
Teisipäeval on eesti keele tund.	火曜日にはエストニア語の時間があります。
Jaapanis algab kool aprillis.	日本では学校が4月に始まります。
Augustis on Tokios palav.	8月の東京は暑いですが [8月には東京では暑い] 。

第3章(kolmas peatükk)

3.1. 名詞の格変化：主格と属格

3.1.1. 名詞の格変化について

日本語では、動詞は活用する語(用言)、名詞は活用しない語(体言)という区別ができますが、エストニア語では、動詞のほかに名詞も活用します。

動詞の活用は、人称変化と呼ばれ、語幹に人称を表す語尾(人称語尾)がつきますが、名詞の活用は、格変化と呼ばれ、語幹に格語尾と呼ばれる語尾がつきます。

名詞 raamat 「本」の主な格形を示すと次のようになります。

	単数	複数
主格	raamat	raamatu/d
属格	raamatu	raamatu/te
分格	raamatu/t	raamatu/id
入格	raamatu/sse	raamatu/te/sse
内格	raamatu/s	raamatu/te/s
出格	raamatu/st	raamatu/te/st
向格	raamatu/le	raamatu/te/le
接格	raamatu/l	raamatu/te/l
奪格	raamatu/lt	raamatu/te/lt
変格	raamatu/ks	raamatu/te/ks

日本語では、形容詞は動詞に準じた活用をするため、動詞とともに用言と呼ばれて、活用しない名詞と区別されますが、エストニア語の形容詞は名詞と同じ活用をするので、文法的に名詞と一緒に扱われます。以下、活用に関する解説では、「名詞と形容詞」という意味で名詞という語を用います。

エストニア語の名詞の活用形は、それぞれ「～格」という名前で呼ばれます。名詞は、単数と複数で別の形をもっていて、それぞれの活用形は、たとえば「単数属格」「複数主格」というように、単数・複数の別を添えて呼ばれます。

3.1.2. 単数主格と単数属格

単数主格は、名詞のもっとも基本的な格形で、名詞を代表する形です。エストニア語の辞書では、名詞は、単数主格の形で載っています。この点で、エストニア語の名詞の単数主格は、日本語の名詞の格助詞(が、を、に、で、...)などのまったくつかない「裸の形」に相当します。ただし、文法的な働きは、日本語の「名詞+が」に相当すると考えた方がいいでしょう。第1章と第2章で用いられている名詞(形容詞を含む)は、語尾 -s または -l をもち、「～で」「～において」という意味を持つ場所や時間の表現(第2章 2.4. ~ 2.5.)以外は、みな単数主格形で現れています。属格は、第1章(1.9.)の人称代名詞の属格形のところですでに触れたように、意味の点で日本語の「名詞+の」に相当する形です。

単数主格形は、名詞によって母音で終わることも、子音で終わることもあって一定しませんが、単数属格形は、どんな名詞でもかならず母音で終わります。

単数属格は、単数主格と並んで、名詞の最も基本的な格の1つです。名詞の単数の格形は、一部を除き、単数属格形から作られるからです。言い替えると、名詞の単数の格形は「単数属格形+格語尾」という形をしており、単数属格形は単数語幹そのものと見なすことができます。ここで、単数属格の格語尾をゼロ(-Ø; 「語尾なし」)と考えるなら、単数属格形も含めて、

単数の格形は、原則として「単数語幹(=単数属格形)+格語尾」という形をしていることになります。

単数属格の形は、単数主格の形から予測できないことが多いので、名詞を覚える際には、単数主格だけでなく、単数属格もあわせて覚える必要があります。

3.1.3. 名詞と形容詞修飾語の呼応(格の一致)

名詞に形容詞修飾語がある場合、形容詞修飾語は名詞と同じ格になります。すなわち、名詞が単数主格なら形容詞も単数主格、名詞が単数属格なら形容詞も単数属格になります。この現象を「名詞と形容詞の呼応」(格の一致)といいます。

単数主格	単数属格
noor tüdruk	noore tüdruku
若い女性	若い女性の
must kohv	musta kohvi
ブラックコーヒー	ブラックコーヒーの
lihtne nimi	lihtsa nime
簡単な名前	簡単な名前

ただし、形容詞の中には不変化(格変化をしない)のものがああります。たとえば、国名を表す形容詞は、常に修飾語として用いられますが、まったく形を変えません。

単数主格	単数属格	単数内格
eesti keel	eesti keele	eesti keeles
エストニア語	エストニア語の	エストニア語において
jaapani linn	jaapani linna	jaapani linnas
日本の町	日本の町の	日本の町で

3.2. 単数属格の用法(その1): 連体修飾語

連体修飾の属格の名詞は、修飾される名詞の前に置かれます。連体修飾の属格は、おおむね日本語の「名詞+の」に対応し、所有者や所属先などを表します。

noore tüdruku kleit	若い娘さんのドレス
eesti keele õpik	エストニア語の教科書
Tallinna linn	タリン(Tallinn)の町

Üliõpilase raamat on auditooriumis.	学生の本は教室にあります。
Siin on eesti keele õpik.	ここにエストニア語の教科書があります。
Loengu algus on varsti.	講義の始まるのはもうすぐです。
Jaani ema elab Kivi tänavas.	ヤーンの母親はキヴィ通りに住んでいます。
Ma ootan Õitse tänava nurgal.	わたしはオイツェ通りの角で待っています。

3.3. 単数属格形(=単数語幹)による名詞の類型

単数主格形と単数属格形を比較し、単数属格形(=単数語幹)がどのような母音で終わるかに注目すると、名詞をいくつかのタイプに分類することができます。単数語幹末に現れる母音は a, e, i, u, o の5つの短母音と長母音または二重母音です。

单数主格	单数属格	
(1a) ema	ema	母親
(2a) raske	raske	重い；難しい
(3a) huvi	huvi	興味，関心
(4a) kodu	kodu	家，家庭
(5a) maa	maa	大地；国
(1b) nädal	nädal/a	週
(2b) tervis	tervis/e	健康
(3b) paber	paber/i	紙
(4b) tüdruk	tüdruk/u	少女
(1c) lusika/s	lusika	スプーン
(1d) kir/i	kir/ja	手紙
(1e) pime	pime/da	暗い
(1f) ak/en	ak/na	窓
(3f) kahv/el	kahv/li	フォーク
(2g) puna/ne	puna/se	赤い
(2h) nim/i	nim/e	名前

3.3.1. 单数属格形が母音 a で終わる名詞

单数主格	单数属格	
(1a) ema	ema	母親
(1b) nädal	nädal/a	週
(1c) lusika/s	lusika	スプーン
(1d) kir/i	kir/ja	手紙
(1e) pime	pime/da	暗い
(1f) ak/en	ak/na	窓

3.3.2. 单数属格形が母音 e で終わる名詞

单数主格	单数属格	
(2a) raske	raske	重い；難しい
(2b) tervis	tervis/e	健康
(2g) puna/ne	puna/se	赤い
(2h) nim/i	nim/e	名前

3.3.3. 单数属格形が母音 i で終わる名詞

单数主格	单数属格	
(3a) huvi	huvi	興味，関心
(3b) paber	paber/i	紙
(3f) kahv/el	kahv/li	フォーク

3.3.4. 单数属格形が母音 u, o で終わる名詞

	単数主格	単数属格	
(4a)	kodu	kodu	家, 家庭
(4b)	tüdruk	tüdruk/u	少女

3.3.5. 単数語幹が長母音または二重母音で終わる名詞

	単数主格	単数属格	
(5a)	maa	maa	大地; 国

3.3.6. 単数属格形に関する注意

3.3.6.1. 単数主格と単数属格(= 単数語幹)の間に子音の違い

(1a)	sada	: saja	100	sõda	: sõja	戦争
(1b)	halb	: halva	悪い	hind	: hinna	価格
	kord	: korra	順序	leib	: leiva	黒パン
	muld	: mulla	土壌	nurk	: nurga	隅
	nõrk	: nõrga	弱い	palk	: palga	報酬
	pikk	: pika	長い	rind	: rinna	胸; 乳房
	selg	: selja	背中	tark	: targa	聡明な
	vend	: venna	兄, 弟	perekond	: perekonna	家族
	jalg	: jala	足	koht	: koha	場所
	laud	: laua	机	õlg	: õla	肩
(1c)	hamma/s	: hamba	歯	kalla/s	: kalda	岸
	puha/s	: puhta	純粋な	rika/s	: rikka	裕福な
	varva/s	: varba	足の指			
(2a)	mõte	: mõtte	考え	hinne	: hinde	評価
	riie	: riide	衣装	õde	: õe	姉, 妹
(2b)	põsk	: põse	頬	täht	: tähe	星; 文字
	kuus	: kuue	6	täis	: täie	満ちた
	uus	: uue	新しい	viis	: viie	5
	üks	: ühe	1	kaks	: kahe	2
	leht	: lehe	葉; 紙面			
(2c)	lühike	: lühike/se	短い	päike	: päike/se	太陽
	väike	: väike/se	小さい			
(2d)	jõgi	: jõe	川	mägi	: mäe	山
	käsi	: käe	手	mesi	: mee	蜜
	vesi	: vee	水			
(3b)	juht	: juhi	指導者	kaart	: kaardi	カード; 地図
	kapp	: kapi	戸棚	kleit	: kleidi	ドレス
	paat	: paadi	ボート	pilt	: pildi	絵, 写真
	pliit	: pliidi	調理台	poiss	: poisi	少年
	riik	: riigi	国家	söök	: söögi	食事
	trepp	: trepi	階段	tund	: tunni	1 時間
	tükk	: tüki	1 切れ, 1 個			
(4b)	auk	: augu	穴, くぼみ	jutt	: jutu	話
	jõud	: jõu	力	käsk	: käsu	命令

lind	: linnu	鳥	lukk	: luku	錠
lõpp	: lõpu	終り	oht	: ohu	危険
toit	: toidu	食物	usk	: usu	信仰
õhk	: õhu	空気			

3.3.6.2. 単数属格形が単数主格形とかなり違う名詞

(1)	nuga	: noa	ナイフ	tuba	: toa	部屋
	viga	: vea	間違い	aeg	: aja	時間
	poeg	: poja	息子	aed	: aia	庭園
	soe	: sooja	暖かい			
(2)	süda	: süda/me	心臓	tüt/ar	: tüt/re	娘
	võt/i	: võt/me	鍵	küm/me	: küm/ne	10
	seits/e	: seits/me	7	mees	: mehe	男; 夫
	õu	: õu/e	中庭			
(3)	pood	: poe	店	kallis	: kalli	高価な
(4)	lugu	: loo	数	nägu	: näo	顔
	rohi	: rohu	草	suhk/ur	: suhk/ru	砂糖
(5)	liht/ne	: liht/sa	簡単な	täht/is	: täht/sa	重要な

3.3.6.3. 複合名詞の単数属格形

複合名詞の格変化は、もっとも最後の構成成分の名詞と同じになります。

eri=ala	: -ala	専門領域	(ala)
aja=kiri	: -kirja	雑誌	(kiri)
pea=linn	: -linna	首都	(linn)
esmas=päev	: -päeva	月曜日	(päev)
aja=leht	: -lehe	新聞	(leht)
üli=õpilane	: -õpilase	大学生	(õpilane)
pasta=pliiats	: -pliiatsi	ボールペン	(pliiats)
kilo=meeter	: -meetri	キロメートル	(meeter)
vaba=riik	: -riigi	共和国	(riik)
ühis=elamu	: -elamu	共同住宅	(elamu)
raamatu=kogu	: -kogu	図書館	(kogu)

3.4. 単数属格の用法(その2): 直接目的語

単数属格は、他動詞文の直接目的語の形にもなります。この場合の単数属格は、日本語の「名詞 + を」にほぼ相当します。

Ma toon raamatu. わたしは本を持ってきます。

Ema kutsub kohe arsti. 母親はすぐ医者を呼びます。

Linda otsib pliiatsi, aga meie otsime õpiku.

リンダは鉛筆を探し出し、わたしたちは教科書を探し出します。

Kas Jüri viib magnetofoni ära?

ユリはテープレコーダーを持って行ってしまいますか？

Kas sa tood homme selle romaani?

あなたは明日その小説を持って来ますか？

Nad ehitavad korstna.

彼らは煙突を建てます。

Dotsent Laan kirjutab raamatu. ラーン助教授は本を書きます。
 Kuhu Reet paneb mu vene keele õpiku?
 レートはどこにわたしのロシア語の教科書を置きますか？
 Kas te avate akna? 窓をあけてくださいますか？

【解説】

ドイツ語・ロシア語などには、直接目的語を表す格として対格(目的格)と呼ばれる独立した格がありますが、エストニア語には、動詞の直接目的語を専門に表す格がなく、いくつかの格が直接目的語の格表示を分担しています。

エストニア語の目的語は、属格のほかに、分格(第5章参照)で表されます。属格で表される直接目的語を「属格目的語」、分格で表される直接目的語を「分格目的語」と呼んで区別します。直接目的語の格として用いられた単数属格を、連体修飾語としての用法から区別して、「対格」と呼ぶことがあります。

ただし、直接目的語が属格で現れるのは、名詞が単数の場合に限られます。言い替えると、直接目的語の格形としての用法は、単数属格形だけのものであり、複数属格形には対応する用法はありません。

3.5. 複合名詞の最初の構成成分

複合名詞の最初の構成成分は、しばしば属格形になります。

palga=päev	給料日 [給料の日]
raamatu=kauplus	書店 [本の店]
toa=naaber	ルームメート [部屋の隣人]

Bussipeatus ei ole kaugel. バス停は遠くありません。
 Kursusetöö ei ole veel valmis. レポートはまだ完成していません。
 Minu toanaaber on Jüri Rand. わたしのルームメートはユリ・ラントです。
 Raamatukaupluses on eesti-vene sõnaraamat.
 書店にエストニア語・ロシア語辞典があります。
 Tema eriala on keeleteadus. 彼女の専攻は言語学です。

3.6. 代名詞の属格形

6つの人称代名詞と疑問代名詞の kes「誰」、mis「何」、指示代名詞の see「これ、この；それ、その」の属格形をまとめて覚えましょう。

主格		属格	
mina	~ ma	minu	~ mu
sina	~ sa	sinu	~ su
tema	~ ta	tema	~ ta
meie	~ me	meie	~ me
teie	~ te	teie	~ te
nemad	~ nad	nende	
kes		kelle	
mis		mille	
see		selle	

名詞に添えられた see は、名詞とともに属格形になります。

See professor on täna haige.	その教授は今日病気です。
Selle professori loeng on homme.	その教授の講義は明日です。
See auditorium ei ole suur.	この教室は大きくありません。
Selle auditoriumi põrand on tume.	この教室の床は黒っぽい色です。
Kas see õpetaja on eestlane?	この先生はエストニア人ですか？
Kas te olete selle õpetaja õpilane?	あなたはこの先生の生徒ですか？

3.7. 所有再帰代名詞 oma 「自分の」

英語では、代名詞で表される直接目的語が、主語と同じ人を指すかどうかにより代名詞の形が異なります。

- (1) a. John will kill you.
b. You will kill yourself.
- (2) a. John will kill him. (John≠him)
b. John will kill himself. (John = himself)

上の(b)の文に使われている yourself, himself のように、主語と同じ人を指す場合に用いられる代名詞の形を「再帰形」と呼びます。すなわち、英語の人称代名詞には目的語として現れる場合に再帰形とそうでない形との区別があります。

ところが、英語では、この区別は所有格になるとなくなってしまいます。

- (3) a. John loves your wife.
b. You love your wife.
- (4) a. John loves his wife. (John≠his)
b. John loves his wife. (John = his)

とくに3人称の場合には、(4a)と(4b)のように、「不倫」している場合も、「正常」な関係の場合も、まったく同じ表現になってしまいます。

エストニア語では、(3)や(4)のような場合でも、再帰形があります。(3b)や(4b)のような文脈で、人称代名詞の属格形(minu, sinu, tema, meie, teie, nende)の代わりに用いられる oma を「所有再帰代名詞」と呼ぶことにします。

次の(a)と(b)の文を比較しましょう。

- (5) a. Isa toob minu magnetofoni. 父がわたしのテープレコーダーを持ってきます。
b. Mina toon oma magnetofoni. わたしは(自分の)テープレコーダーを持ってきます。
- (6) a. Mina müün sinu auto. わたしはあなたの車を売ります。
b. Sina müüd oma auto. あなたは(自分の)車を売ります。
- (7) a. Sina tood meie televiisori. あなたはわたしたちのテレビを持ってきます。
b. Meie viime oma televiisori. わたしたちは(自分たちの)テレビを持っています。
- (8) a. Meie müüme teie telefoni. わたしたちは、あなたたちの電話を売ります。
b. Te müüte oma telefoni. あなたたちは(自分たちの)電話を売ります。

1人称と2人称の場合には、(b)の文脈で人称代名詞の属格形が現れることはありません。

しかし，3人称の場合には，(b)の文脈でも，意味によって，人称代名詞の属格形が使われたり，omaが使われたりします。

- (9b) i) Epp viib oma raadio. エップは(自分の)ラジオを持っていきます。
 ii) Epp viib tema raadio. エップは(他人の)ラジオを持って行きます。

- (10b) i) Eestlased toovad oma lennuki.
 エストニア人たちは(自分たちの)飛行機を持ってきます。
 ii) Eestlased toovad nende lennuki.
 エストニア人たちは(他人の)飛行機を持ってきます。

3.8. 「人称代名詞の属格 + 所有再帰代名詞」 = 「～のもの」

エストニア語には，英語の mine, yours などのような所有代名詞はありません。「～のもの」という意味を表す場合には，所有再帰代名詞 oma の前に人称代名詞の属格形(1.9節)を添えます。疑問代名詞 kes 「誰」に対応する「誰のもの」は，kelle oma となります。

Kelle oma see raadio on?	このラジオは誰のものですか？
See raadio on minu oma.	このラジオはわたしのです。
See auto on meie oma.	この車はわたしたちのものです。
See magnetofon on sinu oma.	このテープレコーダーは君のです。
See telefon on tema oma.	この電話は彼(彼女)のものです。
See telefon on teie oma.	この電話はあなたたちのものです。
See lennuk on nende oma.	この飛行機は彼らのものです。

3.9. 単数属格の用法(その3)：後置詞とともに

エストニア語には，日本語の助詞のように名詞の後ろに添えて場所関係や動詞との格関係を表す語があります。このような語を，英語の前置詞に対して，「後置詞」と呼びます。エストニア語の後置詞は，たいいてい名詞の属格形とともに用いられます。

raamatu	peal all kõrval	本の	上に 下に そばに
maja	juures ees taga	家の	ところに 前に 裏に(後ろに)

Raamatu peal on sullepea.	本の上にペンがあります。
Portfelli all on paber.	書類カバンの下に紙があります。
Kabinet on aula kõrval.	研究室は講堂のそばにあります。
Dekaani kõrval on meie rühmavanem.	学部長のそばにわたしたちのグループのリーダーがいます。
Kaev on maja juures.	井戸は家のところにあります。
Meie oleme Laine juures külas.	わたしたちはライネの家にお邪魔しています。
Laud on diivani ees.	机はソファの前にあります。
Riiul on diivani taga.	本棚はソファの後ろにあります。

第4章(neljas peatükk)

4.1. 名詞の格変化：複数主格

複数主格は、単数主格に対応する複数の形です。複数主格の作り方はすべての名詞に共通で、単数属格に語尾 -d をつけます。

単数属格形のタイプ分け(3.3.参照)に沿って、複数主格の形を整理すると次のようになります。

単数主格	単数属格	複数主格	
(1a) maja	maja	maja/d	家
(2a) haige	haige	haige/d	病気の
(3a) kivi	kivi	kivi/d	岩石
(4a) valu	valu	valu/d	痛み
(5a) töö	töö	töö/d	仕事
(1b) tänav	tänav/a	tänav/d	通り
(2b) kauplus	kauplus/e	kaupluse/d	商店
(3b) korter	korter/i	korteri/d	アパート
(4b) vihik	vihik/u	vihiku/d	ノート
(1c) pastaka/s	pastaka	pastaka/d	ボールペン
(1d) as/i	as/ja	asja/d	ことがら
(1e) sile	sile/da	sileda/d	滑らかな
(1f) sõb/er	sõb/ra	sõbra/d	友人
(3f) mant/el	mant/li	mantli/d	コート
(2g) jaapanla/ne	jaapanla/se	jaapanlase/d	日本人
(2h) mer/i	mer/e	mere/d	海

4.2. 複数主格の用法(その1)：主語

4.2.1. 名詞・形容詞

複数主格形は、複数名詞が主語として現れる場合の格形です。名詞が複数主格形の場合、修飾形容詞も複数主格形になります。

Jaapanlased töötavad hästi ja palju.	日本人は、良く働きますし、たくさん働きます。
Eestlased elavad Eestis.	エストニア人はエストニアに住んでいます。
Uued autod on seal.	新しい車は、あそこにあります。
Väikesed lapsed magavad toas.	小さな子どもたちは、部屋の中で眠っています。
Tal on sinised silmad ja tumedad juuksed.	
彼女は目が青くて、髪は黒(つぼ)い色をしています。	

動詞 olema 「ある、いる」の補語は、主語が複数の場合、複数主格形になります。

Vihikud on sinised.	ノートは青いです。
Meie maja aknad on väikesed.	わたしたちの家の窓は小さいです。
Auditooriumi seinad on heledad.	教室の壁は明るい色をしています。

Jaak ja Enn on noored. Mati ja Toomas on noored arstid. Meie oleme eesti keele õpetajad.	ヤークとエンは若いです。 マッティとトーマスは、若い医師(たち)です。 わたしたちは、エストニア語の教師です。
Minu isa elab Tallinnas. Minu vanemad elavad Haapsalus.	父はタリンに住んでいます。 わたしの両親はハーブサルに住んでいます。
Sinu vend on üliõpilane. Sinu toanaabrid on jaapanlased.	あなたの弟さんは大学生です。 あなたのルームメートたちは、日本人です。
Tema auto on peahoone taga. Tema raamatud on akna all.	彼女の車は本館の裏にあります。 彼女の本は窓の下にあります。
Meie maja ei ole uus. Meie neiud ei istu kohvikus. われわれ(のクラス)の女の子たちは喫茶室に座っていません。	わたしたちの住んでいる建物は新しくありません。
Teie raadio töötab hästi. Teie magnetofonid ei tööta.	あなたたちのラジオは調子がいいです。 あなたたちのテープレコーダーは動きません。
Nende kool ei asu kesklinnas. Nende kauplused asuvad kesklinnas.	彼らの学校は町の中心部にありません。 彼らの店は町の中心部にあります。

4.2.2. 指示代名詞

指示代名詞「これ、それ」は、複数では、単数の時とは別の語を用います。単数主格形 see に対応する複数主格形は need です。

See on uus maja. Need on uued majad.	これは新しい家です。 これらは新しい家です。
---	---------------------------

See üliõpilane on eestlane, aga need on jaapanlased.
この学生はエストニア人ですが、あの学生たちは日本人です。
See loeng toimub raamatukogus, aga need toimuvad peahoones.
この講義は図書館で行われますが、それらは本館で行われます。
See raamat ei ole huvitav, aga need on huvitavad.
この本は面白くありませんが、それらは面白いです。
Need üliõpilased ei õpi Tartu Ülikoolis.
この学生たちは、タルト大学で学んでいません。

4.2.3. 不定代名詞 mõni ~ mõned 「いくつかの」

不定代名詞の mõni「いくつかの」は、「mõni(+ 単数名詞)」「mõned(+ 複数名詞)」のどちらで用いても、意味は変わりません。

Mõni eestlane õpib Jaapani ülikoolis. ~ Mõned eestlased õpivad Jaapani ülikoolis.
日本の大学で勉強しているエストニア人がいます。
Mõned inimesed töötavad palju, teised aga vähe.
たくさん働く人もいますが、あとの人は少ししか働きません。

Mõni vihik on roheline ja mõni sinine.

緑色のノートもあれば、青いノートもあります。

See film ei ole huvitav, aga mõned teised filmid on väga huvitavad.

この映画は面白くありませんが、映画の中には面白いものもあります。

4.3. 複数主格の用法(その2)：直接目的語

複数主格は、直接目的語の格形として用いられます。

Me avasime kõik aknad.	わたしたちは窓を全部開けました。
Nad ehitasid need majad.	彼らはこれらの家を建てました。
Ta kirjutas kõik need raamatud.	彼はこれらの本をすべて書きました。
Nad panid koerad sinna.	彼らは犬たちをそこに入れました。

4.4. 動詞の過去形

4.4.1. 過去語幹と人称語尾

動詞 *elama* 「生きている，住んでいる」の過去形は次の通りです。

		単数		複数
1 人称	ma	elasin	me	elasime
2 人称	sa	elasid	te	elasite
3 人称	ta	elas	nad	elasid

過去形を語幹と人称語尾とに分析して、現在形と比較してみましょう。

現在形	過去形	人称語尾		
		現在	過去	
ma ela/n	ela/si/n	-n	~ -n	(1 人称単数の人称語尾)
sa ela/d	ela/si/d	-d	~ -d	(2 人称単数の人称語尾)
ta ela/b	ela/s	-b	~ Ø	(3 人称単数の人称語尾)
me ela/me	ela/si/me	-me	~ -me	(1 人称複数の人称語尾)
te ela/te	ela/si/te	-te	~ -te	(2 人称複数の人称語尾)
nad ela/vad	ela/si/d	-vad	~ -d	(3 人称複数の人称語尾)

動詞 *elama* の過去語幹は、*ma*-不定詞の語幹に過去を表す標識(接尾辞) *-s* (3 人称単数形) または *-si-* (3 人称単数形以外) を付けて作られます。エストニア語の動詞の過去語幹は、ごく一部の動詞を除いて、すべてこの方法で作られます。

過去形の場合、人称語尾は、1 人称と 2 人称では現在形の時とまったく同じですが、3 人称単数では語尾がなく(「語尾がゼロ-Ø である」といいます)、3 人称複数では現在形の時とは異なる人称語尾 *-d* が用いられます。とくに、過去形の場合、2 人称単数形と 3 人称複数形が、まったく同じ形になる(*sa elasi/d* ~ *nad elasi/d*) ことに注意しましょう。

過去形の作り方に関しては、第 11 章でよりくわしく学びます。

4.4.2. 動詞の過去形の作り方：例外(その1)

現在形では不規則だった動詞 *olema* 「ある，いる」は、過去形では、語尾は規則的になりますが、過去の標識が *-si-* ~ *-s* ではなく *-i-* となる動詞のグループに属する点で、やはり例外的です。

ma	ol/i/n	me	ol/i/me
sa	ol/i/d	te	ol/i/te
ta	ol/i	nad	ol/i/d

Mina olen täna kodus.	わたしは今日うちにいます。
Mina olin eile linnas.	わたしは昨日町にいました。
Sina olid eile Tartus.	あなたはきのうタルトにいました。
Tema oli eile kodus.	彼女は昨日家にいました。
Meie olime eile kinos.	わたしたちは昨日映画にいました。
Teie olite eile siin.	あなたたちはきのうここにいました。
Nemad olid eile seal.	彼らは昨日そこにいました。
Meil on koer.	うちでは犬を飼っています。
Teil oli kass.	あなたのうちではネコを飼っていました。

次の動詞は、動詞 olema 「ある、いる」と同じタイプの過去形をもっています。

		現在	過去
pane/ma 置く	ma	panen	panin
	sa	paned	panid
	ta	pabeb	pani
	me	paneme	panime
	te	panete	panite
	nad	panevad	panid
pese/ma 洗う	ma	pesen	pesin
	sa	pesed	pesid
	ta	peseb	pesi
	me	peseme	pesime
	te	pesete	pesite
	nad	pesevad	pesid
sure/ma 死ぬ	ma	suren	surin
	sa	sured	surid
	ta	sureb	suri
	me	sureme	surime
	te	surete	surite
	nad	surevad	surid
tule/ma 来る	ma	tulen	tulin
	sa	tuled	tulid
	ta	tuleb	tuli
	me	tuleme	tulime
	te	tulete	tulite
	nad	tulevad	tulid
näge/ma	ma	näen	nägin

見る	sa	näed	nägid
	ta	näeb	nägi
	me	näeme	nägime
	te	näete	nägite
	nad	näevad	nägid
tege/ma する, 作る	ma	teen	tegin
	sa	teed	tegid
	ta	teeb	tegi
	me	teeme	tegime
	te	teete	tegite
	nad	teevad	tegid

4.4.3. 動詞の過去形の作り方：例外(その2)

次の動詞は、語幹の長母音が過去の標識 *-i-* がつくと短母音になり、過去語幹には母音 *i* で終わる二重母音が現れます。

		現在	過去
saa/ma 受け取る	ma	saan	sain
	sa	saad	said
	ta	saab	sai
	me	saame	saime
	te	saate	saite
	nad	saavad	said
joo/ma 飲む	ma	joon	jõin
	sa	jood	jõid
	ta	joob	jõi
	me	joome	jõime
	te	joote	jõite
	nad	joovad	jõid
söö/ma 食べる	ma	söön	sõin
	sa	sööd	sõid
	ta	sööb	sõi
	me	sööme	sõime
	te	sööte	sõite
	nad	söövad	sõid

このほかに、*jooma* と同じ活用をする動詞として *looma* 「作り出す」、*tooma* 「持ってくる」、*sööma* と同じ活用をする動詞として *lööma* 「打つ、なぐる」があります。

4.4.4. 不規則動詞

		現在	過去
mine/ma 行く	ma	lähen	läksin
	sa	lähed	läksid

ta	läheb	läks
me	läheme	läksime
te	lähete	läksite
nad	lähevad	läksid

4.5. 「どこへ」

「～へ」を表す名詞の格語尾は -sse です。語尾 -sse は、単数属格形につきます。対応する疑問詞は kuhu 「どこへ」です。

Kuhu lapsed lähevad?	子どもたちはどこへ行くところですか？
Nad lähevad sööklasse.	食堂へ行くところです。
Millal te lähete raamatukogusse?	あなたたちはいつ図書館へ行きますか？
Üliõpilased ei lähe peahoonesse.	学生たちは本館へ行きません。
Töölised lähevad hommikul tehasesse.	労働者たちは朝、工場へ行きます。

4.6. 「いかがお過ごしですか」(様態の副詞)

4.6.1. 「よく、うまく」

形容詞 hea「良い」、halb「悪い」に対応する副詞は、hästi「良く、上手に」、halvasti「悪く、下手に」です。対応する疑問詞は、kuidas「どのように」です。

Kuidas te elate?	いかがお過ごしですか？
Täna, hästi.	ありがとう、元気です。
Halvasti, ma olen haige.	思わしくありません。わたしは病気です。
Kuidas teie ema elab?	あなたのお母さんはいかがお過ごしですか？
Täna, hästi.	ありがとう、元気です。
Kuidas töö läheb?	お仕事はいかがですか？
Väga halvasti.	うまく行っていません。
Kuidas Anu räägib vene keelt?	アヌの話すロシア語はいかがですか？
Anu räägib vene keelt väga hästi.	アヌはとても上手にロシア語を話します。

4.6.2. 接尾辞 -sti, -lt

形容詞の語幹に接尾辞 -sti または -lt をつけると、疑問詞 kuidas「いかに」に応える副詞(様態の副詞)ができます。

kiire	: kiire	→ kiire/sti	速い	: 速く
õige	: õige	→ õige/sti	正しい	: 正しく
rumal	: rumala	→ rumala/sti	愚かな	: 愚かに
tugev	: tugeva	→ tugeva/sti	強い	: 強く
vali	: valju	→ valju/sti	声大きい	: 大きな声で
vaba	: vaba	→ vaba/lt	自由な	: 自由に
täp/ne	: -se	→ täpse/lt	正確な	: 正確に
vaik/ne	: -se	→ vaikse/lt	静かな	: 静かに
aegla/ne	: -se	→ aeglase/lt	ゆっくりの	: ゆっくりと
pidu/lik	: -liku	→ piduliku/lt	祝典の	: 祝典のごとく
hari/lik	: -liku	→ hariliku/lt	ふつうの	: ふつう
soe	: sooja	→ sooja/lt	暖かい	: 暖かく

【参考】

接尾辞は、形容詞ごとにほぼ決まっています。一般に、接尾辞 -ltの方がよく使われます。

4.7. 時刻の言い方

名詞 *kell* は、「時計」「鐘」という意味ですが、数字の前に置かれると、「～時」という意味になります。

4.7.1. 「～時です」

Kui palju kell on? (～ Mis kell on?)	何時ですか？
Kell on neli.	4時です。
Kui palju nüüd kell on?	今何時ですか？
Praegu on kell seitse.	今7時です。
Kui palju kell juba on?	もう何時ですか？
Kell on alles kaheksa.	まだ8時になったばかりです。
Mis täpne kell on?	正確な時刻は何時ですか？
Kell on täpselt kümme.	10時ちょうどです。
Kui palju kell nüüd on?	今何時でしょうか？
Kell on varsti kaksteist.	もうじき12時になります。
Kell on umbes kaksteist.	12時ころです。
Mis kell praegu on?	今何時ですか？
Kell on parajasti kaks.	今2時です。

4.7.2. 「～時に」

「～時に」という時は、数字の前に名詞 *kell* を添えるだけです。「何時に？」と質問する場合には、疑問詞 *millal* 「いつ、何時に」を用います。

Millal ma siia tulen?	何時にここに来ましょうか？
Palun tule siia kell seitse hommikul.	朝の7時にここに来てください。
Millal teie siia tulete?	あなたたちは何時にここに来ますか？
Me tuleme siia täpselt kell üks päeval.	午後1時ちょうどにここに来ます。
Millal me läheme sinna?	何時にそこへ行きますか？
Me läheme sinna umbes kell üheksa õhtul.	夜の9時ころそこへ行きます。
Millal nad sinna lähevad?	彼らは何時にそこへ出かけますか？
Nad lähevad sinna kell kaks öösel.	夜中の2時にそこへ出かけます。

4.8. 接続詞：või 「それとも、または」

Kas te töötate kodus või raamatukogus?	あなたたちは家で勉強しますか、それとも図書館ですか？
Ma töotan kodus.	家で勉強します。
Kas nad elavad Tartus või Tallinnas?	彼らはタルトに住んでいますか、タリンですか？
Nad elavad Tartus.	タルトに住んでいます。
Kas Toomas on eestlane või venelane?	トーマスはエストニア人ですか、ロシア人ですか？
Ta on muidugi eestlane.	もちろんエストニア人です。

第5章(viies peatükk)

5.1. 個体名詞と非個体名詞

英語では、個々の名詞が1個、2個と数えられる対象を表すかどうかを基準にして、名詞を可算、非可算に区分します。

エストニア語の名詞の場合も、この英語の可算・非可算の区分とよく似た区別が必要になります。ここでは、この区別を、個体と非個体の区別と呼ぶことにします。生物・無生物、具体物・抽象物などの区別に関係なく、名詞が指しているものを、名詞の指示する対象(略して指示対象)と呼ぶならば、個体・非個体の区分は、名詞の指示対象の性質に基づく名詞の意味の分類ということになります。

名詞の指示対象のうち、それ本来の特定の形で認識され、1個、2個と数えられるものを、個体と呼びましょう。たとえば、「時計」「本」「犬」「男」などが個体です。個体を指示する名詞を個体名詞と呼びます。一般に、個体は、物理的に分割されると、個体として認識されなくなってしまふという性質をもっています。たとえば、2つに切断された「本」は、もう本ではありません。「本」は2つに切断されたたとんに「本」であることをやめ、その代わりに、かつて「本」と呼ばれていた物体のかたわれが2つ生じます。

これに対し、非個体は、もともとそれ特有の形がなく、外から量の枠を与えないかぎり、数えられない対象です。たとえば、「粘土」「水」「ほこり」「紙」「時間」「空間」などが非個体です。非個体を指す名詞を非個体名詞と呼ぶことにします。非個体名詞によって指される対象は、一定の形を持つわけではありませんから、分割されても同じ名前と呼ぶことができます。たとえば、あるコップに「水」が入っている状態を考えましょう。このコップの「水」を半分だけ別のコップに分けたとします。すると、「水」が入っているコップが2つある状態が生じます。つまり、「水」は、2つに分割してもやはり「水」と呼ぶことができます。

個体名詞と非個体名詞の区別は、絶対的なものではありません。同じ指示対象でも、見方、考え方によって、個体として認識されたり、されなかつたりするからです。たとえば、「マグロ」は、魚市場ではあの魚の形をした個体を単位として認識されるのがふつうだろうと考えられます。しかし、寿司屋では肉の形で意識され、非個体になってしまいます。逆に、「コーヒー」は一般的には非個体ですが、喫茶店のメニューを見ながら「コーヒーを2つ」と注文する時には、1人前(あるいは1杯分)を単位とする個体として意識されているといえます。

したがって、ひとつひとつの名詞を個体名詞、非個体名詞と分類するのは、原理的に不可能です。ある名詞の指示対象が個体であるか、非個体であるかは、本来決まっているものではなく、状況に応じてどちらにもなりうるからです。しかし、「ふつう個体として意識される対象を指す名詞」「ふつう非個体として意識される対象を指す名詞」という条件付きではあれ、名詞を個体名詞・非個体名詞に分類しておくこと、直接目的語の格表示のしくみの理解が容易になりますので、この区別に慣れてください。

5.2. 名詞の格変化：単数分格

単数分格は、単数主格、単数属格とともに、名詞の最も基本的な格の1つです。単数分格の語尾によって、名詞は3つのタイプに分かれます。

5.2.1. 単数分格語尾が-tとなる名詞

単数語幹(=単数属格形)に語尾 -t がついて単数分格形ができる名詞と、子音で終わる特別な語幹(子音語幹)をもち、この語幹に語尾 -t がついて単数分格形ができる名詞の2つのタイプがあります。

5.2.1.1. 単数語幹(=単数属格形)から単数分格形をつくる名詞

单数主格	单数属格	单数分格	
(1a) `õhtu	`õhtu	`õhtu/t	夕べ
(1b) `kahv/el	`kahv/li	`kahvli/t	フォーク
(1c) paber	paber/i	paberi/t	紙
(1d) pime	pime/da	pimeda/t	暗い
(1e) lusika/s	lusika	lusika/t	スプーン

5.2.1.2. 子音語幹から単数分格形をつくる名詞

子音語幹は、名詞によって、単数主格形と同じ形をしている場合とそうでない場合とがあります。

单数主格	单数属格	单数分格	
(2a) tervis	tervis/e	tervis/t	健康
(2b) rahva/s	`rahva	rahvas/t	人々
(2c) noor	noore	noor/t	若い
(2d) puna/ne	puna/se	punas/t	赤い

次の名詞にも子音語幹があります。

单数主格	单数属格	单数分格	
tüt/ar	`tüt/re	tütar/t	娘
ak/en	`ak/na	aken/t	窓
lühike	lühike/se	lühikes/t	短い
päike	päike/se	päikes/t	太陽
väike	väike/se	väikes/t	小さい

【注意】

次の名詞は子音語幹をもっていませんが、子音語幹をもつ名詞と同じように、単数分格の語尾は単数主格形につきます。

mõt/e	`mõt/te	mõte/t	考え
rii/e	`rii/de	riie/t	衣服
arve	`arve	arve/t	勘定書
hoone	`hoone	hoone/t	建物
lõuna	`lõuna	lõuna/t	南；昼食
terve	`terve	terve/t	健康な

5.2.1.3. 注意すべき単数分格形

单数主格	单数属格	单数分格	
uu/s	uu/e	uu/t	新しい
täi/s	täi/e	täi/t	満ちた
kuu/s	kuu/e	kuu/t	6
vii/s	vii/e	vii/t	5
kä/si	kä/e	kä/tt	手
ve/si	ve/e	ve/tt	水

me/si	me/e	me/tt	蜜
laps	lapse	last	子ども
uks	ukse	ust	ドア
mees	mehe	meest	男；夫
süda	südame	südant	心臓
üks	ühe	üht ~ ühte	1
kaks	kahe	kaht ~ kahte	2

5.2.2. 単数分格の語尾が-Ø(ゼロ)となる名詞

単数分格形が単数属格形と区別できない名詞と、単数分格形が単数属格形と区別される名詞の2つのタイプがあります。

5.2.2.1. 単数分格形が単数属格形と区別できない名詞

単数主格	単数属格	単数分格	
(3a) ema	ema	ema	母親
(3b) seminar	seminar/i	seminari	セミナー

(3a)のタイプは、単数主格、単数属格、単数分格がすべて同じ形になります。

5.2.2.2. 単数分格形と単数属格形が異なる名詞

単数属格形と単数分格形が綴りの上で区別される名詞と区別されない名詞とがあります。

単数主格	単数属格	単数分格	
(4a) `kõik	kõige	`kõi/ke	すべての
(4b) `päev	päeva	`päeva	1日
(4c) kiri	kirja	`kirja	手紙

(4a)のタイプでは、単数属格形と単数分格形の違いが子音に現れます。単数分格形では単数主格形と同じ子音が現れます。

5.2.2.3. 注意すべき単数分格形

(3a)型の名詞の一部に、単数主格形が単数属格形・単数分格形と異なるものがあります。

単数主格	単数属格	単数分格	
nim/i	nim/e	nime	名前
suv/i	suv/e	suve	夏

単数属格形と単数分格形が区別される名詞のうち、次のものをとくに覚えましょう

mägi	`mäe	mäge	山
viga	`vea	viga	欠陥
lugu	`loo	lugu	話；数
nuga	`noa	nuga	ナイフ
tuba	`toa	tuba	部屋

õde	`õe	õde	妹, 姉
sõda	sõja	sõda	戦争
`õu	õue	`õue	中庭
`aeg	aja	`aega	時間, 時
`poeg	poja	`poega	息子
`pood	`poe	`poodi	商店
`soe	sooja	`sooja	暖かい
rohi	rohu	`rohtu	草
sõber	sõbra	`sõpra	友人

5.2.3. 単数分格の語尾が-d となる名詞

単数分格の語尾が -d になるのは、長母音または二重母音で終わる単音節の語幹をもつ語です。ただし、二音節の語幹を持つ語の中にも、語尾 -d をとるものがあります。

単数主格	単数属格	単数分格	
(5a) `maa	`maa	`maa/d	国
(5b) meri	mere	`merd	海

【注意】

単数主格	単数属格	単数分格	
nõu	nõu	nõu	助言
lumi	lume	`lund	雪

5.3. 単数分格の用法(その1)：直接目的語

直接目的語を表す格としての単数分格は、同じく直接目的語を表す単数属格(第3章3.4.節)と対立します。属格目的語と分格目的語の使い分けは、以下に述べるいくつかの要因にしがって行われます。

5.3.1. 分格目的語だけをとる他動詞

他動詞のなかには、たとえば次の動詞のように、ふつう分格目的語しかとらないものがあります。この種の動詞に関しては、属格目的語と分格目的語の使い分けの問題は生じません。

armastama	愛する	ravima	治療する
huvitama	興味をもたせる	märkama	気づく
kuulama	聞く	tänama	感謝する
külastama	訪問する	vaatama	見る

Õhtul ma kuulan muusikat.	夕方、わたしは音楽を聞きます。
See meditsiiniõde armastab oma tööd.	この看護婦は自分の仕事を愛しています。
Matemaatika huvitab teda väga.	彼は数学がとても面白いのです。
Millal te külastate oma vanaema?	あなたたちはいつおばさんを訪問しますか？
Kes ravib seda inimest?	誰がこの人を治療していますか？
Minu tuttavad vaatavad uut filmi.	わたしの知人たちは新しい映画を見ています。

5.3.2. 属格目的語・分格目的語のどちらもとれる動詞

属格目的語・分格目的語のどちらも取ることができる動詞の場合，2つの目的語は次のように使い分けます。

5.3.2.1. 否定文

否定文では，分格目的語を用います。

Ta ei lugenud artiklit läbi.	彼は記事を読んでしまいました。
Me ei avanud kohe akent.	わたしたちはすぐ窓をあけませんでした。
Arvo ei ostnud jalgratast.	アルヴォは自転車を買いませんでした。
Mari ei söönud võileiba ära.	マリはサンドイッチを食べてしまいました。

【注意】対応する肯定文では属格目的語が用いられます。

Ta luges artikli läbi.	彼は記事を読みました。
Me avasime kohe akna.	わたしたちはすぐ窓を開けました。
Arvo ostis jalgratta.	アルヴォは自転車を買いました。
Mari sõi võileiva ära.	マリはサンドイッチを食べてしまいました。

5.3.2.2. 肯定文

肯定文では，次のような要因によって，分格目的語と属格目的語のどちらが用いられるかが決まります。

5.3.2.2.1. 目的語が非個体名詞の場合

非個体名詞は，ふつう分格目的語となります。

Ma toon kohe vett.	わたしはすぐに水を持って来ます。(不特定量)
Haige saab ravimit.	病人は薬を受け取ります。

非個体名詞が属格目的語として現れる場合は，その指示対象が何らかの意味で個体として認識されている(対象が特定でき，その対象が全体として動詞の表す行為・動作を受ける)ことをあらわします。たとえば，次の文は，コップにすでに水が用意してあり，その水を持ってくるような場合に用います。

Ma toon kohe vee.	わたしはすぐにその水を持ってきます。
-------------------	--------------------

5.3.2.2.2. 目的語が個体名詞の場合

他動詞の中には，分格目的語，属格目的語のどちらもとることのできる動詞があります。

属格目的語は，動詞の表す行為・行動が目的語の全体に及んで完結する(完結した)場合に用います。言い替えると，現在進行中の出来事ではなく，これから起ることや，すでに完了・完結してしまった出来事を表す場合に用います。

これに対し，完結しない(しなかった)行為・動作，あるいは，今進行中の出来事(過去において進行中であった出来事)が問題となっている場合は，分格目的語になります。次の例を参考にしてください。

Üliõpilased ehitavad ühiselamut.	[分格目的語] [建築中]
学生たちが寮を建てています。	
Üliõpilased ehitavad ise ühiselamu.	[属格目的語] [寮が完成することの予告]

学生たちは自分たちで寮を建てます。
 Üliõpilased ehitasid ühiselamut. [分格目的語] [建築中]
 学生たちは寮を建てていました。
 Üliõpilased ehitasid ise ühiselamu. [属格目的語] [寮は完成]
 学生たちは自分たちで寮を建てました。

Kunstnik joonistab pildi. 芸術家が絵を描いています。
 Kunstnik joonistab pildi. 芸術家は絵を描きます。

Ametnik otsib puhast paberit. 係官が何も書いてない紙を探しています。
 Ametnik otsib puhta paberi. 係官は何も書いてない紙を見つけます。

Perenaine valmistab meile õhtusööki.
 主婦がわたしたちのために夕食を作っているところです。
 Perenaine valmistab meile õhtusöögi.
 主婦はわたしたちのために夕食を作ってくれます。

Ema küpsetab pirukat. 母親がパイをつくっています。
 Reet Lepp kirjutab võistlustööd. レート・レップはコンテスト用の作文を書いています。
 Ma parandan harjutust. わたしは練習の間違いを直しています。
 Me laulame seda uut laulu. わたしたちはこの歌を歌っています。

5.3.2.2.3. 属格目的語と分格目的語(補足)

ふつうは非個体の対象でも、状況によっては個体と見なされて、属格目的語になることがあります。

次のような文脈で、supp「スープ」、salat「サラダ」、tee「紅茶」、kook「ケーキ」など、エストニア語ではふつう非個体と見なされる対象を表す名詞は、1人前の定量を表す時には属格目的語となります。いいかえると、それぞれ、「スープを1つ」「サラダを1つ」「お茶を1つ」「ケーキを1つ」と注文している場面です。

Ma tellin suppi ja salati. わたしはスープとサラダを注文します。
 Ma tellin tee ja koogi. わたしは紅茶とケーキを注文します。

同じ文で属格目的語の代わりに分格目的語を使うと、1人前の定量という意味は消えて、注文するものの種類だけが問題になります。

Kas me suppi ja salatit tellime? スープとサラダを注文しましょうか？
 Ma tellin teed ja kooki. 紅茶とケーキでも注文します。

5.4. 単数分格の用法(その2)：数詞・数量詞とともに

5.4.1. 数詞とともに

英語では、two books, ten children のように、2以上の数詞とともに用いられる名詞は複数形になります。

エストニア語では、数詞とともに用いられる名詞が複数形とはならず、単数形で現れます。すなわち、名詞は、数詞 üks「1」の場合は単数主格、2以上の数詞の場合は単数分格になります。数詞のあとにくる名詞はふつう個体名詞です。

(üks)	raamat	本 1 冊	kaks	raamatu/t	本 2 冊
1	本		2	本	
(üks)	laps	子ども 1 人	kümme	las/t	子ども 10 人
1	子ども		10	子ども	

【用例】

Laua peal on kaks raamatut.	机の上に本が 2 冊あります。
Raamatukogus on viis üliõpilast.	図書館に学生が 5 人います。
Meie ühiselamus on neli televiisorit.	わたしたちの寮にはテレビが 4 台あります。
Temal on kümme last.	彼女は子どもが 10 人います。

5.4.2. 数量詞とともに

重量，体積・容積などの単位を表す語を，便宜上「数量詞」と呼ぶことにします。数量詞とともに用いられるのは，ふつう非個体名詞で，単数分格であらわれます。2 以上の数詞とともに用いられた数量詞は，単数分格形になります。

piim	(üks)	liiter	piim/a	
牛乳	1	リットル	牛乳	「牛乳 1 リットル」
	kaks	liitri/t	piim/a	
	2	リットル	牛乳	「牛乳 2 リットル」

Mul on kilo suhkrut.	わたしは砂糖を 1 キロもっています。
Kui palju maksab kilo soola?	塩 1 キロはいくらしますか。
Siin on liiter piima.	ここに牛乳が 1 リットルあります。
Palun kaks liitrit piima!	牛乳を 2 リットルください。
Palun tass musta kohvi!	ブラックコーヒーを 1 杯お願いします。

5.5. 分格の用法(その 3)：存在文・所有文の主語

存在文とは，「場所を表す表現 + 動詞 olema + 名詞(存在する物)」という構造の構文で，所有文とは，「所有者(1.10., 8.5.2.参照) + 動詞 olema + 名詞(所有されている物)」という構造の構文です。所有文は，物の存在場所が人になっている場合，つまり，物がある人のもとに存在すると述べている文と考えられ，したがって存在文の特別なものと見なすことができます。存在文における存在物を表す名詞句(所有文における被所有物を表す名詞句)を存在文の主語(所有文の主語)と呼ぶことにします。

エストニア語では，存在文(所有文)の主語が，主格(主格主語)または分格(分格主語)で表されます。主格主語と分格主語の使い分けには，属格目的語と分格目的語の使い分けとよく似たところがあります。

5.5.1. 否定文

否定の存在文(所有文)では，分格主語が原則です。

Mul ei ole täna koosolekut.	わたしは今日，会議はありません。
Koridoris ei ole täpset kella.	廊下には正確な時計はありません。
Tal ei ole head töökohta.	彼女はいい職についていません。
Pargis ei olnud suurt puud.	公園には大きな木はありませんでした。
Täna meil loengut ei ole.	今日，わたしたちは講義がありません。

Majas ei ole inimest. 家の中には人がいません。
Mul ei ole aega. わたしは時間がありません。

5.5.2. 肯定文

5.5.2.1. 主語が非個体名詞の場合

非個体名詞の場合は，分格主語がしばしば現れます。

Klaasis on veel piima. コップのなかにまだ牛乳があります。
Kas teil on aega? あなたたちは時間がありますか？

【比較】

Tal on palavik. 彼は熱があります。

5.5.2.2. 主語が個体名詞の場合

個体名詞の場合は，主格主語になります。

Mul on täna koosolek. わたしは今日，会議があります。
Koridoris on täpne kell. 廊下に正確な時計があります。
Tal on hea töökoht. 彼女はいい職についています。
Pargis oli suur puu. 公園に大きな木がありました。
Täna meil on loeng. 今日，わたしたちは講義があります。
Kirjutuslaua peal on kalender. 机の上にカレンダーがあります。
Toas on ilus vaip. 部屋にはきれいな絨毯が敷かれています。
Laupäeva õhtul oli kontsert. 土曜日の夜，コンサートがありました。
Meil on suur perekond. うちは大家族です。
Emal on väike korter. 母には小さいアパートがあります。
Kas tal on tütar? 彼には娘がありますか？

【注意】

疑問文の場合，分格主語が使われることもあります。

Kas teil on kella? 時計をお持ちでしょうか？

第6章(kuues peatükk)

6.1. 「窓を開けてください」

6.1.1. 動詞の活用：命令形

動詞の現在語幹を人称語尾なしで使うと、代名詞 *sina* で対応する相手に対する命令形になります。命令の口調を和らげて依頼の意味を強める場合には、命令形に *palun*「お願いします」を添えます。

動詞が命令形の形をしている文を命令文と呼びます。命令文の文末には、ピリオドの代わりに感嘆符(!)を添えるのがふつうです。

6.1.2. 2人称単数の命令形

2人称単数の命令形は、動詞の現在語幹，すなわち、現在の否定形とまったく同じ形になります。

(1a) kirjuta/ma 「書く」			
Sina ei kirjuta.	→	Kirjuta!	書きなさい!
		Palun kirjuta!	書いてください!
(1b) rääki/ma 「話す」			
Sina ei räägi.	→	Räägi!	話しなさい!
		Palun räägi!	話してください!
(1c) oota/ma 「待つ」			
Sina ei oota.	→	Oota!	待ちなさい!
		Palun oota!	待ってください!
(1d) tule/ma 「来る」			
Sina ei tule.	→	Tule!	来なさい!
		Palun tule!	来てください!
(1e) ost/ma 「買う」			
Sina ei osta.	→	Osta!	買いなさい!
		Palun osta!	買ってください!
(1f) üttele/ma 「言う」			
Sina ei üttele.	→	Üttele!	言いなさい!
		Palun üttele!	言ってください!

代名詞 *teie* で対応する相手(2人称複数，または2人称単数の敬称)に対する命令形は、語尾 *-ge* または *-ke* を *ma*-不定詞または *da*-不定詞の語幹につけて作ります。語尾の選びかた語幹の選び方は、動詞のタイプによって異なり、詳しくは19章で学びます。ここでは、上にあげた動詞について、2人称複数の命令形の形だけあげておきます。

(1a) kirjuta/ma ~ kirjuta/da 「書く」			
kirjuta/ma	→	Kirjuta/ge!	書きなさい!
		Palun kirjuta/ge!	書いてください!
istu/ma ~ istu/da 「座る」			
istu/ma	→	Istu/ge!	座りなさい!
		Palun istu/ge!	座ってください。

(1b) rääki/ma ~ rääki/da rääki/ma	「話す」 → Rääki/ge! Palun rääki/ge!	話しなさい! 話してください!
luge/ma ~ luge/da luge/ma	「読む」 → Luge/ge! Palun luge/ge!	読みなさい! 読んでください!
(1c) oota/ma ~ ooda/ta ooda/ta	「待つ」 → Ooda/ke! Palun ooda/ke!	待ちなさい! 待ってください!
hakka/ma ~ haka/ta haka/ta	「始める」 → Haka/ke! Palun haka/ke!	始めなさい! 始めてください!
(1d) tule/ma ~ tul/la tul/la	「来る」 → Tul/ge! Palun tul/ge!	来なさい! 来てください!
pane/ma ~ pan/na pan/na	「置く」 → Pan/ge! Palun pan/ge!	置きなさい! 置いて下さい!
(1e) ost/ma ~ ost/a ost/ma	「買う」 → Ost/ke! Palun ost/ke!	買いなさい! 買ってください!
kuul/ma ~ kuul/da kuul/ma	「聞く」 → Kuul/ge! Palun kuul/ge!	聞きなさい! 聞いてください!
(1f) üttele/ma ~ üttele/da (~ öel/da) üttele/da (~ öel/da)	「言う」 → Üttele/ge! (~ Öel/ge!) Palun üttele/ge! (~ öel/ge!)	言いなさい! 言ってください!
mõttele/da (~ mõel/da)	→ Mõttele/ge! (~ Mõel/ge!) Palun mõttele/ge! (~ mõel/ge!)	考えなさい! 考えてください!

6.1.3. 例外

動詞 minema「行く」は、現在形では lähe-系の語幹が用いられ、不定詞や命令形では min(e)-系の語幹が用いられる不規則動詞です。

mine/ma ~ min/na 「行く」
sina lähe/d → Mine!
min/na Min/ge!

6.2. 「窓を開けないでください」

「～しないでください」は、命令形の前に小詞 ära(sina で対応する相手), ärge (teie で対応する相手)を添えます。Palun を添えると、命令口調が和らいで、依頼になります。

(1a) kirjuta/ma	「書く」		
Kirjuta!	→	Ära kirjuta!	書かないで!
Kirjutage!	→	Ärge kirjutage!	
		Palun ära kirjuta!	
		Palun ärge kirjutage!	
(1b) rääki/ma	「話す」		
Räägi!	→	Ära räägi!	話さないで!
Rääkige!	→	Ärge rääkige!	
		Palun ära räägi!	
		Palun ärge rääkige!	
(1c) oota/ma	「待つ」		
Oota!	→	Ära oota!	待たないで!
Oodake!	→	Ärge oodake!	
		Palun ära oota!	
		Palun ärge oodake!	
(1d) tule/ma	「来る」		
Tule!	→	Ära tule!	来ないで!
Tulge!	→	Ärge tulge!	
		Palun ära tule!	
		Palun ärge tulge!	
(1e) ost/ma	「買う」		
Osta!	→	Ära osta!	買わないで!
Ostke!	→	Ärge ostke!	
		Palun ära osta!	
		Palun ärge ostke!	
(1f) ütle/ma	「言う」		
Ütle!	→	Ära ütle!	言わないで!
Ütelge!	→	Ärge ütelge! (~ öelge!)	
(~ Öelge!)		Palun ära ütle!	
		Palun ärge ütelge! (~ öelge!)	

6.3. 命令文における直接目的語

分格目的語は、命令文でも分格形で現れますが、意味の上で属格目的語に相当する目的語は、命令文では、単数属格形ではなく単数主格形で現れます。このような属格目的語に相当する単数主格形の目的語を「主格目的語」と呼びます。

Sina avad selle akna.	あなたはこの窓を開けます。	(属格目的語)
Palun ava see aken!	この窓を開けてください!	(主格目的語)
Te panete selle ukse kinni.	あなたはこのドアを閉めます。	(属格目的語)
Palun pange see uks kinni!	このドアを閉めてください!	(主格目的語)
Sina ootad oma sõpra.	あなたはお友だちを待っています。	(分格目的語)
Palun oota oma sõpra!	お友だちを待ってください。	(分格目的語)
Te räägite eesti keelt.	あなたたちはエストニア語を話します。	(分格目的語)
Palun rääkige eesti keelt!	エストニア語を話してください。	(分格目的語)

属格目的語の代わりに主格目的語が現れる点を除くと、命令文における直接目的語の格表

示の規則は、通常の文の場合と基本的に同じです。

対応する肯定文で分格目的語が現れるかどうかに関係なく、否定命令文では、原則として分格目的語が用いられます。

Palun ava see aken!	(肯定 - 主格目的語)
その窓を開けてください!	
Ära ava seda akent!	(否定 - 分格目的語)
その窓を開けてはいけません。	
Palun pange see uks kinni!	(肯定 - 主格目的語)
そのドアを閉めてください!	
Ärge pange seda ust kinni!	(否定 - 分格目的語)
そのドアを閉めないでください。	
Kirjuta sõbrale kiri!	(肯定 - 主格目的語)
友人に手紙を書きなさい。	
Ära kirjuta sõbrale kirja!	(否定 - 分格目的語)
友人に手紙を書かないでください。	

Palun oota oma sõpra!	(肯定 - 分格目的語)
お友だちを待ってください。	
Ära oota oma sõpra!	(否定 - 分格目的語)
お友だちを待ってはなりません。	
Palun rääkige eesti keelt!	(肯定 - 分格目的語)
エストニア語を話してください。	
Ärge rääkige eesti keelt!	(否定 - 分格目的語)
エストニア語を話してはいけません。	
Tooge haigele vett!	(肯定 - 分格目的語)
病人に水を持ってきてください。	
Ärge tooge haigele vett!	(否定 - 分格目的語)
病人に水を持って来ないでください。	

6.4. 「さあ～しましょう」

「～しましょう」と誘いかける場合には、動詞の1人称複数形を、代名詞 me を添えずに用います。

Räägime eesti keelt!	エストニア語を話しましょう!
Hakkame sööma!	さあいただきます [食べ始めましょう]!
Lõpetame ära!	終わりにしましょう!

動詞 minema「行く」だけは、誘いの形として、1人称複数形 läheme の代わりに、その縮まった形 lähme を用います。

Lähme ära!	出発しましょう(出かけましょう)!
Lähme hommikust sööma!	朝食を食べに行きましょう!

6.5. 不定詞の用法

動詞(あるいは動詞に相当する熟語)の中には、他の動詞の不定詞とともに用いられるものがあり、da-不定詞をとるか、ma-不定詞をとるかは、動詞ごとに決まっています。

Mina hakkann minema. わたしはこれから出かけます。
Mina tahan minna. わたしは行きたいです。

6.5.1. da-不定詞をとる動詞

da-不定詞とともに使われる動詞には次のようなものがあります。

armastama	～するのが好きだ	tahtma	～したい
soovima	～したいなと思う	tohtima	～してよい
võima	～できる(可能性)	oskama	～できる(能力)

Ma armastan õhtul jalutada. わたしは夕方散歩するのが好きです。

Nad ei taha lennukiga sõita. Nad tahavad rongiga sõita.

彼らは飛行機で行きたくありません。鉄道で行きたいのです。

Ta soovib olla kodus. 彼女は家にいたいと思っています。

Kas ma tohin koju minna? 帰宅してよろしいですか？

Jah, te võite koju minna. ええ，家に帰っていいです。

Peeter oskab vene keelt rääkida. ペーテルはロシア語が話せます。

6.5.2. ma-不定詞をとる動詞

方向性のある運動を表す動詞とともに用いられて，目的(「～しに行く」)を表します。

minema 行く tulema 来る jääma 留まる

Kas te lähete juba magama? あなたたちはもう寝ますか。

Ei, me ei lähe veel magama, me jääme õppima.

いいえ，わたしたちはまだ寝ません。起きていて勉強します。

Palun tulge siia videot vaatama! ここへビデオを見にいらっしやい！

補助動詞として用いられる動詞 hakkama「～し始める」と pidama「～しなければならない」はともに ma-不定詞を要求します。

Kas hakkame õppima? さあ勉強を始めましょうか？

Palun hakake lugema! 読み始めてください。

Hakkas sadama. 雨が降り始めました。

Sügisel hakkavad nad saama stipendiumi. 秋から彼らは奨学金を受けます。

Ma pean minema. お暇しなければなりません。

Ma pidin lahkuma. わたしは立ち去らなければなりませんでした。

Õhtul ma pean õppima. 夕方，わたしは勉強しなければなりません。

Ta pidi peaaegu uppuma. 彼はおぼれそうになりました。

【比較】

動詞 võima「～できる，～してよい」と pidama「～しなければならない」は，英語の法助動詞の can や must と意味が似ていますが，前者は da-不定詞，後者は ma-不定詞と一緒に用いられる点で，異なった使い方をされることに注意しましょう。

Teie võite ära minna, aga meie peame siia jääma.
 你们是回去的，但我们得留下来。
 Tööpäeval võib bussiga sõita, aga pühapäeval peab jalutama.
 平日可以坐公车，但周日得步行。
 Tema võib kohe ütelda, aga mina pean enne mõtlema.
 他可以马上说，但我得先想想。
 Täna võib puhata, aga homme peab töötama.
 今天可以休息，但明天得工作。
 Sina võid tantsida, aga mina pean istuma.
 你可以跳舞，但我得坐着。
 Pärast võin naerda, aga praegu pean nutma.
 之后我可以笑，但现在我得哭。

6.5.3. 「et + da-不定詞」(～するために)

接続詞 et と da-不定詞で、「～するために」という目的の意味を表すことができます。

Me läheme raamatukogusse, et lugeda eesti ajalehte.
 わたしたちは図書館へエストニアの新聞を読みに行きます。
 Nad lähevad sööklasse, et süüa hommikust. 彼らは食堂へ朝食を食べに行きます。
 Reet tuleb siia, et vaadata uut filmi. レートは新しい映画を見にここへ来ます。

6.6. 代名詞の分格形

6.6.1. 人称代名詞

主格形	属格形	分格形	主格形	属格形	分格形
mina	minu	mind	meie	meie	meid
sina	sinu	sind	teie	teie	teid
tema	tema	teda	nemad	nende	neid

Minu ema kutsub mind. 母がわたしを呼んでいます。
 Sinu ema kutsub sind. あなたのお母さんがあなたを呼んでいます。
 Tema ema kutsub teda. 彼(彼女)の母親が彼(彼女)を呼んでいます。
 Meie ema kutsub meid. わたしたちの母がわたしたちを呼んでいます。
 Teie ema kutsub teid. あなたたちのお母さんがあなたたちを呼んでいます。
 Nende ema kutsub neid. 彼らの母親が彼らを呼んでいます。

Sa näed mind. あなたはわたしを見ます。
 Ma näen sind. わたしはあなたを見ます。
 Ta kuuleb teda. 彼女は彼の話の聞きます。
 Nad kuulevad meid. 彼らはわたしたちの話の聞きます。
 Me vaatame teid. わたしたちはあなたたちを見ます。
 Te vaatate neid. あなたたちは彼らを見ます。

6.6.2. 疑問代名詞

疑問代名詞 kes 「誰」と mis 「何」の分格形は次のようになります。

主格	kes	誰	mis	何
属格	kelle		mille	
分格	keda		mida	

Keda te külastasite Tartus? あなたは、タルトで誰を訪問しましたか？
Mida me vaatame homme kinos? 明日、映画館で何をみましょうか？

6.6.3. 指示代名詞

主格	属格	分格
see	selle	seda

See muusika on hea. この音楽は素晴らしいです。
Ma armastan seda muusikat. わたしはこの音楽が好きです。
See inimene on haige. この人は病気です。
Arst ravib seda inimest. 医者がこの人を治療します。
See neiu on minu tuttav. この娘さんはわたしの知り合いです。
Ma külastan seda neitut. わたしはその娘さんを訪問します。

Palun anna mulle see raamat!
Ma võtan selle raamatu.
Ma ei võta seda raamatut.
Ära anna seda raamatut!
Ärge andke seda raamatut!
この本をください。
わたしはこの本をいただきます。
わたしはその本をいただきません。
その本を人にあげてはいけません。
その本を人にあげないでください。

6.7. 複数分格

非個体名詞が数量詞とともに用いられる場合は、単数分格形になりますが、個体名詞が数量詞とともに用いられる場合には、複数分格と呼ばれる形になります。複数分格は、単数分格に対応する複数の格形です。複数分格の語尾は、1) -id, 2) 母音(-u, -e, -i), 3) -sid です。

Tal on vähe raamatu/id.	(語尾：-id)	彼は本をあまりもっていません。
Sa ostad ühe kilo õun/u.	(語尾：-u, -e, -i)	あなたはリンゴを1キロ買います。
Mul on palju õde/sid.	(語尾：-sid)	わたしは女のきょうだいがたくさんいます。

【注意】複数分格の作り方は、第15章で詳しく扱います。

6.8. 分格支配の前置詞

英語・ドイツ語・ロシア語など、多くの言語には、名詞の前に置かれて、場所関係、時間関係、因果関係等々を表す前置詞と呼ばれる一群の不変化詞があります。これに対して、日本語の助詞のように、名詞の後ろに置かれて、前置詞と同じような働きをする不変化詞を後置詞と呼びます。

たいていの言語は、もっぱら前置詞か後置詞のどちらか一方を用いますが、エストニア語のように後置詞も前置詞も用いる言語も中にはあります。

エストニア語の場合、後置詞は名詞の属格形とともに用いられるものがいちばん多いようですが、前置詞は、名詞の分格形とともに用いられるものが多く見られます。

enne			前に
	tööd	仕事の	
pärast			後で

Enne eksamit peab õppima.	テストの前には勉強しなければなりません。
Isa ei tule koju enne õhtut.	おとうさんは夕方にならないと帰宅しません。
Pärast lõunat peab jalutama.	昼食後は散歩しなければならない。
Kas sa puhkad pärast tööd?	あなたは仕事のあとで休息しますか？

6.9. 接続詞：「AではなくてB」(ei A vaid B)

Me ei maga päeval, vaid öösel.	わたしたちは昼間ではなく、夜中に眠ります。
Jaapanis ei alga kool sügisel, vaid kevadel.	日本では、学校は秋ではなく、春始まります。
Kas te elate Tallinnas?	あなたはタリンに住んでいますか？
Ei, ma ei ela Tallinnas, vaid Tartus.	いいえ、わたしが住んでいるのはタリンではなくて、タルトです。
Vabandage, kas siin toimub loeng?	失礼ですが、講義が行われるのはここですか？
Loeng ei toimu siin, vaid peahoones.	講義が行われるのはここではなくて、本館です。
Kas nad kirjutavad raamatukogus?	彼女たちは図書館で作文を書いていますか？
Nad ei kirjuta raamatukogus, vaid kodus.	彼女たちは図書館ではなく、家で作文を書いています。

第7章(seitsmes peatükk)

7.1. 階程交替(astmevaheldus, grade alternation)

エストニア語の活用語(名詞・形容詞・動詞)の中には, aasta「1年」や kõrge「高い」のように, 基本的な語幹の形が一定に保たれるものと, 語幹に階程交替と呼ばれる交替が見られるものがあります。

階程交替とは, 活用語の語幹の子音や母音がある一定の規則にしたがって交替する現象です。階程交替により, 活用語の語幹は2種類の姿で現れます。たとえば, 次の例では, 名詞・動詞いずれの場合も, 語幹に, 超長子音(pp, kk)を持つ形と長子音(p, k)を持つ形とがあります。

	単数主格	単数属格	単数分格	
pp ~ p	lõpp	lõpu	lõppu	終り
	kapp	kapi	kappi	戸棚
kk ~ k	pikk	pika	pikka	長い
	lukk	luku	lukku	錠
pp ~ p	ma-不定詞	現在形	da-不定詞	
	õppima	õpib	õppida	学ぶ
	lõppema	lõpeb	lõppeda	終わる
kk ~ k	kukkuma	kukub	kukkuda	始める
	pakkuma	pakub	pakkuda	提供する

語幹において, このように超長子音と長子音が交替する階程交替を, 「長さの交替」と呼びます。長さの交替には, このほか, 次の例のような超長母音と長母音(もしくは, 超長二重母音と二重母音)の交替などがあります。

	単数主格	単数属格	単数分格	
`oo ~ oo	`kool	kooli	`kooli	学校
`ae ~ ae	`kael	kaela	`kaela	くび

長さの交替は, エストニア語の音韻構造を特色づける現象で, 階程交替がおこる条件を満たすような語幹を持つ外来語も, ほぼ例外なしにその対象となります。

階程交替する名詞・動詞の語幹の2つの形は, 「強階程」「弱階程」と呼ばれます。長さの交替では, 交替する子音・母音の長い方を持っている形が強階程, 短い方を持っているのが弱階程です。

階程交替には, このほかに子音の同化によるものがあります。子音の同化は, 短子音の b, d が, 次の例に見られるように, 直前の子音と同じものに置き替わる現象です。

子音の同化による階程交替では, 本来の子音を持っている形が強階程, 子音の同化が起こった方が弱階程とよばれます。

	単数主格	単数属格	単数分格	
`nd ~ nn	`vend	venna	`venda	弟, 兄
`mb ~ mm	`kumb	kumma	`kumba	どちら

	ma-不定詞	現在形	da-不定詞	
`nd ~ nn	`andma	annab	`anda	与える
`mb ~ mm	`ambuma	ammun	`ambuda	撃つ

階程交替する活用語では、それぞれの活用形が強階程、弱階程のどちらになるかが、文法的カテゴリーごとに階程交替のパターンとして決まっています。一般に、名詞の階程交替では、単数属格形と単数分格形が常に相異なる階程になるのに対し、単数分格形と単数主格形はふつう同じ階程になります。また、動詞の階程交替では、ma-不定詞形が常に強階程となるのに対し、1人称単数現在形とda-不定詞形は相異なる階程になります。

以下、この課では強階程を で、弱階程を で表すことにします。

7.2. 階程交替(その1) : pp ~ p, tt ~ t, kk ~ k

	単数主格	単数属格	単数分格	
(N-1a)	`lõpp	lõpu	`lõppu	終わり
(N-1b)	rikas	`rikka	rikast	金持ちの
	mõte	`mõtte	mõtet	考え
	ma-不定詞	現在形	da-不定詞	
(V-1a)	`õppima	õpib	`õppida	学ぶ
	`võtma	võtab	`võtta	取る
(V-1b)	`hakkama	`hakkab	hakata	始める

7.3. 階程交替(その2) : つづりに現れない超長音と長音の交替

破裂音 p, t, k 以外の子音や、長母音・二重母音、および子音結合の長さが超長と長で交替することによって起こる長さの交替では、強階程と弱階程の語幹はつづりの上では区別することができません。

エストニア語は、発音通りに書かれるの原則ですが、この場合のようにつづりと発音が対応しないこともあります。以下の解説では、超長を含む音節の前に添えたアクセント記号(˘)を手がかりに、強階程と弱階程を区別してください。超長で発音される方が強階程になります。

7.3.1. 超長母音と長母音(または、超長二重母音と二重母音)の交替

	単数主格	単数属格	単数分格	
(N-2a)	`piim	piima	`piima	牛乳
	`kael	kaela	`kaela	くび
(N-2b)	võõras	`võõra	võõrast	見知らぬ
	kiire	`kiire	kiiret	急ぎ
	ma-不定詞	現在形	da-不定詞	
(V-2a)	`kuulma	kuuleb	`kuulda	聞こえる
	`naerma	naerab	`naerda	笑う
(V-2b)	`kuulama	`kuulab	kuulata	聞く
	`laenama	`laenab	laenata	貸す; 借りる

7.3.2. 超長子音と長子音(超長子音連続と子音連続)の交替

	単数主格	単数属格	単数分格	
(N-3a)	`linn	linna	`linna	町
	`mets	metsa	`metsa	森林
(N-3b)	kallis	`kalli	kallist	高価な
	kitsas	`kitsa	kitsast	狭い
	ma-不定詞	現在形	da-不定詞	
(V-3a)	`kammima	kammib	`kammida	とかす
	`maksma	maksab	`maksta	支払う
(V-3b)	`kallama	`kallab	kallata	注ぐ
	`vastama	`vastab	vastata	答える

7.4. 階程交替(その3) : 長音 p, t, k と短音 b, d, g の交替

	単数主格	単数属格	単数分格	
(N-4a)	`seep	seebi	`seepi	石鹸
	`pilt	pildi	`pilti	写真
(N-4b)	saabas	`saapa	saabast	ブーツ
	toode	`toote	toodet	製品
	ma-不定詞	現在形	da-不定詞	
(V-4a)	`rääkima	räägib	`rääkida	話す
	`saatma	saadab	`saata	送る
	`tõlkima	tõlgib	`tõlkida	訳す
	`kartma	kardab	`karta	恐れる
(V-4b)	`vaatama	`vaatab	vaadata	見る
	`märkama	`märkab	märgata	気づく

7.5. 階程交替(その4) : 子音の同化が起こるもの

強階程の語幹に現れる nd, ld, rd, mb に対して, 弱階程の語幹に nn, ll, rr, mm がそれぞれ対応する階程交替のタイプです。このように, 子音結合の2番目の子音が1番目の子音と同じものに変化することを, 2番目の子音が1番目の子音に同化すると言います。子音の同化による階程交替は, 質の階程交替の1つのタイプです。

	単数主格	単数属格	単数分格	
(N-5a)	`vend	venna	`venda	兄, 弟
(N-5b)	hammas	`hamba	hammast	歯
	murre	`murde	murret	方言
	ma-不定詞	現在形	da-不定詞	
(V-5a)	`kõndima	kõnnib	`kõndida	歩く
	`andma	annab	`anda	与える
(V-5b)	`lendama	`lendab	lennata	飛ぶ

7.6. 用例

7.6.1. 超長音と長音の交替

7.6.1.1. 階程交替が正書法から明らかになる場合

強階程

Sepp on väga tugev.
鍛冶屋はたいそう力持ちです。
See on pikk jutt.
それは長い話です。
Minu vend tahab õppida füüsikat.
弟は物理学を勉強するつもりです。
Tänaval ei tohi kukkuda.
道路で転んではなりません。
Mõned kolhoosid on väga rikkad.
とても裕福な集団農場もある。
Sportlane hüppab pika hüppe.
選手は長い跳躍をします。
Ma pean hüppama.
わたしは跳ばなければならぬ。
Poiss hakkab õppima.
少年は勉強を始めます。

弱階程

Mõned sepad on väga tugevad.
鍛冶屋のなかにはたいへんな力持ちがいる。
Vanaema jutustab pika jutu.
祖母が長い話を語ってくれます。
Minu õde ei õpi füüsikat.
妹は物理学を勉強していません。
Laps kukub keset tänavat.
子どもが道路で転びます。
Meie kolhoos on rikas.
わたしたちの集団農場は裕福です。
Hüpe oli pikk.
長い跳躍でした。
Peeter ei saa täna hüppata.
ペーテルは今日跳ぶことができません。
On vaja hakata õppima.
勉強を始める必要があります。

7.6.1.2. 階程交替が正書法からはわからない場合

強階程

Missugune linn on Emajõe ääres?
エマヨキ河畔にある町は何ですか？
Palun laulge veel üks laul!
もう1曲歌ってください。
Me peame maksma kaks rubla.
2ルーブル支払わなければならぬ。
Ma tahan kuulda seda lugu.
わたしはその話を聞きたい。
Kui kallid on televiisorid?
テレビの値段はいくらですか。
Kes on need võõrad inimesed?
あの見かけない人たちは誰ですか？
Lubage, ma kalkan kohvi!
さあ、コーヒーをお注ぎします。
Me kuulame raadiot.
わたしたちはラジオを聴いています。

弱階程

Mina õpin selles linnas.
わたしはその町で学んでいます。
Missugused on selle uue laulu sõnad?
この新しい歌の歌詞はどんなですか。
See pudel maksab viisteist kopikat.
このピンは15コペカします。
Ma kuulen hästi.
わたしはよく聞こえます。
Me ei osta kallist raadiot.
わたしたちは高いラジオは買いません。
Kes on see võõras inimene?
この見かけない人は誰ですか？
Kas ma tohin teed kallata?
お茶を注ぎましょうか？
Peeter tahab kuulata muusikat.
ペーテルは、音楽が聴きたいのです。

7.6.2. 長子音と短子音の交替

強階程

See on hea lamp.
これは良い電灯です。
Kunstnik ei taha joonistada pilti.
芸術家は絵を描きたくありません。
Kas te oskate rääkida eesti keelt?

弱階程

Lambid on kõrgel.
電灯は高い所にあります。
Kunstnik joonistab pildi.
芸術家は絵を描きます。
See neiu räägib vene keelt.

あなたはエストニア語が話せますか？
 Me peame kleepima ümbriku kinni.
 封筒を糊で貼らなければなりません。
 Need on meie tehase tooted.
 これらはわが工場の製品です。
 Reet vaatab kella.
 レートは時計を見ます。
 Mind ei märka keegi.
 誰もわたしに気がつきません。

この娘さんはロシア語を話します。
 Me kleebime ümbriku kinni.
 わたしたちは封筒を糊で貼ります。
 See auto on meie tehase toode.
 この自動車はわが工場の製品です。
 Me tahame vaadata kunstinäitust.
 わたしたちは美術展を見たいと思います。
 Siin on märgata valgust.
 ここでは光が感じられます。

7.6.3. 子音の同化がおこる場合

強階程

Minu vend töötab kolhoosis.
 弟はコルホーズで働いています。
 Kas seal on palju põldu?
 そこは農地が多いですか？
 Patsient hakkab tundma valu.
 患者が痛みを感じ始めました。
 Palun, kas sa saad anda mulle raamatu?
 本をくださいますか。
 Hambaravikabinet asub meie majas.
 歯医者診察室がわが棟にあります。
 Kellel on ilusad kindad?
 きれいな手袋をしているのは誰ですか。
 Täna lennuk ei lenda.
 今日、飛行機は飛びません。
 Arst tõmbab hamba välja.
 医者が歯を抜きます。

弱階程

See on minu venna jalgratas.
 これは弟の自転車です。
 Silla juures on suured põllud.
 橋のところに大きな畑があります。
 Kuidas te end tunnete?
 どんな気分ですか？
 Jah, ma annan.
 はい、あげますよ。
 Tal valutab hammas.
 彼女は歯が痛いです。
 Ma ei leia teist kinnast.
 手袋の片方が見つかりません。
 Lennuk ei saa täna lennata.
 飛行機は今日、飛べません。
 See hammas tuleb välja tõmmata.
 この歯は抜く必要があります。

7.7. 階程交替に関する補足

階程交替には、以上のタイプのほかに、強階程の短子音 *b, d, g* または *s* が、弱階程において消失したり、*v* または *j* と交替するタイプがあります。このタイプの階程交替は、次の例に見られるように、語幹の構造は同じなのに、階程交替がある語とない語があったり、階程交替してもしなくてもよい語があったりします。

単数主格	単数属格	単数分格	
rida	`rea	rida	列
ida	ida	ida	東
pidu	`peo ~ pidu	pidu	祝い

名詞 *luba* は階程交替しますが、動詞 *luba/ma* は階程交替しません。

単数主格	単数属格	単数分格	
luba	`loa	luba	許可
ma-不定詞	現在形	da-不定詞	
lubama	luban	lubada	許可する

7.7.1. 子音が消失するタイプ

7.7.1.1. 子音 b, d, g の消失

	単数主格	単数属格	単数分格	交替	
(a)	õde	`õe	õde	d : Ø	姉, 妹
	jõgi	`jõe	jõge	g : Ø	川
	mägi	`mäe	mäge	g : Ø	山
	regi	`ree	rege	g : Ø	そり
	`kuub	kuue	`kuube	b : Ø	上着
	`laud	laua	`lauda	d : Ø	机
	`liig	liia	`liiga	g : Ø	余剰
	`jõud	`jõu	`jõudu	d : Ø	力
	`hoog	`hoo	`hoogu	g : Ø	はずみ
	`tõug	`tõu	`tõugu	g : Ø	たね
	`suund	suuna	`suunda	nd : n	方向
	`keeld	keelu	`keeldu	ld : l	禁止
	`sulg	sule	`sulge	lg : l	羽毛
	`jalg	jala	`jalga	lg : l	足
	`õlg	õla	`õlga	lg : l	肩
	`kurg	kure	`kurge	rg : r	鶴
	`veerg	veeru	`veergu	rg : r	コラム
(b)	riie	`riide	riiet	d : Ø	服
	püüe	`püüde	püüet	d : Ø	努力
	pööre	`pööorde	pööret	rd : d	回転
(a)	ma-不定詞	現在形	da-不定詞	交替	
	vedama	`veab	vedada	d : Ø	引く
	`hoidma	hoiab	`hoida	d : Ø	保つ
	`hüüdma	hüüab	`hüüda	d : Ø	叫ぶ
	`jõudma	jõuab	`jõuda	d : Ø	間に合う
	`leidma	leiab	`leida	d : Ø	見つける
	`nõudma	nõuab	`nõuda	d : Ø	要求する
	`püüdma	püüab	`püüda	d : Ø	捕える
	`teadma	teab	`teada	d : Ø	知っている
	`sulgema	suleb	`sulgeda	lg : Ø	閉じる
(b)	`algama	`algab	alata	lg : Ø	始まる

7.7.1.2. 子音 s の消失

	単数主格	単数属格	単数分格	交替	
(a)	kāsi	`kāe	`kātt	s : Ø	手
	mesi	`mee	`mett	s : Ø	蜜
	vesi	`vee	`vett	s : Ø	水
	`kuus	kuue	`kuut	s : Ø	6
	`uus	uue	`uut	s : Ø	新しい
	`viis	viie	`viit	s : Ø	5
	`täis	täie	`täit	s : Ø	満ちた
	`õis	õie	`õit	s : Ø	花

7.7.1.3. 子音 t, k の消失

	単数主格	単数属格	単数分格	交替	
(a)	`juht	juhi	`juhti	ht : h	運転手
	`koht	koha	`kohta	ht : h	場所
	`leht	lehe	`lehte	ht : h	葉
	`täht	tähe	`tähte	ht : h	星 ; 文字
	`käsk	kāsu	`kāsku	sk : s	命令
	`põsk	põse	`põske	sk : s	類
	`usk	usu	`usku	sk : s	信仰
	`õhk	õhu	`õhku	hk : h	空気
(b)	puhas	`puhta	puhast	ht : h	純粋な
	ma-不定詞	現在形	da-不定詞	交替	
(a)	`juhtima	juhīb	`juhtida	ht : h	指導する
	`mahtuma	mahub	`mahtuda	ht : h	収容される
	`tohtima	tohib	`tohtida	ht : h	~してよい
	`tahtma	tahab	`tahta	ht : h	~したい
	`lõhkuma	lõhub	`lõhkuda	hk : h	砕く, 割る
	`uskuma	usub	`uskuda	sk : s	信じる
(b)	`oskama	`oskan	osata	sk : s	~できる
	`viskama	`viskan	visata	sk : s	投げ捨てる

7.7.2. 子音の消失に母音の変化がともなうタイプ

	単数主格	単数属格	単数分格	交替	
(a)	tuba	`toa	tuba	b : Ø	u-a : oa 部屋
	rida	`rea	rida	d : Ø	i-a : ea 列
	lugu	`loo	lugu	g : Ø	u-u : oo 話 ; 数
	nuga	`noa	nuga	g : Ø	u-a : oa ナイフ
	nāgu	`nāo	nāgu	g : Ø	ā-u : āo 顔
	viga	`vea	viga	g : Ø	i-a : ea 欠陥
	süsi	`sõe	`sütt	s : Ø	ü-i : öe 炭
	`pood	`poe	`poodi	d : Ø	oo-i : oe 商店

	`raad	`rae	`raadi	d : Ø	aa-i : ae	市議会
	`lõõg	`lõa	`lõõga	g : Ø	õõ-a : õa	馬勒
	`saag	`sae	`saagi	g : Ø	aa-i : ae	鋸
	ma-不定詞	現在形	da-不定詞	交替		
(a)	kaduma	`kaob	kaduda	d : Ø	a-u : ao	失せる
	pidama	`peab	pidada	d : Ø	i-a : ea	持つ
	siduma	`seob	siduda	d : Ø	i-u : eo	結ぶ
	lugema	`loeb	lugeda	g : Ø	u-e : oe	読む

7.7.3. 子音の交替がおこるタイプ

	単数主格	単数属格	単数分格	交替	
(a)	sada	saja	sada	d : j	100
	sõda	sõja	sõda	d : j	戦争
	tõbi	tõve	tõbe	b : v	病気
	`leib	leiva	`leiba	b : v	パン
	`halb	halva	`halba	lb : l	悪い
	`kurb	kurva	`kurba	rb : rv	悲しい
	`külge	külje	`külge	lg : lj	わき腹
	`selg	selja	`selga	lg : lj	背中
	`märg	märja	`märga	rg : rj	濡れた
(b)	iive	`iibe	iivet	v : b	人口増
	varvas	`varba	varvast	rb : rv	足の指
	ma-不定詞	現在形	da-不定詞	交替	
(a)	sadama	sajab	sadada	d : j	降る

【用例】

強階程

Minul on väike tuba.

わたしの部屋は小さいです。

Palun kaks leiba!

パンを2切れください。

Ema ootab poega.

母親が息子を待っています。

Filoloog peab lugema kirjandust.

文学部生は文学を読まなければならない。

Hakkab vihma sadama.

雨になりそうです。

弱階程

Minu toas ei ole televiisorit.

わたしの部屋にはテレビがありません。

Kas sul on võileivad kaasas?

サンドイッチを持ってきましたか。

Tema poja eriala on majandusteadus.

彼女の息子の専門は経済学です。

Peeter loeb sada lehekülge päevas.

ペーテルは1日に100ページ読みます。

Juba sajab vihma.

もう雨が降っています。

7.8. 階程交替に関してとくに注意を要する語

	単数主格	単数属格	単数分格	
(a)	`lai	laia	`laia	広い
	`nui	nui	`nui	すり粉木
	`õu	õue	`õue	中庭

	`soe	sooja	`sooja	暖かい
	`aed	aia	`aeda	庭園
	`aeg	aja	`aega	時間
	`poeg	poja	`poega	息子
	`üks	ühe	`üht ~ `ühte	1
	`kaks	kahe	`kaht ~ `kahte	2
	rohi	rohu	`rohtu	草；薬
	`poiss	poisi	`poissi	少年
	asi	asja	`asja	ことから
	kiri	kirja	`kirja	手紙
	kuri	kurja	`kurja	凶暴な
	põhi	põhja	`põhja	底；北
	tühi	tühja	`tühja	空っぽの
	sõber	sõbra	sõpra	友人
(b)	seitse	`seitsme	seitset	7
	liige	`liikme	liiget	メンバー
	võti	`võtme	võtit	鍵
	aken	`akna	akent	窓
	tütar	`tütre	tütart	娘
	kannel	`kandle	kannelt	カンテレ
	sammal	`sambla	sammalt	苔
	põial	`põidla	põialt	親指
	ma-不定詞	現在形	da-不定詞	
(a)	nägema	`näeb	näha	見る
	tegema	`teeb	teha	作る
	`mõtleva	`mõtleb	mõtelda ~ mõelda	考える
	`ütleva	`ütleb	ütelda ~ öelda	言う
	`laskma	laseb	`lasta	~させる

【用例】

Ülo on ametiühingu liige.

Meie kõik oleme ametiühingu liikmed.

Näha ei ole midagi.

Hanna ei näe viga.

ユロは労働組合員です。

わたしたちは全員労働組合員です。

何も見えませんでした。

ハンナは間違いがわかりません。

第 8 章(kaheksas peatükk)

8.1. 名詞の格変化：場所格

8.1.1. 場所格の体系

エストニア語の名詞には場所関係を表す格が 6 つあり、「場所格」と呼ばれます。場所格は、「～の中」という位置関係を表す「内部格」と「～の上(表面・近傍)」という位置関係を表す「外部格」とに分けられます。

場所格は、内部格・外部格とも、目標(到達点)・位置(静止位置)・起点(出発点)を表す形がそれぞれあって、次のような名前と呼ばれます。

場所格の体系

	[内部格]	[外部格]
[目標格]	入格 (sissetülev) 「～の中へ」	向格 (alaleülev) 「～の上へ」
[位置格]	内格 (seesülev) 「～の中で」	接格 (alalülev) 「～の上で」
[起点格]	出格 (seestülev) 「～の中から」	奪格 (alaltülev) 「～の上から」

Vanaema läheb kirikusse.	[入格 = 内部目標格]	おばあさんが教会へ行きます。
Vanaema on kirikus.	[内格 = 内部位置格]	おばあさんが教会にいます。
Vanaema tuleb kirikust.	[出格 = 内部起点格]	おばあさんが教会から帰ってきます。
Noormees läheb põllule.	[向格 = 外部目標格]	若者が畑に出かけます。
Noormees töötab põllul.	[接格 = 外部位置格]	若者が畑で働いています。
Noormees tuleb põllult.	[奪格 = 外部起点格]	若者が畑から帰ってきます。

Priit läheb täna kinno.	プリートは今日映画館へ行きます。
Priit on kinos kaks tundi.	プリートは映画館に 2 時間います。
Priit tuleb kinost kell kaheksa.	プリートは映画館から 8 時に帰ります。
Tiina läheb tööle.	ティーナは仕事に出かけます。
Tiina on tööl.	ティーナは仕事をしています。
Tiina tuleb töölt koju.	ティーナは仕事からうちへ帰ってきます。

Külalised saabuvad meie linna hommikul.	客人たちは朝、わたしたちの町に到着します。
Päeval külalised viibivad meie linnas.	日中、客人たちはわたしたちの町に滞在します。
Külalised lahkuvad meie linnast õhtul.	客人たちは夕方、私たちの町から立ち去ります。

Kass ronib katusele.	猫が屋根に這い上ります。
Kass jalutab katusel.	猫が屋根の上を闊歩しています。
Kass hüppab katuselt alla.	猫が屋根の上から飛び降ります。

8.1.2. 内部格と外部格の使い分けについて

一般名詞の場合、名詞が物理的な場所を表すならば、おおむね、その名詞が表す場所の性格や、動詞の表す運動の性格によって、内部格と外部格のどちらを用いるかが決まります。

地名の場合には、慣用によって、内部格・外部格のどちらを用いるかが決まっているのが

普通です。

Ma sõidan `Pärnu (~ `Tal`linna ~ `Tartu ~ `Moskva).

わたしはパルヌ(~タルト~モスクワ)へ行きます。

Ma sõidan Tapale (~ Otepääle ~ Jõgevale ~ Kohtla-Järvele).

わたしはタッパ(~オテパー~ヨケヴァ)へ行きます。

【注意】 `Pärnu, `Tal`linna, `Tartu, `Moskva は, 短い入格形です(8.1.5.参照)。

名詞 maa は内部格を用いるか, 外部格を用いるかで意味が大きく異なる場合があります。

Lumi on veel maas.

雪はまだ(地面に)積もったままです。

Koer on maas.

犬が地面に寝そべっています。

Kartulid on maas.

じゃがいもは植え付けが済みしました。

Ma elan maal.

わたしは田舎に住んでいます。

Kartuleid korjatakse maast.

じゃがいもは地中から収穫されます。

Ta lahkus maalt ja asus linna.

彼女は田舎を出て, 町に移り住みました。

8.1.3. 場所格に対応する疑問詞

	[目標格]	[位置格]	[起点格]	
疑問副詞	kuhu	kus	kust	
	どこへ	どこで	どこから	
疑問詞 kes 「誰」	kelle/sse	kelle/s	kelle/st	[内部格]
	kelle/le	kelle/l	kelle/lt	[外部格]
疑問詞 mis 「何」	mille/sse	mille/s	mille/st	[内部格]
	mille/le	mille/l	mille/lt	[外部格]

8.1.4. 単数の場所格の作り方

単数の場所格は, 単数語幹(= 単数属格形)に, それぞれの格を表す語尾をつけて作ります。場所格の語尾は, 単数・複数に共通です。また, すべての名詞について共通です。

場所格の語尾

入格 -sse	向格 -le
内格 -s	接格 -l
出格 -st	奪格 -lt

名詞 kirik 「教会」の単数の場所格

単数属格 kiriku

入格 kiriku/sse 向格 kiriku/le

内格 kiriku/s 接格 kiriku/l

出格 kiriku/st 奪格 kiriku/lt

形容詞修飾語は, 名詞と同じ格になります。

単数主格	vana	kirik	「古い教会」
属格	vana	kiriku	

入格	vana/sse kiriku/sse	向格	vana/le kiriku/le
内格	vana/s kiriku/s	接格	vana/l kiriku/l
出格	vana/st kiriku/st	奪格	vana/lt kiriku/lt

属格修飾語は，形が変わりません。

单数主格	küla kirik	「村の教会」	
属格	küla kiriku		
入格	küla kiriku/sse	向格	küla kiriku/le
内格	küla kiriku/s	接格	küla kiriku/l
出格	küla kiriku/st	奪格	küla kiriku/lt

单数主格	meie kirik	「わたしたちの教会」	
属格	meie kiriku		
入格	meie kiriku/sse	向格	meie kiriku/le
内格	meie kiriku/s	接格	meie kiriku/l
出格	meie kiriku/st	奪格	meie kiriku/lt

8.1.5. 短い単数入格形

語尾 *-sse* を持つ単数入格形はすべての名詞から作ることができますが，一部の名詞は，「短い入格」とよばれている，語尾 *-sse* 以外の方法によって作られる単数入格形を合わせ持っています。

おおむね，具体的な場所関係を表す場合や地名には短い入格が好まれ，抽象的・比喩的な場所関係を表す(例えば，運動の動詞以外で入格を支配する動詞とともに用いる)場合は通常の単数入格を用いるという使い分けがあります。前者の場合，耳で聞いたときの印象もよく，また発音しやすいので，短い入格の方が好まれる傾向があります。

短い入格は，単数分格形をもとに作ります。作り方には，(1) 単数分格形がそのまま入格形となる，(2) 単数分格形(または単数属格形)の第2音節の短子音を超長子音で置き換える，(3) 単数分格の語尾 *-t* を語尾 *-de* で置き換える，などのタイプがあります。

	单数主格	单数属格	单数分格	短い入格	
(1) (a)	`kool	kooli	`kooli	`kooli	学校
(b)	`park	pargi	`parki	`parki	公園
(c)	`jalg	jala	`jalga	`jalga	足
(2) (a)	maja	maja	maja	`majja	家
(b)	jõgi	`jõe	jõge	`jõkke	川
(c)	meri	mere	merd	`merre	海
(3) (a)	`keel	keele	`keelt	`keel/de	言語
(b)	`uus	uue	`uut	`uu/de	新しい

接尾辞 *-us* で終わる名詞は，第1音節が超長音を含む場合には，短い入格を持つことができます。

单数主格	单数属格	短い入格	单数入格	
`kauplus	`kaupluse	`kauplus/se	~ `kaupluse/sse	商店
`raskus	`raskuse	`raskus/se	~ `raskuse/sse	困難
`õigus	`õiguse	`õigus/se	~ `õiguse/sse	正義

`ümbrus `ümbruse `ümbrus/se ~ `ümbruse/sse 環境

次の名詞の短い入格形を覚えましょう。

単数主格	単数属格	単数分格	短い入格	単数入格	
vesi	`vee	`vett	`vette	~ vee/sse	水
käsi	`käe	`kätt	`kätte	~ käe/sse	手
`maa	`maa	`maad	maha	~ maa/sse	国
`suu	`suu	`suud	suhu	~ suu/sse	口
`pea	`pea	`pead	pähe	~ pea/sse	頭
kodu	kodu	kodu	koju	~ kodu/sse	うち
teine	teise	`teist	`teise	~ teise/sse	第2の

4音節語で短い入格をもつのがあります。この場合、短い入格形は単数分格形と同じ形になります。

単数主格	単数属格	単数分格	短い入格	
`muuseum	`muuseumi	`muuseumi	`muuseumi	博物館
koridor	koridori	koridori	koridori	廊下
seminar	seminari	seminari	seminari	セミナー

8.2. 入格の用法

おおむね日本語の「～(の中)へ」に相当する内部目標格で、運動の目標・到達点が、物理的に、あるいは何らかの比喩的・抽象的な意味で、名詞によって表されている対象の「内部」にある場合に用いられます。

Arvo läheb homme õhtul teatrisse.	アルヴォは明日の晩、劇場へ行きます。
Sa pead minema lillekauplusse.	あなたは花屋に行かなければなりません。
Mart astub sügisel ülikooli.	マルトは、秋に大学に入学します。
Vesi voolab tупpa.	水が部屋の中へ漏れています。
Kirjandusringi liikmed tõlgivad selle luuletuse eesti keelde.	
文学サークルのメンバーはこの詩をエストニア語に翻訳します。	
Ära pane pliiatsit suhu!	鉛筆を口にくわえてはいけません。

内部格で用いる地名は、慣用によって決まっています。

Priit sõidab täna puhkusele Pärnu, aga Riina sõidab Tallinna.	
プリートは今日、休暇でパイテへ行きますが、リーナはタリンへ行きます。	

8.3. 向格の用法

8.3.1. 運動の目標・到達点

おおむね日本語の「～(の上)へ」に相当する外部目標格で、運動の目標・到達点が、物理的に、あるいは何らかの比喩的・抽象的な意味で、名詞によって表されている対象の「外部」「表面」「近傍」にある場合に用いられます。

Millal ta läheb tööle? 何時にあなたは出勤しますか?
 Kas te lähete koosolekule? なたたちは会議に行きますか?
 Nad lähevad kinno esimesele seansile.
 彼らは映画館へ第1回目の上映を見に行きます。
 Palun pange raamatud lauale! 本を机の上に置いてください。

外部格で用いる地名は、慣用によって決まっています。なお、名詞 *maa* を後半に持つ複合名詞や地名は、外部格で用います。

Buss sõidab Otepääle kell kaheksa hommikul.
 バスはオテパーに向けて、朝8時に出ます。
 Sportlased saabuvad kodumaale ülehommel. 選手たちは明後日、故国に着きます。
 Ma sõidan Saaremaale (~ Saksamaale ~ Venemaale).
 わたしは、サーレマー(~ドイツ~ロシア)へ出かけます。

8.3.2. 受け手(与格)

エストニア語の向格は、授受を表す動詞とともに用いられて、受け手(与格 [= 英語の「間接目的語」])を表します。

Marju saadab Kohtla-Järvele õele kirja.
 マリユは、コフトラ・ヤルヴェの姉に手紙を送ります。
 Kas te annate homme oma kursusetöö dotsent Rebasele lugeda?
 なたたちは明日、レポートをレパネ講師に提出して読んでもらいますか。
 Mida see uurimus annab teadusele?
 この研究は、科学にとってどんな意味がありますか。
 Need roosid on sinule. これらのバラはあなた宛です。

8.3.3. 人称代名詞の向格形とその用法

	単数	複数
1人称	minule ~ mulle	meile
2人称	sinule ~ sulle	teile
3人称	temale ~ talle	nendele ~ neile

Aavo toob mulle pileti. アーヴォがわたしにチケットを持ってきてくれます。
 Minule toob pileti Aavo. わたしにチケットを持ってきてくれるのはアーヴォです。
 Priit toob sulle paberi. プリートがあなたに文書を届けます。
 Sinule toob paberi Priit. あなたに文書を届けるのはプリートです。
 Mart toob talle kutse. マルトが彼女に招待状を持ってきます。
 Temale toob kutse Mart. 彼女に招待状を持ってくるのはマルトです。
 Riina toob meile piletid. リーナがわたしたちにチケットを持ってきてくれます。
 Meile toob piletid Riina. わたしたちにチケットを持ってきてくれるのはリーナです。
 Mari toob teile paberid. マリがなたたちに文書を届けます。
 Teile toob paberid Mari. なたたちに文書を届けるのはマリです。
 Vaike toob neile kutsed. ヴァイケが彼らに招待状を持ってきます。
 Neile (~ Nendele) toob kutsed Vaike. 彼らに招待状を持ってくるのはヴァイケです。

8.4. 内格の用法

内格は、入格に対応する意味を持つ内部位置格で、人・物が存在する場所や、人・物が置かれた状態・状況を表し、「～の中で」「～において」などと訳されます。

Aavo on täna õhtul teatris.	アーヴォは今日の晩は劇場にいます。
Missugused kalad elavad Läänemeres?	バルト海にはどんな魚たちが棲んでいますか？
Haige on raskes seisundis.	病人〔患者〕は危険な状態にあります。
Kas te olete mures?	あなたは心配していますか？
Kas võistkond on juba võimlas?	選手団はもう体育館にいますか？

8.5. 接格の用法

8.5.1. 静止位置，状態

接格は向格に対応する外部位置格で、物理的な静止位置や人がおかれた状態・状況などを表し、「～の上で」「～の近傍で」「～において」などと訳すことができます。

Leib ja piim on laual, palun söö!	パンと牛乳がテーブルの上にあります。どうぞ召し上がれ。
Emajõel sõidavad ainult väikesed laevad.	エマヨキ川は、小さな船しか航行しません。
Kas miiting toimub Vabaduse väljakul?	集会は自由広場で行われるのですか？
Kas masinakirjutaja on täna töö!	タイピストは今日、出勤していますか。

8.5.2. 所有文における所有者

Mitu hammast on inimesel?	人間には歯が何本ありますか。
Igal inimesel on kaks kätt.	人間はめいめい手が2本あります。
Inimesel on kümme sõrme.	人間には指が10本あります。
Kellel on homme sünnipäev?	明日が誕生日なのは誰ですか？
Mehaanikul on täna vähe aega.	機械技師には今日、あまり時間がありません。
A. H. Tammsaarel on näidend “Kuningal on külm”.	A・H・タンムサーレには、「王様は寒い」という戯曲があります。
Ülikoolil on suur raamatukogu.	大学には大きな図書館があります。
Peahoonele on kuus sammast.	本館には柱が6本あります。

接格はまた、所有文に準じる次のような文で用いられます。

Mul on halb olla.	わたしは気分がよくありません。
Mul oli töö lõpetamisega väga kiire.	わたしは急いで仕事を終える必要があります。
Mul läheb kõik hästi.	わたしはすべて順調です。
Juba keskkoolis tekkis tal huvi vanade keelte vastu.	すでに高校時代に彼は古典語に興味を持ち始めました。
Tal jooksid pisarad üle põskede.	彼女は頬に涙を流しました。

次のような文では、接格が属格に相当する意味を持っています。

Tal valutab hammas.	彼女は歯が痛みます。
---------------------	------------

Mul kadus vihmavari.	わたしは傘をなくしました。
Mul jäi hing kinni.	わたしは息が切れました。
See tegi mul hinge täis.	わたしはそのことが頭にきました。

8.5.3. 不定詞の意味上の主語

8.5.3.1. 非人称文

Peetril on raske vene keeles kirjutada.	ペーテルはロシア語で書くのが大の苦手です。
Teil on vaja (~ on tarvis) töötada kiiresti.	あなたは急いで仕事をする必要があります。
Hannal tuleb (~ ei tule) koju minna.	ハンナはうちに帰らなければ(~帰っては)なりません。
Sul ei maksa seda teha.	あなたがそれをするのは意味がありません。
Firmal õnnestus sõlmida kasulik tehing.	会社は有益な取引契約を結ぶのに成功しました。

8.5.3.2. 使役, 命令, 許可, 禁止などを表す文

Ta lubas mul maale sõita.	彼はわたしが田舎へ行くのを許可しました。
Ta laskis sel mehel oma katuse all elada.	彼女はその男を自分の家で住ませました。
Direktor käskis töolistel rohkem töötada.	工場長は労働者にもっと働くよう命令しました。
Ema keelas tütrele öhtul kinno minna.	母親は娘が夜映画に行くのを禁じました。
Rahvarinne soovib nendel kohe lahkuda.	人民戦線は彼らに早く身を引くよう勧めています。
Isa aitas mul tööd teha.	父はわたしが仕事をするのを手伝ってくれました。

8.5.4. 時間表現

1 日の時間区分や曜日の表現に用いられます。

Loeng algab hommikul vara: kell 8.	講義は朝早く, 午前 8 時に始まります。
Millal on prodekaani kõnetund?	副学部長の面会時間はいつですか。
Prodekaani kõnetund on teisipäeval ja reedel.	副学部長の面会時間は火曜日と金曜日にあります。
Rong väljub öhtul kell 9.	列車は夜の 9 時に出ます。

【注意】「夜に」は, 例外的に öösel という副詞で表します。

Meie magame öösel.	わたしたちは夜中に眠ります。
--------------------	----------------

8.6. 出格の用法

8.6.1. 運動の起点・出発点

出格は, 入格に対応する意味を持つ内部起点格で, 運動の起点・出発点を表し, ほぼ日本語の「~の中から」に相当します。

Venelased lahkusid Eestist.	ロシア人たちはエストニアから立ち去りました。
Karl tuleb koolist koju.	カルルが学校から帰ってきます。
Patsient tuli haiglast ja läks puhkekodusse.	患者は病院から帰ると療養所へ行きました。

Kes leiab sellest olukorrast väljapääsu?

だれかこの事態から抜け出す方法を見つけられる人がいませんか？

Sellest haigusest ta ei paranenud.

彼はその病気から回復しませんでした。

See algas päris väikesest asjast.

それはほんの些細なことがきっかけでおこりました。

もの・情報などの出所も出格で表されます。

Missugust kala kalurid Läänemerest püüavad?

漁民たちはどんな魚をバルト海で捕獲しますか？

Ta jõi otse pudelist.

彼はビンから直接飲みました。

Ma lugesin selle nime ajalehest.

わたしは、その名前を新聞で見ました。

Emal leidis mu rahakoti köögist.

母はわたしの財布を台所で見つけました。

8.6.2. 材料，原料：「～から(できている)」

Mööbel on puust.

その家具は木製です。

Uued majad on rauast, betoonist ja klaasist.

新しい家々は、鉄，コンクリート，ガラスで出来ています。

Piimast võib saada kohupiima ja võid.

牛乳からは、凝乳やバターができます。

変化の出発点(「AがBになる」という場合のA)も出格で表されます。

Sinust saab hea arst.

あなたは立派な医者になります。

Temast sai president.

彼は大統領になりました。

Minust ei ole teile siin abi.

わたしはここで、あなたのお役に立てません。

8.6.3. 話題：「～について」

Palun jutustage oma tööst.

ご自分の仕事についてお話しください。

Mida te temast teate?

あなたたちは彼女について何かご存知ですか。

Lainest me teame väga vähe.

ライネのことをわたしたちは少ししか知りません。

Ka rühmakaaslased ei tea temast palju.

クラスメートの学生たちも彼女のことをよく知りません。

Kõik inimesed räägivad uuest filmist.

人々は皆、新しい映画について話しています。

Palun rääkige käesolevast sajandist!

今世紀のことについて話してください。

Homme jutustab professor Siberi loodusest.

明日、先生がシベリアの自然について話して下さいます。

8.6.4. 時間的な起点：「～から」「～以来」

Esmaspäevast alates me töötame haiglas. 月曜日から、わたしたちは病院勤務です。

Alates 1. (esimesest) juunist on laborant puhkusel.

6月1日から、事務助手は休みをとります。

Need vead korduvad aastast aastasse.

これらの間違いは、毎年繰り返されます。

Kevadest saadik on ilm külm.

春以来、寒い気候が続いています。

【補足】

時間的な起点を表す場合には、しばしば出格とともに後置詞 *alates* 「～から始まって」、*saadik* 「～からずっと」が使われます。*alates* は前置詞としても使われますが、本来は動詞 *algama* 「始まる」の副詞形です。

8.7. 奪格の用法

8.7.1. 運動の起点・出発点

奪格は、向格に対応する意味を持つ外部起点格で、運動の起点・出発点を表し、「～から」「～の上から」「～の表面から」などの意味になります。

Sekretär võtab laualt telefoniraamatu.	秘書が机から電話帳を取り上げます。
Millal ema turult tagasi tuleb?	お母さんはいつ市場から帰ってきますか？
Varsti saabub lennuk Saaremaalt	まもなくサーレマーから飛行機が到着します。
Mart tuleb töölt koju hilja õhtul.	マルトは夜遅く仕事から帰宅します。

8.7.2. 与え手

受け手を表す向格に対応する用法です。授受を表す動詞とともに用いられて、与える側を表します。

Aavo saab isalt iga kuu kakskümmend rubla.	アーヴォは毎月、父親から 20 ルーブルもらいます。
Informatsiooni võib saada minult.	情報はわたしから得てください。
Juhan saab mõnikord kirja ka vennalt.	ユハンはときどき弟からも手紙を受け取ります。
Anti palub prodekaanilt luba ära sõita.	アンティは副学部長に出発の許可を請います。
Ma palun sinult üht raamatut.	あなたから本を 1 冊いただきたいのですが。
Patsiendid ootavad arstilt abi.	患者たちが医者の治療を待っています。
Küsi seda temalt.	それは彼女に聞きなさい。

8.7.3. 「～の点では」「～に関して言えば」

Helle Kuus on elukutselt kirjakandja.	ヘレ・クースは、職業が郵便配達人です。
Jaak on hariduselt majandusteadlane.	ヤークは経済学者としての教育を受けています。
Oma iseloomult on ta hea inimene.	彼は、人柄のいい人です。
Õie Tüür on rahvuselt eestlane.	オイエ・テュールは、民族で言うとエストニア人です。

第9章(üheksas peatükk)

9.1. 動詞の格支配

動詞の中には、通常、ある特定の格に置かれた名詞(句)とともに用いられるものがあります。このことを、動詞がある特定の格を支配すると言い、この現象を「動詞の格支配」と呼びます。

動詞の格支配の概念を用いると、他動詞とは、分格または「対格」(単数属格・単数主格・複数主格)を支配する動詞であることとなります。

場所格を支配する動詞には、たとえば次のようなものがあります。

9.1.1. 入格支配の動詞

armuma	～に恋をする	kiinduma	～に強く結びつく
mõjuma	～に影響を及ぼす	puutuma	～に関わる
sekkuma	～に介入する	suhtuma	～に対して態度を示す
uskuma	～(の存在)を信じる		

Poiss armus tüdrukusse.

少年は少女に恋をしました。

Õpilane kiindus oma õpetajasse.

生徒は担任の先生に強い愛着を感じました。

See asi ei puutu minusse.

その件はわたしに関係ありません。

Mis puutub ilukirjandusse, siis seda tunneb Reet hästi.

文学に関して言えば、レートがよく知っています。

Need sõnad mõjusid minusse hästi.

そのことばはわたしによい影響を与えました。

Ta sekkus meie asjadesse.

彼はわたしたしの問題に首をつっこんできました。

Jüri suhtub töösse väga tõsiselt.

ユリは仕事に真剣に取り組んでいます。

Ta usub Jumalasse.

彼は神を信じています。

9.1.2. 向格支配の動詞

eelistama	～に優先させる	järgnema	～に続く
kuuluma	～に帰属する	lootma	～に希望を託す
meeldima	～の気に入る	meenuma	～に思い出させる
vastama	～に対応する	võlgnema	～に借りがある

Ma eelistan teatrit kinole.

わたしは映画より演劇の方を選びます。

Tema ettekandele järgnes lühike film.

彼の発表に続いて短編映画がありました。

See raamat kuulub poisile.

この本は少年のものです。

Me kõik loodame heale õnnele (~ sinu peale).

わたしたちはみな、好運(~あなた)を当てにしています。

Priidule ei meeldi see ettepanek.

プリートはその提案が気に入りません。

Peetritele meeldib muusikat kuulata.

ペーテルは音楽鑑賞が趣味です。

Mulle meenub üks vanasõna.

わたしは、諺がひとつ思い浮かびます。

See ei vasta tõele.

それは事実には合いません。

Ma võlgnen sulle palju tänu.

わたしはあなたに感謝しなければなりません。

9.1.3. 内格支配の動詞

Ta nõudis minult raha.

彼はわたしに金の無心をしました。

9.1.6. 動詞の格支配についての補足

目的語の他に2つの格を支配する動詞もあります。

Ta tõlkis ühe raamatu eesti keelest jaapani keelde.

彼女は1冊の本をエストニア語から日本語に翻訳しました。

9.2. 場所格相当の後置詞

9.2.1. 場所格を後置詞句で言い替える

具体的な場所関係を表す場所格は、多くの場合、内部格なら「属格+後置詞 *sisse ~ sees ~ seest*」、外部格なら「属格+後置詞 *peale ~ peal ~ pealt*」で言い替えることが可能です。

kapp 「戸棚」

kappi ~ kapi sisse

戸棚の中へ

kapis ~ kapi sees

戸棚の中に(ある)

kapist ~ kapi seest

戸棚の中から

laud 「テーブル」

lauale ~ laua peale

テーブルの上へ

lual ~ laua peal

テーブルの上に(ある)

laualt ~ laua pealt

テーブルの上から

Pane raamatud kappi (~ kapi sisse)!

本を戸棚にしまいなさい。

Raamatud on kapis (~ kapi sees).

本は戸棚の中にあります。

Võta raamatud kapist (~ kapi seest)!

本を戸棚から取りなさい。

Too õunad lauale (~ laua peale)!

リンゴをテーブルに持ってきてください。

Õunad on lual (~ laua peal).

リンゴがテーブルの上にあります。

Korja õunad laualt (~ laua pealt) ära!

リンゴをテーブルの上から片づけなさい。

9.2.2. 場所を表す後置詞の体系

場所格の体系に対応して、場所関係を表す後置詞にも、目標・到達点を表す形(~へ)、静止位置を表す形(~で)、起点・出発点を表す形(~から)の3つの形があります。したがって、場所格に相当する意味を表す後置詞はその3つの形をセットにして覚えると便利です。

Virve läheb täna arsti juurde.

[目標格相当]

ヴィルヴェは医者へ行きます。

Virve on praegu arsti juures.

[位置格相当]

ヴィルヴェは医者にいます。

Virve tuleb varsti arsti juurest koju.

[起点格相当]

ヴィルヴェはもうすぐ医者から帰ってきます。

場所格に相当する後置詞は、格語尾に相当する語尾を持っていることが多く、区別は比較的簡単ですが、中には独特の形を持つものがあります。

目標格相当

位置格相当

起点格相当

(kuhu?)	(kus?)	(kust?)	どこへ / で / から
alla	all	alt	~の下へ / で / から
peale	peal	pealt	~の上へ / で / から
ette	ees	eest	~の前へ / で / から
taha	taga	tagant	~の裏へ / で / から
juurde	juures	juurest	~のもとへ / で / から
sisse	sees	seest	~の内部へ / で / から
vahele	vahel	vahelt	~の間へ / で / から

Silla alla ei tohi minna. 橋の下へ行ってはいけません。
 Pall on diivani all. ボールはソファの下にあります。
 Laua alt tuleb välja suur koer. 机の下から大きな犬が出てきます。

Palun pange raamatud laua peale (~ lauale). 本を机の上に置いてください。
 Raamatud on laua peal (~ laual). 本は机の上にあります。
 Kas nad leidsid selle kivi maa pealt või maa seest?
 彼らがこの岩を発見したのは、地表からですか、それとも地中からですか？

Õhtul tõmban kardinad akna ette. 夜になると、窓にカーテンを引きます。
 Öösel on kardinad akna ees. 夜中には窓にカーテンが引かれています。
 Hommikul tõmban kardinad akna eest ära. 朝になると、窓のカーテンを開けます。

Pane kast ukse taha! 箱をドアの後ろ(向こう側)に置いてください。
 Kast on ukse taga. 箱がドアの後ろ(向こう側)にあります。
 Too kast ukse tagant siia! 箱をドアの後ろ(向こう側)からここへ持ってきなさい。

Perenaine paneb supi sisse soola. 主婦はスープの中に塩を加えます。
 Löö vai maa sisse (~ maasse). 杭を地中に打ち込みなさい。
 Missuguse looma pesa on maa sees? 地中に巣をつくるのはどんな動物ですか？
 Vesi voolab maa seest välja. 水が地中から流れ出しています。
 Karu tuleb koopa seest (~ koopast). 熊が穴から出てきます。

【参考】

Pall kukkus maha. ボールが地面に落ちました [表面]。

Riputa peegel kapi ja ukse vahele! 鏡を洋服だんすとドアの間に取り付けてください。
 Kas ma võin majade vahele garaaži ehitada?
 2 軒の家の間へ車庫を建ててかまいませんか？
 Milleks ta ripub akende vahel? どうして窓の間に取り付けてあるのですか？
 Paide asub Tallinna ja Tartu vahel. パイテはタリンとタルトの間にあります。
 Leidsin tõendi raamatu vahelt. 証明書を本の間から見つけました。

9.3. 場所関係を表す副詞

場所格の体系に対応して、場所関係を表す副詞にも、「~へ」「~で」「~から」という3つの形がセットになっているものがあります。後置詞のなかには、単独で副詞としても使われるものがあります。

9.4.3. 「～を脱ぐ」

動詞 võtma「取る」と身体の部位を表す名詞の出格で、「～を脱ぐ」という意味が表されます

Ma võtan mütsi peast.	わたしは(頭から)帽子を脱ぎます。
Ma võtan salli kaelast.	わたしは(首から)スカーフをとります。
Ma võtan kindad käest.	わたしは(手から)手袋をとります。
Ma võtan saapad jalast.	わたしは(足から)ブーツを脱ぎます。
Ma võtan kingad jalast.	わたしは(足から)靴を脱ぎます。
Ma võtan püksid jalast.	わたしはズボンを脱ぎます。
Ma võtan palitu seljast.	わたしはオーバーを脱ぎます。
Ma võtan pintsaku seljast.	わたしはジャケットを脱ぎます。
Ma võtan kleidi seljast.	わたしはドレスを脱ぎます。

9.5. 「ビン2本の牛乳」

「数詞 + 個体名詞」あるいは「数詞 + 数量詞 + 非個体名詞」が目的語となった場合の目的語の格表示についてまとめましょう。

9.5.1. 数詞 üks 「1」

数詞 üks は、指示詞 see や一般の形容詞とまったく同じに振るまいます。すなわち、üks は常に名詞と同じ格形になります。

主格	üks raamat	「本1冊」
属格	ühe raamatu	
分格	üht raamatut ~ ühte raamatut	

Sina ostad ühe raamatu.	(属格目的語)	あなたはある本を(1冊)買います。
Sina ei osta üht raamatut.	(分格目的語)	あなたはある本を(1冊)買いません。
Osta üks raamat!	(主格目的語)	ある本を(1冊)買いなさい!

9.5.2. 2以上の数詞

2以上の数詞の振るまいは、üks とは大きく異なります。2以上の数詞の代表として viis 「5」を例にとりて説明します。

まず、主格 viis の後ろでは名詞は単数主格でなく、単数分格になります。その他の格形では、数詞 viis は、形容詞のように振るまいます。

主格	viis raamatut	「本5冊」
属格	viie raamatu	
分格	viit raamatut	

第2に、「viis + 名詞」の場合、分格目的語と主格目的語の対立しかありません。いいかえると、通常なら属格目的語が期待される文でも主格の形で現れます。すなわち、属格の viie raamatu が目的語として用いられることはありません。

Sina ostad viis raamatut.	[主格目的語]	あなたは本を5冊買います。
Sina ei osta viit raamatut.	[分格目的語]	あなたは5冊の本を買いません。
Osta viis raamatut!	[主格目的語]	本を5冊買いなさい!

9.5.3. 「数詞 + 数量詞 + 非個体名詞」

この構造は2つの構造が数量詞を媒介にして結びついています。まず、「数詞 + 数量詞」の部分は、一般の「数詞 + 名詞」とまったく同じに振るまいます。数量詞の例として pudel「ビン」を例にとれば、üks pudel と viis pudelit はそれぞれ次のように変化します。

主格	üks pudel	「ビン 1 本」	viis pudelit	「ビン 5 本」
属格	ühe pudeli		viie pudeli	
分格	üht pudelit		viit pudelit	
	(~ ühte pudelit)			

Sina ostad ühe pudeli (~ viis pudelit). [属格 / 主格目的語]

あなたはビンを 1 本(5 本)買います。

Sina ei osta üht pudelit (~ viit pudelit). [分格目的語]

あなたは 1 本(5 本)のビンを買いません。

Osta üks pudel (~ viis pudelit)!

ビンを 1 本(5 本)買いなさい! [主格目的語]

これに対し、「数量詞 + 非個体名詞」の部分は、数量詞のみが格変化し、非個体名詞は単数分格形におかれたまま変化しません。

主格	(üks)	pudel	piima	「牛乳 1 本」
属格	(ühe)	pudeli	piima	
分格	(üht)	pudelit	piima	

主格	(viis)	pudelit	piima	「牛乳 5 本」
属格	(viie)	pudeli	piima	
分格	(viit)	pudelit	piima	

Sina ostad ühe pudeli piima. [属格目的語] あなたは牛乳を 1 本買います。

Osta üks pudel piima! [主格目的語] 牛乳を 1 本買いなさい。

Sina ostad kaks pudelit piima. [主格目的語] あなたは牛乳を 2 本買います。

Osta kaks pudelit piima! [主格目的語] 牛乳を 2 本買いなさい。

Kas sa ei osta üht pudelit piima? [分格目的語]

あなたは牛乳を 1 本買わないのですか？

Kas sa ei osta viit pudelit piima? [分格目的語]

あなたは牛乳を 5 本買わないのですか？

9.6. 「1 週間は何日ですか」

疑問詞 mitu は、単数分格の個体名詞とともに用いられて、「何個の」「何人の」等の意味を表します。

Mitu päeva on nädalas?

1 週間は何日ですか？

Mitu inimest elab teie majas?

あなたの家には何人住んでいますか？

Mitu üliõpilast on auditoriumis?

教室には学生が何人いますか？

Mitu pirukat sa sööd?
Mitu klaasi teed nad joovad?

あなたはパイをいくつ食べますか？
彼らはお茶を何杯飲みますか？

【参考】

台のついたガラスのコップでお茶を飲むのはロシア風ですが，エストニアでもめずらしくないお茶の入れ方です。klaas teed「コップ1杯のお茶」という表現があるのはこのためです。

9.7. 「たくさん」「すこし」

数量詞 vähe「少量の」と palju「多量の」は，非個体名詞の単数分格とともに用います。対応する疑問詞は kui palju「どれだけの(量の)？」です。

Meil on palju tööd.
Täna on palju tööd.
Te saate palju paberit.
Raamatukogus on palju uut.
Mul on vähe aega.
Tees on vähe suhkrut.
Siin on vähe valgust.
Me joome vähe piima.

わたしたちは仕事がたくさんあります。
今日は仕事がたくさんあります。
あなたたちは紙をたくさん受け取ります。
図書館には新しい資料がたくさんあります。
わたしは時間が少ししかありません。
お茶の中には砂糖があまりはっていません。
ここは明かりが少ないです。
わたしたちは牛乳をあまり飲みません。

Kui palju aega teil on?

あなたには時間がどのくらいありますか？

第 10 章(kümnes peatükk)

10.1. 名詞の格変化：場所格以外の格

エストニア語の名詞には、主格・属格・分格と 6 つの場所格のほかに、格があと 5 つ(変格 saav, 様格 olev, 到格 rajav, 欠格 ilmaütlev, 共格 kaasütlev)あります。

これら 5 つの格形も、すべて単数語幹(= 単数属格形)に格語尾をつけて作ります。

単数主格	töö 「仕事」	naine 「女性」	kes 「誰」	mis 「何」
属格	töö	naise	kelle	mille
変格	töö/ks	naise/ks	kelle/ks	mille/ks
様格	töö/na	naise/na	kelle/na	mille/na
到格	töö/ni	naise/ni	kelle/ni	mille/ni
欠格	töö/ta	naise/ta	kelle/ta	mille/ta
共格	töö/ga	naise/ga	kelle/ga	mille/ga

形容詞修飾語(および数詞)は、変格では名詞と同じ格語尾がつきますが、様格・到格・欠格・共格では、格語尾がつかず、語幹(= 属格形)のままにおかれます。

	白い	襟	5	年
主格	valge	krae	viis	aastat
属格	valge	krae	viie	aasta
変格	valge/ks	krae/ks	viie/ks	aasta/ks
様格	valge	krae/na	viie	aasta/na
到格	valge	krae/ni	viie	aasta/ni
欠格	valge	krae/ta	viie	aasta/ta
共格	valge	krae/ga	viie	aasta/ga

10.2. 変格の用法

10.2.1. 変化の結果：「～になる」「～に変わる)」

Ta saab õpetajaks. 彼女は教師になります。

Vello Karu saab pärast instituudi lõpetamist õpetajaks.

ヴェロ・カルは大学を卒業したあと教師になります。

Üliõpilane Piret Järv saab tulevikus kirurgiks.

学生のピレット・ヤルヴは将来外科医になります。

Salme soovis saada lauljannaks.

サルメは歌手になりたいと思っていました。

Kui jää sulab, siis ta muutub veeks.

氷が解けると、水に変わります。

Suvel läheb vara valgeks ja hilja pimedaks.

夏には、早く明るくなり、遅く暗くなります。

Ta oli alguses rikas, aga hiljem jäi vaeseks.

彼は最初は金持ちだったが、のちに貧乏になりました。

変化の結果を表す変格形容詞句は、ふつう、主語が複数でも単数変格形で現れます。

Me saime temaga tuttavaks.

わたし(たち)は彼と知り合いになりました。

Me saime omavahel sõpradeks. わたしたちはお互いに友だちになりました。
 Lapsed kasvasid suureks ja vanemad jäid vanaks.
 子どもたちは成長して大きくなり、親たちは年をとりました。
 Mõned üksikud saavad rikkaks. 中には金持ちになる人たちもあります。
 Kevadel lähevad lehed roheliseks. 春になると、木々の葉が緑になります。

「AがBになる」は、変格を使う構文と出格を使う構文の2通りの言い表し方が可能です。

Tema saab arstiks. ~ Temast saab arst. 彼女は医者になります。

10.2.2. 変化の結果：「～に(する)」「～に(変える)」

Ta valiti kateedri juhatjaks. 彼は学科主任に選ばれました。
 Ema lõikas leiva viiludeks. 母親はパンを(何切れかに)薄く切りました。
 Laps pühkis nina puhtaks. 子どもは鼻を拭ってきれいにしました。

10.2.3. 一時的な職務・機能：「～として」

動詞 *olema* を変格補語とともに用いると、補語によって表される属性・職務・機能が、主語にとって一時的なものであるという意味合いが強調されます。

See neiu on selles lasteaias kasvatajaks. この娘さんは、この幼稚園で先生をしています。
 Prl. Kaasik on praegu meie asutuses masinakirjutajaks.
 カーシックさんは今、うちの会社でタイピストをしています。
 Praktikant Piret Järv on praegu polikliinikus kirurgiks.
 実習生のピレット・ヤルヴさんは今、総合病院に外科医としています。

補語が主格形の場合は、補語によって表される属性・職務・機能が、主語の恒常的な属性(資格)であるという意味合いが強調されます。したがって、主格補語を使った言い方は、主語が一時的に失業中でも使えることになります。

See neiu on kasvataja. この娘さんは幼稚園の先生です。
 Prl. Kaasik on masinakirjutaja. カーシックさんはタイピストです。
 Doktor Piret Järv on kirurg. ピレット・ヤルヴ先生は外科医です。

10.2.4. 目的補語：「(～を)～と(みなす)」

Mõlemad pooled pidasid otsust õigeks. 双方が決定を正しいと考えました。

10.2.5. 用途, 目的：「～のために」「～用に」「～として」

Mees pakkus oma tüdart Matile naiseks.
 男は、自分の娘をマッティに嫁にどうかとすすめました。
 Iga terve inimene tarvitab toiduks suhkrut.
 健康な人はみな、食物として砂糖を摂取します。
 Me vajame hingamiseks puhast õhku.
 わたしたちは呼吸するために清潔な空気を必要とします。
 Me joome teie terviseks! わたしたちはあなたの健康を祝して乾杯します。

Soovin õnne sünnipäevaks! 誕生日おめでとうございます。
Mati õpib arstiks. マッティは医者になるための勉強をしています。

10.2.6. あることのために予定される時間・期間

Palun tulge meile pooleks tunniks!
2時間ほど(過ごすつもりで)うちへいらっしやい。
Teadlased sõidavad kuueks kuuks ekspeditsioonile.
研究者たちは6カ月の(予定で)実地調査に出かけます。
Kas te lähete Pärnusse pikaks ajaks?
パルヌには長期間(滞在する予定で)お出かけですか？

【注意】

動詞 jääma 「留まる」は、期間を表す変格名詞句をとります。
Me jääme sinna kolmeks päevaks. わたしたちはそこに3日間逗留しました。

10.2.7. 期限：「～までに」「～になる前に」 ある時間、日時までに終わっている(予定である)ことを表します。

Selle töö me lõpetame õhtuks.
この仕事は、夕方までに(=夕方になる前に)終わります。
Kella kuueks olid nad töö lõpetanud. 6時までには彼らは仕事を終わっていました。
Kas te olete selleks ajaks valmis? あなたはその時間までに用意ができていますか？
Ma jõudsin kohale õigeaks ajaks. ちょうどの時間に目的地に到着しました。
Lõpuks olid kõik väga väsinud. しまいにはみんなとても疲れてしまいました。

【比較】

接格の時間表現を用いると、終わる時間そのものを表します。
Selle töö me lõpetame õhtul. この仕事は夕方に(なって)終わります。

10.3. 共格の用法

10.3.1. 道具、手段：「～で」「～を用いて」「～によって」

Ta kirjutab pliiatsiga. 彼女は鉛筆で書きます。
Harja oma riideid selle harjaga! このブラシで服のほこりを払いなさい。
Õhtul me sõitsime paadiga Emajõel.
夕方、わたしたちはエマヨキ川でボートに乗りました。
Narvast Tapale sõitsid matkajad rongiga.
行楽客たちは、ナルヴァからタッパへ列車で行きました。
Missuguse masinaga te oskate töötada? あなたはどんな機械を使う技能がありますか。
Kas sa oskad jalgrattaga sõita? あなたは自転車に乗ることができますか？
Sinu abiga sain töö valmis. あなたの助力で仕事を終えることができました。

10.3.2. 同伴、随行：「～と」「～と一緒に」「～とともに」

Peeter jalutab isaga. ペーテルはおとうさんと散歩します。
Õhtul ma lähen sõbraga kinno. 夕方、わたしは友人と映画に行きます。

Kas te soovite kohvi suhkruga või ilma?

あなたはコーヒーは砂糖入りがいいですか、それとも砂糖なしですか。

この意味の共格は、しばしば koos「一緒に」を伴います。 koos は、共格名詞の前にも後ろにもおくことができます。

Ta läheb sõbraga koos (~ koos sõbraga) kinno. 彼は友人と一緒に映画に行きます。

Poisid lähevad staadionile koos isaga (~ isaga koos).

少年たちは父親と一緒に競技場に行きます。

Koos pudeliga (~ Pudeliga koos) maksab piim 28 kopikat.

牛乳はビン代を入れて 28 コペーカです。

名詞の意味によっては、様態を表すとしたほうが良い場合があります。

Rong tormas mürinaga üle silla.

列車は轟音をたてて(= 轟音とともに)橋を越えました。

Tulen siia suure rõõmuga.

喜んで来させていただきます。

10.3.3. 時間的範囲：「～で」「～のうちに」

一定の時間の後にことが終わることをあらわします。

Ta kirjutas töö valmis kolme tunniga. 彼はその仕事を 3 時間で書き上げました。

Kas jõuad poole tunniga luuletuse selgeks õppida?

あなたは 30 分で詩を完全に理解できますか？

Rein jooksis kilomeetri seitsme minutiga.

レインは 1 キロを 7 分で走りました。

Nädalaga oli töö valmis.

1 週間で仕事が完成しました。

Mati lõpetas ülikooli viie aastaga.

マッティは 5 年間で大学を卒業しました。

10.3.4. 付属，携帯：「～のついた」「～をもった」

この意味の共格名詞句は、名詞の前に置かれて修飾語となったり、動詞 olema とともに用いられて述語形容詞に相当する働きをします。

Palun kaks koorega kohvi!

クリーム入りのコーヒーを 2 つください。

See oli pika kaelaga hobune.

首の長い馬でした。

Õpilasel oli valge kraega kleit.

生徒は、白い襟のドレスを着ていました。

Sul on kõrge kontsaga kingad.

あなたは高い踵の靴をはいています。

Keegi seljakotiga mees tuli meie õue.

誰かリュックサックを背負った男の人がうちの庭に来ました。

Härra Tamm on väikese jutuga.

タンムさんは無口です。

10.3.5. 共格支配の動詞

kohtuma

～と会う

tegelema

～に携わる

tutvuma

～と知り合う

vestlema

～と会話する

tuttavaks saama

～と知り合う

Matkajad kohtusid Lahemaal ühe loodusteadlasega.

遠足の人々は、ラヘマー(自然公園)である自然科学者と会いました。
 Tõnu tegeleb spordiga. トヌはスポーツをしています。
 Turistid tutvusid Tallinna vanalinnaga. 観光客たちは、タリンの旧市街を見学しました。
 Ma tutvusin temaga (~ sain temaga tutvavaks) alles eile.
 わたしは彼女と昨日知り合いになったばかりです。
 Marile meeldib oma sõpradega vestelda. マリは友人たちとおしゃべりするのが好きです。

10.4. 欠格の用法

欠格は、何かが存在していないこと、欠如していることを表します。欠格名詞は、共格名詞と同じく、名詞の前におかれての修飾語となったり、動詞 *olema* と一緒に用いられて述語形容詞に相当する役割をはたすことができます。

Õpilane ei lähe kooli pliiatsita.	生徒は鉛筆を持たずに学校には出かけません。
Rahata ei saa reisima minna.	お金がなくては旅行に出かけられません。
Me ootasime teda asjata.	わたしたちはあの人を待ちましたが、無駄でした。
Uus maja on veel katuseta.	新しい家にはまだ屋根がありません。
Miks see kiri on aadressita?	この手紙にはなぜあて先の住所がないのですか？
Kuuta õö on pime.	月の出ない夜は暗いです。
Emata lapse elu on raske.	母親のいない子どもの人生はたいへんです。

欠格名詞句は、しばしば前置詞 ilma 「～なしに」を伴います。

Me ei saa seda ilma teieta teha.
 わたしたちはそれをあなた抜きで行うことはできません。

Kas te joote teed ilma suhkruta?	お茶はお砂糖なしで飲みますか？
Ilma loata ei tohi laboratooriumi minna.	許可なしに実験室へ入ってはなりません。
Üks aken on ilma kardinata.	窓の1つはカーテンがありません。

Kes tööd teeb, see ei jää ilma leivata.
 労働をする者は、パンなしになることはありません。

Matkajad olid kahjuks ilma kaardita.
 遠足の人々は、残念ながら地図を持っていませんでした。

10.5. 様格の用法

10.5.1. 一時的な職務・機能

動詞 *olema* 以外の動詞とともに用います。

Ta teenib leiba kalamehena.	彼は漁師として生計を立てています。
-----------------------------	-------------------

Salme Kurg töötab õpetajana keskkoolis.
 サルメ・クルクは中等学校に教師として勤めています。

Vello Karu töötab teist aastat õpetajana.
 ヴェロ・カルが教師として働き始めて2年目にはいっています。

Piret Järv töötab haiglas kirurgina.
 ピレット・ヤルヴは病院で外科医として働いています。

Teise maailmasõja ajal teenis Tõnu vanaisa Punaarmee ohvitserina.
 第2次世界大戦中、トヌの祖父は赤軍で将校として勤務しました。

る接続詞)によってつなぐ場合には、格語尾は最後の名詞だけに付いて、それ以外の名詞は語幹の形(=属格形)のまま置かれます。

Ma läksin koos venna ja õega. (venna/ga + õe/ga)

わたしは弟と妹と一緒に出かけました。

Tallinnast Leningradi võib sõita nii laeva kui rongiga. (laeva/ga + rongi/ga)

タリンからは、レニングラードへ船でも列車でも行けます。

10.8. 数詞(21 以上)

20, 30 ... 90 は、2 ~ 9 を表す数詞の後ろに -kümmend を添えて表します。

		40	neli/kümmend	70	seitse/kümmend
20	kaks/kümmend	50	viis/kümmend	80	kaheksa/kümmend
30	kolm/kümmend	60	kuus/kümmend	90	üheksa/kümmend

21 ~ 29 は、kakskümmend (20)の後ろに 1 ~ 9 を表す数詞を添えます。分ち書きに注意してください。なお、-kümmend は、話しことばでしばしば-kend と発音されます。

21	kaks/kümmend üks	26	kaks/kümmend kuus
22	kaks/kümmend kaks	27	kaks/kümmend seitse
23	kaks/kümmend kolm	28	kaks/kümmend kaheksa
24	kaks/kümmend neli	29	kaks/kümmend üheksa
25	kaks/kümmend viis		

以下、34, 47, 56,... 等々は、21 ~ 29 と同じ方法で組み立てられます。

34	kolm/kümmend neli
47	neli/kümmend seitse
56	viis/kümmend kuus

200, 300 ... 900 は、1 ~ 9 を表す数詞に sada「100」を添えます。100 の桁と 10 の桁は分けて書きます。

100	sada	600	kuussada
200	kakssada	700	seitsesada
300	kolmsada	800	kaheksasada
400	nelisada	900	üheksasada
500	viissada		

137 sada kolmkümmend seitse

1000, 2000 ... 9000 は、1 ~ 9 を表す数詞に tuhat「1000」を添えます。数詞と tuhat は分けて書きます。1000 の桁と 100 の桁も分けて書きます。

1000	(üks) tuhat	6000	kuus tuhat
2000	kaks tuhat	7000	seitse tuhat

3000	kolm tuhat	8000	kaheksa tuhat
4000	neli tuhat	9000	üheksa tuhat
5000	viis tuhat		

4 568	neli tuhat viissada kuuskümmend kaheksa
20 000	kakskümmend tuhat
10 387	kümme tuhat kolmsada kaheksakümmend seitse
400 000	nelisada tuhat
900 000	üheksasada tuhat

100 万(1 000 000)は miljon です。miljon は paber などと同じ変化をします。

1 000 000	(üks) miljon
2 000 000	kaks miljonit
70 000 000	seitsekümmend miljonit

【参考】

0 null

10.9. 「～も」(小詞 ka)

エストニア語には、日本語の副助詞「も」によく似た小詞 ka があります。ka は、文のいろいろな位置に現れることができます。

Ka minu isa oli arst. わたしの父も医者でした。
 Jüri töötab ka õhtul. ユリは夜も働いています。

小詞 ka と同じ働きをする前接語 -gi ~ -ki があります。-gi ~ -ki は、さまざまな語の後ろにつくことができます。

Minu isagi oli arst. わたしの父も医者でした。
 Jüri töötab õhtulgi. ユリは夜も働いています。

【解説】

前接語(enclitic)とは、必ず他の語の末尾につけられて用いられ、語尾のように振るまう語のことを言います。-gi ~ -ki は、母音や有聲子音で終わる語につくときは -gi と書かれ、無声子音で終わる語につくときは、-ki と書かれます。

第 11 章(üheteistkümnes peatükk)

11.1. 動詞の過去形

11.1.1. 過去形(その 1)

動詞の過去形については、すでに第 4 章(4.4.)である程度触れました。この章では、第 4 章で触れなかった場合を含めて、過去形の作り方をより詳しく扱います。

一部の動詞(11.1.2.)を除いて、過去形の語幹は、ma-不定詞の語尾 -ma を接尾辞 -si- (3 人称単数では：-s ~ -is)で置き換えて作ります。3 人称単数の場合、過去を表す接尾辞(過去の標識)は、ma-不定詞の語幹(語尾 -ma を取った形)が母音で終わる場合は -s (例：tööta/ma - tööta/s)，ma-不定詞の語幹が子音で終わる場合に -is (例：and/ma - and/is)となります。

tööta/ma 「働く」

ma	tööta/si/n	me	tööta/si/me
sa	tööta/si/d	te	tööta/si/te
ta	tööta/s	nad	tööta/si/d

and/ma 「与える」

ma	and/si/n	me	and/si/me
sa	and/si/d	te	and/si/te
ta	and/is	nad	and/si/d

ma-不定詞の語幹が子音 s で終わっている場合、3 人称単数以外では、過去の標識-si-の子音 s が落ちて、過去語幹は「ma-不定詞の語幹 + 母音 -i」となります。

tõus/ma 「起きあがる」

ma	tõus/i/n	me	tõus/i/me
sa	tõus/i/d	te	tõus/i/te
ta	tõus/is	nad	tõus/i/d

【解説】

- 1) 過去形では、3 人称複数形が 2 人称単数形と同じ形になります。
- 2) 階程交替する動詞では、ma-不定詞はいつも強階程です。したがって、過去形の形もすべて強階程になります。

11.1.2. 過去形(その 2)

過去の標識が -si- の代わりに -i- となる動詞がいくつかあります。過去の標識は、基本的には ma-不定詞の語幹(ma-不定詞から語尾 -ma を取った形)につくと言えますが、ma-不定詞の語幹の母音に変化が起きます。

tule/ma 「来る」

ma	tul/i/n	me	tul/i/me
sa	tul/i/d	te	tul/i/te
ta	tul/i	nad	tul/i/d

過去標識 -i- をとる動詞と、その過去の形は次の通りです。

(a) ma-不定詞の語幹が 2 音節で，過去の標識-iがつくと，語幹末の母音が落ちます。

näge/ma	nägi/n	nägi/d	nägi	nägi/me	nägi/te	nägi/d	「見る」
ole/ma	oli/n	oli/d	oli	oli/me	oli/te	oli/d	「いる，ある」
pane/ma	pani/n	pani/d	pani	pani/me	pani/te	pani/d	「置く」
pese/ma	pesi/n	pesi/d	pesi	pesi/me	pesi/te	pesi/d	「洗う」
sure/ma	suri/n	suri/d	suri	suri/me	suri/te	suri/d	「死ぬ」
tege/ma	tegi/n	tegi/d	tegi	tegi/me	tegi/te	tegi/d	「する，作る」
pida/ma	pidi/n	pidi/d	pidi	pidi/me	pidi/te	pidi/d	「～すべきだ」

【注意】

「とらえる，もつ」の意味の動詞 pidama と「～すべきだ」の意味の動詞 pidama は，現在形はまったく同じですが，過去形は形が異なります。

	pida/ma「とらえる，もつ」		pida/ma「～すべきだ」	
現在形：	pea/n	pea/me	pea/n	pea/me
	pea/d	pea/te	pea/d	pea/te
	pea/b	pea/vad	pea/b	pea/vad
過去形：	pida/si/n	pida/si/me	pid/i/n	pid/i/me
	pida/si/d	pida/si/te	pid/i/d	pid/i/te
	pida/s	pida/si/d	pid/i	pid/i/d

(b) ma-不定詞の語幹が長母音で終わる 1 音節の場合には，過去語幹の母音が，i で終わる二重母音になります。

saa/ma	sai/n	sai/d	sai	sai/me	sai/te	sai/d	「受け取る」
jää/ma	jäi/n	jäi/d	jäi	jäi/me	jäi/te	jäi/d	「とどまる」
joo/ma	jõi/n	jõi/d	jõi	jõi/me	jõi/te	jõi/d	「飲む」
too/ma	tõi/n	tõi/d	tõi	tõi/me	tõi/te	tõi/d	「持ってくる」
loo/ma	lõi/n	lõi/d	lõi	lõi/me	lõi/te	lõi/d	「作り出す」
löö/ma	lõi/n	lõi/d	lõi	lõi/me	lõi/te	lõi/d	「打つ」
söö/ma	sõi/n	sõi/d	sõi	sõi/me	sõi/te	sõi/d	「食べる」

【注意】

動詞 looma「作り出す」と lööma「打つ」は，過去形がまったく同じになります。

11.1.3. 過去形(その 3)

動詞 minema「行く」の過去形は特別な語幹を持っています。

mine/ma läksi/n, läksi/d, läks, läksi/me, läksi/te, läksi/d

11.1.4. 過去形の用例

Mina töötasin suvel Saaremaal.	わたしは夏，サーレマーで働きました。
Sina küsisid kaks postmarkki.	あなたは切手を 2 枚頼みました。
Minu toonaaber tahtis lugeda ajalehte “Päevaleht”.	

わたしのルームメートは新聞「Päevaleht」を読みたいと思いました。
 Palun korra, mida te ütlesite! おっしゃったことをもう一度繰り返してください。
 Sa tulid väga vara. あなたはとても早く来ました。
 Kuhu Priit pani vene-eesti sõnastiku?
 プリートはどこにロシア語・エストニア語辞典を置いたのですか？
 Õhtul me tegime väikese jalutuskäigu pargis.
 夕方、わたしたちは公園をちょっと散歩しました。
 Kas sõite suppi ja jõite piima? スープと牛乳をお召し上がりになりましたか？
 Lained löid vastu laeva. 波が船に向かって打ちつけていました。

11.1.5. 複合動詞の過去形

複合動詞の過去形は、動詞の部分が過去形になるだけで、原理的に単純動詞の過去形と同じに作られます。

ära minema 「立ち去る」				
ma	läksi/n	ära	me	läksi/me ära
sa	läksi/d	ära	te	läksi/te ära
ta	läks	ära	nad	läksi/d ära

Ma kirjutasin dokumendile alla. わたしは文書に署名しました。
 Me jõudsim kohale kell kaheksa hommikul.
 わたしたちは朝 8 時に目的地に着きました。
 Kas nad võtsid lilled vastu? 彼らは花を受け取りましたか？
 Kinnas kadus ära. 手袋の片方がなくなっていました。

11.2. 動詞の nud-分詞(能動過去分詞)

11.2.1. nud-分詞の作り方(その 1)

動詞は、(1a)(1b)のように、2つの不定詞(ma-不定詞と da-不定詞)の語幹が共通であるタイプと、(2a)(2b)のように、2つの不定詞の語幹が異なるタイプに分けられます。階程交替がある動詞の場合、da-不定詞は前者のタイプでは強階程に、後者のタイプでは弱階程になります。

	ma-不定詞	da-不定詞	nud-分詞	
(1a)	avama	(ava/da)	ava/nud	開ける
(1b)	andma	(and/a)	and/nud	与える
	maksma	(maks/ta)	maks/nud	支払う
(2a)	hakkama	haka/ta	haka/nud	始める
(2b)	õmblema	õmmel/da	õmmel/nud	縫う
	tulema	tul/la	tul/nud	来る

動詞の nud-分詞は、(1a)(1b)では、2つの不定詞に共通の語幹から、(2a)(2b)では、da-不定詞の語幹から作られます。したがって、階程交替する動詞の場合、能動過去分詞は、da-不定詞の階程に応じて、強階程になる [(1a)(1b)] か、弱階程になる [(2a)(2b)] かが決まります。

11.2.2. nud-分詞の作り方(その 2 : 例外)

エストニア語の正書法上の約束では，子音 p, t, k の超長音は母音間にある時のみ pp, tt, kk で表しますが，直前または直後に子音がある場合には，超長音でも p, t, k で表します。
次の動詞の 2 つの不定詞語幹が異なっているように見えるのは，正書法の約束のためです。

ma-不定詞	da-不定詞	nud-分詞	
`jät/ma	(`jätt/a)	`jät/nud	捨てる
`võt/ma	(`vött/a)	`võt/nud	取る
`nut/ma	(`nutt/a)	`nut/nud	泣く
`kat/ma	(`katt/a)	`kat/nud	覆う
`pet/ma	(`pett/a)	`pet/nud	欺く
`küt/ma	(`kütt/a)	`küt/nud	暖房する

次の動詞は，2 つの不定詞の語幹の形が異なりますが，nud-分詞は ma-不定詞の語幹から作られます。

ma-不定詞	da-不定詞	nud-分詞	
joo/ma	(juu/a)	joo/nud	飲む
too/ma	(tuu/a)	too/nud	持ってくる
loo/ma	(luu/a)	loo/nud	造る
söö/ma	(süü/a)	söö/nud	食べる
löö/ma	(lüü/a)	löö/nud	打つ
jooks/ma	(joos/ta)	jooks/nud	走る
lask/ma	(las/ta)	lask/nud	～させる

【比較】

müü/ma	müü/a	müü/nud	売る
maks/ma	maks/ta	maks/nud	支払う

次の動詞は，nud-分詞が特別の語幹から作られます。

ma-不定詞	da-不定詞	nud-分詞	
mine/ma	(min/na)	läi/nud	行く
näge/ma	(näh/a)	näi/nud	見る
tege/ma	(teh/a)	tei/nud	作る

11.3. 動詞の過去形(否定形)

直説法過去の否定形は，否定の小詞 ei と本動詞の過去分詞で作ります。過去の否定形はすべての人称に共通です。

töötama 「働く」の過去否定形		
ma	ei tööta/nud	わたしは働かなかった
sa	ei tööta/nud	あなたは働かなかった
ta	ei tööta/nud	彼(彼女)は働かなかった
me	ei tööta/nud	わたしたちは働かなかった
te	ei tööta/nud	あなたたちは働かなかった
nad	ei tööta/nud	彼ら(彼女たち)は働かなかった

Mari ei töötanud suvel Lõuna-Eestis.

マリは夏，南エストニアで働きませんでした。

Miks sa ei pannud leiba lauale?

なぜあなたはパンをテーブルの上に置かなかったのですか？

Mina ei tulnud loengule, sest olin haige.

わたしが講義に出なかったのは，病気のせいです。

Me ei söönud ega joonud seal mitte midagi.

わたしたちはそこでまったく何も食べたり飲んだりしませんでした。

Miks sa ei õppinud kirjutusmasinal kirjutama?

あなたはなぜタイプライターを習わなかったのですか？

Ma ei tundnud sind ära.

わたしはあなただということに気がつきませんでした。

Kursusetöö ei teinud talle muret.

彼はレポートのことで悩みませんでした。

Koosolek ei alanud täpselt.

会議は定刻に始まりませんでした。

Kahjuks me ei vaadanud ukse taha.

残念ながらわたしはドアの向こうを見ませんでした。

Eile nad ei võimelnud.

昨日，彼らは体操をしませんでした。

Miks ta ei läinud kinno?

彼はなぜ映画に行かなかったのですか？

11.4. 動詞の完了時制

動詞の完了形は，動詞 *olema* と過去分詞でつくりま

11.4.1. 現在完了

現在完了の形は，動詞 *olema* の現在形と本動詞の能動過去分詞(*nud*-分詞)とで作ります。否定形は，動詞 *olema* の部分を，現在の否定形にします。

		töötama 「働く」			
肯定形				否定形	
ma	olen	tööta/nud		ma	ei ole tööta/nud
sa	oled	tööta/nud		sa	ei ole tööta/nud
ta	on	tööta/nud		ta	ei ole tööta/nud
me	oleme	tööta/nud		me	ei ole tööta/nud
te	olete	tööta/nud		te	ei ole tööta/nud
nad	on	tööta/nud		nad	ei ole tööta/nud

現在完了時制は，<1>すでに完了している(または未来の特定の時点までに完了する)行為・動作，<2>過去から現時点まで継続している行為・動作，<3>過去における経験を表します。

Mina olen töötanud Soomes kaks kuud.

わたしは，フィンランドで働き始めて2か月になります。

Kui ta on söönud ja joonud, siis ta läheb magama.

十分食べたり飲んだりしてから，彼は寝ます。

Te olete oodanud kaks tundi ja ootate veel.

あなたたちは2時間も待ちました。まだ待っています。

Töö on lõppenud, seepärast me läheme puhkama.

仕事が終わりましたので，わたしたちは休養に出かけます。

Nad tulevad alles siis, kui meie oleme lahkunud.

彼らがやってくるのは，わたしたちが立ち去ってからです。

Mina ei ole selles tehases töötanud. わたしは、この工場で働いたことはありません。
 Miks sa ei ole end ravinud?
 あなたはなぜ治療を受けて病気を直さなかったのですか？
 Raadiosaade ei ole veel lõppenud. ラジオ放送はまだ終わっていません。
 Töö ei ole veel lõppenud, seepärast me ei lahku.
 仕事はまだ終わっていません。だからわたしたちは立ち去りません。
 Nad ei tea seda ja ei ole sellest ka kuulnud.
 彼らはそのことを知らないし、これまでに聞いたこともありません。

11.4.2. 過去完了

過去完了形は、動詞 *olema* の過去形と本動詞の能動過去分詞(*nud*-分詞)とで作ります
 否定形は、動詞 *olema* を過去の否定形にすることによって作ります。

			töötama 「働く」	
肯定形			否定形	
ma	olin	tööta/nud	ma	ei ol/nud tööta/nud
sa	olid	tööta/nud	sa	ei ol/nud tööta/nud
ta	oli	tööta/nud	ta	ei ol/nud tööta/nud
me	olime	tööta/nud	me	ei ol/nud tööta/nud
te	olite	tööta/nud	te	ei ol/nud tööta/nud
nad	olid	tööta/nud	nad	ei ol/nud tööta/nud

過去完了が用いられるのは、行為・動作が過去において完了し、その完了の時点と現在との間に時間的な隔たりがある場合です。

Selleks ajaks olin ma töötanud juba mitu tundi.
 そのとき、わたしはもう何時間も働いていました。
 Noormees oli õppinud jaapani keelt Tokios.
 青年は(当時すでに)東京で日本語を勉強していました。
 Nad olid arsti juurde tulnud liiga hilja.
 彼らが医者に来たのが遅すぎたのです。
 Kui olime töö lõpetanud, siis läksime puhkama.
 わたしたちは、仕事を終えた後、休養に出かけました。
 Nad tulid alles siis, kui meie olime neli tundi oodanud.
 わたしたちが4時間待った後でやっと彼らがやってきました。

Haiguse pärast ei olnud ma töötanud tollal juba kaks kuud.
 病気のため、わたしはもう2か月も働いていませんでした。
 Sina ei olnud selle tütarlapsega varem kohtunud.
 あなたは(当時まだ)この娘さんと会ったことはありませんでした。
 Te ei olnud siis veel lugenud Eduard Vilde «Mahtra sõda».
 彼はエトウアルト・ヴィルテの「マフトラの戦い」を読んだことはありませんでした。
 Sõbrad ei olnud neid külla kutsunud, seepärast nad ei tulnud.
 友人たちは彼らを招待しませんでした。だから来なかったのです。
 Me ei teadnud seda ega olnud sellest ka kuulnud.
 わたしたちはそのことを知りませんでしたし、聞いたこともありませんでした。

11.4.3. 「完了時制 + 完了時制」の等位構造

完了時制の形を2つ(以上)等位接続詞でつなぐ場合、2番目(以降)の形からは動詞 *olema* は省略され、過去分詞だけになります。

[on elanud + on töötanud → on elanud ja töötanud]

Karl Kivi on elanud ja töötanud Võrus.

カルル・キヴィはずっとヴォルに住み、ヴォルで働いています。

[oli elanud + oli töötanud → oli elanud ja töötanud]

Enne sõda oli Karl Kivi elanud ja töötanud Narvas.

戦争前、カルル・キヴィはナルヴァに住み、ナルヴァで働いていました。

11.4.4. 複合動詞の完了時制形

Kas sa oled aru saanud oma veast?

あなたは自分の間違いが分かりましたか？

Külalised olid kohale jõudnud.

客人たちは到着していました。

Rahvas ei olnud veel kinost välja tulnud.

人々はまだ映画館から出てきていませんでした。

11.5. 序数詞：「～番目」

「～番目」を意味する数詞を序数詞と呼びます。序数詞は、「1番目」を表す *esimene*、「2番目」を表す *teine* を除いて、基数詞をもとに作られます。序数詞の多くは、基数詞の語幹(= 属格形)に語尾 *-s* をつけて作ります。ただし、数詞の常として、不規則なものが多いので、ひとつひとつ形を確認しましょう。

序数詞は日付を表すときに使われます。とりあえず、1. (*esimene*)から31. (*kolmekümne esimene*)までの数詞を覚えましょう。序数詞を数字で書く場合には、ピリオドを添えます。

	基数		序数
1	üks : ühe	→ 1.	esime/ne
2	kaks : kahe	→ 2.	tei/ne
3	kolm : kolme	→ 3.	kolma/s
4	neli : nelja	→ 4.	nelja/s
5	viis : viie	→ 5.	viie/s
6	kuus : kuue	→ 6.	kuue/s
7	seitse : seitsme	→ 7.	`seitsme/s
8	kaheksa : kaheksa	→ 8.	kaheksa/s
9	üheksa : üheksa	→ 9.	üheksa/s
10	kümme : kümne	→ 10.	`kümne/s

11～19に相当する序数詞は、*-teist* の後ろに10の序数詞形 *-kümnes* が添えられます。1～9の部分属格形(= 語幹)になる点と、*-teist-* に主強勢が置かれることに注意しましょう。

11	üks=teist	→ 11.	ühe=teist=`kümnes
12	kaks=teist	→ 12.	kahe=teist=`kümnes
13	kolm=teist	→ 13.	kolme=teist=`kümnes
14	neli=teist	→ 14.	nelja=teist=`kümnes
15	viis=teist	→ 15.	viie=teist=`kümnes
16	kuus=teist	→ 16.	kuue=teist=`kümnes

17	seitse=teist	→ 17.	`seitsme=teist=`kümnes
18	kaheksa=teist	→ 18.	kaheksa=teist=`kümnes
19	üheksa=teist	→ 19.	üheksa=teist=`kümnes

20～29に相当する序数詞では、最後の部分だけが序数詞形となり、その他の部分は属格形(=語幹)のままです。

20	kaks=kümmend	→ 20.	kahe=`kümnes
21	kaks=kümmend üks	→ 21.	kahe=`kümne esimene
22	kaks=kümmend kaks	→ 22.	kahe=`kümne teine
23	kaks=kümmend kolm	→ 23.	kahe=`kümne kolmas
24	kaks=kümmend neli	→ 24.	kahe=`kümne neljas
25	kaks=kümmend viis	→ 25.	kahe=`kümne viies
26	kaks=kümmend kuus	→ 26.	kahe=`kümne kuues
27	kaks=kümmend seitse	→ 27.	kahe=`kümne `seitsmes
28	kaks=kümmend kaheksa	→ 28.	kahe=`kümne kaheksas
29	kaks=kümmend üheksa	→ 29.	kahe=`kümne üheksas

30以上の序数詞も、20～29と同じ原理で作られます。

30	kolm=kümmend	→ 30.	kolme=`kümnes
31	kolm=kümmend üks	→ 31.	kolme=`kümne esimene

11.6. 日付の言い方

日付は、序数詞を用いて表します。日本とは逆に、「日付+月名」というヨーロッパで一般的な日付の言い方が用いられるので注意しましょう。

- | | |
|--|-----------------------------------|
| 1. (= esimene) jaanuar on uusaasta. | 1月1日は、元旦です。 |
| 2. (= teine) veebruar on küünlapäev. | 2月2日は、「ロウソクの日」です。 |
| 29. (= kahekümne üheksas) märts oli suur reede. | 3月29日は、聖金曜日 [復活祭の前の金曜日] です。 |
| 23. (= kahekümne kolmas) aprill on jüripäev. | 4月23日は、聖ゲオルギオス [St. George] の日です。 |
| 5. (= viies) mai on Jaapanis lastepäev. | 5月5日は、日本では子どもの日です。 |
| 24. (= kahekümne neljas) juuni on jaanipäev. | 6月24日は、夏至祭 [聖ヨハネの日] です。 |
| 7. (= seitsmes) juuli on minu ema sünnipäev. | 7月7日は、母の誕生日です。 |
| 16. (= kuueteistkümnes) august on laupäev. | 8月16日は、土曜日です。 |
| 29. (= kahekümne üheksas) september on mihkclipäev. | 9月29日は、聖ミカエルの日です。 |
| 10. (= kümnes) oktoober on Jaapanis kehalise kasvatuse päev. | 10月10日は、日本では体育の日です。 |
| 3. (= kolmas) november on Jaapanis kultuuripäev. | 11月3日は、日本では文化の日です。 |
| 31. (= kolmekümne esimene) detsember on aasta viimane päev. | 12月31日は、1年の最後の日です。 |

第 12 章(kaheteistkümnes peatükk)

12.1. 形容詞の比較級

12.1.1. 比較級の作り方

形容詞の比較級は、形容詞の単数語幹(= 単数属格形)に接尾辞 -m (属格 -ma)をつけてつくられます。

単数主格	単数属格	比較級	
ilus	ilusa	ilusa/m	美しい

12.1.2. 例外

例外的に、母音 a(まれに母音 u)で終わる 2 音節語幹の形容詞の多くは、比較級の接尾辞 -m の前で語幹末の母音 a(または u)が e に変わります。

単数主格	単数属格	比較級	
kõva	kõva	kõv/em	固い
vana	vana	van/em	古い; 年をとった
halb	halva	halv/em	悪い
kehv	kehva	kehv/em	粗悪な
kuiv	kuiva	kuiv/em	乾いた
kurb	kurva	kurv/em	かわいそうな
kõhn	kõhna	kõhn/em	痩せた
külm	külma	külm/em	寒い
laisk	laisa	lais/e/m	怠惰な
must	musta	must/em	黒い
märg	märja	märj/e/m	濡れた
nõrk	nõrga	nõrg/em	弱い
pikk	pika	pik/em	長い
tark	targa	targ/em	利口な
virk	virga	virg/em	機敏な
lai	laia	lai/em	広い
tühi	tühja	tühj/em	空っぽの
kuri	kurja	kurj/em	意地悪な
soe	sooja	sooj/em	暖かい
järsk	järsu	järs/em	急な
paks	paksu	paks/em	厚い

次の形容詞は比較級の形が変則的です。

原形	比較級	
hea	parem	良い
lühike	lühem	短い

pisike	pisem	小さい
väike	väiksem	小さい
õhuke	õhem	薄い

12.1.3. 比較級の格変化(単数)

形容詞の比較級は、名詞を修飾する場合、一般の形容詞と同様にふるまいます。比較級の格変化は、ilus「美しい」、igav「退屈な」、madal「低い、浅い」などと同じタイプです。

単数主格	suurem	jõgi	より大きな川
属格	suurema	jõe	
分格	suurema/t	jõge	
入格	suurema/sse	jõkke (~ jõesse)	
内格	suurema/s	jõe/s	
出格	suurema/st	jõe/st	
向格	suurema/le	jõe/le	
接格	suurema/l	jõe/l	
奪格	suurema/lt	jõe/lt	
変格	suurema/ks	jõe/ks	
様格	suurema	jõe/na	
到格	suurema	jõe/ni	
欠格	suurema	jõe/ta	
共格	suurema	jõe/ga	

12.2. 比較級の用法

12.2.1. 比較構文と比較の基準

「AはBより大きい」という文における「Bより」を、「比較の基準」と呼ぶことにします。形容詞の比較級が用いられる場合は、必ず比較の基準がありますが、文脈から明かな場合には、とくに表現しないで済ますことができます。

- Kas sai on täna värsked? 今日の白パンは新しいですか？
 On küll, aga leib on värskem. ええ、新しいですよ。でも黒パンの方が新しいです。
 Teie tuba on avaram, aga meie tuba on mugavam.
 あなたの部屋の方が広いですが、わたしたちの部屋の方が快適です。
 Rein on pikk poiss, kuid Jüri on pikem.
 レインは背の高い少年ですが、ユリはもっと背が高いです。
 Ene referaat on sisukas, sinu oma on veel sisukam.
 エネのレポートは内容が立派ですが、あなたの方がずっと立派です。
 Dotsent Sepal on uus auto, professor Kivi auto on veel uuem.
 セップ助教授は新車を持っていますが、キヴィ教授の車はもっと新しいです。
 Jüri on tubli organisatsioon, tema õde on veel tublim.
 ユリは、有能な組織者ですが、彼の妹はもっと有能です。
 Esimene harjutus on kerge, nüüd tuleb raskem.
 最初の練習は簡単ですが、今度のはもっと難しいものです。
 Uuemates linnaosades on tänavad laiemad ja väljakud avaramad.
 町の新しい市街地では、他の地域より通りも広く、広場も大きいです。
 Need kingad on väikesed, palun üks number suuremad.

この靴は小さいので，1つ番号の上のをください。

Kahjuks ei ole praegu suuremaid. 残念ですが，今，これより大きいはありません。

Need on küll pikemad, aga kitsamad. これらは，より長いですが，より窮屈です。

Leidsime vaiksema koha. Rääkisime tähtsamatest asjadest.

(ほかより)静かなところがみづかり，重要な事柄について話し合いました。

Sain täpsemad arvud. より詳しい数字が手に入りました。

比較の基準(～より)は，接続詞 *kui* を用いて表される場合と，名詞の出格形で表される場合とがあります。

Saaremaa on suurem kui Hiiumaa. サーレマー島はヒーウマー島より大きいです。

Isa on vanem kui ema. 父は母より年上です。

Mõnikord on töö tähtsam kui anne. ときには，努力が才能より大切なことがあります。

Pärnus on praegu soojem kui Tartus. 今，パルヌの方がタルトより暖かいです。

Õhtu on hommikust targem. 夕方は朝より賢い[ことわざ]。

Sõnaraamat on kallim kui õpik, ta on õpikust paksem.

辞書は教科書より値段が高く，教科書より厚いです。

Ta on emast viis aastat vanem. 彼は，母より5歳年上です。

See roheline mantel on pruunist mantlist moodsam.

この緑色のオーバーは，茶色のオーバーよりナウいです。

12.2.2. 「～より少し」「～よりずっと」

比較級は程度を表す副詞 *veidi*, *pisut*, *natuke*「少し，やや，多少」で修飾することができます。

Reet Lepp on Peeter Laanest pisut noorem.

レート・レップは，ペーテル・ラーネより少し若いです。

Meie tuba on natuke soojem kui teie tuba.

わたしたちの部屋は，あなたたちの部屋より，少し暖かいです。

Kohv on veidi magusam kui tee. コーヒーは紅茶よりやや甘いです。

比較級はまた，程度を表す副詞 *palju*, *märksa*, *tunduvalt*, *märgatavalt*「大いに，ずっと，かなり」で修飾することができます。

Professor Sarv näeb välja palju noorem, kui ta tegelikult on.

サルヴ教授は，年よりかなり若く見えます。

Ladina keel on märksa raskem kui inglise keel.

ラテン語は，英語よりはるかに難しいです。

Uus õpik on tunduvalt sisukam kui vana.

新しい教科書は，古いのより内容的にはるかに充実しています。

Tütarlaste tuba on märgatavalt puhtam kui poiste oma.

女の子たちの部屋は，男の子たちの部屋に比べて，はるかに清潔です。

12.2.3. 「～と同じくらい」

「～と同じくらい～だ」は，相関構文「*niisama* + 形容詞 + *kui* + 比較の基準」，「～ほどは～でない」は，相関構文「*ei nii* + 形容詞 + *kui* + 比較の基準」で表します。形容詞は，原級で現れ，比較級にはなりません。

Kas sõnaraamat on niisama paks kui õpik? 辞書は、教科書と同じくらい厚いですか？
 Ei, ta on õpikust tunduvalt paksem. いいえ、教科書よりかなり厚いです。
 Kas täna on niisama külm kui eile? 今日は、昨日と同じくらい寒いですか？
 Ei, täna ei ole nii külm kui eile, täna on veidi soojem.
 いいえ、今日は昨日ほど寒くありません。やや暖かいです。

Tõnu on niisama andekas kui Peeter. Arvo ei ole nii andekas kui Tõnu ja Peeter, aga ta on neist töökam.

トヌはペーテルと同じくらい才能があります。アルヴォはトヌやペーテルほど才能はありませんが、3人の中ではいちばん努力家です。

Sirje ei ole nii hoolas õpilane kui Krista. シリエはクリスタほど熱心な生徒ではありません。
 Kas praktikum oli niisama huvitav kui loeng?

実習は、講義と同じくらい面白かったですか？

Ei, loeng oli huvitavam. いいえ、講義の方が面白かったです。

12.3. 形容詞の最上級

形容詞の比較級の前に、kõige (不定代名詞 kõik 「すべて」の単数属格形)を添えると、最上級になります。

原級	比較級	最上級
huvitav	huvitavam	kõige huvitavam
面白い	より面白い	もっとも面白い

See on kõige ilusam vaas. これはいちばん美しい花瓶です。

Esmaspäev on Salme Kurel kõige raskem päev.

サルメ・クルクは、月曜日がいちばん忙しい日です。

Praegu on ööd kõige pikemad ja päevad kõige lühemad.

今、夜がもっとも長く、昼がもっとも短い時期です。

最上級を用いた構文では、比較が行われている対象の範囲を明示することができます。

Ta on meie kursuse tüdrukutest kõige ilusam.

彼女はわが学年の女子学生の中でいちばんの美人です。

Teaduskondadest on kõige suurem arstiteaduskond.

学部の中でいちばん大きいのは医学部です。

Kes teie hulgast on kõige parem joonistaja?

あなたがたの中で誰が絵がいちばん上手ですか？

Maie on meie perekonnas kõige noorem. マイエは、うちの家族の最年少者です。

Saaremaa on Eesti Vabariigi kõige suurem saar.

サーレマーはエストニア共和国最大の島です。

Missugune on ülikooli kõige suurem teaduskond?

大学でいちばん大きな学部は何ですか？

Ülo on meie rühma kõige andekam üliõpilane.

ユロは、わたしたちの班でいちばん優秀な学生です。

12.4. 時間の表現

12.4.1. 「～時です」

時刻を問う疑問文は、少なくとも2通りの言い方ができます。時刻には何通りもの表現方法があります。

Kui palju kell on? ~ Mis kell on? 何時ですか？

- 8.05 Kell on kaheksa null viis.
 Kell on viis minutit kaheksa läbi.
 Kell on viis minutit üheksa peal.
- 8.15 Kell on kaheksa viisteist.
 Kell on viisteist minutit kaheksa läbi.
 Kell on veerand üheksa.
- 8.25 Kell on kaheksa kakskümmend viis.
 Kell on kakskümmend viis minutit üheksa peal.
 Viis minutit puudub poole üheksast.
 Poole üheksast puudub viis minutit.
- 8.30 Kell on kaheksa kolmkümmend.
 Kell on kaheksa ja kolmkümmend minutit.
 Kell on pool üheksa.
- 8.40 Kell on kaheksa nelikümmend.
 Kakskümmend minutit puudub üheksast.
- 8.45 Kell on kaheksa nelikümmend viis.
 Kell on kolmveerand üheksa.
- 8.55 Kell on kaheksa viiskümmend viis.
 Kell on viie minuti pärast üheksa.
 Viis minutit puudub üheksast.
 Viie minuti pärast on kell üheksa.
- 9.00 Kell on üheksa.
 Kell on üheksa null null.
 Kell on täpselt üheksa.

もちろん、時刻は大ざっぱに表現することもできます。

Kell saab mõne minuti pärast üheksa. あと何分かで9時になります。

12.4.2. 「～時から～時まで」

Kui kaua kestavad loegud? 講義はどのくらい続きますか？

Loengud kestavad kella üheksast hommikul kuni (kella) viieni peale lõunat.

講義は、朝9時から夕方5時まであります。

Suur vahetund kestab (kella) veerand üheteistkümnest kuni poole üheteistkümmeni.

長い休み時間は，10時15分から10時30分までです。

12.5. 語形成

12.5.1. 動作主名詞(～する人)

動詞の ma-不定詞形の語尾 -ma を接尾辞 -ja で置き換えると，「～する人」という意味の名詞(動作主名詞)ができます。

and/ma	→ and/ja	与える人
kand/ma	→ kand/ja	運ぶ人
ost/ma	→ ost/ja	買う人，買い手
saat/ma	→ saat/ja	送り手，差出人
ehita/ma	→ ehita/ja	建てる人，建築業者
hiline/ma	→ hiline/ja	遅れてきた人，遅刻者
istu/ma	→ istu/ja	座っている人
kirjuta/ma	→ kirjuta/ja	書く人，書き手
kuula/ma	→ kuula/ja	聞き手
luge/ma	→ luge/ja	読者，読み手
maga/ma	→ maga/ja	眠っている人，寝ている人
oota/ma	→ oota/ja	待つ人
saabu/ma	→ saabu/ja	到着する人
õpeta/ma	→ õpeta/ja	教える人，教師

【注意】

ma-不定詞の語幹が母音 e で終わる場合，母音 e が i に変わることがあります。

näge/ma	→ näg/i/ja	見る人
ole/ma	→ ol/i/ja	出席者，居合わせた人
tege/ma	→ teg/i/ja	する人，作り手
tule/ma	→ tul/i/ja	来る人

12.5.2. 動作名詞(～すること)

動詞の ma-不定詞形の語尾 -ma を接尾辞 -mine で置き換えると，「～すること」という意味の名詞(動作名詞)ができます。

and/ma	→ and/mine	与えること
hüüd/ma	→ hüüd/mine	叫ぶこと
maks/ma	→ maks/mine	支払うこと
ost/ma	→ ost/mine	買うこと
saat/ma	→ saat/mine	送ること
ava/ma	→ ava/mine	開くこと
hiline/ma	→ hiline/mine	遅れ(ること)
kirjuta/ma	→ kirjuta/mine	書くこと
luge/ma	→ luge/mine	読むこと
maga/ma	→ maga/mine	寝ること，眠ること

näge/ma	→ näge/mine	見ること
ole/ma	→ ole/mine	(～に)いること
oota/ma	→ oota/mine	待つこと
pese/ma	→ pese/mine	洗うこと
saabu/ma	→ saabu/mine	到着(すること)
söö/ma	→ söö/mine	食べること
tege/ma	→ tege/mine	すること, 作ること
tule/ma	→ tule/mine	来ること
ärka/ma	→ ärka/mine	目覚め(ること)

12.6. 指小接尾辞: -ke ~ -kene

指小接尾辞は、名詞の語幹(属格形)につきます。指小接尾辞がついた名詞は、その指し示す対象が、指小接尾辞のつかない名詞の表す対象と比べて実際に小さい場合、あるいは話者が主観的に可愛らしくて小さいものと見なす場合に用いられます。

主格形	属格形	指小形
ema 母親 :	ema	→ ema/ke ~ ema/kene
lill 花 :	lille	→ lille/ke ~ lille/kene
raamat 本 :	raamatu	→ raamatu/ke ~ raamatu/kene

指小接尾辞のついた名詞は、lühike「短い」と同じタイプの格変化をします。

単数主格	単数属格
lühike ~ lühike/ne	lühike/se
emake ~ emake/ne	emake/se

12.7. 身体部位・内臓器官

`pea, -, -d	頭, 頭部	`sil, silma, `silma	目
`kulm, kulmu, `kulmu	眉毛	nina, -, -	鼻
`põsk, põse, `põske	頬	`kõrv, kõrva, `kõrva	耳
`kael, kaela, `kaela	首	keha, -, -	身体, 胴体
`õlg, õla, `õlga	肩		
käsi, `kää, `kätt	手	`peo=pesa, -, -	手のひら
`sõrm, sõrme, `sõrme	指		
`rind, rinna, `rinda	胸(胸部, 乳房)	`selg, selja, `selga	背中
`kõht, kõhu, `kõhtu	腹, 腹部	`jalg, jala, `jalga	足, 脚
`reis, reie, `reit	腿, 太股	`põlv, põlve, `põlve	膝
`säär, sääre, `säärt	すね, 足	`põid, põia, `põida	足の甲
varvas, `varba, varvast	足の指		
süda, -me, -nt	心臓	`kops, kopsu, `kopsu	肺
magu, `mao, magu	胃, 腹	`maks, maksa, `maksa	肝臓
`sool, soole, `soolt	内臓, 腸		
`nahk, naha, `nahka	皮膚	veri, vere, `verd	血
kude, `koe, kude	組織		

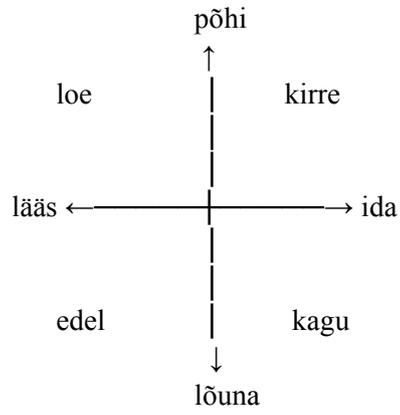
12.8. 方角(ilmakaared)

põhi, põhja, `põhja
ida, -, -
kirre, `kirde, kirret
`loe, `loode, `loet

北
東
北東
北西

lõuna, `lõuna, lõunat
`lääs, lääne, `läänt
kagu, -, -
edel, -a, -at

南
西
南東
南西



第 13 章(kolmeteistkümnes peatükk)

13.1. 数詞の格変化

数詞は、一般の名詞・形容詞に準じた格変化を行います。しばしば変則的な語幹が用いられるほか、数詞特有の現象もあります。

13.1.1. 基本的な数詞の主な活用形

	主格	属格	分格	入格
1	üks	ühe	ühte ~ üht	ühesse ~ ühte
2	kaks	kahe	kahte ~ kaht	kahesse ~ kahte
3	kolm	kolme	kolme	kolmesse ~ kolme
4	neli	nelja	nelja	neljasse ~ nelja
5	viis	viie	viit	viiesse ~ viide
6	kuus	kuue	kuut	kuuesse ~ kuude
7	seitse	seitsme	seitset	seitsmesse
8	kaheksa	kaheksa	kaheksat	kaheksasse
9	üheksa	üheksa	üheksat	üheksasse
10	kümme	kümne	kümnet	kümnesse
100	sada	saja	sada(t)	sajasse
1 000	tuhad	tuhade	tuha(nde)t	tuhandesse
1 000 000	miljon	miljoni	miljonit	miljonisse

13.1.2. 複合的な数詞の活用

複合的な数詞は、主格・属格・分格とそれ以外の格では、活用の原理が異なります。

主格・属格・分格では、すべての構成部分が通常の活用規則によって活用します。入格以下の格では、最後の構成部分にだけ格語尾がつき、その他の構成部分は語幹(=属格形)の形のままにおかれます。

なお、kümme「10」の分格形は、単独では kümnet ですが、複合数詞の構成部分となる場合は、-kümmend という特別な形になります。-kümmend は、話しことばで、しばしば kend と発音されます。

11~19 では、1~9 の数詞の部分は格変化しますが、-teist の部分は不変化です。主格以外の格では、-teist の後ろに kümme「10」を格変化させたものを添えます(ただし、話しことばでは、分格についた -kümmend はふつう省略されます)。主格形(および -kümmend のつかない分格形)を除いて、主強勢は -teist- に置かれます。

	11	12	13
主格	üksteist	kaksteist	kolmteist
属格	üheteist`kümne	kaheteist`kümne	kolmeteist`kümne
分格	ühteteist(kümmend) ~ ühtteist(kümmend)	kahteteist(kümmend) ~ kahtteist(kümmend)	kolmeteist(kümmend)
入格	üheteist`kümnesse	kaheteist`kümnesse	kolmeteist`kümnesse
	14	15	16
主格	neliteist	viisteist	kuusteist
属格	neljateist`kümne	viieteist`kümne	kuueteist`kümne

分格	`neljateist(kümmend)	viitteist(kümmend)	kuutteist(kümmend)
入格	neljateist`kümnesse	viieteist`kümnesse	kuueteist`kümnesse
	17	18	19
主格	seitseteist	kaheksateist	üheksateist
属格	`seitsmeteist`kümne	kaheksateist`kümne	üheksateist`kümne
分格	seitsetteist(kümmend)	kaheksateist(kümmend)	üheksateist(kümmend)
入格	`seitsmeteist`kümnesse	kaheksateist`kümnesse	üheksateist`kümnesse

20, 30, ..., 90 の場合は、主格・属格・分格では、kümme「10」があたかも一般名詞のようにふるまいます。入格以下の格では、2～9は属格で現れ、kümmeだけが格変化します。

	20	30	40
主格	kakskümmend	kolmkümmend	nelikümmend
属格	kahe`kümne	kolme`kümne	nelja`kümne
分格	`kahtekümmend ~ kahtkümmend	`kolmekümmend	`neljakümmend
入格	kahe`kümnesse	kolme`kümnesse	nelja`kümnesse
	50	60	70
主格	viiskümmend	kuuskümmend	seitsekümmend
属格	viie`kümne	kuue`kümne	`seitsme`kümne
分格	viitkümmend	kuutkümmend	seitsetkümmend
入格	viie`kümnesse	kuue`kümnesse	`seitsme`kümnesse
	80	90	
主格	kaheksakümmend	üheksakümmend	
属格	kaheksa`kümne	üheksa`kümne	
分格	kaheksatkümmend	üheksatkümmend	
入格	kaheksa`kümnesse	üheksa`kümnesse	

21, 33, 45 のような数詞は、主格・属格・分格では、各構成成分が通常の活用規則によって格変化します。入格以下の格では、いちばん最後の成分だけが格変化し、その他の成分は属格のまま置かれます。

	21	22
主格	kakskümmend üks	kakskümmend kaks
属格	kahe`kümne ühe	kahe`kümne kahe
分格	`kahtekümmend`ühte ~ kahtkümmend üht	`kahtekümmend`kahte ~ kahtkümmend kaht
入格	kahe`kümne ühesse ~ kahe`kümne`ühte	kahe`kümne kahesse ~ kahe`kümne`kahte
	33	44
主格	kolmkümmend kolm	nelikümmend neli
属格	kolme`kümne kolme	nelja`kümne nelja
分格	`kolmekümmend`kolme	`neljakümmend`nelja

入格	kolme`kümne kolmesse	nelja`kümne neljasse
	55	66
主格	viiskümmend viis	kuuskümmend kuus
属格	viie`kümne viie	kuue`kümne kuue
分格	viitkümmend viit	kuutkümmend kuut
入格	viie`kümne viiesse	kuue`kümne kuuesse
	77	88
主格	seitsekümmend seitse	kaheksakümmend kaheksa
属格	`seitsme`kümne `seitsme	kaheksa`kümne kaheksa
分格	seitsetkümmend seitset	kaheksatkümmend kaheksat
入格	`seitsme`kümne `seitsmesse	kaheksa`kümne kaheksasse
	99	
主格	üheksakümmend üheksa	
属格	üheksa`kümne üheksa	
分格	üheksatkümmend üheksat	
入格	üheksa`kümne üheksasse	

13.1.3. 数詞 + 名詞

主格の場合に名詞が単数分格形になる点を除けば，名詞に形容詞修飾語がついた場合と基本的に変わりません。様格，到格，欠格，共格では，名詞にのみ格語尾がつき，数詞は属格のままです。

	2571 inimest 「2571 人の人」					
主格	kaks	tuhat	viissada	seitsekümmend	üks	inimest
属格	kahe	tuhande	viiesaja	seitsmekümne	ühe	inimese
分格	kaht	tuhat	viitsada	seitsetkümmend	üht	inimest
入格	kahe	tuhande	viiesaja	seitsmekümne	ühesse	inimesesse
	~ kahe	tuhande	viiesaja	seitsmekümne	ühete	inimesesse
共格	kahe	tuhande	viiesaja	seitsmekümne	ühe	inimesega

2571-l (kahe tuhande viiesaja seitsmekümne ühel) inimesel on dokumendid korras.

2571 人の書類が整っています。

Laevad koos 2571 (kahe tuhande viiesaja seitsmekümne ühe) inimesega pardal jõudsid sadamasse.

船が，2571 人の乗客を乗せて港に到着しました。

【補足】

数字に格語尾をつける場合には，2571-l のように，間にハイフンを書きます。

13.2. 「何歳ですか？」

年齢の表現には，2 通りの構文があります。

形容詞 vana「年取った」(英語の old に相当)を用いる場合は，年齢を aasta「年」，kuu「月」などで表し，主格のまま vana の前に添えます。

この方法は，通常，vana が主格(= 動詞 olema の補語)の場合にのみ用いられます。

Kui vana laps on?

子どもは何歳ですか？

Laps on kolm kuud vana.	子どもは(年齢が)3か月です。
Kui vana teie olete?	あなたは何歳ですか？
Ma olen kakskümmend aastat vana.	わたしは二十歳です。
Kui vana see haige on?	この患者は何歳ですか？
See haige on nelikümmend kuus aastat vana.	この患者は46歳です。

もう1つは、年齢を表す数字表現をそのまま形容詞化する方法です。名詞 kuu「月」からは -kuu/ne (~ -ku/ine), aasta「年」からは -aasta/ne という形の形容詞ができます。数詞の部分はずべて属格になります。

kolm kuu/d : kolme kuu	→ Laps on kolmekuune (~ kolmekuine). 子どもは(年齢が)3か月です。
kakskümmend aasta/t : kahekümne aasta	→ Ma olen kahekümneaastane. わたしは二十歳です。
nelikümmend kuus aasta/t : neljakümne kuue aasta	→ See haige on neljakümne kuue aastane. この患者は46歳です。

Kolmekuuse lapsega ema tahtis taksoga sõita.

3か月の子どもを連れた母親がタクシーに乗りたと思いました。

Ta sai kahekümneaastaseks.

彼女は二十歳になりました。

Ma sain kirja neljakümne kuue aastaselt õpetajalt.

わたしは46歳の学校の先生から手紙をもらいました。

13.3. 序数詞

序数詞を作る接尾辞は -s (主格) ~ -nda (属格 = 語幹) です。数字を使って序数を表す場合には、ピリオドを添えます。11~19では、-teist- に主強勢が置かれます。

1.	esime/ne,	-se,	-s/t,	-se/sse ~ -sse
2.	teine,	teise,	teis/t,	teise/sse ~ `teise
3.	kolma/s,	-nda,	-nda/t,	-nda/sse
4.	nelja/s,	-nda,	-nda/t,	-nda/sse
5.	viie/s,	-nda,	-nda/t,	-nda/sse
6.	kuue/s,	-nda,	-nda/t,	-nda/sse
7.	`seitsme/s,	-nda,	-nda/t,	-nda/sse
8.	kaheksa/s,	-nda,	-nda/t,	-nda/sse
9.	üheksa/s,	-nda,	-nda/t,	-nda/sse
10.	`kümne/s,	-nda,	-nda/t,	-nda/sse
11.	üheteist`kümne/s,	-nda,	-nda/t,	-nda/sse
12.	kaheteist`kümne/s,	-nda,	-nda/t,	-nda/sse
13.	kolmeteist`kümne/s,	-nda,	-nda/t,	-nda/sse
14.	neljateist`kümne/s,	-nda,	-nda/t,	-nda/sse
15.	viieteist`kümne/s,	-nda,	-nda/t,	-nda/sse
16.	kuueteist`kümne/s,	-nda,	-nda/t,	-nda/sse
17.	`seitsmeteist`kümne/s,	-nda,	-nda/t,	-nda/sse
18.	kaheksateist`kümne/s,	-nda,	-nda/t,	-nda/sse
19.	üheksateist`kümne/s,	-nda,	-nda/t,	-nda/sse

【参考】「基数詞 + 名詞 kord」は「～回」の意味になります。

Ma käin ujumas kaks korda nädalas. わたしは週2回泳ぎに通っています。

13.5 日付の表し方：「～月～日に」

「～月～日に」という場合は、序数、月名ともに接格になります。

Millal (～ Mis kuupäeval) on teil sünnipäev?

あなたのお誕生日はいつ(何月何日)ですか？

Mul on sünnipäev 20. (kahekümnendal) jaanuaril.

わたしの誕生日は1月20日です。

Toomas saabus 28. (kahekümne kaheksandal) mail.

トーマスは、5月28日に到着しました。

【注意】「1月に」「6月に」のように月だけ言う場合は、内格になります。

Mul on sünnipäev jaanuaris.

わたしの誕生日は1月です。

Toomas saabus juunis (～ juunikuus).

トーマスは6月に到着しました。

13.6. 年号の表し方：「(西暦)～年に」

年号(「～年に」)は、「序数 + aastal」で表す方法と、単に基数で表す方法とがあります。

Mis aastal te olete sündinud?

何年のお生まれですか？

Mina olen sündinud 1953. a. (= tuhande üheksasaja viiekümne kolmandal aastal)

～ Mina olen sündinud 1953. (= tuhat üheksasada viiskümmend kolm)

わたしは1953年に生まれました。

Ma olen sündinud 19.09.1955. (= üheksateistkümnendal septembril tuhande üheksasaja viiekümne viiendal aastal ~ tuhat üheksasada viiskümmend viis)

わたしは1955年9月19日に生まれました。

Laulja Tiit Kuusik on sündinud 1911. a. (= tuhande üheksasaja üheteistkümnendal aastal)

歌手ティート・クーシクは1911年に生まれました。

Kunstnik Kristian Raud on sündinud 1865. (= tuhat kaheksasada kuuskümmend viis)

芸術家クリスチアン・ラウトは1865年に生まれました。

Gagarin lendas kosmosesse 12.04.1961. (= kaheteistkümnendal aprillil tuhande üheksasaja kuuekümmend esimesel aastal ~ tuhat üheksasada kuuekümmend üks)

ガガーリンは、1961年4月12日に宇宙へ飛びました。

Teine maailmasõda kestis 1939. a. - 1945. a. (=tuhande üheksasaja kolmekümne üheksandast aastast kuni tuhande üheksasaja neljakümne viienda aastani)

第2次世界大戦は、1939年から1945年まで続きました。

13.7. 名詞をつくる接尾辞：-us

接尾辞 -us は、動詞、形容詞(形容詞化した分詞を含む)を名詞に変える働きをします。

kannatama	→ kannat/us	耐える - 忍耐
noor	→ noor/us	若い - 若さ

13.7.1. 動詞 + -us

動詞に接尾辞 -us がつくと、「～すること」という意味の名詞(動作名詞)ができます。接尾辞 -mine のつくる動作名詞(例：kannatamine)が動作・行為の過程そのものを表すのに対し、接尾辞 -us のつくる動作名詞(例：kannatus)は、どちらかと言えば、動作・行為の結果に注目した言い方になります。

接尾辞 -us は、ふつう、ma-不定詞の語幹から語幹末の母音を取り除いた形につきます。

kaeba/ma	- kaeb/us	苦情を言う	- 苦情
saavuta/ma	- saavut/us	達成する	- 達成, 成果
kavatse/ma	- kavats/us	意図する	- 意図
võistle/ma	- võistl/us	競争する	- 競争, 競技

ただし、一部の動詞では、ma-不定詞形の最後の母音を取り除いた形に接尾辞 -us がつきます。

küsi/ma	- küsi/m/us	質問する	- 質問
harju/ma	- harju/m/us	慣れる	- 習慣
arva/ma	- arva/m/us	考える	- 考え, 意見

13.7.2. 形容詞 + -us

形容詞(形容詞化した v-分詞と tav-分詞を含む)に接尾辞 -us がつくと、「～であること」という意味の性質や状態を表す名詞(性質名詞)ができます。接尾辞 -us は、形容詞・分詞の単数語幹(階程交替する形容詞の場合は、強階程の語幹)から語幹末の母音を取り除いた形につきます。

形容詞：

pikk : pikk/a	- pikk/us	長い	- 長さ
rask/e	- rask/us	困難な	- 困難
julg/e	- julg/us	大胆な	- 勇気
pime : pimed/a	- pimed/us	暗い	- 闇
uskumat/u	- uskumat/us	信じがたい	- 信じがたいこと

形容詞化した分詞：

vasta/ma	→ vasta/v : vasta/v/a	- vastav/us
答える	対応する	対応していること, 対応関係
erine/ma	→ erine/v : erinev/a	- erinev/us
異なる	異なった	違い
kest/ma	→ kest/e/v : kest/v/a	- kestv/us
続く	持続する	持続性, 耐久性
kuul/ma	→ kuul/dav : kuul/dav/a	- kuuldav/us
聞く	聞こえる	聞こえること, 聞こえ
söö/ma	→ söö/dav : söö/dav/a	- söödav/us
食べる	食べられる	食べられること

第 14 章(neljateistkümnes peatükk)

14.1. 名詞の格変化：複数属格

複数属格形は、もっぱら連体修飾語の格として用いられ、直接目的語の格としては用いられません。複数属格の語尾は、-te または -de です。

Naabrite autoga sõitsid nad Suurele Munamäele.

隣人たちの車に乗って彼らは大ムナマキ山へ行きました。

Ekskursiooni organiseerimine on ringi liikmete mure.

遠足の準備実行はサークルのメンバーのすることです。

Maipühade ajal oli ilm soe.

5月の連休のころは暖かい天候でした。

Mida te ostate nii suurte summade eest?

こんな大金を払って何を買うおつもりですか？

Mägede vahel olid orud.

山と山の間に谷がありました。

14.2. 複数属格形の作り方

複数属格形は、少数の例外を除き、単数分格形をもとに作られます。

単数分格の語尾が -t ~ -d の場合は、この語尾を取り除いて、代わりに -te ~ -de をつけると複数属格形ができます。

単数分格が母音で終わる場合には、単数分格形にそのまま -te ~ -de をつけると複数属格形になります。

単数主格	属格	分格	複数属格	
(1a) aasta	aasta	aasta/t	aasta/te	1年
kirik	kirik/u	kiriku/t	kiriku/te	教会
lusika/s	lusika	lusika/t	lusika/te	スプーン
pime	pime/da	pimeda/t	pimeda/te	暗い
(1b) mõte	mõtte	mõte/t	mõte/te	考え
(1c) hamma/s	hamba	hammas/t	hammas/te	歯
(1d) keel	keel/e	keel/t	keel/te (*)	舌；言語
uu/s	uu/e	uu/t	uu/te (*)	新しい
(1e) uudis	uudis/e	uudis/t	uudis/te	ニュース
puna/ne	puna/se	punas/t	punas/te	赤い
(2a) maja	maja	maja	maja/de	家
tuba	toa	tuba	tuba/de	部屋
(2b) jalg	jala	jalga	jalga/de	足
imelik	imeliku	imelikku	imelikku/de	不思議な
(2c) kõne	kõne	kõne/t	kõne/de	話
(2d) tütar/ar	tüt/re	tütär/t	tütär/de	娘
(2e) maa	maa	maa/d	maa/de (* *)	国

(*) 第1音節は長音で発音されます。

(* *) 第1音節は長音または超長音で発音されます。

14.3. 複数属格形の作り方に関する補足

14.3.1. -ne で終わる名詞

単数主格が「母音 + -ne」で終わる名詞は，(1e) punane と同じタイプの格変化が原則ですが，2音節語の場合にかぎって，(1b) mōte と同じタイプの格変化(長さの階程交替あり)をする語が見られます。

単数主格	属格	分格	複数属格	
(1e) nai/ne	nai/se	nais/t	nais/te	女性，妻
tei/ne	tei/se	teis/t	teis/te	第2の
vae/ne	vae/se	vaes/t	vaes/te	貧しい
(1b) aine	`aine	aine/t	aine/te	物質
eine	`eine	eine/t	eine/te	軽食
kaine	`kaine	kaine/t	kaine/te	しらふの
laine	`laine	laine/t	laine/te	波

単数主格が「子音 + -ne」で終わる名詞は，単数属格の作り方は(1e) punane と似ていますが，単数分格形や複数属格形の作り方は(1a) aasta と同じタイプになります。

単数主格	属格	分格	複数属格	
täp/ne	täp/se	täpse/t	täpse/te	正確な
liht/ne	liht/sa	lihtsa/t	lihtsa/te	単純な

14.3.2. 例外など

単数分格形に基づかない複数属格形をもつ名詞があります。

単数主格	属格	分格	複数属格	
ase	ase/me	ase/t	ase/me/te	場所
liige	`liik/me	liige/t	`liik/me/te	会員
süda	süda/me	süda/nt	süda/me/te	心臓
võti	`võt/me	võti/t	`võt/me/te	鍵
lumi	lume	lun/d	lume/de	雪
uni	une	un/d	une/de	眠り，夢
meri	mere	mer/d	mere/de	海
mõni	mõne	mõn/d	mõne/de	いくつかの
tuli	tule	tul/d	tule/de	火

次の名詞は，複数属格形が2通り可能です。

単数主格	属格	分格	複数属格	
`koer	koera	`koera	koer/te (~ `koera/de)	犬
`poiss	poisi	`poissi	pois/te (~ `poissi/de)	少年
`õun	õuna	`õuna	õun/te (~ `õuna/de)	リンゴ
`sein	seina	`seina	sein/te (~ `seina/de)	壁

次の名詞の格変を注意して覚えましょう。

単数主格	属格	分格	複数属格	
käsi	käe	kätt	kä/te	手

laps	lapse	last	las/te	子ども
uks	ukse	ust	us/te	ドア
mees	mehe	meest	mees/te	男, 夫
sõber	sõbra	sõpra	sõpra/de	友人
lai	laia	`laia	`laia/de	広い
soe	sooja	`sooja	`sooja/de	暖かい
õu	õue	`õue	`õue/de	中庭

ふつう複数形でのみ使われる名詞もあります。

複数主格	複数属格	
juukse/d	juus/te	髪の毛
püksi/d	`püks/te (~ `püksi/de)	ズボン
vanema/d	vanema/te	両親

14.3.3. kõik の複数属格形

不定代名詞 kõik 「すべて(の)」の複数属格形は, kõikide または kõigi のどちらを用いても構いません。

Kas siin on kõikide (~ kõigi) reisijate piletid?

ここにすべての乗客の乗車券がありますか?

Ma ei tule ainult tema pärast, vaid kõikide (~ kõigi) pärast.

わたしは彼のためだけに来たのではなく, みんなのために来ました。

Üks kõikide (~ kõigi) eest, kõik ühe eest!

1人はみんなのために, みんなは1人のために。

14.3.4. 指示代名詞の複数属格形

指示代名詞 see 「これ」に対応する複数形 need 「これら」の属格は nende となります。これは, 3人称複数の人称代名詞 nemad 「彼ら, 彼女たち」の属格形とまったく同じ形です。

Kas need linnud elavad metsas?

これらの鳥は森に住んでいますか?

Ei, nende lindude pesa on aias.

いいえ, これらの鳥の巣は庭にあります。

Need majad on kõrged.

これらの家は高いです。

Nende aknad on väikesed.

それらの(家の)窓は小さいです。

【比較】

Läksin Aldo ja Rita juurde alles siis, kui nende lapsed olid suveks Hiiumaale ära sõitnud.

アルトとリッタを訪問したのは, 彼らの子どもたちが夏を過ごしにヒーウマーに出かけてしまったあとでした。

14.4. 属格支配の前置詞・後置詞

前置詞		後置詞	
läbi	~ を通って	eest	~ に対して
üle	~ を横切って	pärast	~ のために
		tõttu	~ のために

Buss sõitis läbi väikeste külade.	バスは小さな村をいくつも通って行きました。
Ta läks üle tänava.	彼は通りを渡って向こうへ行きました
Kui palju te maksite nende raamatute eest?	これらの本にいくら払いましたか？
Me muretseme sõprade pärast.	わたしたちは友人たちのことを気に懸けています。
Me kaotasime mängu teie tõttu.	わたしたちが試合に負けたのはあなたのせいです。

14.5. 名詞の複数形の格変化

名詞の単数形の格変化では、主格、属格、分格以外の格、すなわち、格変化表で入格以下の格はすべて、単数属格形を語幹(単数語幹)として作られます。

この原則は、複数形の格変化でも変わりません。すなわち、複数主格(単数属格形からつくる；第4章)、複数属格(本章)、複数分格(第15章)以外の複数の格、すなわち入格以降の複数の格は、すべて複数属格形を語幹(複数語幹)として作られます。したがって、階程交替する名詞の場合、これらの格は、複数属格と同じ階程になります。複数属格形は、ほとんどの場合単数分格形をもとにつくりますから、入格以下の複数の格形の階程も、少数の例外を除き、単数分格と同じと考えてさしつかえありません。

階程交替しない名詞 aasta「1年」、階程交替する hammas「歯」と jalg「足」を例にとって、まだ扱っていない複数分格を以外の格形をすべて書き出してみましよう。

	単数	複数	
主格	aasta	aasta/d	「1年」
属格	aasta	aasta/te	
分格	aasta/t	- - - -	
入格	aasta/sse	aasta/te/sse	
内格	aasta/s	aasta/te/s	
出格	aasta/st	aasta/te/st	
向格	aasta/le	aasta/te/le	
接格	aasta/l	aasta/te/l	
奪格	aasta/lt	aasta/te/lt	
変格	aasta/ks	aasta/te/ks	
様格	aasta/na	aasta/te/na	
到格	aasta/ni	aasta/te/ni	
欠格	aasta/ta	aasta/te/ta	
共格	aasta/ga	aasta/te/ga	

主格	hammas	hamba/d	「歯」
属格	hamba	hammas/te	
分格	hammas/t	- - - -	
入格	hamba/sse	hammas/te/sse	
内格	hamba/s	hammas/te/s	
出格	hamba/st	hammas/te/st	
向格	hamba/le	hammas/te/le	
接格	hamba/l	hammas/te/l	
奪格	hamba/lt	hammas/te/lt	
変格	hamba/ks	hammas/te/ks	
様格	hamba/na	hammas/te/na	
到格	hamba/ni	hammas/te/ni	

欠格	hamba/ta	hammas/te/ta	
共格	hamba/ga	hammas/te/ga	
主格	jalg	jala/d	「足」
属格	jala	jalga/de	
分格	jalga	- - - -	
入格	jala/sse ~ jalga	jalga/de/sse	
内格	jala/s	jalga/de/s	
出格	jala/st	jalga/de/st	
向格	jala/le	jalga/de/le	
接格	jala/l	jalga/de/l	
奪格	jala/lt	jalga/de/lt	
变格	jala/ks	jalga/de/ks	
様格	jala/na	jalga/de/na	
到格	jala/ni	jalga/de/ni	
欠格	jala/ta	jalga/de/ta	
共格	jala/ga	jalga/de/ga	

14.6. 形容詞修飾語と名詞の数・格における一致

「形容詞 + 名詞」という構造の名詞句では、形容詞が名詞と同じ数・格になります。これを形容詞と名詞の数・格の一致といいます。

名詞句 noor inimene 「若い人」を例に形容詞と名詞の一致の様子を見てみましょう。

	単数		複数	
主格	noor	inimene	noore/d	inimese/d
属格	noore	inimese	noor/te	inimes/te
分格	noor/t	inimes/t	- - - -	- - - -
入格	noore/sse	inimese/sse	noor/te/sse	inimes/te/sse
内格	noore/s	inimese/s	noor/te/s	inimes/te/s
出格	noore/st	inimese/st	noor/te/st	inimes/te/st
向格	noore/le	inimese/le	noor/te/le	inimes/te/le
接格	noore/l	inimese/l	noor/te/l	inimes/te/l
奪格	noore/lt	inimese/lt	noor/te/lt	inimes/te/lt
变格	noore/ks	inimese/ks	noor/te/ks	inimes/te/ks
様格	noore	inimese/na	noor/te	inimes/te/na
到格	noore	inimese/ni	noor/te	inimes/te/ni
欠格	noore	inimese/ta	noor/te	inimes/te/ta
共格	noore	inimese/ga	noor/te	inimes/te/ga

形容詞と名詞の数の一致は、どんな場合でも起こりますが、格の一致の方は、上の表の最後の4つの格(様格, 到格, 欠格, 共格)においては起こりません。

すなわち、これらの4つの格では、格語尾は名詞にだけついて、形容詞の方にはつきません。この時、形容詞は格語尾のつかない語幹の形、すなわち単数では単数属格形、複数では複数属格形で現れます。

Esimene brigaad koosneb noortest inimestest. 第1部隊は若者で構成されています。

Ärge tulge ilma noorte inimesteta!

若者たち抜きで来ないでください。

14.7. 副詞の比較級

14.7.1. 語尾 -em

派生語でない副詞の比較級は、語尾 -em によって作ります。原級が母音で終わる場合は、この母音が落ちます。

原級	比較級	
vähe	väh/em	少し
kaua	kau/em	長い間
hilja	hilj/em	遅く、遅れて
tasa	tas/em	小さな声で
vara	var/em	早く
harva	harv/em	まれに

次の副詞の比較級は変則的です。

palju	rohk/em	たくさん
ruttu	rut/em	急いで、早く

14.7.2. 語尾 -mini

形容詞から語尾 -sti によって作られた副詞の比較級は、形容詞の比較級の語尾 -m を語尾 -mini に置き換えて作ります。

形容詞		副詞		
原級	比較級	原級	比較級	
kiire	kiire/m	kiire/sti	kiire/mini	速い：速く
halb	halve/m	halva/sti	halve/mini	悪い：悪く

14.7.3. 語尾 -malt

形容詞から語尾 -lt によって作られた副詞の比較級は、対応する形容詞の比較級に語尾 -lt をつけて作ります。

形容詞		副詞		
原級	比較級	原級	比較級	
täpne	täpse/m	täpse/lt	täpse/malt	正確な：正確に
soe	sooje/m	sooja/lt	sooje/malt	暖かい：暖かく

14.7.4. 場所関係を表す副詞の比較級

場所関係を表す副詞で、「～へ」「～で」「～から」の3つの形が組になっている場合には、比較級でもそれぞれに対応する3つの形があります。

原級		比較級	
kauge/le	遠くへ	kauge/male	もっと遠くへ
kauge/l	遠くで	kauge/mal	もっと遠くで
kauge/lt	遠くから	kauge/malt	もっと遠くから

kõrge/le	高い所へ	kõrge/male	もっと高い所へ
kõrge/l	高い所で	kõrge/mal	もっと高い所で
kõrge/lt	高い所から	kõrge/malt	もっと高い所から
madala/le	低い所へ	madala/male	もっと低い所へ
madala/l	低い所で	madala/mal	もっと低い所で
madala/lt	低い所から	madala/malt	もっと低い所から

14.7.5. 副詞の比較級に関する補足
比較級に並行形のあることがあります。

比較級			
kaua	- kauem	~ kauemini	長い間
tasa	- tasem	~ tasemini	小さな声で
ruttu	- rutem	~ rutemini	急いで
hilja	- hiljem	~ hiljemini	遅い時間に
vara	- varem	~ varemini	早い時間に
harva	- harvem	~ harvemini	まれに
täpselt	- täpsemini	~ täpsemalt	正確に
ilusasti (~ ilusti)	- ilusamini	~ ilusamalt	美しく

原級・比較級ともに並行形がある場合があります。

rõõmsasti ~ rõõmsalt	- rõõmsamini ~ rõõmsamalt	喜んで
kiiresti ~ kiirelt	- kiiremini ~ kiiremalt	急いで
hoolsasti ~ hoolsalt	- hoolsamini ~ hoolsamalt	入念に
tugevasti ~ tugevalt	- tugevamini ~ tugevamalt	強く

14.7.6. 副詞の比較級の用例

Mine kõrgemale! Kõrgemalt näeb selgemini!

もっと高い所へ行きなさい。より高い所からならよりはっきりと見えます。

Mul ei ole aega kauem oodata, tee rutem.

これ以上待つ時間はありません。もっと急いでください。

Ma ei saa praegu tulla, ma tulen hiljem. 今は行けません。後で行きます。

Miks sa seda varem ei ütelnud?

どうしてそれをもっと早く言ってくれなかったのですか？

Homme on mul veel vähem aega. 明日になるともっと時間が少なくなります。

Klubis käisime nüüd harvem (~ harvemini).

もう以前ほどは頻りにクラブに行くことがなくなりました。

Väljas on külm, pane soojemalt riidesse! 外は寒いから、服を着て暖かくしなさい。

Palun räägi kõvemini, ma ei kuule!

もっと大きな声で話してください。聞こえません。

Peab lugema aeglasemalt ja peab täpsemalt hääldama.

もっとゆっくり読み、もっと正確に発音しなければなりません。

Tule lähemale ja vaata hoolsamini! もっと近くに来て、もっと注意して見なさい。

比較の基準(~より)は、接続詞 kui を用いて表します。比較の基準が出格で表されることもあります。

Mikk räägib aeglasemalt kui Jaan. ミックは、ヤーンよりゆっくりと話します。

Hanna on temperamentne, ta räägib meist kõigist elavamalt.

ハンナは、情熱的で、わたしたちの誰よりも生き生きと話します。

Dotsent Mets räägib kõigist teistest huvitavamalt.

メツ講師は誰よりも面白い話をしてくれます。

比較級は、程度を表す副詞 veidi, pisut, natuke「少し、やや、多少」、あるいは palju, märksa, tunduvalt, märgatavalt「大いに、ずっと、かなり」によって修飾することができます。

Ta astus pisut nooremalt ülikooli kui Peeter.

彼女は、ペーテルより少し若くして大学に入学しました。

Lembit sai palju nooremalt arstiks kui Ülo.

レンピットは、ユロよりもずっと若くて医者になりました。

「~と同じくらい~だ」は、「niisama + 副詞の原級 + kui + 比較の基準」で表します。

Ene töötab niisama hoolsalt kui Krista. エネはクリスタと同じくらい熱心に勉強します。

14.8. 副詞の最上級

比較級の前に不定代名詞 kõik「すべて」の単数属格形 kõige を添えて作る方法で、すべての副詞の比較級から作ることができます。

原級	比較級	最上級	
huvitavalt	huvitavamalt	kõige huvitavamalt	興味深く、面白く
hästi	paremini	kõige paremini	良く、上手に
palju	rohkem	kõige rohkem	たくさん

Meist joonistab kõige paremini Eha Lepp.

わたしたちの中では、エハ・レップがいちばん上手に絵を描きます。

Ülo on meie rühma kõige andekam üliõpilane. Kursusetöö kirjutas ta kõige andekamalt ja ka eksamid sooritas kõige edukamalt.

ユロは、わたしたちの班でいちばん優秀な学生です。彼は、学年末のレポートがいちばん優秀でしたし、試験でももっともよい成績を修めました。

Anne on pärit Helsingist, Ingrid aga palju kaugemalt, Oslost. Kõige kaugemalt on pärit Maria: tema kodu on Hamburgis.

アンネはヘルシンキ出身ですが、イングリッドはずっと遠いオスロの出身です。いちばん遠いところの出身は MARIA で、彼女の故郷はハンブルクです。

Peeter tõuseb hommikul kõige varem: tema loengud algavad kell kaheksa. Rein tõuseb täna veidi hiljem, tal on esimene loeng kell üheksa. Ülo magab kõige kauem: tal ei olegi täna loenguid.

ペーテルは朝、いちばん早く起きます。講義が 8 時から始まるのです。レインは、少し遅く起きます。最初の講義が 9 時からのためです。ユロはいちばん遅くまで寝ています。今日は、講義がないからです。

第 15 章(viieteistkümmes peatükk)

15.1. 名詞の格変化：複数分格

複数分格は、他動詞文の直接目的語、存在文・所有文の主語、分格支配の前置詞の補語などとして用いられるほか、数量詞とともに現れます。

Maren ei teadnud neid sõnu.	マレンはそれらの単語を知りませんでした。
Tallinnas elab nii eestlasi kui ka venelasi.	
タリンにはエストニア人もロシア人も住んでいます。	
Pärast eksameid läks Tõnu maale.	試験が終わるとトヌは田舎へ帰りました。
Mul on palju raamatuid.	わたしは本をたくさん持っています。

15.2. 複数分格形の作り方

複数分格形は、その語尾によって大きく 3 つのタイプに分けられます。

語尾 -id

	単数主格	属格	分格	複数分格	
(1a)	aasta	aasta	aasta/t	aasta/id	1 年
	kõrge	kõrge	kõrge/t	kõrge/id	高い
	kasutu	kasutu	kasutu/t	kasutu/id	無用の
(1b)	korter	korter/i	korteri/t	kortere/id	アパート
(1c)	maa	maa	maa/d	ma/id	国

語尾なし(母音で終わる)

(2a)	kala	kala	kala	kal/u	魚
(2b)	pesa	pesa	pesa	pes/i	巣
(2c)	kivi	kivi	kivi	kiv/e	石
(2d)	lukk	luku	lukku	lukk/e	錠
(2e)	keel	keele	keel/t	keel/i	舌, 言語

語尾 -sid

(3a)	kõne	kõne	kõne/t	kõne/sid	話
(3b)	nimi	nime	nime	nime/sid	名前
(3c)	süü	süü	süü/d	süü/sid	罪

15.2.1. 複数分格形(その 1) - 語尾-id

このタイプの複数分格形は、-aid, -eid, -uid で終わります。

多音節語幹の名詞の場合は、単数語幹(単数属格形)に語尾 -id がつきます。このタイプの名詞は、(1c)のタイプを除いて、単数分格の語尾が -t (したがって、複数属格の語尾が -te) です。階程交替がある場合は、単数属格が強階程、単数分格が弱階程となるタイプに限られません。

	単数主格	属格	分格	複数分格	
(1a)	aasta	aasta	aasta/t	aasta/id	1 年
	kõrge	kõrge	kõrge/t	kõrge/id	高い
	kasutu	kasutu	kasutu/t	kasutu/id	役にたたない

lusika/s	lusika	lusika/t	lusika/id	スプーン
pime	pime/da	pimeda/t	pimeda/id	暗い
kirik	kirik/u	kiriku/t	kiriku/id	教会
mõte	`mõtte	mõte/t	`mõtte/id	考え
hamma/s	`hamba	hammas/t	`hamba/id	歯
tüt/ar	`tütre	tütar/t	`tütre/id	娘

ただし、語幹が母音 -i で終わる場合には、この母音は -e に変わります。

(1b) korter	korter/i	korteri/t	kortere/id	アパート
naab/er	naab/ri	naabri/t	naabre/id	隣人
kauni/s	`kauni	kaunis/t	`kaune/id	美しい

1音節語でこのタイプの複数分格形をつくるのは、語幹が長母音(ただし ii, üü を除く)で終わる場合です。長母音が短くなり、語尾の i と一緒になって二重母音を作ります。

(1c) maa	maa	maa/d	ma/id	国
----------	-----	-------	-------	---

15.2.2. 複数分格形(その2) - 母音 -u, -i, -e でおわる場合

単数語幹末の母音が、-u, -i, -e のいずれかに置き換えられて複数分格形が作られます。階程交替する語は、単数属格が弱階程、単数分格が強階程のものに限られます。複数分格形は、強階程になります。

単数分格形が母音で終わる語の多くは、このタイプの複数分格形をもっています。これらの名詞のなかには、複数分格の第3のタイプである語尾 -sid によって作られる並行形をもつものが少なからずあります。

単数主格	属格	分格	複数分格	
(2a) kala	kala	kala	kal/u (~ kala/sid)	魚
jalg	jala	jalga	jalg/u (~ jalga/sid)	足
(2b) pesa	pesa	pesa	pes/i (~ pesa/sid)	巣
pikk	pika	pikka	pikk/i (~ pikka/sid)	長い
(2c) kivi	kivi	kivi	kiv/e (~ kivi/sid)	石
tükk	tüki	tükki	tükk/e	~ 個
(2d) lukk	luku	lukku	lukk/e (~ lukku/sid)	錠

接尾辞 -nik, -lik, -stik などによる派生語はすべて名詞 lukk と同じタイプに活用します。

単数主格	属格	分格	複数分格	
maa/stik	-stiku	-stikku	-stikk/e	風景
kirja/nik	-niku	-nikku	-nikk/e	作家
isik/lik	-liku	-likku	-likk/e	個人的な

単数分格形が「子音 + t」で終わる語は、複数分格形は母音 -i で終わります。

(2e) keel	keele	keel/t	keel/i	舌, 言語
teine	teise	teis/t	teis/i	2 番目の

15.2.3. 複数分格形(その3) - 語尾 -sid

語尾 -sid によって複数分格形を作る名詞には次のタイプがあります。語尾 -sid は、原則として単数語幹 (= 単数属格形) に付きますが、階程交替する名詞の場合は、単数分格形 (= 強階程) に付きます。

単数主格	属格	分格	複数分格	
(3a) kõne	kõne	kõne/t	kõne/sid	話
auto	auto	auto/t	auto/sid	自動車
(3b) nimi	nime	nime	nime/sid	名前
jõgi	jõe	jõge	jõge/sid	川
(3c) süü	süü	süü/d	süü/sid	罪

15.2.4. 複数分格の作り方(補足)

語尾 -sid によって作る複数分格形しかもたない名詞は比較的少数で、語尾 -sid による複数分格形をもつ名詞の多くは、語尾 -id による複数分格形または母音で終わる複数分格形を合わせもっています。

	複数分格		
kuu	kuu/sid ~	ku/id	月
idee	idee/sid ~	ide/id	考え
püha	püha/sid ~	pühi	祝日
maja	maja/sid ~	maju	家

実用的な方策として、母音で終わる複数分格をもつ名詞の場合、その母音が -u, -i, -e のどれになるかがわからずに戸惑うよりは、一律に「単数語幹(強階程) + 語尾 -sid」の複数分格形を用いた方が簡単です。

	複数分格		
	慣用的な形	慣用的でない形	
jalg	jalgu	jalga/sid	足
pliit	pliite	pliiti/sid	レンジ
laul	laule	laulu/sid	歌

このようにして作られた語尾 -sid による複数分格形の中には、必ずしも慣用的に用いられていない形もありますが、エストニア人は、問題なく複数分格形として理解してくれます。

15.2.5. 注意すべき複数分格形

単数主格	属格	分格	複数分格	
hea	hea	head	hä/id	良い
pea	pea	pead	pä/id	頭
käsi	käe	kätt	käsi	手

vesi	vee	vett	vesi	水
uus	uue	uut	uusi	新しい
täis	täie	täit	täisi	満ちた
laps	lapse	last	lapsi	子ども
mees	mehe	meest	mehi	男, 夫
uks	ukse	ust	uksi	ドア
muna	muna	muna	mune	卵
nuga	noa	nuga	nuge	ナイフ
tuba	toa	tuba	tube	部屋
tühi	tühja	tühja	tühje	からの

15.3. 複数分格の用法(その1) : 他動詞文の直接目的語

15.3.1. 否定文

否定文では、直接目的語は分格形になります。

Raskeid töid ei saa meie teha käsitsi.	重労働は手で行うことはできません。
Mari ei leidnud oma sukki ega kingi.	マリは自分の靴下も靴も見つけれませんでした。
Virve ei ostnud nuge ega klaase.	ヴィルヴェは、ナイフもコップも買いませんでした。
Eile ei laulnud koor rahvalaule.	昨日、合唱団は民謡を歌いませんでした。
Miks ta ei pannud lauale nõusid?	なぜ彼女はテーブルに食器を置きませんでした。
Ma ei tunne kõiki uusi ideesid.	わたしは新しい考えのすべてに通じてはいません。

15.3.2. 分格支配の動詞

通常は分格目的語のみをとる他動詞には次のようなものがあります。

armastama	愛する	austama	尊敬する
harrastama	(趣味として)行う	kartma	恐れる
kohtama	会う	käsitlema	取り扱う
külastama	訪問する	mõistma	理解する
nautima	楽しむ	nägema	見る
ootama	待つ	parandama	直す
pesema	洗う	ravima	治療する
sööma	食べる	teadma	知っている
teenindama	(客に)対応する	tervitama	挨拶する
tundma	(人を)知っている	tähele panema	注目する
vaatama	見る	vajama	必要とする
vihkama	嫌う		

Emal armastab eriti oma nooremat tütar (~ nooremaid tütreid).

母親はとくに下の娘(たち)をかわいがっています。

Mati kohtas kaubamajas oma sõpra (~ sõpru).

マッティはデパートで友人の友人たちに出会いました。

Kas te teate tema nime (~ nende nimesid)?

彼女を名前(彼らの名前)をご存知ですか？

15.3.3. 肯定文

15.3.3.1. 複数名詞と非個体名詞

複数名詞(個体名詞の複数形)が他動詞の直接目的語になる場合には、複数分格形または複数主格形になります。

複数主格形の直接目的語(主格目的語)と複数分格形の直接目的語(分格目的語)の区別は、非個体名詞(5.1.)における属格目的語と分格目的語の区別に通じるところがあります。個体名詞は、複数になると指示対象が個体とは見なせなくなり、非個体名詞に似てくるためです。

たとえば、本が何冊も机の上に置かれている時、これらの本を話題にするには、raamat (個体名詞)を複数形で用います。また、この本の山を2つに分けて、別々の段ボール箱にしまったあとで、それぞれの段ボール箱に入っている本を話題にするにも、やはり raamat の複数形を用います。

つまり、ある個体名詞の複数形の指示対象となっている個体の集まりは、それを2つに分けた場合でも、同じ名詞の複数形で指示できます。これは、非個体名詞の指示対象が、それを2つに分けた場合でも、同じ名詞で指示できることと同じです。

非個体名詞の属格目的語に対応するのは、個体名詞の複数の場合、複数主格形で現れる目的語(主格目的語)です。

15.3.3.2. 進行中の動作・行為

英語の現在進行形や過去進行形に当たる意味を表す場合には、分格目的語が用いられます。主格目的語を用いると、すでに完了・完結した(または完了・完結するはずの)行為・動作として表現されます。

Me otsime vajalikke dokumente. わたしたちは、必要な書類を探しています。
Me otsime vajalikud dokumendid üles. わたしたちは、必要な書類を見つけます。

Sekretär Anu kirjutab kirju. 秘書のアヌは、手紙を(何通か)書いていました。
Sekretär Anu kirjutab kirjad valmis. 秘書のアヌは、(その何通かの)手紙を書き終えました。

Kunstnik joonistab ajalehele karikatuure.
(その)芸術家は新聞に風刺漫画を描いています [連載中]。
Kunstnik joonistab ajalehele karikatuurid. (その)芸術家は新聞に風刺漫画を書きます。

Need tütarlapsed õmblevad endale seelikuid.
この若い女性たちは自分でスカートを縫っているところです。
Need tütarlapsed õmblevad endale seelikud.
この若い女性たちはスカートを自分で縫って作ります。

Peeter kannab puid tuppä. ペーテルは、薪を家の中へ運んでいるところです。
Peeter kannab puud tuppä. ペーテルが薪を家の中に運びます。

Matkajad valivad sobivaid saapaid. 旅行者たちが自分にあったブーツを選んでいきます。
Matkajad valivad välja sobivad saapad. 旅行者たちは自分にあったブーツを選びます。

15.3.3.3. 不特定のものの集まり

複数分格形の目的語(分格目的語)は、指示対象の範囲や数量が特定されない(できない)時用います。

これに対し、複数主格形の目的語(主格目的語)は、指示対象の範囲や数量が特定される(で

きる)時用います。

Tüdruk ostis marke ja lahkus postkontorist.

娘さんは切手を買って、郵便局を出て行きました。

Tüdruk ostis margid ära ja lahkus postkontorist.

娘さんは(その)切手を買って、郵便局を出て行きました。

Lauale tuuakse sööke ja jooke.

テーブルに料理や飲物が運ばれてきます。

Lauale tuuakse söögid ja joogid.

テーブルへ(注文してあった)料理と飲物が運ばれてきます。

Palun andke mulle raamatuid!

わたしに本をください。

Palun andke mulle raamatud!

わたしに例の本を [その本を全部] ください。

Poiss ostis lõpuks pliiatseid.

少年は最期に鉛筆を何本か買いました。

Poiss ostis lõpuks endale ka pliiatsid.

少年は最期に自分用に(必要な本数の)鉛筆を買いました。

Ajakirjanik tõi häid fotosid.

ジャーナリストが、良い写真を [何枚か] 持ってきました。

Ajakirjanik tõi head fotod.

ジャーナリストは良い写真を [選んで全部] 持ってきました。

15.4. 目的語の格表示：主格，属格，分格

目的語の格表示は、単数形と複数形の場合で、次のような対応関係があります。

15.4.1. 単数主格～複数主格(命令文)

Tellige aedviljasupp, seapraad ja maasikad! [1人前の特定できる分量]

野菜スープ(1つ)とローストポーク(1つ)とイチゴ(1人前)を注文してください。

15.4.2. 単数属格～複数主格(平叙文)

Jüri tellib aedviljasupi, seaprae ja maasikad. [1人前の特定できる分量]

ユリは、野菜スープ(1つ)とローストポーク(1つ)とイチゴ(1人前)を注文します。

15.4.3. 単数分格～複数分格(命令文，平叙文とも)

Tellige aedviljasuppi, seapraadi ja maasikaid.

野菜スープとローストポークとイチゴを注文してください。 [特定できない量]

Jüri tellib aedviljasuppi, seapraadi ja maasikaid.

ユリは野菜スープとローストポークとイチゴを注文します。 [特定できない量]

15.5. 複数分格の用法(その2)：存在文・所有文の主語

非個体名詞は、直接目的語の場合も、存在文・所有文の主語の場合も、(単数)分格形で用いられるのがふつうです。同様に、複数の個体名詞も、直接目的語の場合、存在文・所有文の主語の場合を問わず、ふつうは(複数)分格形で用いられます。

15.5.1. 否定文

原則として，分格主語のみが現れます。

Neil ei ole häid uudiseid.	彼らにはいい知らせがありません。
Laul ei ole soovisedeleid.	机の上に図書の閲覧希望カードがありません。
Eestis ei ole kõrgeid mägesid.	エストニアには高い山がありません。

15.5.2. 肯定文

複数分格形の名詞句(分格主語)は，指示対象の範囲や数量が特定されない(特定できない)時用います。

これに対し，複数主格形の名詞句(主格主語)は，指示対象の範囲や数量が特定される(特定できる)時用います。

Komisjonis töötab nii arste kui ka psühholooge.
委員会では，医師も心理学者も働いています。

Komisjonis töötavad nii arstid kui ka psühholoogid.
委員会で，(その)医師たちも心理学者たちも働いています。

Kas selles kaupluses on müügil valgeid kraesid?
このお店では，白い襟を売っていますか？

Selles kaupluses on müügil valged kraed.
このお店では，(例の)白い襟を(一式揃えて)売っています。

Kontserdil osaleb tuntud lauljannasid.
コンサートの出演者の中には有名な女性歌手たちがいます。

Kontserdil osalesid tuntud lauljannad.
コンサートに出演したのは，(その)有名な女性歌手たちでした。

ふつうは，分格主語が用いられますが，特定のものの集まりをセットとしてまとめて考える場合には，主格主語になります。

Laul (~ Laua peal) on pudeleid.	テーブルの上にピンが(何本か)あります。
Laul (~ Laua peal) on pudelid.	
	テーブルの上に(例の)ピンが(まとめて)置かれています。

15.6. 複数分格の用法(その3)：数量詞とともに

個体名詞が palju「多数の，多量の」，vähe「少数の，少量の」など，数量詞とともに用いられる場合には，複数分格形になります。

Pargis on palju oravaid.	公園にはリスがたくさんいます。
Paberil on vähe numbroid.	紙にはあまりたくさん数字が書いてありません。
Sinu kirjale on vähe vastuseid.	あなたの手紙にはあまりたくさん返事が来ていません。
Teie perekonnas on vähe lapsi.	あなたの家族には，子どもが少ないです。
Sinu töös on vähe vigu.	あなたの仕事は，間違いが少ないです。
Võistlustel osaleb palju sportlasi.	競技には，スポーツ選手が大勢参加します。
Eestis on palju väikesi jõgesid.	エストニアには小さな川がたくさんあります。

Eesti metsades on vähe karusid. エストニアの森には熊があまりいません。
 Maailmas juhtub vähe imesid. 世界では奇跡はめったにおこらない。

数量詞の出てくる表現には、このほか次のようなものがあります。

Kui palju maksab karp pliiatseid? 鉛筆 1 箱はおいくらですか？
 Palun mulle kakssada grammi sibulaid! タマネギを 200 グラムください。
 Rida meie rühma liikmeid töötas laupäeval kolhoosis.
 わたしたちのグループのメンバーの何人かが土曜日にコルホーズで働きました。
 Ta ostis nelisada grammi kompvekke. 彼女は、キャンディーを 400g 買いました。
 Palun andke üks karp makarone! マカロニを 1 箱ください。
 Mitu tsentnerit peete saadakse teie kolhoosis ühelt hektarilt?
 あなたの集団農場では、ヘクタール当たり何百キログラムのビートがとれますか？
 Rühm neiusid läks suusatama. 若い娘さんのグループがスキーに出かけました。
 Praegu põleb rida tulesid. 今、明かりがいくつついています。
 Osa autosid on garaa#is. 一部の車はガレージに置いてあります。

Tellige kaks portsjonit aedviljasuppi, kaks portsjonit seapraadi ja kaks portsjonit maasikaid.
 野菜スープを 2 つ、ローストポークを 2 つ、イチゴを 2 つ注文してください。

Jüri tellib endale ja Mallele kaks portsjonit aedviljasuppi, kaks portsjonit seapraadi ja kaks portsjonit maasikaid.

ユリは、自分とマレのために、野菜スープを 2 つ、ローストポークを 2 つ、イチゴを 2 つ注文します。

【注意】

- 1) 数詞とともに用いられた個体名詞は、単数分格形になります。
 例：kaks pliiatsi/t 「鉛筆 2 本」
- 2) 数量詞とともにもちいられた非個体名詞は、単数分格形になります。
 例：kilo suhkru/t 「砂糖 1 キロ」

15.7. 分格とともに用いられる前置詞

enne	～の前に	keset	～の真ん中で
mööda	～に沿って	peale	～の後で
pärast	～の後で		

Enne lõunat me olime tööl. 昼食の前にわたしたちは仕事をしました。
 Autod sõitsid mööda pikki teid. 自動車は長い道を走って行きました。
 Pärast loenguid me läksime teatrisse. 講義のあと、わたしたちは劇場に行きました。

第 16 章(kuueteistkümnes peatükk)

16.1. 人称代名詞の格変化

16.1.1. 完全形と短縮形

人称代名詞の格形の中には，完全形と短縮形の 2 つの形をもつものがあります。完全形は，対比などの目的で代名詞が強調されて文強勢を受ける場合に用いられ，通常は短縮形が用いられます。短縮形は，強勢を受けずに，次に続く語と一続きに発音されます。

人称代名詞の主格の短縮形は，省略されることがあります。

Kas ka sina tuled?	君も来ますか？
Ei, ma ei tule.	いいえ，行きません。
Kas sinu õde õpib ülikoolis?	あなたの妹は大学生に行っていますか？
Jah, mu õde õpib ülikoolis.	はい，妹は大学に行っています。
Tean, et need ei ole sinu vanemad, vaid su mehe vanemad.	
彼らがあなたのご両親ではなく，ご主人の両親であることをわたしは知っています。	
Kui teie ei lähe, siis ei lähe ka mina.	あなたが行かないなら，わたしも行きません。

Mina olen esimene.	1 番目はわたしです。
Ma olen esimene	わたしは 1 番目です。
Ma ei ole esimene, vaid teine.	わたしは 1 番目ではなくて，2 番目です。

Millal meie sinna läheme?	わたしたちはいつ，そこへ行きましょうか？
Millal me läheme sinna?	そこへ行くのはいつにしましょうか？

16.1.2. 人称代名詞の格変化

	1 人称単数	2 人称単数	3 人称単数
主格	mina ~ ma	sina ~ sa	tema ~ ta
属格	minu ~ mu	sinu ~ su	tema ~ ta
分格	mind	sind	teda
入格	minusse	sinusse	temasse
内格	minus	sinus	temas
出格	minust	sinust	temast
向格	minule ~ mulle	sinule ~ sulle	temale ~ talle
接格	minul ~ mul	sinul ~ sul	temal ~ tal
奪格	minult ~ mult	sinult ~ sult	temalt ~ talt
变格	minuks	sinuks	temaks
様格	minuna	sinuna	temana
到格	minuni	sinuni	temani
欠格	minuta	sinuta	temata
共格	minuga	sinuga	temaga
	1 人称複数	2 人称複数	3 人称複数
主格	meie ~ me	teie ~ te	nemad ~ nad
属格	meie ~ me	teie ~ te	nende
分格	meid	teid	neid

エストニア語は、英語よりは、再帰代名詞を頻繁に用います。エストニア語の再帰代名詞は、とくに日本語に訳す必要がなかったり、訳すことが不可能な場合があります。

Ta esitas kandidaadiks iseenda. 彼は自分自身を候補者として提案しました。
Ta ei anna seda endale (~ enesele) andeks. 彼を自分がそれをすることを許しません。

Ta kutsus mind enda juurde külla. 彼女はわたしを自分の家に招待しました。
Ma sain endale parema koha. わたしはもっとよい席が(自分用に)とれました。
Otsin endale uue särgi. わたしは(自分用に)新しいシャツを買いました。
Ma panen end riidesse. わたしは服を着ます [自分を服の中に入れる]。
Me peseme ennast. わたしたちは(自分の)身体を洗います。
Sa tunned ennast hästi. あなたは気分がいいです [自分を良く感じる]。
Ta tappis enda. 彼女は自殺した [自分を殺した]。
Ta külmetas end ära. 彼は寒くて風邪をひいてしまいました。

16.2.2. 再帰代名詞の格変化

再帰代名詞のほとんどの格形には、並行形があります。どちらの形を用いるかは、話者の好みや文全体のリズムなどによって決まります。

	単数	複数
主格	ise	ise
属格	enese ~ enda	eneste ~ endi
分格	ennast ~ end	- - - endid *)
入格	enesesse ~ endasse	enestesse ~ endisse
内格	eneses ~ endas	enestes ~ endis
出格	enesest ~ endast	enestest ~ endist
向格	enesele ~ endale	enestele ~ endile
接格	enesel ~ endal	enestel ~ endil
奪格	eneselt ~ endalt	enestelt ~ endilt
変格	enesekd ~ endaks	enesteks ~ endiks
共格	enesega ~ endaga	enestega ~ endiga

*) 話しことばでは、単数分格形 ennast ~ end が複数分格形 endid の代わりに用いられます。

Poisid pesid end (~ endid) puhtaks. 少年たちは身体を洗ってきれいになりました。
Meid ennast (~ endid) ei olnud kohal. わたしたち自身はそこにいませんでした。

主格以外の格において、再帰代名詞の前に ise を添えると再帰代名詞の強調形ができます。強調のために添えられた ise は形を変えません。

Iseenesest ei muutu midagi paremaks. 何事もそれ自身ではよくなりません。
Uks avanes iseenesest. ドアが自然に開きました。
Mägimatkal peab igaüks iseenesest eest hoolitsema.
山を旅するときは、めいめいが自分で自分の身の回りことをする必要があります。

単数

複数

主格	- - -	- - -	- - -	- - -
属格	iseenese	~ iseenda	iseeneste	~ iseendi
分格	iseennast	~ iseend	- - -	iseendid
入格	iseenese	~ iseendasse	iseenestesse	~ iseendis
内格	iseeneses	~ iseendas	iseenestes	~ iseendis
出格	iseenese	~ iseendast	iseenestest	~ iseendist
向格	iseenesele	~ iseendale	iseenestele	~ iseendile
接格	iseenesel	~ iseendal	iseenestel	~ iseendil
奪格	iseenese	~ iseendalt	iseenestelt	~ iseendilt
变格	iseenese	~ iseendaks	iseenesteks	~ iseendiks
共格	iseenese	~ iseendaga	iseenestega	~ iseendiga

16.3. 所有再帰代名詞(oma)

16.3.1. 所有再帰代名詞と人称代名詞の属格形の用法の比較

英語の人称代名詞の所有格の形(my, your, his, her, its, etc.)に対応するエストニア語は、一般に人称代名詞の属格形です。

Minu asjad on korras.	わたしは万事うまくいっています。
Mu palitu on kapis.	わたしのオーバーは衣装戸棚にあります。
Otsitakse meie dokumente.	わたしたちの書類をさがしてくれています。
Me seljakotid on juba vagunis.	わたしたちのリュックサックは、もう列車に運んであります。
Pojad ei teadnud, mida olid nende isad sõja ajal teinud.	息子たちは、自分たちの父親が戦争中にしたことを知りませんでした。

しかし、英語の人称代名詞の所有格とエストニア語の人称代名詞の属格形の間に対応関係は、英語の次のような文に関してはなりたちません。

- (1) I am driving my car.
- (2) You are driving your car.

これらの文では、所有格の人称代名詞は主語と同じ人を指しています。このような場合、エストニア語では人称代名詞の属格の代わりに、次の文(3a), (4a)のように所有再帰代名詞 oma「自分の(もの)」を用います。

- | | |
|------------------------------|----------------------|
| (3) a. Ma sõidan oma autoga. | わたしは(自分の)車を運転していきます。 |
| b. Ma sõidan mu autoga. | (誤) |
| (4) a. Sa sõidad oma autoga. | あなたは(自分の)車を運転していきます。 |
| b. Sa sõidad su autoga. | (誤) |

エストニア語では、1人称と2人称では(3b)や(4b)のような言い方はしません。ただし、3人称の人称代名詞に限って、(a)(b)両方の言い方が可能です。2つの文の意味の違いに注意して下さい。

- | | |
|---------------------------------|----------------------------|
| (5) a. Mati armastab oma naist. | マッティは(自分の)妻を愛しています。 |
| b. Mati armastab tema naist. | マッティは彼 [他人] の奥さんを愛しています。 |

すなわち、(5b)の場合、属格形になっている人称代名詞 *tema* は主語の *Mati* を指すことはできません。いいかえると、(5b) は理想的な夫婦関係を表していないこととなります。

名詞を修飾する所有再帰代名詞 *oma* は、ふつう、名詞と格・数の一致をおこさず、不変化になります。

Ma loen oma raamatut.	わたしは自分の本を読んでいます。
Sa räägid oma sõbraga.	あなたは(自分の)友人と話しています。
Lapsed külastasid oma vanemaid.	子どもたちは(自分の)両親を訪問しました。
Nad elavad oma majas.	彼らは自分の家に住んでいます [彼らの持ち家]。
Kirjanik jutustas oma raamatust.	作家は自分の著書について語りました。
Mees tõi siia oma tööriistad.	男は(自分の)道具を持参しました [個人所有の道具]。
Lapsed külastasid oma vanemaid.	子どもたちは(自分の)両親を訪問しました。

ときに *oma* は、形容詞のように名詞と格・数の一致をおこすことがあります。一致が起こると、発話の時点において、主語の表す人間(たち)が、問題となっている対象物を、他人と共有せず、自分(たち)だけで専有している状態が成立しているという事実が強調されます。また、主語の表す人間(たち)が問題となっている対象物の本来の所有者であるかどうかは二の次となって、しばしば、本来の所有ではない可能性が示唆されます。

Nad elavad omas majas.

彼らは自分たちだけである家に住んでいます [共同住宅ではない、たとえば一戸建ての家。借家であってもよい]。

Kirjanik jutustas omast raamatust.

作家は自分の本について話しました [たとえば、書評のために担当した本、書店で見つけた本など。作家自身の著書である可能性は低い]。

Mees tõi siia oma (~ omad) tööriistad.

男は自分の道具を持参しました [他人に道具を借りなくても困らないように、自分が使う道具を自分で持参したというような場合]。

16.3.2. 所有再帰代名詞の名詞的用法

英語には、*mine, yours, hers, ours* のように「～もの」を意味する所有代名詞と呼ばれる形があります。また、「トムのもの」という場合には、所有格をそのまま用います。

This book is mine (~ Tom's).

エストニア語のこれに対応する表現は、「属格形 + 所有再帰代名詞」です。

Kelle oma see on?

これは誰のものですか？

See auto on minu oma (~ venna oma).

この車はわたしのもの(～弟のもの)です。

Need raamatud on sinu omad (~ isa omad).

これらの本はあなたのもの(～父親のもの)です。

Sinu lapsed on juba suured, aga minu omad on veel väikesed.

あなたの子どもたちはもう大きいですが、わたしの(子どもたち)はまだ小さいです。

16.3.3. 所有再帰代名詞の格変化

所有再帰代名詞 *oma* は、名詞 *osa* と同じタイプの格変化をします。

	単数形	複数形
主格	oma	omad
属格	oma	omade
分格	oma	omasid ~ omi
入格	omasse	omadesse
内格	omas	omades
出格	omast	omadest
向格	omale	omadele
接格	omal	omadel
奪格	omalt	omadelt
変格	omaks	omadeks
共格	omaga	omadega

16.4. 疑問詞の格変化

疑問代名詞の kes「誰」と mis「何」の複数形は、指示対象が複数であることを特に明示しなければならない場合にのみ用いられ、通常は、指示対象の単複に関係なく単数形を用います。

	単数	複数
主格	kes	kes
属格	kelle	kelle ~ kellede
分格	keda	keda
入格	kellesse	kellesse ~ kelledesse
内格	kelles	kelles ~ kelledes
出格	kellest	kellest ~ kelledest
向格	kellele	kellele ~ kelledele
接格	kellel ~ kel	kellel ~ kel ~ kelledel
奪格	kellelt	kellelt ~ kelledelt
変格	kelleks	kelleks ~ kelledeks
様格	kellena	kellena ~ kelledena
到格	kelleni	kelleni ~ kelledeni
欠格	kelleta	kelleta ~ kelledeta
共格	kellega	kellega ~ kelledega
主格	mis	mis
属格	mille	mille ~ millede
分格	mida	mida
入格	millesse	millesse ~ milledesse
内格	milles	milles ~ milledes
出格	millest	millest ~ milledest
向格	millele	millele ~ milledele
接格	millel ~ mil	millel ~ mil ~ milledel
奪格	millelt	millelt ~ milledelt
変格	milleks	milleks ~ milledeks
様格	millena	millena ~ milledena
到格	milleni	milleni ~ milledeni
欠格	milleta	milleta ~ milledeta

共格 millega millega ~ milledega

疑問詞 kumb は「2つのうちのどれ(どちら)」の意味なので、複数形はありません。「どれ」が複数の対象を指す場合には、kes, mis が用いられます。

主格	kumb
属格	kumma
分格	kumba
入格	kummasse ~ kumba
内格	kummas
出格	kummast
向格	kummale
接格	kummal
奪格	kummalt
変格	kummaks
様格	kummana
到格	kummani
欠格	kummata
共格	kummaga

疑問形容詞 missugune, milline は、指示形容詞の niisugune, selline などに対応する疑問詞で、「どんな」に意味になります。

	単数	複数
主格	missugune	missugused
属格	missuguse	missuguste
分格	missugust	missuguseid
入格	missugusesse	missugustesse ~ missuguseisse
内格	missususes	missugustes ~ missuguseis
出格	missugusest	missugustest ~ missuguseist
向格	missugusele	missugustele ~ missuguseile
接格	missugusel	missugustel ~ missuguseil
奪格	missuguselt	missugustelt ~ missuguseilt
変格	missuguseks	missugusteks ~ missuguseiks
共格	missugusega	missugustega
主格	milline	millised
属格	millise	milliste
分格	millist	milliseid
入格	millisse	millistesse ~ milliseisse
内格	millises	millistes ~ milliseis
出格	millisest	millistest ~ milliseist
向格	millisele	millistele ~ milliseile
接格	millisel	millistel ~ milliseil
奪格	milliselt	millistelt ~ milliseilt
変格	milliseks	millisteks ~ milliseiks
共格	millisega	millistega

第 17 章(seitsmeteistkümnes peatükk)

17.1. 指示詞

17.1.1. 「これ、あれ、それ」

エストニア語の指示代名詞は、see (複数 need) です。see は文脈によって、「これ」「あれ」「それ」のいずれにもなります。

指示代名詞は、名詞の前に修飾語として添えることができ、その場合は、形容詞と同じように振るまいます。

「これ」と「あれ」を区別する必要がある場合には、siin「ここ」または seal「あそこ」を添えて、see siin「このそれ(=これ)」または see seal「あそのそれ(=あれ)」と言います。名詞を修飾する場合は、see raamat siin「この本」または see raamat seal「あの本」などとなります。

See on ilus pilt.	これはきれいな絵です。
See pilt on ilus.	この絵はきれいです。
Ma tahan sellest koosolekust osa võtta.	わたしはこの会議に参加したいと思います。
See siin on sulle ja see seal on pliia.	これはペンで、あれは鉛筆です。
Andke mulle see raamat seal!	わたしにあの本をください。

see に対応する複数形は need、too に対応する複数形は need です。

Need on ilusad pildid.	これらはきれいな絵です。
Need pildid on ilusad.	これらの絵はきれいです。
Andke mulle need raamatud seal!	わたしにあれらの本をください。

see は、物やことがらを指す一般的な代名詞として用いられます。

Ta oli selle vastu.	かれはそれに反対でした。
Ma tean seda.	わたしはそのことを知っています。
Ma ei saa sellest aru.	わたしはそのことが理解できません。
Sellest ei tule midagi.	それは箸にも棒にもかかりません。

see は、また、後に来る従属節を受ける代名詞として用いられます。

Isa oli selle vastu, et mina saan õpetajaks. 父はわたしが教師になることに反対でした。

Jaan puudus loengust selle tõttu, et tal valutas hammas.

ヤーンは、歯が痛かったので講義を休みました。

Teie sööte selleks, et elada, aga mina elan selleks, et süüa.

君たちは生きるために食べるが、僕は食べるために生きています。

指示代名詞 see の格変化は次のようになります。

	単数	複数
主格	see	need
属格	selle	nende
分格	seda	neid

入格	sellesse	~ sesse	nendesse	~ neisse
内格	selles	~ ses	nendes	~ neis
出格	sellest	~ sest	nendest	~ neist
向格	sellele		nendele	~ neile
接格	sellel	~ sel	nendel	~ neil
奪格	sellelt	~ selt	nendelt	~ neilt
変格	selleks	~ seks	nendeks	~ neiks
共格	sellega		nendega	

【参考】

文法書は、ふつう、話者から離れたところにあるものを指す場合に用いられる指示代名詞として too (複数 nood) を挙げていますが、see ~ need と too ~ nood の違いは、実際には、意味上のものというより方言的なものです。すなわち、共通語、およびタリンを中心とする北エストニア地方ではもっぱら see ~ need を用い、タルトを中心とする南エストニア地方ではふつう too ~ nood を用います。

	単数		複数
主格	too		nood
属格	tolle		nonde
分格	toda		noid
入格	tollesse		nondesse ~ noisse
内格	tolles		nondes ~ nois
出格	tollest		nondest ~ noist
向格	tollele		nondele ~ noile
接格	tollel	~ tol	nondel ~ noil
奪格	tollelt	~ tolt	nondelt ~ noilt
変格	tolleks		nondeks ~ noiks
共格	tollega		nondega

17.1.2. 「同じ」

日本語の「同じ」に相当するのは、sama です。名詞的に用いられる場合(「同じこと」「同じもの」)は、指示代名詞の see のついた seesama という形になります。

Meie oleme samal arvamusel.	わたしたちは意見が同じです。
Olen samal arvamusel kui teie.	わたしはあなたと同じ意見です。
Mina olen teinud sedasama.	わたしはまったく同じことをしました。
Kas see on seesama, mida te mulle eile näitasite?	これは昨日見せてもらったものと同じものですか？

	単数		複数
主格	sama		samad
属格	sama		samade
分格	sama		samu
入格	samasse		samadesse
内格	samas		samades
出格	samast		samadest
向格	samale		samadele

接格	samal	samadel
奪格	samalt	samadelt
変格	samaks	samadeks
共格	samaga	samadega
主格	see/sama	need/samad
属格	selle/sama	nende/samade
分格	seda/sama	neid/samu
入格	sellesse/samasse	nendesse/samadesse
内格	selles/samas	nendes/samades
出格	sellest/samast	nendest/samadest
向格	sellele/samale	nendele/samale
接格	sellel/samal	nendel/samadel
奪格	sellelt/samalt	nendelt/samadelt
変格	selleks/samaks	nendeks/samaks
共格	selle/samaga	nende/samadega

17.1.3. 「こんな，そんな」

エストニア語には「こんな，そんな」の意味の形容詞(指示形容詞)が，たくさんありますが，どれも意味は同じと考えて差し支えありません。また格変化も基本的にすべて同じタイプになります。

Selline vastus mulle ei meeldinud.

そのような答は，わたしの好みではありませんでした。

Selline mees nagu tema oskab hästi elada.

彼のような男は，上手に生きることができます。

Palun andke mulle midagi taolist! 何か同様のものをください。

	単数	複数
主格	selline	sellised
属格	sellise	selliste
分格	sellist	selliseid
入格	sellisesse	sellistesse ~ selliseisse
内格	sellises	sellistes ~ selliseis
出格	sellisest	sellistest ~ selliseist
向格	sellisele	sellistele ~ selliseile
接格	sellisel	sellistel ~ selliseil
奪格	selliselt	sellistelt ~ selliseilt
変格	selliseks	sellisteks ~ selliseiks
共格	sellisega	sellistega
主格	niisugune	niisugused
属格	niisuguse	niisuguste
分格	niisugust	niisuguseid
入格	niisugusesse	niisugustesse ~ niisuguseisse
共格	niisugusega	niisugustega

主格	säärane	säärased
属格	säärase	sääraste
分格	säärast	sääraseid
入格	säärasesse	säärastesse ~ sääraseisse
共格	säärasega	säärastega

主格	taoline	taolised
属格	taolise	taoliste
分格	taolist	taolisi
入格	taolisesse	taolistlesse ~ taolisisse
共格	taolisega	taolistega

17.2. 疑問詞(関係詞)

疑問詞は疑問文の文頭におかれます。

Kelle raamatud need on?	これらは誰の本ですか？
Mida te ütlesite?	何とおっしゃいましたか？
Kummalt ma pean raha küsima?	どちらにお金をくれと言ったらいいのでしょうか？
Missuguseid (~ Milliseid) raamatuid pean ma lugema?	どんな本を読んだらいいのでしょうか？

疑問詞は、間接疑問文の従属接続詞として用いられます。

Ma ei tea, kelle raamatud need on.	これらが誰の本か、わたしは知りません。
Mees ütleb mulle homme, kumma lapse me kaasa võtame.	とちらの子どもを連れていくか、主人が明日わたしに言います。
Palun öelge, missuguseid raamatuid ma pean lugema.	どんな本を読んだらいいか、教えてください。

疑問詞 kes, mis は、関係代名詞として用いられます。

Ma tean niisugust inimest, kes oskab seal hästi orienteeruda.	わたしは、そこでよく適用できる人を知っています。
Ma olen lugenud ainult niisuguseid raamatuid, mida õpetaja soovitas.	わたしは、先生が推薦した本だけを読みました。

17.3. 不定代名詞

17.3.1. 「誰か(ある人)」「何か(あるもの)」

Keegi peab selle töö ära tegema.	誰かがこの仕事を仕上げなければなりません。
Ta hüüdis midagi.	彼女は何か叫びました。

	誰か(ある人)	何か(あるもの)
主格	keegi	miski
属格	kellegi	millegi

分格	kedagi	midagi
入格	kellessegi	millessegi
内格	kelleski	milleski
出格	kellestki	millestki
向格	kellelegi	millelegi
接格	kellelgi	millelgi
奪格	kelleltki	milleltki
変格	kellekski	millekski
共格	kellegagi	millegagi

17.3.2. 「すべて、どれも」

kõik「すべて」は、複数主格が単数主格と同じ形です。kõikの単数形は非個体名詞とともに、複数形は個体名詞とともに用いられます。

Ma tean kõik.	わたしは何でも(すべて)知っています。
Kõik olid väsinud.	みんなくたくたでした。
Kõik lapsed on siin.	子どもたちは皆ここにいます。
Tahan tutvuda kõigega (~ kõigiga).	すべてについて知りたい(~みんなと知り合いたい)と思います。

	単数	複数	
主格	kõik	kõik	
属格	kõige	kõikide	~ kõigi
分格	kõike	kõiki	
入格	kõigesse ~ kõike	kõikidesse	~ kõigisse
内格	kõiges	kõikides	~ kõigis
出格	kõigest	kõikidest	~ kõigist
向格	kõigele	kõikidele	~ kõigile
接格	kõigel	kõikidel	~ kõigil
奪格	kõigelt	kõikidelt	~ kõigilt
変格	kõigeks	kõikideks	~ kõigiks
様格	kõigena	kõikidena	
到格	kõigeni	kõikideni	
欠格	kõigeta	kõikideta	
共格	kõigega	kõikidega	

iga「すべての、いかなる」は形容詞として、igaüks「めいめい、おのおの」は名詞的に、どちらも単数形でのみ用いられます。

Seda teab iga inimene.	それはみんなが知っています。
Sa vaatad televiisorit igal õhtul.	あなたは毎晩テレビを見ます。
Igaüks teab seda.	誰でもそれは知っています。
Ta annab igauhele õuna.	彼女はめいめいにリンゴを(1つ)あげます。

主格	iga	igaüks
属格	iga	igauhe
分格	iga ~ igat	igaüht ~ igauhte

入格	igasse	igäuhesse ~ igäuhte
内格	igas	igäuhes
出格	igast	igäuhest
向格	igale	igäuhele
接格	igal	igäuhel
奪格	igalt	igäuheld
变格	igaks	igäuheks
共格	-	igäuhega

17.3.3. 「いくつか」「多数(の)」

mõni「いくつか(の)」と mitu「多数(の)」は、単数形と複数形の意味の差があいまいで、単数形でも意味的には複数の指示対象を表すのがふつうです。

mõni は形容詞相当として用いられ、単数主格では名詞が単数主格形になります。mitu は数詞相当として用いられ、単数主格では名詞が単数分格形になり、単数の直接目的語として主格形が現れます。mitu はまた、kui palju? の意味の疑問詞として用いられます。

Andke mulle mõni õun (~ mõned õunad)! リンゴをいくつかください。

Püüdsime leida mõnd tuttavat inimest.

わたしたちはだれか知人がいないかとさがしました。

Ta lahkub mõne päeva pärast.

彼は数日後に出発します。

Mõnele on see raske otsus.

一部の人々にとって、それはむずかしい決定事項です。

Lugesin läbi mitu raamatut.

本を何冊も読みました。

Ta läks välismaale mitmeks kuuks.

彼は何か月もの予定で外国に出かけました。

Mitmed meist on juba Tallinnas käinud.

わたしたちの多くがすでにタリンに行ったことがあります。

Mitu tundi sa oled oodanud?

(もう)何時間まっているのですか？

	単数		複数
主格	mõni		mõned
属格	mõne		mõnede
分格	mõnd	~ mõnda	mõnesid
入格	mõnesse	~ mõnda	mõnedesse
内格	mõnes		mõnedes
出格	mõnest		mõnedest
向格	mõnele		mõnedele
接格	mõnel		mõnedel
奪格	mõnelt		mõnedelt
变格	mõneks		mõnedeks
共格	mõnega		mõnedega

主格	mitu	mitmed
属格	mitme	mitmete
分格	mitut	mitmeid
入格	mitmesse	mitmetesse
内格	mitmes	mitmetes

出格	mitmest	mitmetest
向格	mitmele	mitmetele
接格	mitmel	mitmetel
奪格	mitmelt	mitmetelt
変格	mitmeks	mitmeteks
共格	mitmega	mitmetega

17.3.4. 「両方」「どちらも」

mõlema ~ mõlemad「両方(の)」は、単数主格形がないので、主格形の場合は常に複数です。それ以外の格の場合は単数形が一般的ですが、複数形が用いられることもあります。

Mõlemad vennad on mul surnud.	わたしの兄は2人とも死にました。
Ma soovin mõlemat raamatut.	本は両方ともください。
Ta tegi seda mõlema käega.	彼はそれを両手でしました。
Ma tutvusin seal mõlemaga (~ mõlematega).	両方の人とそこで知り合いました。

	単数	複数	
主格	- -	mõlemad	
属格	mõlema	mõlemate	
分格	mõlemat	mõlemaid	
入格	mõlemasse	mõlematesse	~ mõlemaisse
内格	mõlemas	mõlemates	~ mõlemais
出格	mõlemast	mõlematest	~ mõlemaist
向格	mõlemale	mõlematele	~ mõlemaile
接格	mõlemal	mõlematel	~ mõlemail
奪格	mõlemalt	mõlematelt	~ mõlemailt
変格	mõlemaks	mõlemateks	~ mõlemaiks
共格	mõlemaga	mõlematega	

kumbki「どちらも」は肯定文でも否定文でも用いられます。名詞は単数形になります。

Kumbki vend ei tulnud.	どちらの兄も来ませんでした。
Kumbki vend tuli eri ajal.	兄はふたりとも別々の時間にやってきました。
Ma andsin kummalegi (~ mõlemale) lapsele kaks õuna.	人のこどものそれぞれに(~両方に)リンゴを2つあげました。

主格	kumbki
属格	kummagi
分格	kumbagi
入格	kummassegi ~ kumbagi
内格	kummaski
出格	kummastki
向格	kummalegi
接格	kummalgi
奪格	kummaltki
変格	kummakski
共格	kummagagi

17.4. 相互代名詞

「互いに，互いを」の意味を表す代名詞です。teineteise は 2 人の場合に用いられます。üksteise は 2 人の場合も，3 人以上の場合にも用いられます。

Jüri ja Olev aitavad teineteist (~ üksteist). ユリとオレヴは互いに助け合います。
 Jüri, Olev ja Mart aitavad üksteist. ユリとオレヴとマルトは互いに助け合います。
 Nad mõlemad tunnevad juba teineteist (~ üksteist).

ふたりはもう知り合いです。

Kõik siin tunnevad juba üksteist. ここではすでに全員がお互いに知り合いです。

Neil kahel polnud teineteisele (~ üksteisele) enam palju ütelda.

ふたりはもう互いに相手に話すことがたいしてありませんでした。

Pärast head mängu langesid jalgpallurid üksteisele kaela.

すばらしい試合のあと，サッカー選手たちは互いに抱き合いました。

主格	- - - -	- - - -
属格	teineteise	üksteise
分格	teineteist	üksteist
入格	teineteisesse	üksteisesse
内格	teineteises	üksteises
出格	teineteisest	üksteisest
向格	teineteisele	üksteisele
接格	teineteisel	üksteisel
奪格	teineteiselt	üksteiselt
変格	teineteiseks	üksteiseks
共格	teineteisega	üksteisega

第 18 章(kaheksateistkümmes peatükk)

18.1. 動詞の活用：不定詞

エストニア語には不定詞と呼ばれる形が 2 つあり，語尾に応じて，それぞれ ma-不定詞，da-不定詞と呼ばれます。

ma-不定詞を見ると，動詞のもっとも基本的な語幹の形がわかります。階程交替する動詞では，ma-不定詞は常に強階程です。ma-不定詞の語尾 -ma は，すべての動詞に共通です。

da-不定詞の形からは，動詞を活用させる場合，ma-不定詞について重要な情報が得られません。da-不定詞の語尾は，動詞によって -da, -ta, -a などの形をとります。階程交替する動詞の場合，da-不定詞が強階程になるものと弱階程になるものの 2 つのタイプがあります。

ma-不定詞	da-不定詞	
ela/ma	ela/da	住む
luge/ma	luge/da	読む
tõmba/ma	tõmma/ta	引き寄せる
käi/ma	käi/a	行ってくる
pane/ma	pan/na	置く
sure/ma	sur/ra	死ぬ

18.2. da-不定詞の語尾

18.2.1. 語尾 -da

da-不定詞が，ma-不定詞とまったく同じ語幹から作られる動詞[(1a)(1b)]，ma-不定詞の語幹とは異なる語幹から作られる動詞[(1c)]，両方のタイプの da-不定詞を合わせ持つ動詞[(1d)]とがあります。(1c)は，da-不定詞が弱階程になる動詞です。

ma-不定詞	da-不定詞	
(1a) armasta/ma	armasta/da	愛する
õppi/ma	õppi/da	学ぶ
saa/ma	saa/da	受ける
(1b) kuul/ma	kuul/da	聞く，聞こえる」
(1c) õmble/ma	õmmel/da	縫う [da-不定詞が弱階程]
(1d) kõnele/ma	kõnel/da	話す
	~ kõnele/da	

18.2.2. 語尾 -ta

da-不定詞が，ma-不定詞と同じ語幹から作られる動詞[(2a)]と異なる語幹から作られる動詞[(2b)]とがあります。(2a)では，子音で終わる語幹，(2b)では母音で終わる語幹が用いられます。(2b)は da-不定詞が弱階程になるタイプです。

ma-不定詞	da-不定詞	
(2a) seis/ma	seis/ta	立っている
(2b) hakka/ma	haka/ta	始める [da-不定詞が弱階程]

18.2.3. 語尾 -a

ma-不定詞の語尾 -ma を -a で置き換えると da-不定詞が得られます。

ma-不定詞	da-不定詞	
(3) and/ma	and/a	与える

18.2.4. 変則的な da-不定詞形をもつ動詞

ma-不定詞	da-不定詞	
mõtlet/ma	mõtlet/da ~ `mõel/da	考える
ütlet/ma	ütlet/da ~ `öel/da	話す
jooks/ma	joos/ta	走る
lask/ma	las/ta	~ させる
pese/ma	pes/ta	洗う
jät/ma	jätt/a	残す
kat/ma	katt/a	覆う
küt/ma	kütt/a	暖房する
nut/ma	nutt/a	泣く
pet/ma	pett/a	欺く
võtt/ma	võtt/a	取る
käi/ma	käi/a	行ってくる
vii/ma	vii/a	連れて行く
joo/ma	juu/a	飲む
loo/ma	luu/a	創造する
too/ma	tuu/a	持ってくる
löö/ma	lüü/a	打つ
müü/ma	müü/a	売る
söö/ma	süü/a	食べる
ole/ma	olla	ある, いる
tule/ma	tulla	来る
mine/ma	minna	行く
pane/ma	panna	置く
sure/ma	surra	死ぬ
näge/ma	näha	見る
tege/ma	teha	する, 作る

18.3. da-不定詞をとる動詞

18.3.1. 可能性や意志を表す動詞

saama	~ できる(能力)	võima	~ できる(条件)
tohtima	~ してよい	julgema	思い切って~ する

Haige ei saa käia, sest tal valutab jalg. 病人は(歩きたくても)歩けません。足が痛むのです。
 Jüri ei saa õppida, kuna tal ei ole õpikut. コリは勉強できません。教科書がないのです。
 Ants ei saa praegu tulla, sest tal pole aega.
 アントは今来ることができません。時間がないのです。
 Kas saan teid aidata? お手伝いしていいですか？

Jüri ei või tööle tulla, sest ta oli haige (ja võib veel teisi nakatada).
 コリは出勤できません。病み上がりですので(まだ人に病気をうつす可能性があります)。
 [本人はまったく普通に動くことができる]
 See kurjategija võib veel elus olla. この犯罪人はまだ生きている可能性があります。
 Kas võin teid aidata? お手伝いしましょうか？

Kas tohin teid koju saata? 家までお送りしましょうか？
 Haige ei tohi veel tõusta, arst ei luba.
 病人はまだ起きあがってはなりません。医者の許可がないのです。
 Ma ei julge üksi minna. わたしはひとりで行く勇気がありません。

püüdma	~ するよう努力する	suutma	~ する能力がある
jõudma	~ することができる		

Haige püüab tõusta, kuid ta ei suuda (~ ei jõua) veel tõusta, sest ta on väga nõrk.
 病人は起きあがろうとするが、まだ起きあがることはできません。体力がないのです。
 Olen nii väsinud, et ei jõua (~ ei suuda) enam käia.
 わたしはとても疲れていて、もう歩けません。
 Kas jõudsid töö lõpetada? - Ei jõudnud.
 仕事を終えることができましたか？ - できませんでした。
 Püüdsin küll kiiresti kirjutada, aga ma ei suuda terve päev laua taga istuda.
 急いで書こうとしたのですが、一日中机の前に座っているのは無理です。
 See on võimatu, ma ei suuda seda uskuda.
 それはありえません。わたしには信じられません。
 Toomas ei suutnud otsustada, missugust võõrkeelt õppida.
 トーマスはどの外国語を学ぶか決められませんでした。

tahtma	~ しようと欲する	soovima	~ しようと望む
--------	-----------	---------	----------

Kes tahab (~ soovib) sõna võtta? どなたか発言したい方はいらっしゃいますか？
 Mida te soovite juua, teed või kohvi?
 紅茶とコーヒー、どちらをお飲みになりたいですか？
 Rein tahtis õhtul välja minna, kuid ei saanud, sest tuli Jaan, kes soovis (~ tahtis) malet mängida.
 レインは夕方、外出しかったのですが、行けませんでした。ヤーンがやってきて、
 チェスをしたいと言ったからです。

18.3.2. 使役や許可を表す動詞

不定詞の意味上の主語(実際にことを行う人)は、接格(語尾-l)で表されます。

aitama	~ するのを手伝う	laskma	~ させる
lubama	~ するのを許す	käskima	~ するよう命じる

Meil on tarvis tõsiselt töötada, kuid ei tarvitse närviõtseda.

わたしたちは、まじめに働かなければなりません、神経質になる必要はありません。

18.3.5. 名詞の修飾句

次のような名詞は、da-不定詞をとることができます。

võimalus	機会, 可能性	kavatsus	意図
soov	希望	tahtmine	意思
lootus	期待	käsk	命令
luba	許可	vajadus	必要
tarvidus	必要	õnn	好運
hirm	恐れ	rõõm	喜び
aeg	～する時間		

Poistel oli soov (~ kavatsus) matkama minna.

少年たちは旅行に出かけたいと希望していました(旅行に出かけるつもりでした)。

Oli võimalus raha teenida. お金を作る機会がありました。

Mul on käsk päevik dekanaati viia. 日誌を学部長室に持って行くよう指示されています。

Kas on lootust stipendiumi saada? 奨学金がもらえると期待できますか？

Virvel on hirm ilma stipendiumita jääda.

ヴィルヴェは奨学金がもらえないのではないかと恐れています。

Kui on vajadus sõna võtta, siis tuleb seda teha.

発言する必要があるときは、そうしなければなりません。

Kas on tarvidust seda küsimust veel arutada?

この質問について討議する必要がまだありますか？

Mul oli õnn temaga tutvuda. 彼女と知り合いになれて好運です。

On rõõm sind näha. あなたの顔を見ることができて嬉しいです。

On aeg magama minna. 寝る時間です。

18.3.6. 「on + da-不定詞」

On näha, et ta on purjus. 彼が酔っていることは見ればわかります。

On teada, et ta ei saa koosolekust osa võtta.

彼が会議に出られないことがわかっています。

Täna on oodata sooja ilma. 今日は、暖かい天気になるでしょう。

Siin on märgata valgust. ここでは光が感じられます。

See maja on müüa. この家は売りに出されています。

Seda pole kuskilt osta. それはどこにも売っていません。

18.3.7. 「on + 形容詞 + da-不定詞」

Kas sul on vaja raha teenida? あなたはお金を作る必要がありますか？

Temaga on huvitav vestelda. 彼と話すのは面白いです。

Suitsetada on kahjulik. 喫煙は有害です。

On vara magama minna. 寝るにはまだ早いです。

On meeldiv teiega tutvuda. お知り合いになれて嬉しいです。

Seda on raske uskuda. それは信じがたいです。

Kas oli igav oodata? 待つのは退屈でしたか?
 Ei, siin oli mugav istuda. いいえ, ここは座り心地がよかったですから。
 Nüüd on hilja teda kutsuda. 彼女を呼ぶにはちょっと遅いです。

18.3.8. 接続詞 et とともに(目的を表す副詞句)

Sa oled liiga noor, et sellest aru saada. それを理解するには, あなたはまだ若すぎます。
 Ootasime taksot, et raudteejaama sõita. 駅まで行こうと, タクシーを待ちました。
 Jüri läks postkontorisse, et kaugekõne talongi osta.
 長距離電話のクーポンを買おうと, 彼は郵便局へ出かけました。
 Võtsin sõnaraamatu, et uue sõna tähendust vaadata.
 新しい単語の意味を調べようと, 辞書を手に取りました。
 Sööme selleks, et elada, kuid ei ela selleks, et süüa.
 生きるために食べます。食べるために生きているわけではありません。

18.3.9. 非人称の疑問文

Mis teha? 何をすべきでしょうか?(何をしたらいいのでしょうか?)
 Mõtlen, kuidas vastata. どう答えようか, 考えています。
 Millega seda seletada? それは何によって説明すればいいのでしょうか?
 Küsisin, millega seda seletada.
 それを何によって説明すればいいのか, と質問しました。
 Kuhu õhtul minna? 夜どこへ出かけましょうか?
 Ma ei tea, kuhu õhtul minna. 夜どこへ出かけたらいいか, わたしには分かりません。
 Milleks nii kaua oodata? なぜこんなに長く待たなければならないのですか?
 Ei saa aru, milleks nii kaua oodata.
 なぜこんなに長く待たなければならないのか, 分かりません。
 Kas arst kutsuda? 医者を呼びましょうか?
 Ta küsis, kas kutsuda arst. 医者を呼びますか, と彼女は聞きました。
 Kas ära minna või siia jääda? 立ち去るべきでしょうか, ここに残るべきでしょうか?
 Kas bussiga sõita või jalutada? バスでいきましょうか, それとも歩きましょうか?
 Kas kohe ütelda või enne mõtelda?
 すぐに言いましょうか, それともまず考えましょうか?
 Kas töötada või puhata? 働きましょうか, それとも休みましょうか?
 Kas tantsida või istuda? 踊りましょうか, それとも座りましょうか?
 Kas naerda või nutta? 笑うべきでしょうか, 泣くべきでしょうか?

18.3.10. da-不定詞の否定形

da-不定詞の前に否定を表す不変化詞 mitte を添えると, da-不定詞の否定形ができます。

Olla või mitte olla? 生きるべきか, 死ぬべきか?
 Kas osta raamat või mitte? 本を買いましょうか, それともよみましょうか?
 Kas saata telegramm või mitte? 電報を送ろうか, それともやめようか?
 Kas teda ka kutsuda? Miks siis mitte kutsuda?
 彼女も呼びましょうか? ぜひ呼びなさいよ。
 Ruttasime, et mitte hilineda. 遅れないように, 急ぎました。

18.3.11. da-不定詞節内の語順

定形動詞の場合，ふつう「動詞 + 修飾語」の語順ですが，不定詞の場合は，「修飾語 + 動詞」の語順が一般的です。

Kirjanik kirjutab romaani.	作家は小説を書いています。
Ma kutsun sind külla.	わたしはあなたを家に招待します。
Me kuulame muusikat.	わたしたちは音楽を聴いています。

Kirjanik hakkab romaani kirjutama.	作家は小説を書き始めます。
Ma kavatsen sind külla kutsuda.	わたしはあなたを家に招待するつもりです。
Meile meeldib muusikat kuulata.	わたしたちは音楽を聴くのが好きです。

18.4. 動詞の活用：副動詞形(des-形)

エストニア語の動詞には，「～しつつ」「～しながら」という意味をもつ形(副動詞形，des-形)があります。この形は，意味・用法の点で，日本語の動詞の連用形(手紙を書き)やテ形(手紙を書いて)に通じる場合があります。

副動詞形は，da-不定詞の末尾の母音-a を-es に変えてつくります。

ma-不定詞	da-不定詞	副動詞形	
luge/ma	luge/da	luge/des	読む：読みつつ
kuul/ma	kuul/da	kuul/des	聞く：聞きつつ
mõtlem/ma	mõtlem/da	mõtlem/des	考える：考えつつ
	~ mõel/da	~ mõel/des	
hakka/ma	haka/ta	haka/tes	始める：始めつつ
tõus/ma	tõus/ta	tõus/tes	起きる：起きつつ
pese/ma	pes/ta	pes/tes	洗う：洗いつつ
mine/ma	min/na	min/nes	行く：行きつつ
tule/ma	tul/la	tul/les	来る：来つつ
sure/ma	sur/ra	sur/res	死ぬ：死につつ
kart/ma	kart/a	kart/es	恐れる：恐れつつ
püüd/ma	püüd/a	püüd/es	努める：努めつつ
söö/ma	süü/a	süü/es	食べる：食べつつ
võtt/ma	võtt/a	võtt/es	取る：取りつつ
näge/ma	näh/a	näh/es	見る：見つつ

Nähes dotsent Laant peahoones, otsustas Jaan temaga rääkida.

講師のラーン先生の顔を見たとき，ヤーンは先生と話をしようと思いました。

Omavahel elavalt vesteldes jalutasid sõbratarid koridoris.

元気良くおしゃべりしながら，ふたりは廊下を歩いていました。

Laboratooriumist koju minnes kaotas Virve kinda.

実験室から帰宅する途中，手袋を片方なくしてしまいました。

Mare istus ajalehti lugedes diivanil. Mareはソファーに座って新聞を読んでいました。

Üliõpilased tervitavad õppejõudu püsti tõustes.

学生たちは，起立して先生に挨拶します。

Eile kaubamajast tulles leidsin rahakoti. 昨日デパートから帰る時，財布を見つけました。

Naerdes jooksid lapsed toast välja.

子どもたちは、笑いながら部屋から外へ走って出て行きました。

副動詞形が目的語を伴う場合、目的語は副動詞形の前に置かれるのが一般的です。

Jaan kandis lippu. Ta sammus kōige ees.

ヤーンは手に旗を持っていました。彼は先頭を歩きました。

Lippu kandes sammus Jaan kōige ees. ヤーンは旗を手にとって先頭を歩きました。

第 19 章(üheksateistkümmes peatükk)

19.1. ma-不定詞の用法

ma-不定詞には、格語尾がつくことができます。ma-不定詞につく格語尾は、内格語尾 -s、出格語尾 -st、欠格語尾 -ta、変格語尾 -ks です。

基本形	内格形	出格形	欠格形	変格形	
õppima	õppima/s	õppima/st	õppima/ta	õppima/ks	学ぶ

ma-不定詞に格語尾のついた形は、ふつう、動詞の mas-形、mast-形、mata-形、maks-形と呼ばれます。

19.1.1. ma-不定詞の場所格的意味

ma-不定詞の基本形、mas-形(内格形)、mast-形(出格形)は、運動の動詞や動詞 olema と一緒に用いられて、「～しに行く」「～しているところだ」「～してきた」のような意味を表します。

Ma lähen sööma. (kuhu?)	[食へに行く]	わたしは食事に行きます。
Ma olen söömas. (kus?)	[食べているところだ]	わたしは食事中です。
Ma tulen söömast. (kust?)	[食べることから]	わたしは食事から戻ります。

Virve läks kohvikusse kohvi jooma.

ヴィルヴェは喫茶室へコーヒーを飲みに行っていました。

Kas Virve on praegu kohvi joomas? ヴィルヴェは今、コーヒーをのんでいるところですか？

Ei, Virve tuli juba kohvi joomast ja läks õppima.

いいえ、ヴィルヴェはもうコーヒー飲んで戻り、勉強に行きました。

19.1.2. ma-不定詞の基本形の用法

ma-不定詞の基本形は次のような動詞とともに用いられます。

19.1.2.1. 運動の動詞

「～しに行く」という意味になります。

Rein läheb treenima. レインはトレーニングに出かけます。

Moskvast saabus kuulus professor loenguid pidama.

著名な教授がモスクワから講義にやってきました。

Poiss jooksis välja palli mängima.

少年はボール遊びをしようと外へ走って出て行きました。

Kas tuled võimlema? あなたは体操に来ますか？

Ei, ma ei tule võimlema, lähen suusatama.

いいえ、体操には来ません。スキーに出かけます。

Me ruttame pileteid ostma.

わたしたちは、急いでチケットを買いに行くところです。

Kuhu te puhkama sõidate? あなたは休暇にどこへ旅行しますか？

19.1.2.2. 動作・行為の開始を表す動詞

Rein hakkab treenima. レインはトレーニングを始めます。

Me hakkame vene keelt õppima: Jaan hakkab tõlkima, Maret hakkab harjutust kirjutama, mina hakkam lugemispala jutustama. Mati ei hakka veel õppima, ta hakkab Peetriga malet mängima.

わたしたちはロシア語の勉強を始めます。ヤーンは翻訳を始めます。マレットは練習問題を書き始めます。わたしは読み物テキストの内容を話し始めます。マッティはまだ勉強にとりかかりません。彼は、ペーテルとチェスを始めます。

Tammede perekond asus elama Tartusse.

タム家の人々は、タルトにやってきて生活を始めました。

Kas sa jääd mind ootama? (行かないで)わたしを待っていてくれますか？

Laps jäi magama. 子どもが寝てしまいました。

Kell jäi seisma. 時計が止まってしまいました。

Kas see paneb sind mõtlema? あなたはそれを聞くと考えてしまいますか？

Ei, see ajab mind naerma. いいえ、笑いたくなります。

19.1.2.3. 動詞 hakkama と algama

「～し始める」の意味の hakkama は ma-不定詞をとりますが、「(～が)始まる」という意味の alagma は、ma-不定詞をとることができません。

「動詞 hakkama + ma-不定詞」は、しばしば「～し始める」という意味が希薄になって、単にこれから起こる出来事を表すだけの場合があります。

Täna hakkab sadama. 今日は雨が降り出します。

Me hakkame ehitama. わたしたちは(建物を)建てはじめます。

Homme hakkame harjutama uues võimlas.

明日、わたしたちは新しい体育館で練習を始めます。

Täna algab kevad. 今日から春です。

Töö algab 1. (= esimesel) augustil. 仕事は8月1日に始まります。

Harjutus algab uues võimlas kell kümme. 練習は新しい体育館で10時に開始されます。

19.1.2.4. 動詞 pidama 「～しなければならない」

Mari peab kirja kirjutama. マリは手紙を書かなければなりません。

Me peame homseks sõnu kordama.

わたしたちは、明日までに単語の復習をしなければなりません。

Virve peab koosolekule minema. ヴィルヴェは会議に行かなければなりません。

Peeter peab vabandama, kuna ta hilines.

ペーテルは遅刻したので、謝らなければなりません。

Kas peab akna avama? 窓を開けなければなりませんか？

19.1.2.5. valmis olema 「～する用意がある」、nõus olema 「～することに同意している」

Ta on valmis (~ nõus) sellest rääkima.

彼は、そのことに関して話す用意があります(話すことに同意しています)。

Rein on valmis vastama, kuna ta õppis eile kaua.

レインは、昨日長時間勉強したので、答える準備ができています。

Me oleme valmis võistlema. わたしたちは試合の準備が出来ています。
 Kas oled nõus minu eest valvesse minema?
 わたしの代わりに電話番に行ってくださいませんか？
 Ei, ma ei saa, aga Sirje on nõus sind aitama.
 いいえ、それはできません。シリエなら喜んで力になってくれます。
 Tõnis on valmis kõike organiseerima, aga meie pole alati nõus osa võtma.
 トニスは何でも企画するのが好きだが、私たちはいつも喜んで参加するわけではない。

19.1.2.6. その他の動詞で ma-不定詞をとるもの

Mari kutsub teed jooma. マリがお茶に招待してくれます。
 Piret õpib klaverit mängima. ピレットは、ピアノを習っています。
 Kes õpetab teda klaverit mängima? 誰が彼女にピアノを教えていますか？
 Dotsent Raud saadab Andrese kriiti tooma.
 講師のラウト先生は、アンドレスをチョークを取りに行かせます。

19.2. 動詞の mas-形の用法

動詞 olema「いる、ある」、käima「行ってくる」などとともに用いられます。

Külalised on tulemas. (= Külalised tulevad varsti.)
 客人たちが到着しようとしているところです [まもなく到着]。
 Mari on kirja lõpetamas. (= Mari lõpetab kirja varsti.)
 マリは手紙を書き終えようとしています [まもなく書き終える]。
 Kas selliseid raamatuid üldse on olemas? この種の本は実際に存在するのですか？
 Me käisime kaks korda nädalas võimlemas. わたしたちは、週2回運動しにでかけます。
 Jüri käis külalistega jalutamas. ユリは客たちと散歩に行っていて帰ってきました。
 Nad käisid Toomemäe vaatamas. 彼らはトーメマキ丘を見に行っていました。

19.3. 動詞の mast-形の用法

動詞 tulema「来る」、saabuma「到着する」、tõusma「起きる」、hoiduma「避ける」、keelduma「拒否する」、tänamata「感謝する」などとともに用いられます。

Ene tuleb võimlemast, Andres tuleb ujumast.
 エネが運動から帰ってきます。アンドレスが泳ぎから帰ってきます。
 Mari saabus mere äärest puhkamast.
 マリは海のほとりで休暇を過ごして帰ってきました。
 Peeter saabus võimlast treenimast.
 ペーテルは体育館でのトレーニングから帰ってきました。
 Tõusin magamast kell kaheksa. わたしは8時に目が覚めて起きました。
 Mari hoidus Jüriga kohtumast. マリはユリと会うのを避けていました。
 Peab hoiduma haigestumast. 病気にならないよう気をつける必要があります。
 Peeter keeldus sellele küsimusele vastamast.
 ペーテルは質問に答えるのを拒みました。
 Võõras keeldus tõendit esitamast. 見知らぬ人は、証明書を見せるのを拒みました。
 Kuidas elad? - Tänan küsimast, hästi.
 いかがお過ごしですか? - (聞いてくださって)ありがとうございます。元気です。
 Palun tule pühapäeval minu juurde. - Tänan kutsumast!

日曜日にわたしのところへ遊びにきてください。 - ご招待ありがとうございます。

19.4. 動詞の mata-形の用法

19.4.1. 副詞的用法

mata-形は、特定の動詞とは結びつかない、副詞句をつくることができます。

Õppimata ei saa homme kontrolltööd kirjutada.

勉強してなければ、明日の小テストは書くことができません。

動詞 olema「ある、いる」と一緒に用いいると、「～してない」という状態を表します。

Mul on ajaleht lugemata. (= Ma ei ole ajalehte lugenud.)

わたしは新聞を読んでありません。

Mul on töö lõpetamata.

わたしは仕事が終えてありません。

Töö on lõpetamata.

しごとは終えてありません。

Kas Moskva rong on veel tulemata?

モスクワからの列車は到着がまだですか？

Jah, aga ta on iga minut tulemas.

はい、でもいつ着いてもおかしくない時刻です。

Kas need õunad on pestud või pesemata?

あのリンゴは洗ってありますか、それとも洗ってありませんか？

動詞 jääma「とどまる」、jätma「残す」、unustama「(～し)忘れる」などとともに用いられます。

Külalised jäid tulemata. (= Külalised ei tulnud.)

客人たちはとうとう来ませんでした。

See film jäi mul vaatamata. (= Seda filmi ma ei vaadanud.)

その映画をわたしは見ませんでした。

Anne jättis sõnad õppimata. (= Anne ei õppinud sõnu.)

アンネは単語を覚えませんでした。

Rein jättis kohtumisele minemata. (=Rein ei läinud kohtumisele.)

レインは約束の会合に出かけませんでした。

Sirje unustas ajalehe tellimata.

シリエは新聞を予約するのを忘れてしまいました。

Jaan unustas piletid ostmata.

ヤーンはチケットを買うのを忘れてしまいました。

19.4.2. 修飾語としての用法

mata-形は、形容詞のように名詞を修飾できます。意味は tud-分詞の反対で「～してない」「～されてない」の意味です。

Ei või juua keetmata vett ega süüa pesemata õunu.

生水(沸かしてない水)を飲んだり、洗ってないリンゴを食べてはなりません。

Andsin ära lõpetamata töö.

仕上がっていない作品を提出しました。

Kutsumata külalised.

招かれざる客。

Parandamata vead.

直されていない間違い。

Kontrollimata harjutus.

答え合わせのすんでいない練習問題。

19.5. 動詞の maks-形の用法

「et + da-不定詞」の代わりに maks-形を用いることができます。

Ta pani käe kõrva juurde, kuulmaks paremini.

もっとよく聞こえるようにと、彼は手を耳にあてました。

Väitmaks seda, tuleb esitada tõendeid.

それを主張するためには、証拠を示さなければなりません。

19.6. 動詞の活用：命令法 2 人称

19.6.1. 「～してください」「～しなさい」

命令法の 2 人称は、人称代名詞 *sina* または *teie* で指される相手に対して、「～してください」「～しなさい」という場合に用いる形です。

人称代名詞 *sina* で指される相手に対しては、現在形の語幹が命令形として用いられます。

Kas sa tuled sisse?

あなたは中へ入ってきますか？

Palun tule sisse!

どうぞ中へ入ってください。

Sa võtad mantli ära.

あなたはコートを脱ぎます。

Võta mantel ära!

コートを脱ぎなさい。

Sa istud siia.

あなたはここに座ります。

Istu siia!

ここに座りなさい。

Sa vaatad seda ajakirja.

あなたはこの雑誌を見ます。

Vaata seda ajakirja!

この雑誌を見なさい。

Sa saadad vanaemale telegrammi.

あなたは、おばあさんに電報を送ります。

Saada vanaemale telegramm!

おばあさんに電報を送ってください。

Sa ostad viis margiga ümbrikku.

あなたは切手つきの封筒を 5 枚買います。

Osta viis margiga ümbrikku!

切手つきの封筒を 5 枚買ってください。

Ma annan sulle aega.

わたしはあなたに時間をあげます。

Palun anna mulle raha!

お金をください。

Ma mõtlen. Ütlen sulle hiljem.

考えています。あなたにはあとで話します。

Enne mõtle, siis ütle!

まず考えて、それから話しなさい。

2 人称単数の命令形の作り方の唯一の例外は、動詞 *minema* です。

Kas sa lähed panka?

あなたは銀行へ行きますか？

Ants, mine palun postkontorisse!

アンツ、郵便局へ行ってちょうだい。

人称代名詞 *teie* で指される相手に対しては、語尾 *-ke* ~ *-ge* をもつ形が用いられます。

Lugege seda kirja!

この本を読みなさい。

Tõlkige esimene lause!

最初の文を訳してください。

Hakake jutustama!

話を始めてください。

Ütelge veel kord!	もう一度言ってください。
Võtke vihikud!	ノートを手に取りなさい。
Vastake küsimustele!	質問に答えなさい。
Püüdke õigesti hääldada!	正しく発音するよう努めなさい。
Minge tahvli juurde!	黒板のところへ行きなさい。
Tehke aknad lahti!	窓を開けなさい。
Õppige uued sõnad selgeks!	新しい単語を学習しなさい。

19.6.2. 2人称複数の命令形の作り方

2人称複数の命令形の語尾は、-ke ~ -ge です。少数の例外を除いて、2人称複数の語尾は、da-不定詞の語幹(da-不定詞形から語尾の -da, -ta などを取り除いた形)に付きます。

19.6.2.1. da-不定詞の語幹

動詞の da-不定詞の語幹と語尾の分離の仕方は次のようになります。以下で「ma-不定詞の語幹」とは、ma-不定詞形から語尾 -ma を取り除いた形のことです。

(1) ma-不定詞の語幹が母音で終わる場合

(1a) da-不定詞が -da/-ta で終わるなら、da-不定詞の語尾は -da/-ta です。

ma-不定詞形	da-不定詞形	
ava/ma	ava/da	開く
aita/ma	aida/ta	手伝う
üttele/ma	ütel/da ~ öel/da	言う
saa/ma	saa/da	受け取る

(1b) 例外：次の動詞は、da-不定詞の語尾が -a です。

müü/ma	müü/a	売る
vii/ma	vii/a	持ち去る
käi/ma	käi/a	歩く

(1c) 例外：次の動詞は、da-不定詞の語尾が -na, -la, -ra です。

mine/ma	min/na	行く
pane/ma	pan/na	置く
ole/ma	ol/la	ある, いる
tule/ma	tul/la	来る
sure/ma	sur/ra	死ぬ

(2) ma-不定詞の語幹が子音で終わる場合

(2a) ma-不定詞の語幹が -t/-d で終わるなら、da-不定詞の語尾は -a です。

ma-不定詞形	da-不定詞形	
sõit/ma	sõit/a	乗る
kart/ma	kart/a	恐れる

and/ma and/a 与える

(2b) ma-不定詞の語幹が -l で終わるなら , da-不定詞の語尾は -da です。

kuul/ma kuul/da 聞こえる

(2c) ma-不定詞の語幹が -s で終わるなら , da-不定詞の語尾は -ta です。

tōus/ma tōus/ta 起きる

(3) 次の動詞は , da-不定詞の語幹の形が変則的です。

	ma-不定詞形	da-不定詞形	
(3a)	pese/ma	pes/ta	洗う
	näge/ma	näh/a	見る
	tege/ma	teh/a	する , 作る
(3b)	jooks/ma	joos/ta	走る
	lask/ma	las/ta	~ させる

19.6.2.2. 語尾 -ge ~ -ke の使い分け

語尾 -ke が用いられるのは , <1> da-不定詞の語尾が -ta である , <2> 2 人称命令形の語尾が無声子音(-t, -d, -s, -h)で終わる語幹につく , の少なくとも一方が成り立つ場合です。<1><2> のどちらもなりたない場合は , 語尾 -ge が用いられます。

語尾 -ke は次のタイプの動詞で用います。

(1a)	aita/ma	aida/ta	aida/ke!	手伝う	<1>
(2a)	sōit/ma	sōit/a	sōit/ke!	乗る	<2>
	kart/ma	kart/a	kart/ke!	恐れる	<2>
	and/ma	and/a	and/ke!	与える	<2>
(2c)	tōus/ma	tōus/ta	tōus/ke!	のぼる	<1><2>
(3a)	pese/ma	pes/ta	pes/ke!	洗う	<1><2>
	näge/ma	näh/a	näh/ke!	見る	<2>
	tege/ma	teh/a	teh/ke!	作る	<2>
(3b)	jooks/ma	joos/ta	joos/ke!	走る	<1><2>
	lask/ma	las/ta	las/ke!	~ させる	<1><2>

その他のタイプの動詞では , 語尾は -ge になります。

(1a)	ava/ma	ava/da	ava/ge!	開く
	ütel/ma	ütel/da	ütel/ge!	言う
		~ öel/da	~ öel/ge!	
(1b)	müü/ma	müü/a	müü/ge!	売る
	vii/ma	vii/a	vii/ge!	持ち去る
	käi/ma	käi/a	käi/ge!	歩く
(1c)	mine/ma	min/na	min/ge!	行く
	pane/ma	pan/na	pan/ge!	置く
	ole/ma	ol/la	ol/ge!	ある , いる
	tule/ma	tul/la	tul/ge!	来る

sure/ma	sur/ra	sur/ge!	死ぬ
(2b) kuul/ma	kuul/da	kuul/ge!	聞こえる

19.6.2.3. 命令形が ma-不定詞の語幹から作られる動詞

(1b)の動詞のうち，ma-不定詞の語幹が -oo- または -öö- をもつ動詞と，(2a)の動詞のうち，da-不定詞の語幹が -tt で終わる動詞がこの例外的タイプです。それぞれ数個の動詞を含むだけです。

	ma-不定詞	da-不定詞	2 人称複数命令形	
(1b)	joo/ma	juu/a	joo/ge!	飲む
	loo/ma	luu/a	loo/ge!	造る
	too/ma	tuu/a	too/ge!	持ってくる
	löö/ma	lüü/a	löö/ge!	叩く
	söö/ma	süü/a	söö/ge!	食べる
(2a)	jät/ma	jätt/a	jät/ke!	捨て置く
	kat/ma	katt/a	kat/ke!	覆う
	küt/ma	kütt/a	küt/ke!	暖房する
	nut/ma	nut/a	nut/ke!	泣く
	pet/ma	pett/a	pet/ke!	欺く
	võt/ma	vött/a	võt/ke!	取る

19.7. 動詞の活用：命令法 3 人称

2 人称複数の命令形の語尾 -ge ~ -ke を -gu ~ -ku に置き換えると，命令法 3 人称と呼ばれる動詞の形ができます。命令法 3 人称は，「～してほしいものだ」「～するのがいいだろう」のように，命令というよりは話者の願望を表す場合に用いられます。

命令法 3 人称には，2 人称のときと異なり，単数形・複数形の区別がありません。また，ふつう動作主が主語の形で明示されます。

Mida te soovitate Leida Kuusikul teha?

レイタ・クーシクにどうするように勧めますか？

Kirjutagu avaldus ja mingu prodekaani juurde.

申請書を書いて，副学部長のところへ行くのがいいでしょう。

Järgmisel semestril õppigu hoolsamini.

来学期はもっとしっかり勉強してほしいと思います。

Tõusku hommikul varem, istugu vähem kohvikus ja töötagu rohkem raamatukogus.

朝もっと早く起き，喫茶店に座っている時間を減らし，図書館で勉強する時間を増やしてほしいです。

Mõteltu ometi oma haige ema peale! 病気の母親のことをもっと考えてほしいですね。

Miks su sõbrad väljas ootavad? あなたの友人たちはなぜ外で待っているのですか？

Tulgu ometi sisse! 中に入れてもらいなさい。

Miks nad esikus seisavad? なぜ玄関のところで立ち止まっているのですか？

Mingtu tuppa ja istugu diivanile, vaadaku uusi ajakirju!

部屋に入って，ソファーにすわり，新着の雑誌を読んでもらいましょう。

19.8. 動詞の活用：命令法(否定形)

命令法の否定形は，それぞれの命令形の前に否定を表す小詞を添えて作ります。命令法で用いられる否定小詞は，2 人称単数 ära，2 人称複数 ärge，3 人称 ärgu です。

命令法の否定形は、2人称では、「～しないでください」「～してはいけません」、3人称では、「～してほしくないものだ」「～しないのがいいだろう」という意味になります。

命令法の否定形は、動詞 lugema「読む」と aitama「手伝う」を例にとると、つぎのようになります。

動詞 lugema「読む」	肯定形	否定形
2人称単数	loe!	ära loe!
2人称複数	lugege!	ärge lugege!
3人称	lugegu!	ärgu lugegu!

動詞 aitama「手伝う」	肯定形	否定形
2人称単数	aita!	ära aita!
2人称複数	aidake!	ärge aidake!
3人称	aidaku!	ärgu aidaku!

Jüri, sa oled kahvatu, ära suitseta nii palju!

ユリ，顔色が悪いですよ。あまりタバコを吸ってはいけません。

Aga sina, Ene, oled närviline, ära joo nii palju kohvi!

エネ，あなた落ち着きがありませんよ。あまりコーヒーを飲んではいけません。

Sõbrad, ärge tülitsege! おいみんな，喧嘩はよせよ。

Ärge sellest rääkige! このことについては口外しないでください。

Ärge mind oodake, me jääme siia.

わたしを待たないでください。わたしたちはここに残りますから。

Ärgu nad tahtku liiga palju! 彼らがあまり多くを欲しないようにさせなさい。

Ärgu soovigu võimatut! (あの人が)無理なことを望むことのないように。

Ärge kartke, kõik läheb hästi! 恐れることはありません。すべてうまく行きますから。

第 20 章(kahekümnes peatükk)

20.1. 動詞の活用：条件法

エストニア語の条件法は、用法の点で、英語の仮定法にほぼ相当する動詞の形です。動詞の条件形には、条件法語幹に人称語尾をつけてつくる単純形と、動詞 *olema* の条件形(単純形)と本動詞の *nud*-分詞とでつくる複合形とがあり、前者は条件法現在、後者を条件法完了と呼ばれます。エストニア語の条件法現在と条件法完了は、用法の点で、それぞれ英語の仮定法過去と仮定法過去完了にほぼ相当します。

20.1.1. 条件法現在

動詞の条件法の語幹は、現在語幹に *-ksi-* (3人称単数では *-ks*)をつけてつくります。人称語尾は、直説法過去の場合と同じ(*-n, -d, -Ø, -me, -te, -d*)です。2人称単数と3人称複数の形がまったく同じになることに特に注意しましょう。

動詞 *kirjutama* 「書く」の条件法現在形は次のとおりです。

直説法現在	条件法現在	
ma kirjuta/n	ma kirjuta/ksi/n	わたしは書くであろうに
sa kirjuta/d	sa kirjuta/ksi/d	
ta kirjuta/b	ta kirjuta/ks	
me kirjuta/me	me kirjuta/ksi/me	
te kirjuta/te	te kirjuta/ksi/te	
nad kirjuta/vad	nad kirjuta/ksi/d	

条件法では、動詞の人称語尾を省略することができます。人称語尾を省略すると、すべての人称において3人称単数形を使うのと同じこととなります。

ma kirjuta/ks	わたしは書くであろうに
sa kirjuta/ks	
ta kirjuta/ks	
me kirjuta/ks	
te kirjuta/ks	
nad kirjuta/ks	

20.1.2. 条件法完了

条件法完了の形は、動詞 *olema* の条件法現在形と本動詞の *nud*-分詞によってつくられます。動詞 *kirjutama* の条件法完了形は次のとおりです。

条件法完了			
ma ole/ksi/n	kirjutanud		わたしは書いたであろうに
sa ole/ksi/d	kirjutanud		
ta ole/ks	kirjutanud		
me ole/ksi/me	kirjutanud		
te ole/ksi/te	kirjutanud		
nad ole/ksi/d	kirjutanud		

条件法現在形と同じく、人称語尾は省略することができます。

ma	ole/ks	kirjutanud	わたしは書いたであろうに
sa	ole/ks	kirjutanud	
ta	ole/ks	kirjutanud	
me	ole/ks	kirjutanud	
te	ole/ks	kirjutanud	
nad	ole/ks	kirjutanud	

20.1.3. 条件法の否定形

条件法現在の否定形は、否定の小詞 *ei* と動詞の条件法の語幹とでつくられ、すべての人称に共通です。動詞 *kirjutama* を例にとると、条件法現在の否定形は次のとおりです。

条件法現在(否定形)			
ma	ei kirjuta/ks		わたしは書かないであろうに
sa	ei kirjuta/ks		
ta	ei kirjuta/ks		
me	ei kirjuta/ks		
te	ei kirjuta/ks		
nad	ei kirjuta/ks		

条件法完了の否定形は、動詞 *olema* の条件法現在の否定形と本動詞の *nud*-分詞形とでつくります。動詞 *kirjutama* の条件法完了の否定形は次のとおりです。

条件法完了(否定形)			
ma	ei ole/ks kirjutanud		わたしは書かなかったであろうに
sa	ei ole/ks kirjutanud		
ta	ei ole/ks kirjutanud		
me	ei ole/ks kirjutanud		
te	ei ole/ks kirjutanud		
nad	ei ole/ks kirjutanud		

条件法完了の否定形では、*ei oleks* の代わりに *poleks* を使うことができます。

ma	pole/ks kirjutanud	わたしは書かなかったであろうに
sa	pole/ks kirjutanud	
ta	pole/ks kirjutanud	
me	pole/ks kirjutanud	
te	pole/ks kirjutanud	
nad	pole/ks kirjutanud	

20.1.4. 条件法の用法(その1)

エストニア語の動詞の条件法は、英語の仮定法にあたるものです。

Ma loeksin (~ loeks) seda raamatut, aga ei ole aega.

この本を読みたいのですが、時間がありません。

Ma arvan, et ta räägiks, kui ta midagi teaks.

彼が何か知っているとしたら、話すはずだと思います。

Ma tuleksin (~ tuleks) teatrisse ainult siis, kui sina ka tuleksid (~ tuleks).
 あなたも来るのなら，わたしは劇場へ行くのですが。

Kui ma ei loeks ajalehti, siis ei teaks ma midagi poliitikast.
 わたしは，もし新聞を読まないとすれば，政治に関して何も知らないでしょう。
 Kas te ei sööks meiega koos lõunat? わたしたちと一緒にお昼を食べませんか？
 Nad ei tahaks peole tulla. 彼らは，パーティーに来たくないでしょうに。

Kes kirjutaks konverentsist artikli? Kas sina kirjutaksid?
 誰か会議について記事を書きませんか。あなた書きませんか？
 Kirjutaksin küll, aga mul ei ole aega.
 書きたいのはやまやまですが，時間がありません。
 Katrin oleks juba eile kirjutanud, aga talle tulid külalised.
 カトリンはもう昨日のうちに書いてしまうはずでしたが，昨日，来客があったのです。
 Täna õhtul me Reinuga kirjutaksime, kui me Katrinilt materjalid saaksime.
 今晚，わたしがレインと書きましょうか。カトリンから資料がもらえたら話ですが。
 Peaksite ise temalt küsima.
 ご自分で彼女にお聞きになったほうがいいです。
 Kui meie Reinuga ei kirjutaks, kas siis jääks artikkel kirjutamata?
 もしレインとわたしが書かなかったら，記事は書かれないままになるのでしょうか？
 Ka Tiina ja Mari kirjutaksid, kuid nad ei kirjutaks nii põhjalikult kui teie.
 ティーナとマリも書くでしょうが，あなたたちほど完璧なものは書かないでしょう。

20.1.5. 条件法の用法(その2)：婉曲な依頼

英語の仮定法と同じく，エストニア語の条件法は，婉曲な依頼を表すことができます。

Palun, kas te ütleksite, mis kell on!	今何時か言っていただけますか。
Palun, kas sa laenaksid mulle oma õpikut!	教科書を拝借できますか？
Palun, kas te ulataksite mulle leiba!	パンをこちらにいただけますか？
Vabandage, kas te näitaksite meile aulat!	申し訳ありませんが，わたしたちに式場を見せていただけますか？

20.1.6. 条件法の語幹と階程交替

条件法の語幹は，動詞の現在語幹からつくられます。したがって，階程交替する動詞の場合，条件法現在が弱階程になるタイプと強階程になるタイプとがあります。

弱階程になるタイプ
 õppima/andma

Te õpiksite paremini.
 あなたはもっとよく勉強するでしょうに。
 Kes saadaks mind?
 誰かわたしを送ってくれますか？
 Nad tõlgiksid selle jutu.
 彼らならその話を翻訳するでしょうに。
 Sa ei tunneks teda.
 あなたは彼を知らないでしょう。

強階程になるタイプ
 hakkama/ütlemata

Ta hüppaks kaugemale.
 彼はもっと遠くまで跳べるでしょうに。
 Kes aitaks vanaisa?
 誰かおじいさんを手伝いますか。
 Ma ei ootaks nii kaua.
 わたしはこんなに長く待たないでしょう。
 Ma tõmbaksin akna kinni.
 わたしは窓を閉めるでしょう。

Jaan peaks vabandama. ヤーンは謝るべきでしょうね。	Puhkaksite mere ääres. あなたは海岸で休養すれば。
Asjad ei kaoks. 物がなくなることはないでしょう。	Õmbleksite uued riided. あなたは新しい服を縫うでしょう。
Teeksite seda kiiremini. もっと手早くそれをするでしょう。	Ei vaidleks temaga. 彼と言い争うことはないでしょう。
Nad näeksid rohkem. 彼らにはもっと多くが見えるでしょう。	Ma ei kahtleks selles. わたしはそれを疑わないでしょう。

20.2. 「～しましょう」

20.2.1. 動詞の勧誘形

エストニア語で「～しましょう」と誘いかける場合は、動詞の1人称複数形を、人称代名詞 *meie* ~ *me* を添えずに用います。対応する否定「～しないようにしましょう」「～するのはよししましょう」は、動詞の1人称複数形に小詞 *ärme* を添えて表します。

Oleme sõbrad! Õpime võõrkeeli! Maksame oma võlad! Aitame sõpru!	友だちでいましょう。 外国語を学びましょう。 借金を返しましょう。 友人たちを援助しましょう。
Ärme kutsume neid! Ärme anname neile raha! Ärme loeme enam “Pravdat”! Ärme ootame Jaanilt midagi!	彼らを招待するのはよししましょう。 彼らにお金をあげないようにしましょう。 もう「プラウダ」は読まないようにしましょう。 ヤーンには何も期待しないようにしましょう。

動詞 *minema* 「行く」だけは、勧誘のための特別な形 *lähme* があります。

Lähme nüüd koju! Ärme lähme homme linna!	もう家に帰りましょう。 明日、町へ行くのはよししましょう。
---	----------------------------------

【補足】

儀式や演説などで改まった言葉遣いをする場合や書きことばでは、話しことばでは用いられない誘いかけの形、すなわち命令法1人称複数形と呼ばれる形が用いられることがあります。

命令法1人称複数の肯定形は、2人称複数の語尾 *-ge* ~ *-ke* を語尾 *-gem* ~ *-kem* に置き換えてつくります。否定形は、肯定形に小詞 *ärgem* を添えて作られます。

	命令法2人称複数	命令法1人称複数
lugema 読む	luge/ge!	luge/gem!
	ärge luge/ge!	ärgem luge/gem!
aitama 手伝う	aida/ke!	aida/kem!
	ärge aida/ke!	ärgem aida/kem!

Olgem sõbrad! Õppigem võõrkeeli! Makskem oma võlad!	友人でいよう（ではないか）。 外国語を学ぼう（ではないか）。 借金を返済しよう（ではないか）。
---	---

Aidakem sõpru! 友人たちを援助しよう（ではないか）。

Ärgem lugegem enam “Pravdat”!
Ärgem oodakem Jaanilt midagi! もう「プラウダ」は読まないようにしよう。
ヤーンからは何も期待しないようにしよう。

20.3. 動詞の活用：伝聞法(kaudne kõneviis)

伝聞法は、話者自身が直接見たり、経験したことからではないことを示す場合に用いる動詞の形で、日本語で、「～であるそうだ」「～であるという」と添える場合に相当します。

また、いわゆる中間話法(直接話法と間接話法の間での形態で、「～と言った」などの表現を添えない話法)の文の動詞も、ふつう伝聞法の形になります。

動詞の伝聞形には、*ma*-不定詞の語尾 *-ma* を語尾 *-vat* に置き換えてつくる単純形と、動詞 *olema* の伝聞形(単純形)と本動詞の *nud*-分詞とでつくる複合形とがあり、前者は伝聞法現在形、後者は伝聞法完了形と呼ばれます。伝聞形には、人称語尾はつきません。いいかえると、伝聞法では、動詞はすべての人称に共通な1つの形しかもっていません。

動詞 *kirjutama*「書く」を例にとると、伝聞形(「書くという」「書いたという」)は次のとおりです。

伝聞法現在		伝聞法完了	
<i>ma</i>	<i>kirjuta/vat</i>	<i>ma</i>	<i>ole/vat kirjuta/nud</i>
<i>sa</i>	<i>kirjuta/vat</i>	<i>sa</i>	<i>ole/vat kirjuta/nud</i>
<i>ta</i>	<i>kirjuta/vat</i>	<i>ta</i>	<i>ole/vat kirjuta/nud</i>
<i>me</i>	<i>kirjuta/vat</i>	<i>me</i>	<i>ole/vat kirjuta/nud</i>
<i>te</i>	<i>kirjuta/vat</i>	<i>te</i>	<i>ole/vat kirjuta/nud</i>
<i>nad</i>	<i>kirjuta/vat</i>	<i>nad</i>	<i>ole/vat kirjuta/nud</i>

動詞の伝聞形の前に否定の小詞 *ei* を添えると、伝聞法の否定形(「書かないという」「書かなかったという」)になります。

伝聞法現在(否定)		伝聞法完了(否定)	
<i>ma</i>	<i>ei kirjuta/vat</i>	<i>ma</i>	<i>ei ole/vat kirjuta/nud</i>
<i>sa</i>	<i>ei kirjuta/vat</i>	<i>sa</i>	<i>ei ole/vat kirjuta/nud</i>
<i>ta</i>	<i>ei kirjuta/vat</i>	<i>ta</i>	<i>ei ole/vat kirjuta/nud</i>
<i>me</i>	<i>ei kirjuta/vat</i>	<i>me</i>	<i>ei ole/vat kirjuta/nud</i>
<i>te</i>	<i>ei kirjuta/vat</i>	<i>te</i>	<i>ei ole/vat kirjuta/nud</i>
<i>nad</i>	<i>ei kirjuta/vat</i>	<i>nad</i>	<i>ei ole/vat kirjuta/nud</i>

伝聞法完了の否定形では、*ei olevat* の代わりに *polevat* を用いることもできます。

<i>ma</i>	<i>pole/vat</i>	<i>kirjuta/nud</i>
<i>sa</i>	<i>pole/vat</i>	<i>kirjuta/nud</i>
<i>ta</i>	<i>pole/vat</i>	<i>kirjuta/nud</i>
<i>me</i>	<i>pole/vat</i>	<i>kirjuta/nud</i>
<i>te</i>	<i>pole/vat</i>	<i>kirjuta/nud</i>
<i>nad</i>	<i>pole/vat</i>	<i>kirjuta/nud</i>

なお、*nud*-分詞が、動詞 *olema* の伝聞形(*olevat*)に伴われずに単独で述語動詞として用いられることがあります。この場合を、伝聞法過去と呼びます。

伝聞法過去

ma kirjuta/nud
 sa kirjuta/nud
 ta kirjuta/nud
 me kirjuta/nud
 te kirjuta/nud
 nad kirjuta/nud

【用例】

Sa olevat mind eile otsinud? 昨日私を探していたそうですね？

Jah, sest kuulsin, et sa olevat juba esmaspäeval Tallinnast saabunud.

はい、あなたがすでに月曜日にタリンから到着していたと聞いたものですから。

Ene ja Rein kavatsevat varsti abielluda. Neil olevat võimalus omaette tuba saada. Ene emale see abielu ei meeldivat. Ta tahtvat, et tütar lõpetaks enne ülikooli.

エネとレインはまもなく結婚するそうです。かれらは自分たちのアパートが手にはいるそうです。エネの母親はこの結婚を快く思っておらず、自分の娘がまず大学を卒業することを望んでいるそうです。

See professor oskavat väga paljusid keeli. Ta olevat noorena palju reisinud. Nüüd kirjutavat ta memuaare.

この教授は、たくさんの言葉を知っているそうです。若い頃、ずいぶんと旅行したとかで、今、回想録を執筆中とのこと。

Vanaonu olnud meremees. Ta purjetanud Lõuna-Ameerikasse.

大叔父は船乗りで、南アメリカに船で渡ったそうです。

20.4. 形容詞をつくる接尾辞 -ne

20.4.1. 副詞についたもの

täna	-	täna/ne	今日	-	今日の
eile	-	eil/ne	昨日	-	昨日の
homme	-	hom/ne	明日	-	明日の
praegu	-	praegu/ne	今	-	現在の
hilja	-	hili/ne	遅くに	-	時間が遅い, 時期が遅い
siin	-	siin/ne	ここで	-	ここの, 当地の
otse	-	otse/ne	まっすぐに	-	まっすぐな, 直接の

20.4.2. 名詞の属格についたもの

liiv	:	liiva	-	liiva/ne	砂	-	砂質の
sool	:	soola	-	soola/ne	塩	-	塩辛い, 塩分を含む
vihm	:	vihma	-	vihma/ne	雨	-	雨降りの
muld	:	mulla	-	mulla/ne	土	-	土に覆われた
hommik	:	hommiku	-	hommiku/ne	朝	-	朝の
päev	:	päeva	-	päeva/ne	日中	-	日中の
kivi	:	kivi	-	kivi/ne	石	-	石製の
õhtu	:	õhtu	-	õhtu/ne	夕方	-	夕べの

20.4.3. 名詞の主格についたもの

vesi	- vesi/ne	水	- 水を含む
lumi	- lumi/ne	雪	- 雪の
veri	- veri/ne	血	- 血の
kuld	- kuld/ne	金	- 金の
raud	- raud/ne	鉄	- 鉄の
mood	- mood/ne	流行	- 当世流行の

接尾辞の直前に -i- が挿入される場合があります。

tuul	- tuul/i/ne	風	- 風の吹く
pilv	- pilv/i/ne	曇	- 曇りの
talv	- talv/i/ne	冬	- 冬の
kevad	- kevad/i/ne	春	- 春の

20.4.4. 名詞句についたもの

接尾辞 -ne が名詞句につく場合は、ふつう属格形につきます。

kaks kopikat	: kahe kopika	- kahekopika/ne	2 コペーカ	- 2 コペーカの
viis rubla	: viie rubla	- viierubla/ne	5 ルーブル	- 5 ルーブルの
kümme tundi	: kümne tunni	- kümnetunni/ne	10 時間	- 10 時間の
kolm aastat	: kolme aasta	- kolmeaasta/ne	3 年	- 3 年間の
neli päeva	: nelja päeva	- neljapäeva/ne	4 日	- 4 日間の

Postmark maksab kaks kopikat. - See on kahekopikane postmark.

切手は 2 コペーカします。これは 2 コペーカの切手です。

Siin on viis rubla raha. - See on viierublane raha.

ここにお金が 5 ルーブルあります。これは 5 ルーブルの紙幣です。

Loeng kestab kaks tundi. - See on kahetunniline loeng.

講義は 2 時間続きます。これは 2 時間の講義です。

接尾辞 -ne が例外的に主格形につくこともあります。

eesti keel	エストニア語	- eestikeel/ne	エストニア語の
kaks keelt	2 つの言語	- kakskeel/ne	二言語併用の

【参考】 kakskeel/ne 二言語併用の - kahekeel/ne 二枚舌の

See siin on eestikeelne raamat.

これはエストニア語の本です。

See seal on venekeelne ajaleht.

あれはロシア語の新聞です。

See on ingliskeelne raadiosaade.

これは英語のラジオ放送です。

第 21 章(kahekümne esimene peatükk)

21.1. 不定人称文(umbisik, indefinite person)

21.1.1. 動詞文の 3 つのタイプ：不定人称文・定人称文・非人称文

6 つの人称代名詞に対応する動詞の形を，特定の人称を表す形という意味で動詞の「人称形」と呼びますが，エストニア語の動詞には，特定の人称代名詞に対応する 6 種類の人称形のほかに，もうひとつ，どの人称代名詞とも結びつかない「不定人称形」と呼ばれる形があります。次の文のように，不定人称形の動詞を述語とする文を「不定人称文」と呼びます。

(1) Mindi linna. 町へ行きました。

人称形の動詞を述語とする文には，原則として，動詞の人称に対応する「主語」を文成分として持っています。主語は，多くの場合，人称代名詞の主格形，または主格名詞句の形で明示されますが，明示されていない場合には，必要に応じて人称代名詞の主格形を使って明示することができます。

(2) a. Poisid läksid linna. 少年たちは町へ行きました。
b. Läksin (~ Ma läksin) linna. わたしは町へ行きました。

このように，人称を特定できる主語を持つ文を，不定人称文に対して「定人称文」(definite person)と呼ぶことにします。定人称文は，一般に，行為者・動作主を主語としてとりあげ，その行為者・動作主をについて，何かを述べる文と性格づけることができます。

人称形の動詞を述語とする文には，「原則として」主語があると述べましたが，エストニア語の 3 人称単数の動詞を述語とする文の中には，その文が表す現象・事態の性格上，主語にあたる動作主・行為者が本来存在しないものがあります。主語となるものがないわけですから，当然，主語のない文となります。

(3) a. Väljas läks pimedaks. 外が暗くなりました。
b. Mul oli külm. わたしは寒かったです。

上の(3b)の文は，日本語に訳してしまうと，1 人称単数の「わたし」を主語とする定人称文のように見えますが，「わたし」を表す代名詞が主格の ma でなく接格の mul になっているほか，動詞が 1 人称単数形の olin でなく 3 人称単数形の oli になっていることから，この文にも文法的に主語と呼べる要素がないことがわかります。

エストニア語では，(3a)(3b)のようなタイプの主語のない文が頻繁に使われます。このような文を，主語がないために特定の人称に関係づけることができない文と言う意味で「非人称文」(impersonal)と呼びましょう。非人称文の動詞は，すでに述べたようにいつも 3 人称単数形です。

エストニア語の不定人称文は，行為者・動作主がいるにもかかわらず，それを主語にとりあげて話題としないで，行われる行為や動作の方に注意を向ける文です。別の言い方をすれば，不定人称文とは，行為者・動作主の存在を示すだけで，明示せずに不特定のままにおく文ということになります。ただし，不定人称文が明示せずにおく行為者・動作主は，かならず人間でなければなりません。

不定人称文は，主語(主格名詞句)が現れることができない文という点で，動作主・行為者がいない現象・事態を表すために主語がない非人称文と似ているところがあります。しかし，

不定人称文は、行為者・動作主を明示しないだけで、現実には行為者・動作主がいるわけですから、もともと行為者・動作主がない現象・事態を表す非人称文とは、別の概念です。また、非人称文の動詞が3人称単数形であるのに対し、不定人称文の動詞が不定人称形という特別の形になる点も、非人称文と不定人称文がまるで別の概念であることを示しています。

- (4) a. Meie olime suvel Saaremaal. わたしたちは、夏、サーレマーにいました。[定人称文]
 b. Teie lähete rongiga linna. あなたたちは、列車で町へ行きます。[定人称文]
 (5) a. Suvel oldi Saaremaal. 夏、サーレマーに行つて来ました。[不定人称文]
 b. Linna minnakse rongiga. 町へは列車で行きます。[不定人称文]
 (6) a. Jaanuaris oli külm. 1月には寒かったです。[非人称文]
 b. Talvel läheb vara pimedaks. 冬には早く暗くなります。[非人称文]

【参考】

エストニア語の不定人称文の中には、ドイツ語の *man* が主語の構文や、フランス語の *on* が主語の構文に対応するものも多く見られます。ドイツ語の *man* もフランス語の *on* も、不定代名詞と呼ばれ、必ず人をさす点が、エストニア語の不定人称文に通じています。

- (7) a. Eestis kõneldakse eesti keelt. エストニアではエストニア語が話されます。
 b. Seda rohtu tarvitatakse kolm korda päevas. この薬は1日3回服用します。

- ドイツ語： a) In Estland spricht man Estnisch.
 b) Diese Medizin braucht man dreimal täglich.
 フランス語： a) En Estonie, on parle estonien.
 b) On prend cette médicament trois fois par jour.

21.1.2. 動詞の不定人称形

不定人称形には、人称形と同じく、時制や法の形が揃っています。

ただし、不定人称の複合形では、本動詞は *nud*-分詞形ではなく、*tud*-分詞形になりますが、動詞 *olema* の肯定形・否定形は、不定人称形ではなく、3人称単数形になりますので、注意しましょう。

õppima 「学ぶ」の不定人称形						
単純形：	肯定形		否定形			
現在形	õpi/ta/kse		ei	õpi/ta		
過去形	õpi/ti		ei	õpi/tud		
条件法現在形	õpi/ta/ks		ei	õpi/ta/ks		
伝聞法現在形	õpi/ta/vat		ei	õpi/ta/vat		
命令法現在形	õpi/ta/gu		är/gu õpi/ta/gu			
複合形：						
現在完了形	on	õpi/tud	ei	ole	õpi/tud	
過去完了形	oli	õpi/tud	ei	ol/nud	õpi/tud	
条件法完了形	ole/ks	õpi/tud	ei	ole/ks	õpi/tud	
伝聞法完了形	ole/vat	õpi/tud	ei	ole/vat	õpi/tud	
命令法完了形	ol/gu	õpi/tud	är/gu ol/gu õpi/tud			

21.1.3. 不定人称文の作り方

不定人称文には、定人称文と比べて、<1> 主語がない、<2> 動詞が不定人称形である、と

いう2つの大きな特徴があることはすでに指摘しました。

(8) Söödi ja joodi. 飲んだり，食べたりしました [飲み食いが行われた]。

不定人称文には，定人称文に対して，もう1つ大きな違いがあります。

<3>定人称文の属格目的語にあたるものが，すべて主格で現れる。

いいかえると，不定人称文の(直接)目的語の格表示の仕方は，命令文の場合と同じになります。分格目的語や主格目的語(複数主格)の現れかたは，定人称文の場合と変わりません。

(9) a. Ostan selle sõnaraamatu kindlasti. [属格目的語]

わたしは，この辞書をきつと買います。

b. See sõnaraamat ostetakse kindlasti. [主格目的語]

この辞書は，きつと買われます。

(10) a. Ostan suhkrut (~ kartuleid) kindlasti. [分格目的語]

わたしは砂糖(~ジャガイモ)をきつと買います。

b. Suhkrut (~ Kartuleid) ostetakse kindlasti. [分格目的語]

砂糖(~ジャガイモ)はきつと買われます。

(11) a. Ostan kõik õunad kindlasti. [主格目的語]

わたしはリンゴを全部，明日買います。

b. Kõik õunad ostetakse kindlasti. [主格目的語]

リンゴは全部，きつと買われます。

この<3>の現象があるために，目的語が文頭に置かれた不定人称文は，あたかも主語をもつ受動文のような姿になります。実際，(9b)(10b)(11b)のような文は受動文に訳すとぴったりする場合があります。

不定人称文は，エストニア語に特徴的な文であり，ほかの言語にはない構文です。その意味・用法の多様さを，次の実例で垣間みてください。

Mida siin ehitatakse?

ここでは何を建築していますか？

Mis laulu seal lauldakse?

そこではどんな歌を歌いますか？

Kus müüakse lilli?

花はどこで売っていますか？

Preagu siin ei ehitata.

今ここでは建築が行われていません。

Seal ei laulda.

そこでは歌を歌いません。

Siin lilli ei müüda.

ここでは花を売っていません。

Ajalehes teatatakse, et kontsert toimub homme õhtul.

新聞で，明日の晩コンサートがあると告知されています。

Sellest siin ei teata.

このことに関して，ここでは何も知られていません。

Teist korda sind ei paluta.

あなたには2度とお願いしません。

Miks teie perekonnas ei loeta ilukirjandust?

あなたのご家庭で文学が読まれないのはなぜですか。

Pühapäeval ei minda tööle.

日曜日には，出勤しません。

Tutvutakse uue linnaosaga, mida ei tunta.

町のまだ知らない新しい地区の見学をします。

Kuidas seda väljakut nimetatakse? この広場は何と呼ばれていますか？

Väljaku nime ei teata. 広場の名前は不明です。

Sõidetakse teatri juurde. 劇場に車で乗り付けます。

Mis teatris täna mängitakse? 今日劇場で何が上演されますか？

Draamat ei taheta vaadata, tahetakse näha balletti.

ドラマが見たいのではありません。バレエが見たいのです。

Kioskist ostetakse ajalehti, brošüüre ei osteta.

キヨスキでは新聞を買います。パンフレットは買いません。

21.1.4. 補足：不定人称文といわゆる「受動文」

不定人称文は、行為者・動作主が主語となっていない文であるという点で、いわゆる受動文と似ているところがあります。エストニア語には、英語や日本語の(直接)受動文に相当する構文が事実上存在しませんし、実際、次の例のように、エストニア語の不定人称文が、日本語や英語の受動文にぴったり訳せる場合も決して少なくありません。

(12) Võid tehakse piimast. バターは牛乳から作られます。(Butter is made from milk.)

しかし、エストニア語の不定人称文は、次のような点で、受動文とははっきり異なった概念です。

<1> 受動文では、動作・行為を受ける対象(能動文の直接目的語に相当する要素)が主語として現れますが、エストニア語の不定人称文では、動作・行為を受ける対象(能動文の直接目的語に相当する要素)は、直接目的語のままにおかれます。

不定人称文	定人称文
(13) a. Võid tehakse piimast. バターは牛乳から作られます。	←→ Me teeme võid piimast.
b. Sind kutsutakse. あなたは招待されます。	←→ Me kutsume sind.

受動文は主語をもっていますから、動詞が人称変化する言語では、受動文の述語も人称変化します。たとえばドイツ語の受動文の述語は、助動詞 werden の人称形と本動詞(例：loben「ほめる」)の過去分詞によって表されます。

(14) Ich werde gelobt.	わたしはほめられる
Du wirst gelobt.	あなたはほめられる
Er wird gelobt.	彼はほめられる
Wir werden gelobt.	わたしたちはほめられる
Ihr werdet gelobt.	あなたたちはほめられる
Sie werden gelobt.	彼らはほめられる

エストニア語は動詞が人称変化する言語ですが、不定人称文は主語をもちませんから、不定人称文には動詞の人称変化はなく、動詞は常に一定の形、すなわち不定人称形で現れます。

(15) Mind kiidetakse. わたしはほめられた

Sind	kiidetakse.	あなたはほめられた
Teda	kiidetakse.	彼はほめられた
Meid	kiidetakse.	わたしたちはほめられた
Teid	kiidetakse.	あなたたちはほめられた
Neid	kiidetakse.	彼らはほめられた

(15)の各文においては、(14)のドイツ語の文で主格の人称代名詞(ich, du, er, wir, ihr, sie)が現れているところに、人称代名詞の分格目的語(mind, sind, teda, meid, teid, neid)が現れています。

<2> 受動文を構文としてもつ言語では、動詞が受動文をつることができるかどうかは、一般に、その動詞が他動詞である(主語と直接目的語をとる動詞である)かどうかと関係がありますが、エストニア語の動詞が不定人称文をつることができるかどうかは、その動詞が他動詞であるかどうかとは無関係です。たとえば、次の3つの不定人称文の述語である動詞 minema「行く」、sõitma「(車で)行く、乗る」、lendama「(飛行機で)行く、飛ぶ」は、いずれも目的語を取らない動詞です。

- (16) a. Pühapäeval ei minda tööle. 日曜日には、出勤しません。
 b. Sõidetakse teatri juurde. 劇場に車で乗り付けます。
 c. Tokiosse lennatakse 10 tunniga. 東京まで飛行機で10時間です。

エストニア語で動詞が不定人称文を作るかどうかは、それが人間の動作・行為を表す動詞であるかどうかによって決まります。したがって、明かな他動詞であっても、人間の動作・行為以外のものを表す動詞は、不定人称文をつくることはできません。

たとえば、「教会が火事で焼失する」事件が起こったとします。この事件を、英語の他動詞 destroy「破壊する」を用いると、能動文でも受動文でも表すことができます。

- (17) The fire destroyed the church.
 (18) a. The church was destroyed by the fire.
 b. The church was destroyed.

能動文(17)と受動文(18a)は、ともに、崩壊したのが教会で、その原因が火事であったことを述べている点が共通していますが、(17)が「火事(が起こったこと)」に注目した言い方であるのに対し、(18a)は「教会(がどうなったか)」に注目した言い方になっている点で異なります。また、(18a)と(18b)の2つの受動文の違いは、教会の建物が崩壊した原因を明示しているかどうかにあります。

とくにこの(18b)のような受動文は、「教会の建物が崩壊した」という事件を述べているだけとなり、その原因が、たとえば異教徒の砲撃とか放火のように、人間の意図的な行為であったのか、あるいは、不注意による失火のように、人間の意図の関与しない出来事であったのかを、あいまいにしまいますから、特定の間人が行為者・動作主として関与していることに触れるのを避ける文体的手段として、しばしば利用されます。

同じ出来事を、英語の動詞 destroy にほぼ相当するエストニア語の動詞 hävitama を用いて表して見ましょう。(19a)(19b)が定人称文、(20a)(20b)が不定人称文です。

- (19) a. Tulekahju hävitas kiriku. (その)火事で教会が焼け落ちました。
 b. Kiriku hävitas tulekahju. 教会は火事で焼け落ちました。
 (20) a. Hävitati kirik. 教会の破壊が行われました。
 b. Kirik hävitati. 教会は破壊されました。

定人称文(19a)と(19b)は、ともに、崩壊したのが教会で、その原因が火事であったことを述べている点が共通していますが、(19a)が「火事(が起こったこと)」に注目した言い方であるのに対し、(19b)は「教会(がどうなったか)」に注目した言い方になっている点で異なります。すなわち、文の機能に注目すると、おおむね、定人称文(19a)は英語の能動文(17)に対応し、定人称文(19b)は英語の受動文(18a)にほぼ対応している文ということになります。

これに対し、必ず人間の行為者・動作主を前提とする不定人称文(20a)(20b)は、どちらも、「教会が(誰かによって)破壊された」という意味であり、英語の受動文(18b)が「教会の崩壊」のことだけを話題にし、その原因には一切触れていないのとは対照的です。(20a)と(20b)の違いは、(20a)がどんな事件が起こったかという観点から事態を述べているのに対し、(20b)は教会がどうなったかに注目して事件を述べた表現である点にあります。いずれの場合も、教会の破壊を行ったのは、たとえば異教徒とかテロリストなどの人間であって、火事が直接の原因とするなら、失火ではなく放火でなければ用いることが出来ない文です。

定人称文の(19a)(19b)は、英語の能動文(17)同様、火事が失火と放火のいずれであるかに関係なく用いることができます。一方、不定人称文の(20a)(20b)は、失火が直接の原因ではありえません。したがって、不定人称文(20a)(20b)は、定人称文(19a)(19b)に対応した文ではないことがわかります。

これに対して、英語では、能動文の(17)が成り立つ状況ならば、受動文の(18a)(18b)はどちらも言えます。受動文(18a)(18b)は、能動文の(17)にきちんと対応しているわけです。

21.2. 不定人称の過去分詞(tud-分詞)

動詞の不定人称の変化形は、不定人称の過去分詞(tud-分詞、受動過去分詞)をもとにしてつくることができます。不定人称の過去分詞の語尾は、-tud ~ -dud です。階程交替する動詞の場合、不定人称の過去分詞は、弱階程になります。

21.2.1. tud-分詞の作り方

ma-不定詞の語幹が母音で終わり、かつ da-不定詞の語幹が ma-不定詞の語幹と同じ動詞は、現在語幹に -tud をつけます。

(1a)	ela/ma	ela/da	ela/n	ela/tud	住む
(1b)	luge/ma	luge/da	loe/n	loe/tud	読む

da-不定詞の語尾が -ta であり、かつ da-不定詞の語幹が母音で終わる場合は、da-不定詞の語尾 -ta を -tu で置き換えると、tud-分詞になります。

(2)	hakka/ma	haka/ta	haka/tud	始める
-----	----------	---------	----------	-----

ma-不定詞の語幹が1音節で母音で終わる動詞は、ma-不定詞の語幹に語尾 -tud をつけると tud-分詞形が得られます。

(3)	saa/ma	saa/da	saa/dud	受ける
-----	--------	--------	---------	-----

da-不定詞の語幹が -r, -l, -n で終わる動詞は、da-不定詞の語幹に語尾 -dud をつけると tud-分詞形が得られます。

(4)	kuul/ma	kuul/da	kuul/dud	聞く
-----	---------	---------	----------	----

ma-不定詞の語幹と da-不定詞の語幹が等しく，ともに -s で終わる動詞の場合は，da-不定詞の語幹に語尾 -tud をつけると tud-分詞形が得られます。

(5) tōus/ma tōus/ta tōus/tud 起きあがる

ma-不定詞の語幹と da-不定詞の語幹が等しく，ともに -d で終わる動詞の場合は，語幹末の -d を取り，語尾 -tud をつけると tud-分詞形が得られます。

(6) and/ma and/a an/tud 与える

ma-不定詞の語幹と da-不定詞の語幹が等しく，ともに -t で終わる動詞の場合は，語幹末の -t を -de に替え，語尾 -tud をつけると tud-分詞形が得られます。

(7) sōit/ma sōit/a sōid/e/tud 乗る

21.2.2. 例外

次の各動詞の tud-分詞の形を特に覚えましょう。

ma-不定詞	da-不定詞	tud-分詞	
aja/ma	aja/da	ae/tud	追いたてる
pida/ma	pida/da	pee/tud	保つ
tege/ma	teh/a	teh/tud	作る
nāge/ma	nāh/a	nāh/tud	見る
pese/ma	pes/ta	pes/tud	洗う
lask/ma	las/ta	las/tud	～させる
jooks/ma	joos/ta	joos/tud	走る
taht/ma	taht/a	tah/e/tud	欲する
nut/ma	nut/a	nut/e/tud	泣く
pet/ma	pet/a	pet/e/tud	欺く
ost/ma	ost/a	ost/e/tud	買う
tōst/ma	tōst/a	tōst/e/tud	上げる
vōt/ma	vōtt/a	vōe/tud	取る
kat/ma	katt/a	kae/tud	覆う
jāt/ma	jätt/a	jäe/tud	捨ておく
mat/ma	matt/a	mae/tud	埋める
küt/ma	kütt/a	kōe/tud	暖める
mōtle/ma	mōtel/da ～ mōel/da	mōtel/dud ～ mōel/dud	考える
ütle/ma	ütel/da ～ öel/da	ütel/dud ～ öel/dud	言う

第22章(kahekümne teine peatükk)

22.1. 不定人称の現在形

不定人称の現在形は、一部の例外を除いて、すべて tud-分詞から導くことができます。

tud-分詞の語尾が -tud の場合には、不定人称現在の肯定形の語尾は -takse、否定形の語尾は -ta になります。

tud-分詞の語尾が -dud の場合には、不定人称現在の肯定形の語尾は -dakse、否定形の語尾は -da になります。

		不定人称現在			
ma-不定詞	tud-分詞	肯定形	否定形		
(1a) ela/ma	ela/tud	ela/takse	ei ela/ta		住む
(1b) luge/ma	loe/tud	loe/takse	ei loe/ta		読む
(2) hakka/ma	haka/tud	haka/takse	ei haka/ta		始める
(3) saa/ma	saa/dud	saa/dakse	ei saa/da		受ける
(4) kuul/ma	kuul/dud	kuul/dakse	ei kuul/da		聞く
(5) tõus/ma	tõus/tud	tõus/takse	ei tõus/ta		起きあがる
(6) and/ma	an/tud	an/takse	ei an/ta		与える
(7) sõit/ma	sõide/tud	sõide/takse	ei sõide/ta		乗る

この規則は、tud-分詞の作り方が変則的な動詞のほとんどについてもなりたちます。

aja/ma	ae/tud	ae/takse	ei ae/ta		追いたてる
pida/ma	pee/tud	pee/takse	ei pee/ta		保つ
pese/ma	pes/tud	pes/takse	ei pes/ta		洗う
lask/ma	las/tud	las/takse	ei las/ta		～させる
jooks/ma	joos/tud	joos/takse	ei joos/ta		走る
taht/ma	tahe/tud	tahe/takse	ei tahe/ta		欲する
nut/ma	nute/tud	nute/takse	ei nute/ta		泣く
pet/ma	pete/tud	pete/takse	ei pete/ta		欺く
ost/ma	oste/tud	oste/takse	ei oste/ta		買う
tõst/ma	tõste/tud	tõste/takse	ei tõste/ta		上げる
võt/ma	võe/tud	võe/takse	ei võe/ta		取る
kat/ma	kae/tud	kae/takse	ei kae/ta		覆う
jät/ma	jäe/tud	jäe/takse	ei jäe/ta		置き去る
mat/ma	mae/tud	mae/takse	ei mae/ta		埋める
küt/ma	kõe/tud	kõe/takse	ei kõe/ta		暖める
mõtlet/ma	mõtlet/dud	mõtlet/dakse	ei mõtlet/da		考える
	~ mõel/dud	~ mõel/dakse	~ mõel/da		
ütlet/ma	ütlet/dud	ütlet/dakse	ei ütlet/da		言う
	~ öel/dud	~ öel/dakse	~ öel/da		

この規則の例外となるのは、次の動詞です。これらの動詞は、不定人称の現在形の肯定形のみが変則的で、da-不定詞の形に -kse をつけて作られます。否定形は、一般規則に従って、tud-分詞から導かれます。

ma-不定詞	da-不定詞	不定人称現在(肯定形)	
	tud-分詞	不定人称現在(否定形)	
ole/ma	ol/la	ol/la/kse	いる, ある
	ol/dud	ei ol/da	
tule/ma	tul/la	tul/la/kse	来る
	tul/dud	ei tul/da	
mine/ma	min/na	min/na/kse	行く
	min/dud	ei min/da	
pane/ma	pan/na	pan/na/kse	置く
	pan/dud	ei pan/da	
sure/ma	sur/ra	sur/ra/kse	死ぬ
	sur/dud	ei sur/da	
käi/ma	käi/a	käi/a/kse	行ってくる
	käi/dud	ei käi/da	
müü/ma	müü/a	müü/a/kse	売る
	müü/dud	ei müü/da	
vii/ma	vii/a	vii/a/kse	持ち去る
	vii/dud	ei vii/da	
joo/ma	juu/a	juu/a/kse	飲む
	joo/dud	ei joo/da	
loo/ma	luu/a	luu/a/kse	造る
	loo/dud	ei loo/da	
löö/ma	lüü/a	lüü/a/kse	打つ
	löö/dud	ei löö/da	
söö/ma	süü/a	süü/a/kse	食べる
	söö/dud	ei söö/da	
too/ma	tuu/a	tuu/a/kse	持ってくる
	too/dud	ei too/da	
tege/ma	teh/a	teh/a/kse	作る
	teh/tud	ei teh/ta	
näge/ma	näh/a	näh/a/kse	見る
	näh/tud	ei näh/ta	

22.2. 不定人称現在形の用例

Maitse üle ei vaielda.

好みについて議論しても意味がありません [蓼食う虫も好き好き]。

Mille üle vaieldakse?

何について議論しているのですか？

Koosolekule ei jääda hiljaks (= ei hilineta).

会議には遅れないように。

Mis küsimustega teie ringis tegeldakse?

あなたのサークルはどんな問題を扱っているのですか？

Kuidas saadakse uut kirjandust?

どうしたら新しい文献が手に入りますか？

Kas mõteldakse juba kevadisele konverentsile?

もう春の会議のことを考えているのですか [誰か考えていますか] ？

Mind küsiti, aga Maretit ei küsitud.

わたしはいるかと聞かれましたが、マレットは聞かれませんでした。

Eile EPA meeskonnale kaotati, täna enam ei kaotatud.

昨日は、エストニア農業大学のチームに負けましたが、今日はもう負けませんでした。

22.4. 不定人称現在完了

不定人称の現在完了は、動詞 *olema* の直説法 3 人称現在形 *on* と *tud*-分詞でつくります。

不定人称の現在完了の否定形は、動詞 *olema* の直説法 3 人称現在の否定形 *ei ole* と *tud*-分詞でつくります。

不定人称現在完了			
ma-不定詞	肯定形	否定形	
(1a) <i>ela/ma</i>	<i>on ela/tud</i>	<i>ei ole ela/tud</i>	住む
(1b) <i>luge/ma</i>	<i>on loe/tud</i>	<i>ei ole loe/tud</i>	読む
(2) <i>hakka/ma</i>	<i>on haka/tud</i>	<i>ei ole haka/tud</i>	始める
(3) <i>saa/ma</i>	<i>on saa/dud</i>	<i>ei ole saa/dud</i>	受ける
(4) <i>kuul/ma</i>	<i>on kuul/dud</i>	<i>ei ole kuul/dud</i>	聞く
(5) <i>tõus/ma</i>	<i>on tõus/tud</i>	<i>ei ole tõus/tud</i>	起きあがる
(6) <i>and/ma</i>	<i>on an/tud</i>	<i>ei ole an/tud</i>	与える
(7) <i>sõit/ma</i>	<i>on sõide/tud</i>	<i>ei ole sõide/tud</i>	乗る

Kas see sild on enne sõda ehitatud? この橋は戦争前にかけられたものですか？

Ei, see sild ei ole ehitatud enne sõda. いいえ、この橋は戦前にかけられたものではないです。

Kas seda laulu on sageli lauldud? この歌はよく歌われたものですか？

Ei, seda laulu ei ole sageli lauldud. いいえ、この歌はよくは歌われませんでした。

Kas siin on alati roose müüdud? ここではいつもバラを売っていましたか？

Ei, siin ei ole alati roose müüdud.

いいえ、ここでいつもバラを売っていたわけではありません。

22.5. 不定人称過去完了

不定人称の過去完了は、動詞 *olema* の直説法 3 人称過去形 *oli* と *tud*-分詞でつくります。

不定人称の過去完了の否定形は、動詞 *olema* の直説法 3 人称過去の否定形 *ei olnud* と *tud*-分詞でつくります。

過去完了は、過去のある時点まで継続して行われていた(または、過去のある時点までに完了していた)動作・行為を表します。

不定人称過去完了			
ma-不定詞	肯定形	否定形	
(1a) <i>ela/ma</i>	<i>oli ela/tud</i>	<i>ei olnud ela/tud</i>	住む
(1b) <i>luge/ma</i>	<i>oli loe/tud</i>	<i>ei olnud loe/tud</i>	読む
(2) <i>hakka/ma</i>	<i>oli haka/tud</i>	<i>ei olnud haka/tud</i>	始める
(3) <i>saa/ma</i>	<i>oli saa/dud</i>	<i>ei olnud saa/dud</i>	受ける
(4) <i>kuul/ma</i>	<i>oli kuul/dud</i>	<i>ei olnud kuul/dud</i>	聞く
(5) <i>tõus/ma</i>	<i>oli tõus/tud</i>	<i>ei olnud tõus/tud</i>	起きあがる
(6) <i>and/ma</i>	<i>oli an/tud</i>	<i>ei olnud an/tud</i>	与える
(7) <i>sõit/ma</i>	<i>oli sõide/tud</i>	<i>ei olnud sõide/tud</i>	乗る

Kas seda silda oli kaua plaanitud?

この橋の計画が始まってから長くたっていましたか？

Ei, seda silda ei olnud plaanitud kaua.

いいえ，その橋の計画が始まってから長くたっていませんでした。

Sinna oli ehitatud sild. 当時，そこに橋がかけてありました。

Seda laulu oli lauldud, kui vanaisa noor oli. Aga seda teist laulu ei olnud siis lauldud.

この歌は祖父が若い頃歌われていたものです。もう1つの歌のほうは当時歌われていませんでした。

Kuulsin, et siin oli ainult kollaseid roose müüüdud, aga punaseid ei olnud müüüdud.

当時ここでは，黄色いバラだけで，赤いバラは売っていませんでした。

22.6. 不定人称の用例(追加)

Kohvi juuakse kuumalt.

コーヒーは熱くして飲みます。

Klubis mängitakse malet.

集会所ではチェスをします。

Instituudis õpitakse mitmeid võõrkeeli.

大学では，いろいろな外国語を学びます。

Viimane mäng kaotati.

最後の試合に負けました。

Õnnitleti juubilari.

その日の主役にお祝いの言葉が送られました。

Vaheajal avati aknad.

休み時間に窓をあけました。

Kell kümme lukustati väravad.

10時に門が閉められました。

Selle vabriku toodangut eksporditakse välismaale.

この工場の製品は外国に輸出されます。

Jõe äärde ehitatakse uut elamut.

川のほとりに新しい住居が建てられます。

Taldrikuid pestakse kuuma veega.

お皿はお湯で洗います。

Haridusele on kulutatud palju raha.

教育に巨額のお金がつぎ込まれました。

Sel aastal on korraldatud huvitavaid ekskursioone.

今年は興味深い旅行が催されました。

Millal see artikkel on kirjutatud?

この論文はいつ書かれましたか？

See kool on asutatud möödunud sajandil.

この学校は前世紀に設立されました。

Need roosid on müüüdud.

このバラは売却済みです。

22.7. 従属接続詞 et と間接疑問文

22.7.1. 「言う」「思う」などの意味の動詞とともに

接続詞 et を用いるか，間接疑問文にするかは，動詞の意味によって決まってきます。

Poiss ütles, et ta oskab ujuda.

少年は，彼は泳げると言いました。

Poiss arvas, et ta oskab ujuda.

少年は，彼が泳げると思っています。

Poiss küsis, kas ta oskab ujuda.

少年は，彼は泳げるかと聞きました。

動詞 teadma「知っている」は，接続詞 et と間接疑問文の両方をとることができます。次の2つの文の意味の違いに注意しましょう。

Poiss ei teadnud, et ta sõber oskab ujuda. 少年は友人が泳げるとは知りませんでした。

Poiss ei teadnud, kas ta sõber oskab ujuda. 少年は友人が泳げるかどうか知りませんでした。

接続詞 et も間接疑問文も，指示詞 se に先行されることが出来ます。

Poiss ei teadnud seda, et ta sõber oskab ujuda. 少年は友人が泳げるとは知りませんでした。
Poiss ei teadnud seda, kas ta sõber oskab ujuda.
少年は友人が泳げるかどうか知りませんでした。

上の文では、指示詞 *see* の分格 *seda* は、従属節が動詞 *teadma* の目的語であることを明示する働きをしているだけで、*seda* のあるなしは文の意味に影響を与えません。

22.7.2. 指示詞 *see* が先行するもの

接続詞 *et* の導く従属節や、間接疑問文に先行する指示詞 *see* は、動詞の格支配に応じて、様々な格で現れます。指示詞 *see* はまた、後置詞とともに現れます。

主格：

Teda hämmastas see, et Margus oli vait.

マルクスが黙っていたことに彼にはおどろきました。

Talles meenus see, et tuleb poodi minna.

お店に行かなければならないことを彼女は思い出しました。

分格：

Poiss ei teadnud seda, et ta sõber oskab ujuda.

少年は友人が泳げることを知りませんでした。

Poiss ei teadnud seda, kas ta sõber oskab ujuda.

少年は友人が泳げるかどうか知りませんでした。

その他の格：

Ta oli kindel selles, et saab ülesandega hakkama.

彼は、その課題を何とかできるにちがいないと思いました。

Ta kahtles selles, kas ta saab ülesandega hakkama.

彼は、その課題を何とかできるかどうか自信がありませんでした。

Ta rääkis sellest, et on väsinud, juba mitu päeva.

もう何日も疲労状態にあることを彼は話してくれました。

Ta viitas sellele, et teised tema vigu tavaliselt ei märka.

彼は、自分の間違いがふつう他人には気づかれないことを指摘しました。

Ta leppis sellega, et ülikooli sisse ei saanud.

彼女は、大学に入学できなかったことに甘んじました。

後置詞とともに：

Ta jäi ka pärast vaidlust selle juurde, et tänapäeva noorus on laisk.

議論を終えたあとでも、彼は、今の若者は怠惰であるという意見のままでした。

Ta lootis selle peale, et keegi teda parandab.

彼女は、誰かが直してくれることに期待していました。

Ma jäin hiljaks selle tõttu, et tramm täna hommikul ei käinud.

わたしが遅刻したのは、今朝市電が来なかったからです。

22.7.3. 程度

Ma olin nii tark, et oskasin enne hinnatõusu endale mööblit osta.

わたしには、価格上昇の前に家具を買うだけの知恵がありました。

See auto on nii suur, et sinna mahtub kuus inimest.

この車は大きいので、6人乗ることができます。

22.8. 接尾辞-line

22.8.1. 名詞の属格についてのもの

hind	: hinna	値段	- hinna/line	値段のはる
keha	: keha	身体	- keha/line	身体の
närv	: närvi	神経	- närvi/line	神経質な
meditsiin	: meditsiini	医学	- meditsiini/line	医学の
kultuur	: kultuuri	文化	- kultuuri/line	文化の
ajalugu	: ajaloo	歴史	- ajaloo/line	歴史の

22.8.2. 名詞句の属格についてのもの

kaks tuba	: kahe toa	- kahetoa/line	2 部屋	- 2 部屋からなる
neli korrust	: nelja korruse	- neljakorruse/line	4 階	- 4 階建ての
viis liiget	: viie liikme	- viieliikme/line	5 人の会員	- 5 人からなる
pikk kasv	: pika kasvu	- pikakasvu/line	長身	- 長身の
soe veri	: sooja vere	- soojavere/line	暖かい血	- 定温の, 温血の
mitu värvi	: mitme värvi	- mitmevärvi/line	たくさんの色	- 多色の

22.9. 接尾辞-lik

22.9.1. 名詞の主格についてのもの

teadus	科学	- teadus/lik	科学的な
riik	国家	- riik/lik	国の, 国立の
ühiskond	社会	- ühiskond/lik	社会の
amet	職務	- amet/lik	職務上の, 公式の
majandus	経済	- majandus/lik	経済の
kirjandus	文学	- kirjandus/lik	文学の
arst	医者	- arst/lik	医学の

22.9.2. 名詞の属格についてのもの(比較的まれ)

õnn	: õnne	幸福	- õnne/lik	幸福な
kord	: korra	秩序	- korra/lik	きちんとした
kiri	: kirja	手紙	- kirja/lik	書面による
koht	: koha	場所	- koha/lik	地元の

第 23 章(kahekümne kolmas peatükk)

23.1. 名詞の複数形：「i-複数」

名詞の複数語幹は、一般に、複数属格形と同じ形をしていることはすでに学びました。複数属格形は、語尾が -de ~ -te ですから、名詞の複数の標識は -de ~ -te ということができます。

名詞の中には、-de ~ -te を複数標識とする複数形(「de-複数」と呼ばれる)に加えて、もうひとつ「i-複数」と呼ばれる複数語幹をもつものがあります。de-複数語幹は複数属格形から導かれますが、i-複数語幹は、複数分格形から導かれます。複数分格形が<1> 語尾 -id をもつか<2> 母音で終わる名詞だけが i-複数語幹をもち、複数分格が語尾 -sid の名詞には、i-複数語幹はありません。

i-複数形をもつ名詞の例として、tüdruk「少女」と kirjanik「作家」を取り上げてみましょう。

	de-複数形	i-複数形
主格	- - -	- - -
属格	tüdruku/te	- - -
分格	- - -	tüdruku/id
入格	tüdruku/te/sse	tüdruku/i/sse
内格	tüdruku/te/s	tüdruku/i/s
出格	tüdruku/te/st	tüdruku/i/st
向格	tüdruku/te/le	tüdruku/i/le
接格	tüdruku/te/l	tüdruku/i/l
奪格	tüdruku/te/lt	tüdruku/i/lt
変格	tüdruku/te/ks	tüdruku/i/ks
様格	tüdruku/te/na	
到格	tüdruku/te/ni	
欠格	tüdruku/te/ta	
共格	tüdruku/te/ga	
主格	- - -	- - -
属格	kirjanikku/de	kirjanike
分格	- - -	kirjanikke
入格	kirjanikku/de/sse	kirjanike/sse
内格	kirjanikku/de/s	kirjanike/s
出格	kirjanikku/de/st	kirjanike/st
向格	kirjanikku/de/le	kirjanike/le
接格	kirjanikku/de/l	kirjanike/l
奪格	kirjanikku/de/lt	kirjanike/lt
変格	kirjanikku/de/ks	kirjanike/ks
様格	kirjanikku/de/na	
到格	kirjanikku/de/ni	
欠格	kirjanikku/de/ta	
共格	kirjanikku/de/ga	

i-複数形が用いられるのは、入格、内格、出格、向格、接格、奪格、変格で、様格、到格、欠格、共格ではふつう用いられません。

i-複数語幹は、次のようにして導かれます。

<1> 複数分格形が -id で終わる場合は、語末の -d を取り除けば i-複数語幹になります。

単数主格	複数分格	i-複数語幹	i-複数形の例
tüdruk 少女	tüdrukuid	tüdrukui-	tüdrukui/le 少女たちへ
lugeja 読者	lugejaid	lugejai-	lugejail 読者たちへ

<2> 複数分格形が母音で終わる場合は、複数分格形そのものが i-複数語幹になります。ただし、階程交替する名詞の場合、複数分格形は強階程、i-複数語幹は弱階程になります。

単数主格	複数分格(強)	i-複数語幹(弱)	i-複数形の例
kirjanik 作家	kirjanikke	kirjanike-	kirjanike/le 作家たちへ
jalg 足	jalgu	jalu-	jalust 足(複)から
kõik すべて	kõiki	kõigi-	kõigile すべての人へ

なお、<2> のタイプの名詞の中には、kirjanik や kõi のように、i-複数語幹が複数属格形として用いられる語と、用いることができない語とがあります。

【用例】

Tänavail on palju rahvast. (比較：tänavatel) 通りには人々が大勢出ています。
Lapsel on pisarad silmis. (比較：silmales) 子どもは目に涙をためています。

23.2. 句と句を結びつける接続詞

23.2.1. A と B

A と B がともに成り立つ場合のもっとも基本的な接続詞は ja です。

Naine oli rikas ja (~ ning) ilus. その女性は金持ちで、美人でした。
Naine oli nii (~ niihästi) rikas kui ka ilus. その女性は金持ちであり、また美人でした。
Naine ei olnud mitte ainult (~ mitte üksnes) rikas, vaid ka ilus.
その女性は金持ちであったばかりか、美人でもありました。

A も B も成り立たない場合は、ja のかわりに ega が用いられます。

Naine ei olnud rikas ega ilus. その女性は金持ちでも美人でもありませんでした。
Naine ei olnud ei rikas ega ilus. その女性は金持ちでも美人でもありませんでした。

23.2.2. A か B

A と B のどちらかを選ぶ場合の接続詞は või です。

Anna mulle sinine või punane pliiats! 青か赤の鉛筆をわたしにください。

Anna mulle kas sinine või punane pliiats! 青または赤の鉛筆をわたしにください。

「すなわち」「言い替えると」は接続詞 ehk で表します。

Lauk ehk vana nimega vesikana on Eestis tavaline lind.

オオバン(lauk), すなわち旧名で言うと vesikana はエストニアではごくふつうに見られる鳥です。

23.2.3. 対比

2つの相対立する性質が問題になっている場合は、接続詞 aga を用い、「AでなくてB」という場合は、接続詞 vaid を用います。

Naine oli rikas, aga (~ kuid ~ ent) inetu. その女性は金持ちだが、美人ではありません。
Naine ei olnud rikas, vaid vaene. その女性は金持ちではなくて、貧乏です。

23.3. 文と文の等位接続

2つの文がほぼ対等な資格で接続されることを「等位接続」と呼びます。

23.3.1. 並列的

第2文が肯定文なら、第1文の肯定・否定に関係なく、接続詞 ja が用いられます。

Meie läksime ujuma ja Rein jäi tuppa lugema.

わたしたちは泳ぎに出かけ、レインは部屋に残って読書しました。

Meie ei läinud ujuma ja Rein jäi tuppa lugema.

わたしたちは泳ぎに行かず、レインは部屋に残って読書しました。

第1文が肯定文、第2文が否定文の場合には、接続詞は ja または ega です。接続詞 ega は否定の意味を含むので、第2文には否定小詞 ei は用いられません。

Meie läksime ujuma ja Rein ei jäänud tuppa lugema.

~ Meie läksime ujuma ega Rein jäänud tuppa lugema.

わたしたちは泳ぎに出かけましたが、レインは部屋に残って読書しませんでした。

第1文、第2文がともに否定文の場合の接続詞は ega です。

Meie ei läinud ujuma ega Rein jäänud tuppa lugema.

わたしたちは泳ぎに行きませんでしたし、レインは部屋に残って読書しませんでした。

mitte ainult A vaid B は、文の接続にも用いられます。

Poiss mitte ainult ei kirjutanud luuletuse, vaid tegi sellele ka viisi.

少年は詩を書いたばかりか、それに節までつけました。

23.3.2. 対比的

逆接(しかしながら)の場合には、aga, kuid, ent が用いられます。

Meie läksime ujuma, aga Rein jäi tuppa lugema.

わたしたちは泳ぎに出かけましたが，レインは部屋に残って読書をしました。
Nad hakkasid kiirustama, aga tööga valmis siiski ei jõudnud.
彼らはあわて始めましたが，結局仕事は間に合いませんでした。

Hommikul paistis päike, kuid õhtul hakkas sadama.
午前中は日が出ていましたが，夕方から雨になりました。
Sõdurid püüdsid end kaitsta, ent vaenlane oli tugevam.
兵士は身を守ろうとしたが，敵の方が力が上でした。

「AでなくてB」の場合の接続詞は *vaid* です。

Rein ei läinud ujuma, vaid jäi tuppa lugema.
レインは泳ぎに行かないで，部屋に残って読書しました。

23.4. 原因または結果を表す接続詞

原因と結果は，2つの文を接続詞 *ja* で結びつけただけでも表すことができます。

Hommikul hakkas sadama ja me lükkasime väljasõidu edasi.
朝，雨が降り出して，わたしたちは外出を延期しました。

一般には，原因または理由を表す接続詞を用いると，因果関係が明確に表現できます。
次の場合，原因を表す節は必ず主文の後ろに置かれます。

Me lükkasime väljasõidu edasi, sest (~ sest et) hommikul hakkas sadama.

外出を延期しました。朝，雨が降り出したのです。

Me lükkasime väljasõidu edasi, sellepärast et hommikul hakkas sadama.

外出を延期しました。朝，雨が降り出したからです。

Me lükkasime väljasõidu edasi sellepärast, et hommikul hakkas sadama.

外出を延期したのは，朝，雨が降り出したからです。

接続詞 *kuna* の導く原因節は，主文の前にも後にも置くことができます。

Me lükkasime väljasõidu edasi, kuna hommikul hakkas sadama.

外出は延期しました。朝，雨が降り出したからです。

Kuna hommikul hakkas sadama, lükkasime me väljasõidu edasi.

朝，雨が降り出したので，外出を延期しました。

同じ状況を，結果を明示する接続詞によって表現することもできます。

Hommikul hakkas sadama, nii et (~ nõnda et) me lükkasime väljasõidu edasi.

朝，雨が降り出して，そのため，外出を延期することになりました。

23.5. 譲歩を表す接続詞

譲歩(にもかかわらず)を表す接続詞は *kuigi*, *ehkki* です。

Me ei lükanud väljasõidu edasi, kuigi hommikul hakkas sadama.

朝，雨が降り出したけれども，外出は延期しませんでした。

Kuigi kõik osavõtjad polnud veel kohal, hakkasime me prooviga peale.

関係者がすべてその場にいたわけではありませんでしたが、わたしたちは練習に取りかかりました。

Ehkki alguses oli ka vastuväiteid, võeti ettepanek lõpuks vastu ühel hääl.

最初のうちは反対意見もなかったわけではありませんが、最終的には全会一致で提案が採択されました。

23.6. 時・条件の接続詞

23.6.1. 接続詞 kui

接続詞 kui は、日本語の接続助詞の「と」と同じように、時間的意味(ボールを蹴ると、まっすぐ飛んだ)を持つ場合と、条件的意味(ボールを蹴ると、危ない)を持つ場合があります。

時間的：

Kui Arno isaga koolimajja jõudis, olid tunnid juba alanud.

アルノが父親に連れられて学校に着くと、授業はもう始まっていました。

Kui me hommikul välja sõitma hakkasime, (siis) sadas väljas nagu oavarrest.

朝、外出しようとする時、土砂降りでした。

条件的：

Kui te auto eest hästi hoolt kannate, (siis) sõidab ta teil veel mitu aastat.

車を大事に手入れすれば、まだあと何年でも走らせることができますよ。

Kui te oma lapse eest rohkem hoolitseksite, oleks teil temast palju rohkem rõõmu kui praegu.

お子さんの面倒をもっとご覧になりさえすれば、子どもがいることが今よりずっと大きな喜びになると思いますけど。

23.6.2. 接続詞 kuni

接続詞 kui が「～した時」という瞬間的な意味を表すのに対し、接続詞 kuni は「～した(する)時までずっと」という継続的な意味を表します。

Õpilased seisisid püsti, kui õpetaja neid tervitas.

生徒たちは、先生が挨拶したとき、起立していました。

Õpilased seisisid püsti, kuni õpetaja oli istunud.

生徒たちは、先生が座るまで起立したままでいました。

Ta käis nii kaua peale, kuni sai oma tahtmise.

彼女は、ずっと譲らず、とうとう自分の希望を通してしまいました。

23.6.3. 接続詞 kui を含む複合接続詞

接続詞 kui はさまざまな複合接続詞を作ります。

23.6.3.1. 時間的關係：「～する前に」「～する間」「～したあとで」

Nad asusid teele, enne kui päike tõusis. 彼らは日が昇る前に出発しました。

Poiss lõhkus parajasti puid, siis kui sõber talle külla tuli.

少年が薪を割っているちょうどそのところへ、友だちが遊びにやって来ました。

Meie siin viskame toitu ära, samal ajal kui Aafrika lapsed nälgivad.

われわれが食べ物を捨てている一方で、アフリカの子どもたちが飢えに苦しんでいます。

Me läheme siit ära kohe, nii kui oleme teda oma silmaga näinud.

彼女を実際に見たら、すぐにここを離れます。

Ta kirjutas diplomitöö valmis, sel ajal kui (~ sellal kui) meie pidu pidasime ja logelesime.

われわれがパーティーをしたり、何もせずにぶらぶらしている間に、彼女は卒業論文を仕上げてしまいました。

Ma pole temast enam midagi kuulnud, sestsaadik kui teda viimati nägin.

彼に最後に会って以来、彼の消息については何も聞いていません。

Teen oma tööd, niikaua kui vähegi jõudu on.

少しでも力が残っているうちは、自分の仕事をします。

Nad jõudsid kohale, pärast seda kui olid mitu korda teed küsinud.

彼らは、何度も道を聞いたあとで、ようやく目的地に着きました。

23.6.3.2. 比喻

Pärast eksamit jooksis ta uksest välja justkui (~ just nagu ~ otsekui) oleks talle tiivad kasvanud.

試験が終わると、彼はちょうど羽根が生えてきたみたいに、ドアから外へ走り出て行きました。

23.7. 接尾辞-lane, -lanna

接尾辞 -lane は、地名・国名などから、その地の住人やその地の出身者を表す名詞をつくれます。接尾辞 -lane によって作られる名詞は、男女の区別なく用いることができますが、とくに女性を区別したい場合には、接尾辞 -lane の代わりに -lanna を使います。

Eesti エストニア	→ eest/lane eest/lanna	エストニア人 エストニア人女性
Tallinn タリン	→ tallin/lane tallin/lanna	タリン出身(在住)者 同女性
Tartu タルト	→ tart/lane tart/lanna	タルト出身(在住)者 同女性
Soome フィンランド	→ soom/lane soom/lanna	フィン(ランド)人 フィン(ランド)人女性
Läti ラトビア	→ lät/lane lät/lanna	ラトビア人 ラトビア人女性
Leedu リトアニア	→ leedu/lane leedu/lanna	リトアニア人 リトアニア人女性
Moskva モスクワ	→ moskva/lane moskva/lanna	モスクワっ子 同女性
Ukraina	→ ukrain/lane	ウクライナ人

ウクライナ		ukrain/lanna	ウクライナ人女性
Jaapan	→	jaapan/lane	日本人
日本		jaapan/lanna	日本人女性
Tokio	→	tokio/lane	東京人，東京っ子
東京		tokio/lanna	同女性

-maa のついた地名は，-lane ~ -lanna の前で -maa が省略されます。

Saare/maa	→	saarlane	サーレマー出身(在住)者
サーレマー		saarlanna	同女性
Vene/maa	→	venelane	ロシア人
ロシア		venelanna	ロシア人女性
Inglis/maa	→	ing/lane	イギリス人(イングランド人)
イングランド		ing/lanna	イギリス人女性

23.8. 主な形容詞とその反意語

õige	-	vale	正しい	-	間違った
hea	-	paha	良い	-	悪い
tugev	-	nõrk	強い	-	弱い
tark	-	rumal	賢い	-	馬鹿な
terve	-	haige	健康な	-	病気の
lõbus	-	kurb	陽気な	-	悲しい
naljakas	-	tõsine	おかしい	-	真面目な
tuttav	-	võõras	既知の	-	未知の，外国の
virk	-	laisk	機敏な	-	怠惰な
kasulik	-	kahjulik	有用な	-	有害な
ohutu	-	ohtlik	安全な	-	危険な
huvitav	-	igav	興味深い	-	つまらない
kiire	-	aeglane	急ぎの，速い	-	ゆっくりとした
kõrge	-	madal	高い	-	低い
lähedane	-	kaugel	近い	-	遠い
sirge	-	kõver	まっすぐな	-	曲がった
pehme	-	kõva	柔らかい	-	固い
kuiv	-	märj	乾いた	-	湿った，濡れた
terav	-	nüri	鋭い	-	鈍い
õhuke	-	paks	薄い	-	厚い，太った
hele	-	tume	明るい色の	-	暗い色の
kallis	-	odav	高価な	-	安い
täis	-	tühi	満ちた	-	空の

第 24 章(kahekümne neljas peatükk)

24.1. エストニア語の動詞の 4 つの分詞

分詞は、形動詞(形容詞的な動詞形)とも呼ばれ、形容詞と同じく、名詞の修飾語や、動詞 olema の補語として用いられる動詞の活用形で、日本語の動詞の連体形に相当します。

エストニア語には分詞が 4 つあり、次のような体系をつくっています。

動詞 alga/ma 「使う」(自動詞)

	現在(未完了)	過去(完了)
能動	alga/v	ala/nud
受動(不定人称)	ala/tav	ala/tud

動詞 kasuta/ma 「使う」(他動詞)

	現在(未完了)	過去(完了)
能動	kasuta/v	kasuta/nud
受動(不定人称)	kasuta/tav	kasuta/tud

4 つの分詞の基本的な意味を次のような例で覚えましょう。

Aasta lõpeb.	→ lõppe/v aasta
1 年が終わります。	終わろうとしている 1 年
Aasta lõppes.	→ lõppe/nud aasta
1 年が終わりました。	終わった 1 年
Raamat müüakse.	→ müü/dav raamat
その本は売られます。	売られる(べくある)本
Raamat müüdi.	→ müü/dud raamat
その本は売られました。	売られた本

分詞は、語尾に注目して、v-分詞、nud-分詞、tav-分詞、tud-分詞と呼ばれます。4 つの分詞のうち、v-分詞と tav-分詞は活用しますが、nud-分詞と tud-分詞は不変化です。

24.2. v-分詞(能動現在分詞，能動未完了分詞)

24.2.1. v-分詞の作り方と格変化

ma-不定詞の語幹が母音で終わる場合、接尾辞-v はそのまま ma-不定詞の語幹につきます。

	v-分詞	
(1) alga/ma	alga/v	始まる

ma-不定詞の語幹が子音で終わる場合、接尾辞 -v と ma-不定詞の語幹の間に母音 e が挿入されます。

(2) tõus/ma	tõus/e/v	起きる
-------------	----------	-----

v-分詞の単数語幹には母音 a が現れます。

	lõppe/ma 「終わる」	
	単数	複数
主格	lõppe/v	lõppe/va/d
属格	lõppe/va	lõppe/va/te
分格	lõppe/va/t	lõppe/va/id
入格	lõppe/va/sse	lõppe/va/te/sse ~ lõppe/va/i/sse

接尾辞 -v の前に挿入された母音 e は、単数主格以外では消失します。

	laul/ma 「歌う」	
主格	laul/e/v	laul/va/d
属格	laul/va	laul/va/te
分格	laul/va/t	laul/va/id
入格	laul/va/sse	laul/va/te/sse ~ laul/va/i/sse

v-分詞が名詞の前に修飾語として置かれる場合は、一般の形容詞と同じく名詞と数・格の一致が occurs。様格・到格・欠格・共格では数の一致のみで、格の一致はおこなわれません。

	lõppev aasta 「終わろうとしている年」			
	単数		複数	
主格	lõppev	aasta	lõppeva/d	aasta/d
属格	lõppeva	aasta	lõppeva/te	aasta/te
分格	lõppeva/t	aasta/t	lõppeva/id	aasta/id
入格	lõppeva/sse	aasta/sse	lõppeva/te/sse	aasta/te/sse
内格	lõppeva/s	aasta/s	lõppeva/te/s	aasta/te/s
出格	lõppeva/st	aasta/st	lõppeva/te/st	aasta/te/st
向格	lõppeva/le	aasta/le	lõppeva/te/le	aasta/te/le
接格	lõppeva/l	aasta/l	lõppeva/te/l	aasta/te/l
奪格	lõppeva/lt	aasta/lt	lõppeva/te/lt	aasta/te/lt
変格	lõppeva/ks	aasta/ks	lõppeva/te/ks	aasta/te/ks
様格	lõppeva	aasta/na	lõppeva/te	aasta/te/na
到格	lõppeva	aasta/ni	lõppeva/te	aasta/te/ni
欠格	lõppeva	aasta/ta	lõppeva/te	aasta/te/ta
共格	lõppeva	aasta/ga	lõppeva/te	aasta/te/ga

24.2.2. 分詞の用例

Me elame kiiresti muutuvast maailmas.

わたしたちは急激に変化しつつある世界に住んでいます。

Mida me ootame algavalt aastalt?

始まろうとしている年に何を期待しましょうか？

Iga mõtleval inimene on sõja vastu.

自分の頭でものを考える人間なら誰でも戦争に反対します。

1. mai on töötava rahva solidaarsuse päev.

5月1日は労働大衆の連帯の日です。

Tutvusin armeenia kirjanduse kohta leiduvate materjalidega.

アルメニア文学に関して見つかった資料に目を通しました。

動詞との意味関係が薄れた v-分詞は，形容詞に転化したものと見なすことができます。

See pilet ei ole enam maksev.	このチケットはすでに有効期限を過ぎています。
Kontrolltöö tulemused olid üllatavad.	小テストの結果は意外なものでした。
Mõned inimesed on kergesti ärrituvad.	すぐに興奮する人がいます。
Inimeste maitse on väga erinev.	人の好みはまちまちなものです。
Uudised olid rõõmustavad.	ニュースは喜ばしいものでした。

24.3. nud-分詞(能動過去分詞，能動完了分詞)

nud-分詞の作り方は第 11 章(11.2.)を参照。

24.3.1. 動詞の活用形としての用法

nud-分詞は，否定小詞 ei とともに動詞の過去の否定形をつくります(11.3.参照)。

	過去形(否定形)		
rääkima	ei rääki/nud		話す
leidma	ei leid/nud		見つける
ootama	ei ooda/nud		待つ

nud-分詞はまた，動詞 olema とともに完了時制の形をつくります(11.4., 20.1.参照)。

	直説法現在完了		直説法過去完了		条件法完了	
ma olen	rääki/nud	olin	rääki/nud	oleksin	rääki/nud	
sa oled	ooda/nud	olid	ooda/nud	oleksid	ooda/nud	
ta on	leid/nud	oli	leid/nud	oleks	leid/nud	
me oleme	ava/nud	olime	ava/nud	oleksime	ava/nud	
te olete	haka/nud	olite	haka/nud	oleksite	haka/nud	
nad on	and/nud	olid	and/nud	oleksid	and/nud	

24.3.2. 名詞の修飾句

v-分詞と同じく，nud-分詞にも形容詞的用法があります。v-分詞と異なり，nud-分詞は不変化です。

Konverentsile saabunud külalistega vestles Emakeele Seltsi esindaja.

会議のために到着した来賓と母語協会の代表が話をしました。

Selle luuletuse tõlkinud üliõpilane on väga andekas.

この詩を翻訳した学生は，とても才能があります。

Möödunud nädalal olime Leningradis ekskursioonil.

先週，わたしたちはレニングラードに旅行に行きました。

Väsinud matkajad leidsid hea laagrikoha.

疲れたハイカーたちは，適当なキャンプ地を見つけました。

Pilte vaadanud poiss hakkas naerma. 絵を見た少年は笑いだしました。

24.3.3. 時を表す副詞節(分詞構文)

nud-分詞は単独で、時の副詞節(分詞構文)の動詞の役割をはたします。

Lõpetanud keskkooli, astus ta Eesti Põllumajanduse Akadeemiasse.

高校を卒業すると、彼女はエストニア農業アカデミーに入学しました。

Kõik eksamid edukalt sooritanud, sõitis ta koju.

すべての試験に合格すると、彼女は帰省しました。

Mantli selga pannud, märkas ta, et puudub üks nõõp.

コートを着たとき、彼はボタンが1つないことに気づきました。

Ajalehe läbi lugenud, panin selle riulile tagasi.

新聞を読み終えて、わたしはそれを棚に戻しました。

Pikast matkast väsinud, heitsime vara magama.

長い旅に疲れ、わたしたちは早めに床につきました。

Pilte vaadanud, hakkas Jüri naerma. 絵を見て、ユリは笑いだしました。

24.4. tav-分詞(受動現在分詞, 受動未完了分詞, 不定人称の現在分詞)

24.4.1. tav-分詞の作り方と格変化

tud-分詞の語尾 -tud ~ -dud を、-tav ~ -dav に置き換えて作ります。

ma-不定詞	tud-分詞	tav-分詞	
(1a) ehita/ma	ehita/tud	ehita/tav	建てる
(1b) luge/ma	loe/tud	loe/tav	読む
(2) hakka/ma	haka/tud	haka/tav	始める
(3) saa/ma	saa/dud	saa/dav	受ける
(4) kuul/ma	kuul/dud	kuul/dav	聞く
(5) maks/ma	maks/tud	maks/tav	支払う
(6) and/ma	an/tud	an/tav	与える
(7) muut/ma	muude/tud	muude/tav	変える

tav-分詞は、v-分詞と同じタイプの格変化を行います。

	kasuta/tav 「使われる」	
	単数	複数
主格	kasuta/tav	kasuta/tava/d
属格	kasuta/tava	kasuta/tava/te
分格	kasuta/tava/t	kasuta/tava/id
入格	kasuta/tava/sse	kasuta/tava/te/sse ~ kasuta/tava/i/sse

24.4.2. tav-分詞の用法

24.4.2.1. 名詞の修飾語

修飾語として用いられた tav-分詞は、名詞と数・格の一致をおこします。

	kasutatav õpik 「使用される教科書」			
	単数		複数	
主格	kasutatav	õpik	kasutatava/d	õpiku/d
属格	kasutatava	õpiku	kasutatava/te	õpiku/te

分格	kasutatava/t	õpiku/t	kasutatava/id	õpiku/id
入格	kasutatava/sse	õpiku/sse	kasutatava/te/sse	õpiku/te/sse
内格	kasutatava/s	õpiku/s	kasutatava/te/s	õpiku/te/s
出格	kasutatava/st	õpiku/st	kasutatava/te/st	õpiku/te/st
向格	kasutatava/le	õpiku/le	kasutatava/te/le	õpiku/te/le
接格	kasutatava/l	õpiku/l	kasutatava/te/l	õpiku/te/l
奪格	kasutatava/lt	õpiku/lt	kasutatava/te/lt	õpiku/te/lt
変格	kasutatava/ks	õpiku/ks	kasutatava/te/ks	õpiku/te/ks
様格	kasutatava	õpiku/na	kasutatava/te	õpiku/te/na
到格	kasutatava	õpiku/ni	kasutatava/te	õpiku/te/ni
欠格	kasutatava	õpiku/ta	kasutatava/te	õpiku/te/ta
共格	kasutatava	õpiku/ga	kasutatava/te	õpiku/te/ga

Raamatuid tuleb hoida köetavates ruumides.

本は暖房することのできる部屋で保存するべきです。

Oodatavat kirja ei tulnud.

待ち望んでいた手紙は来ませんでした。

Õpitavad luuletused meeldisid Mallele.

マレは、教材の詩が気に入りました。

Kasutatavasse õpikusse tegi ta märkusi.

使用中の教科書に彼女は書き込みをしました。

Seminariks korratavaid materjale polnud ta veel jõudnud vaadata.

セミナーのために復習しておかなければならない資料を彼女はまだ時間がなくて見ていませんでした。

Talvel söödavas toidus on vähe vitamiine.

冬に食べる食物にはビタミンがあまり含まれていません。

Treeningul kantava spordiriietusega ei saa minna aulasse aktusele.

トレーニングのとき着る運動着で講堂の式典には出られません。

24.4.2.2. 動詞 olema の補語として

tav-分詞の中には、動詞との意味関係が薄れて形容詞に転化していると見なせるものがあります。

Need seened ei ole söödavad.

これらの茸は食用ではありません。

Kõik mängud ei ole võidetavad.

すべてのゲームが勝つことのできるものではありません。

Uksekella helisemine oli halvasti kuuldav.

ドアの呼び鈴の鳴る音がよく聞こえませんでした。

See mõistatus on jaapani keelde tõlgitav, see vanasõna aga ei ole täpselt tõlgitav.

このなぞなぞは日本語に翻訳できますが、このことわざは厳密には翻訳できません。

24.5. tud-分詞(受動過去分詞, 受動完了分詞, 不定人称の過去分詞)

tud-分詞の作り方は、第 21 章(21.2.)を参照。tud-分詞は、次の場合に使われます。

24.5.1. 動詞の活用形として

否定の小詞 ei とともに、不定人称の過去の否定形を作ります。

	tud-分詞	不定人称の過去(否定形)	
ava/ma	ava/tud	ei ava/tud	開く
oota/ma	ooda/tud	ei ooda/tud	待つ

laul/ma	laul/dud	ei	laul/dud	歌う
mõtlet/ma	mõel/dud	ei	mõel/dud	考える

動詞 olema とともに，不定人称の完了形を作ります。

	現在完了	過去完了	条件法完了	
ava/ma	on ava/tud	oli ava/tud	oleks ava/tud	開く
oota/ma	on ooda/tud	oli ooda/tud	oleks ooda/tud	待つ
laul/ma	on laul/dud	oli laul/dud	oleks laul/dud	歌う
mõtlet/ma	on mõel/dud	oli mõel/dud	oleks mõel/dud	考える

24.5.2. 名詞の修飾句

tud-分詞は，nud-分詞同様，不変化です。

Keedetud kartulid on taldrikul. 料理したジャガイモがお皿にのっています。

【参考】

Kartulid on juba keedetud. ジャガイモはもう料理してあります。

Kasutatud kirjandus tuleb märkida artikli lõppu.

使用した文献は，論文の最後に書かなければなりません。

Ma ei ole tellitud ajakirju kätte saanud.

わたしは，まだ注文した雑誌を受け取っていません。

Tunnis lahendatud ülesanded olid rasked. 授業中に解いた課題はむずかしかったです。

Alatud töösse tuleb tõsiselt suhtuda.

始めた仕事には，真剣に取り組まなければなりません。

Linaga kaetud laual olid tassid ja taldrikud.

テーブルクロスの掛かったテーブルのうえに茶碗と受け皿が置かれてありました。

Pestud õunad pane sellesse kaussi.

洗ったリンゴは，このボールに入れなさい。

Eile toodud piimast võib suppi keeta.

昨日運んできた牛乳からスープが作れます。

24.5.3. 時間を表す副詞節(分詞構文)

Eksamid edukalt sooritatud, sõitis ta koju. 試験に合格して，彼は帰省しました。

Ajaleht läbi loetud, panin selle riulile.

新聞を読み終えて，わたしはそれを棚に返しました。

Lõuna söödud, läksime tagasi raamatukogusse.

昼食を済ませて，わたしたちは図書室に帰りました。

Keskool lõpetatud, tuli Viktor ülikooli majandusteadust õppima.

高校を卒業して，ヴィクトルは経済学を専攻するために大学に入学しました。

Harjutus kontrollitud, hakati jutustama lugemispala.

練習問題の答え合わせのあと，読み物の要約を始めました。

24.6. 形容詞の最上級：「i-最上級」

複数分格が，(1) 語尾 -id または (2) 母音 -i, -u で終わる形容詞の場合，「i-最上級」と呼ばれる独自の最上級形を用いることができます。

ilusaim (~ kõige ilusam) vaas もっとも美しい花瓶

i-最上級は、i-複数と同様に、複数分格形をもとに作られます。(2)のタイプの形容詞で階程交替するものは、複数分格は強階程ですが、i-最上級は弱階程になります。

(1) 単数主格	複数分格	最上級	
huvitav	huvitava/id	huvitava/im	面白い
ilus	ilusa/id	ilusa/im	美しい
kiire	`kiire/id	`kiire/im	速い
julge	`julge/id	`julge/im	勇気ある
kitsas	`kitsa/id	`kitsa/im	狭い
(2) 単数主格	複数分格(強)	最上級(弱)	
pikk	`pikk/i	pik/im	長い
suur	`suur/i	suur/im	大きい
noor	`noor/i	noor/im	若い
uus	`uus/i	uus/im	新しい
vana	van/u	van/im	古い
halb : halva	`halb/u	halv/im	悪い

【用例】

Missugune on ülikooli suurim teaduskond? 大学でいちばん大きな学部は何ですか？
Teaduskondadest on suurim arstiteaduskond. 学部の中でいちばん大きいのは医学部です。

【注意】次の形容詞は比較級・最上級の形が不規則です。

原級	比較級	最上級	
hea	parem	kõige parem ~ parim	良い
väike	väiksem	kõige väiksem ~ väikseim	小さい
lühike	lühem	kõige lühem ~ lühim	短い
pisike	pisem	kõige pisem ~ pisim	小さい
õhuke	õhem	kõige õhem ~ õhim	薄い

第 25 章(kahekümne viies peatükk)

25.1. 場所格相当の後置詞

場所格の体系に対応して，場所関係を表す後置詞にも，目標・到達点を表す形(～へ)，静止位置を表す形(～で)，起点・出発点を表す形(～から)の3つの形があります。

目標格相当	位置格相当	起点格相当	
kuhu?	kus?	kust?	どこへ/で/から
alla	all	alt	～の下へ/で/から
peale	peal	pealt	～の上へ/で/から
ette	ees	eest	～の前へ/で/から
taha	taga	tagant	～の裏へ/で/から
juurde	juures	juurest	～のもとへ/で/から
järele	järel	järelt	～のあとへ/で/から
kohale	kohal	kohalt	～の上方へ/で/から
kõrvale	kõrval	kõrvalt	～のそばへ/で/から
lähedale	lähedal	lähedalt	～の近くへ/で/から
ligidale	ligidal	ligidalt	～の近くへ/で/から
sisse	sees	seest	～の内部へ/で/から
äärde	ääres	äärest	～のへりへ/で/から
vahele	vahel	vahelt	～の間へ/で/から
keskele	keskel	keskelt	～の真ん中へ/で/から
hulka	hulgas	hulgast	～の中へ/で/から
sekka	seas	seast	～の中へ/で/から
poole	pool	poolt	～の方(側)へ/で/から
külge	küljes	küljest	～の横へ/で/から
kätte	käes	käest	～の手の中へ/で/から
vastu	vastas	vastast	～に向かって/向いに/から
(üumber)	üumber	ümbert	～の回りへ/で/から

【用例】

Silla alla ei tohi minna.

橋の下へ行ってはいけません。

Pall on diivani all.

ボールはソファの下にあります。

Laua alt tuleb välja suur koer.

机の下から大きな犬が出てきます。

Palun pange raamatud laua peale (～ lauale).

本を机の上に置いてください。

Raamatud on laua peal (～ laual).

本は机の上にあります。

Kas nad leidsid selle kivi maa pealt või maa seest?

彼らがこの岩を発見したのは，地表からですか，それとも地中からですか？

Pomm langes teatri ette.

爆弾は劇場の前に落ちました。

Kino ees ei olnud palju inimesi.

映画館の前には人が大勢いませんでした。

Ta põgenes minu eest.

彼はわたしの前から逃げ出しました。

Õhtul tõmban kardina akna ette.

夜になると，窓にカーテンを引きます。

Öösel on kardina akna ees.

夜中には窓にカーテンが引かれています。

- Hommikul tõmban kardinad akna eest ära. 朝になると、窓のカーテンを開けます。
- Pane kast ukse taha!
Kast on ukse taga.
Too kast ukse tagant siia!
箱はドアの後ろ(向こう側)に置いてください。
箱がドアの後ろ(向こう側)にあります。
箱をドアの後ろ(向こう側)からここへ持ってきてください。
- Kas te tulete peahoone juurde?
Nad kohtuvad peahoone juures.
Vanaema tuleb arsti juurest varsti tagasi.
あなたたちは本館の方に来ますか。
彼らは本館のところで落ち合います。
おばあちゃんがもうじきお医者さんから帰ってきます。
- Rivistuge esimeste järele.
Läksin koju raha järele.
Õpetaja järel tulevad õpilased.
Koosoleku järel toimub saalis kontsert.
最初の人(ひと)の後ろ(うしろ)に並(なら)びなさい。
家(いへ)にお金(かね)を取り(と)りに帰(かえ)りました。
先生(せんせい)のあと(あと)から生徒(せいと)たち(たち)が来(き)ます。
会議(かいぎ)の終(お)わった後(ご)、ホ-ル(ホール)ではコンサ-ト(コンサート)が開(あ)かれます。
- Ma korjan laste järelt mänguasjad.
わたしは子ども(こども)たちの(遊(あそ)んだ)あと(あと)からおもちゃ(おもちゃ)を片(か)づけました。
- Linna kohale ilmusid lennukid.
Riputa lamp laua kohale.
Lennukid lendavad linna kohal.
Lennukid lahkusid linna kohalt.
町(まち)の上(う)空(そら)へ飛行機(ひこうき)が現(あら)われました。
電灯(でんとう)はテ-ブル(テーブル)の上(う)に吊(か)しなさい。
飛行機(ひこうき)が町(まち)の上(う)空(そら)を飛(と)んでいます。
飛行機(ひこうき)が町(まち)の上(う)空(そら)から飛(と)び去(い)っていきました。
- Istuge minu kõrvale, minu kõrval on vaba koht!
わたしのそば(そば)にお座(ま)りください。わたしのそば(そば)に開(あ)いた席(せき)が有(あ)ります。
Vend läheb isa kõrvalt ema kõrvale. 弟(あに)は父(ちち)のそば(そば)から母(はは)のそば(そば)へ行(い)きます。
Minu kõrvalt tõusis poiss ja palus invaliidil istuda.
わたしのそば(そば)から少年(せうねん)が立(た)ち上(あ)がり、身障者(しんしょう)に席(せき)を譲(ゆず)りました。
- Staadion ehitatakse küla lähedale (~ küla ligidale).
競技場(けいぎじょう)は村(むら)の近(ちか)くに建(た)設(せつ)されま(す)す。
Asusime elama Tallinna lähedale (~ Tallinna ligidale).
タリ(ン)の近(ちか)郊(こう)に引(ひ)っ越(こ)して住(す)み始(は)めました。
Tehase lähedal (~ Tehase ligidal) on suur väljak.
工場(こうじょう)の近(ちか)くには大(お)きな広(ひろ)場(ば)が有(あ)ります。
Kohvik on peahoone lähedal (~ peahoone ligidal).
喫茶店(きっさてん)は本館(ほんくわん)の近(ちか)くに有(あ)ります。
Ta on pärit piiri lähedalt (~ piiri ligidalt). 彼(かれ)は国境(こくけい)の近(ちか)くの出身(しゅしん)です。
- Perenaine paneb supi sisse soola.
Löö vai maa sisse (~ maasse).
Missuguse looma pesa on maa sees?
Vesi voolab maa seest välja.
Karu tuleb koopa seest (~ koopast).
主婦(しゅふ)はス-プ(スープ)の中(なか)に塩(しお)を加(く)えます。
杭(くわ)を地中(ちちゆう)に打(う)ち込(こ)みなさい。
地中(ちちゆう)に巢(くわ)をつくるのはど(ど)んな動(どう)物(ぶつ)ですか(ですか)?
水(みづ)が地中(ちちゆう)から流(なが)れ出(で)して有(あ)ります。
熊(くま)が穴(あな)から出(で)てき(ま)す。

椅子をテーブルの回りからのけて、壁際に置いてください。

25.2. 場所関係を表す前置詞

25.2.1. 属格支配の前置詞

läbi	～を通して	üle	～を越えて / 横切って
ümber	～の回りに		

Muusika kostab läbi sein.	音楽が壁を通して聞こえてきます。
Tuleb minna läbi metsa ja ujuda üle jõe.	
森を通り抜け、川を泳いで渡って進まなければなりません。	
Kas üle silla ei saa?	橋を渡ってはいけないのですか？
Pane toolid ümber laua!	テーブルの回りに椅子を置いてください。
Ümber monumendi kasvasid lilled.	記念碑の回りに花が育ちました。

25.2.2. 分格支配の前置詞

keset	～の真ん中で	piki	～に沿って
mööda	～に沿って / ～を通り過ぎて	vastu	～に向かって

Ta jäi seisma keset tänavat.	彼は通りの真ん中に立ち止まりました。
Keset elutuba on klaver.	居間の中央にピアノがあります。
Kes jookseb mööda maja?	走って家のそばを通り過ぎて行くのは誰ですか？
Paadid sõidavad mööda jõge.	ボートが川を下って(上って)行きます。
Keegi kõnnib piki koridori.	誰かが廊下を歩いて行きます。
Vihma sajab vastu akent.	雨が窓を叩くように降っています。
Vastu tuult on raske joosta.	向かい風の中を走るのは大変です。

25.2.3. 到格支配の前置詞

kuni ～まで

Saadan sind kuni sillani.	橋のところまであなたを送っていきます。
Minge siit otse kuni pargini, siis pöörake paremale.	
ここをずっとまっすぐ公園まで行ってから、右に曲がってください。	

25.3. 時間関係を表す後置詞・前置詞

25.3.1. 属格支配の後置詞

eest	(今から)～前に
jooksul ~ kestel	～の間ずっと, ～中に
pärast	(今から)～後に, ～経って

Viie minuti eest oli ta veel siin.	彼女は5分前にはまだここにいました。
Tutvusime kahe aasta eest.	わたしたちは2年前に知り合いました。

Töö tuli lõpetada selle nädala jooksul (~ nädala kestel).

仕事は今週中に終えなければなりません。

Kogu ülikooliaja jooksul (~ ülikooliaja kestel) polnud tal ühtki “kolme”.

大学で勉強していた時期を通じて、彼は(成績に)一度も3があったことはありませんでした。

Seanss algab poole tunni pärast.

30分後に上演が始まります。

Eksam on kahe päeva pärast.

試験は2日後です。

25.3.2. 出格支配の後置詞

saadik ~ peale ~ 以来, ~ 以後ずっと

Möödunud aastast saadik (~ Möödunud aastast peale) elan pealinnas.

去年からわたしは首都に住んでいます。

Sellest päevast peale õpib Rein korralikult.

レインが真面目に勉強するようになったのは、その日以後のことです。

Tunnen su isa sõja ajast saadik.

あなたの父親をわたしは戦時中から知っています。

25.3.3. 分格支配の後置詞

enne ~ の(始まる)前に

pärast ~ peale ~ の(終わった)後

Enne kella kaheksat pole mul aega, kohtume pärast kella kaheksat (~ peale kella kaheksat).

8時までは時間がありません。8時以後に会いましょう。

Enne eksamit õpitakse.

試験の前はみんな勉強します。

Pärast vihma paistab päike.

雨の後には太陽が顔を出します。

25.4. 原因・理由または目的を表す後置詞(属格支配)

pärast ~ tõttu ~ のせいで, ~ のおかげで

jaoks ~ tarvis ~ のため

Ta puudub haiguse pärast (~ haiguse tõttu).

彼女は病気のため欠席です。

Ära minu pärast muretse!

わたしのことは心配しないでください。

Sinu jaoks (~ Sinu tarvis) on mul alati aega.

あなたのためなら、わたしはいつでも時間がさけます。

Kas Virve jaoks on kohta?

ヴィルヴェのために席がありますか？

25.5. 量的関係を表す後置詞・前置詞

25.5.1. 属格支配の後置詞

kaupa ~ viisi ~ ずつ, ~ 毎に, ~ をまとめて

üumber およそ~ほど

Seda eksamit võib sooritada osade kaupa.

この試験は何回かに分けて受けることができます。

Väike Mati võis tundide kaupa (~ tundide viisi) joonistada.

小さなマッティは何時間でも絵を書いていることができました。

Üliõpilasi on selles rühmas kümne ümber. このグループにいる大学生は10人ほどです。

Laagrini on viie kilomeetri ümber. キャンプ地まで5キロほどです。

25.5.2. 属格支配の前置詞

alla ~ 以下 üle ~ 以上

Mere ääres on praegu üle kahekümne kraadi sooja, mägedes on aga alla kümne kraadi.

海岸では今、20度を超えていますが、山では10度以下です。

Suvel teenisime üle viiesaja rubla kuus, alla saja ei saanud keegi.

夏には、月に500ルーブル以上稼ぎました。収入が500ルーブル以下の人は誰もいませんでした。

25.6. その他の関係を表す後置詞・前置詞

25.6.1. 属格支配の後置詞

kohta	~ について, ~ に関して	suhtes	~ の点で
poolest	~ の点で	järgi	~ によれば
kaudu	~ を経由して, ~ を通じて	asemel ~ eest	~ の代わりに

Kas sul on materjali Tartu ajaloo kohta?

あなたはタルトの歴史に関する資料がありますか？

Tal on kõige kohta oma arvamus.

彼はあらゆることについて自分の考えをもっています。

Leppisime kokku järgmise koosoleku suhtes. 次回の会議について取り決めました。

Nende meeskondade suhtes on Jüri erapooletu.

これらのチームについては、ユリはとくにひいきがありません。

Pedagoogilise kirjanduse poolest on see raamatukogu rikas.

教育学の文献に関して、この図書館は蔵書が充実しています。

Näo poolest on ta ema moodi.

彼女は、顔が母親に似ています。

See on hinna poolest liiga kallis.

これは値段が高すぎます。

Stipendiumi määratakse eeskirjade järgi.

奨学金は、規則に従って貸与されます。

Soola lisage maitse järgi!

塩はお好みに合わせてふってください。

Moskvasse sõidame seekord Leningradi kaudu.

今回はレニングラードを経由してモスクワに行きます。

Kontserdipileti sain isa tuttava kaudu.

コンサートのチケットは、父の知人を通じて手にいれました。

Kes läheb Peetri asemel (~ Peetri eest) poodi?

誰かペーテルの代わりに店に行ってくださいか？

Ma maksan sinu eest.

わたしに立て替えさせてください。

Šokolaadi asemel ostime lilli.

チョコレートをやめて花を買いました。

Tänan kõige hea eest!

いろいろと、ありがとうございました。

25.6.2. 属格支配の前置詞

peale ~の他に, ~を除くと

Peale noorema venna on meie perekonnas kõik brünetid.

家の家族は, 弟以外髪の色が濃い茶色です。

Kohal olid kõik komisjoni liikmed peale dekaani.

学部長以外は, 委員会のメンバーが全員出席しました。

25.6.3. 共格支配の前置詞

koos ~ ühes ~と一緒に

Mari elab selles toas koos kahe kursusekaaslasega (~ ühes kahe kursusekaaslasega).

マリはこの部屋に2人の同級生と一緒に住んでいます。

Virve lõunastab koos Pireti ja Jaaniga (~ ühes Pireti ja Jaaniga).

ヴィルヴェはピレットとヤーンと一緒にお昼を食べます。

25.6.4. 欠格支配の前置詞

ilma ~なしに, ~を使わずに

Ma ei oska seda teksti ilma sõnaraamatuta tõlkida.

わたしはその文章を辞書を使わずに訳すことはできません。

Ühe semestri oli Rein ilma stipendiumita.

1学期の間, レインは奨学金をもらえませんでした。

25.7. 名詞の格を後置詞・前置詞で言い替える

名詞の格のなかには, 場合によって, 後置詞や前置詞を用いて言い替えられるものがあります。

25.7.1. 向格 属格 + peale

Riputame pildi seinale (~ seinale peale).

絵を壁に掛けましょう。

Istuge pingile (~ pingile peale).

ベンチにお座りください。

25.7.2. 接格 属格 + peal

Keegi seisab trepil (~ trepi peal).

誰か階段に立っている人がいます。

Nad kohtusid sillal (~ silla peal).

彼らは橋の上で出会いました。

25.7.3. 奪格 属格 + pealt

Võta laualt (~ laua pealt) album!

テーブルの上からアルバムを取ってください。

Ajakirja otsi riulilt (~ riuli pealt).

雑誌は本棚から捜してください。

25.7.4. 奪格 属格 + poolest

Ta on iseloomult (~ iseloomu poolest) meeldiv inimene.
彼女は好感のもてる性格の人です。

25.7.5. 奪格 属格 + käest

Sain emalt (~ ema käest) kirja. 母から手紙をもらいました。
Küsi instruktorilt (~ instruktori käest)! 指導員に質問してください。

25.7.6. 属格 + ümber ↔ umbes + 主格

Siit linna on viie kilomeetri ümber (~ umbes viis kilomeetrit).
ここから町までは5キロほどです。
Lehmi on talul kolmesaja ümber (~ umbes kolmsada).
農家にいる牛は300頭ほどです。

25.7.7. 出格 + saadik/peale ↔ 出格 + alates (~ alates + 出格)

Kevadest saadik (~ kevadest peale ~ kevadest alates ~ alates kevadest) töötab ta välismaal.
春から彼は外国で働いています。

25.7.8. 属格 + eest ↔ 主格 + tagasi

Viie minuti eest (~ viis minutit tagasi) oli ta siin. 彼女は5分前ここにいました。
Tutvusime nädala eest (~ nädal tagasi). わたしたちは1週間前に知り合いました。